

市原市山新遺跡・白塚出途遺跡

2 0 1 8

市 原 市 教 育 委 員 会

市原市^{さんしん}山新遺跡・^{しらつかで}白塚出途遺跡

2018

市原市教育委員会

序 文

市原市は、千葉県のほぼ中央に位置し、養老川が形成した肥沃な平野から標高300m近い丘陵部まで変化に富んだ地勢を有します。この豊かな地に古くから暮らす人々の痕跡は、「王賜」銘鉄剣や上総国分僧尼寺跡に代表される埋蔵文化財となって当時の状況を私たちに伝えてくれます。こうした先人が残した歴史的遺産は後世に伝えるべきものですが、市原市を発展させるためには都市計画の推進とのバランスが必要となります。

今回の発掘調査は、都市計画道路建設工事にともない実施しました。遺跡範囲の道路建設計画の策定にあたっては、関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査からは、市を代表する古墳である姉崎二子塚古墳が築造された時期の集落と古墳群が発見されました。発見事例が乏しい時期にあって、さまざまな新しい知見を得ることができました。発掘調査は本書の刊行をもって終了しますが、発掘調査によって得られた成果は、記録として将来に伝えられると同時に、高まる市民の生涯学習意欲に応えるため、特に（仮称）いちほら歴史館の計画が具体化する中、より文化財の活用が図れるよう、一層心を砕いてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御尽力をいただきました、千葉県教育庁教育振興部、千葉県県土整備部、地元関係者、並びに旧財団法人市原市文化財センター関係者の方々のこれまでの御努力に対し、厚くお礼申し上げます。

平成30年 3 月

市 原 市 教 育 委 員 会
教 育 長 前 田 周 一

例 言

- 1 本報告書は、市原市姉崎1451番地他に所在する山新（さんしん）遺跡、白塚出途（しらつかでど）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、都市計画道路八幡椎津線（姉崎工区）建設工事に伴って実施した。
- 3 発掘調査は、市原市（土木部道路建設課）の委託を受けた財団法人市原市文化財センターが、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと実施した。ただし、財団法人市原市文化財センターは平成18年3月31日付けで廃止となったため、平成18年度以降は市原市教育委員会がその業務を継承している。
- 4 発掘調査にかかる費用の一部は国土交通省まちづくり交付金があてられている。
- 5 発掘調査面積は11,407㎡である（本調査）。
- 6 発掘調査（発掘調査・整理作業）は以下のとおりに行った。

発掘調査

（1）山新遺跡第1地点 確認調査

市原市姉崎1272番地1地先ほか 財団法人市原市文化財センター
平成10年11月9日～平成10年11月20日まで 担当 小橋健司

（2）山新遺跡第3地点 確認調査

市原市姉崎1451番地5地先ほか 財団法人市原市文化財センター
平成14年1月15日～平成14年3月18日まで 担当 近藤敏・北見一弘

（3）山新遺跡第3地点第1次 本調査

平成14年4月11日～平成14年8月21日まで 担当 近藤敏

（4）山新遺跡第3地点第2次 本調査

平成15年7月7日～平成16年1月30日まで 担当 近藤敏

（5）山新遺跡第4地点 確認調査

市原市姉崎1750番地1地先ほか 市原市埋蔵文化財調査センター
平成20年6月16日～平成20年7月11日まで 担当 高橋康男

（6）山新遺跡第8地点 本調査

市原市姉崎1584番地1地先ほか 市原市埋蔵文化財調査センター
平成23年9月26日～平成23年12月9日まで 担当 近藤敏

（7）山新遺跡第9地点 本調査

市原市姉崎1584番地1地先ほか 市原市埋蔵文化財調査センター
平成24年9月10日～平成24年11月30日まで 担当 小橋健司

（8）山新遺跡第10地点 本調査

市原市姉崎1730番地4地先ほか 市原市埋蔵文化財調査センター
平成28年9月5日～平成29年1月20日まで 担当 木對和紀

（9）白塚出途遺跡 確認調査

市原市白塚251-5番地ほか 財団法人市原市文化財センター
平成7年5月22日～平成7年6月8日まで 担当 田所真

整理作業

- (1) 平成28年 5月20日～平成29年 3月27日まで 担当 田中清美
(2) 平成29年 5月30日～平成30年 3月30日まで 担当 北見一弘

- 7 本書の執筆編集は主に北見が行ったが、第2章第9節は坂元秀平が執筆した。
- 8 土器観察表等一部表類は、添付のDVD-ROMのみの収録とした。
- 9 図中の方位は座標北を、高さは海拔を示している。
- 10 遺構番号は本書作成の段階で変更している。遺物注記等については調査段階の遺構番号を使用しているため、その対照を遺構一覧表に明示している。
- 11 遺構略号は、「千葉県埋蔵文化財発掘調査標準」(千葉県教育委員会、平成16年4月)により、
竪穴住居跡：SI、掘立柱建物跡：SB、土坑・土壌：SK、井戸：SE、古墳：SM、溝：SD、その他：
SXを使用した。
- 12 本書に掲載した出土遺物及び図面・写真等の記録類は、市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。

本文目次

序文

例言

本文・挿図目次

表目次

遺構一覧

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡周辺の環境	1
第3節 発掘調査の概要	2

第2章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居（建物）跡	18
第2節 掘立柱建物跡	58
第3節 古墳	62
第4節 土坑・土壇・井戸	94
第5節 ピット	129
第6節 溝	135
第7節 その他の遺構	155
第8節 遺構外の遺物	156
第9節 山新遺跡出土石材の岩石肉眼鑑定	171

第3章 総括

山新遺跡・白塚出途遺跡の変遷	175
----------------	-----

插图目次

Fig.1	山新遺跡・白塚出途遺跡 位置図 1/100000	4	Fig.46	SB3、4 遺構・SB4 遺物実測図	61
Fig.2	山新遺跡・白塚出途遺跡 周辺地形図 1/10000	5	Fig.47	SM1 遺構・遺物実測図	63
Fig.3	トレンチ配置図 1/2500	6	Fig.48	SM2 遺構・遺物実測図	64
Fig.4	山新遺跡本調査区 1/1500	7	Fig.49	SM3 遺構・遺物実測図	65
Fig.5	全体図（1）1/150	8	Fig.50	SM4、5 遺構・SM4 遺物実測図	66
Fig.6	全体図（2）1/150	9	Fig.51	SM6 遺構実測図	68
Fig.7	全体図（3）1/150	10	Fig.52	SM7 遺構・遺物実測図	69
Fig.8	全体図（4）1/150	11	Fig.53	SM8、SD21 遺構実測図	70
Fig.9	全体図（5）1/150	12	Fig.54	SM8、SD21 遺物実測図	71
Fig.10	全体図（6）1/150	13	Fig.55	SM9、10 遺構実測図	73
Fig.11	全体図（7）1/150	14	Fig.56	SM10 遺構・SM9 遺物実測図	74
Fig.12	全体図（8）1/150	15	Fig.57	SM9、10 遺物実測図	75
Fig.13	全体図（9）1/150	16	Fig.58	SM11、SD23、24 遺構実測図	77
Fig.14	全体図（10）1/150	17	Fig.59	SM11 遺物実測図	78
Fig.15	SI1 ～ 3 遺構・SI2、3 遺物実測図	19	Fig.60	SM12 遺構・遺物実測図	79
Fig.16	SI4、SD18 遺構・SI4 遺物実測図	21	Fig.61	SM12 遺物実測図	80
Fig.17	SI5、6、SK8、SD19 遺構・SI6、SK8、 SD19 遺物実測図	22	Fig.62	SM13、SX6 遺構・SM12 遺物実測図	82
Fig.18	SI7a、7b、7c 遺構・遺物実測図	24	Fig.63	SM14、SX3 遺構実測図	83
Fig.19	SI8 遺構・SI7a、7b、7c、8 遺物実測図	25	Fig.64	SM13、14 遺物実測図	84
Fig.20	SI9 遺構・SI8、9 遺物実測図	27	Fig.65	SM14 遺物実測図	86
Fig.21	SI10 遺構・SI9、10 遺物実測図	29	Fig.66	SM14、SX3 遺物実測図	87
Fig.22	SI11、12 遺構・SI11 遺物実測図	30	Fig.67	SM15 遺構・遺物実測図	88
Fig.23	SI13 遺構・SI12、13 遺物実測図	31	Fig.68	SM16 遺構・遺物実測図	89
Fig.24	SI14 遺構・遺物実測図	33	Fig.69	SM17 遺構・遺物実測図	91
Fig.25	SI15、16 遺構・SI14 ～ 16 遺物実測図	34	Fig.70	SM18 遺構実測図	92
Fig.26	SI17 ～ 19 遺構・SI16、17 遺物実測図	35	Fig.71	SM18 遺物実測図	93
Fig.27	SI18、19 遺物実測図	37	Fig.72	SK1 ～ 3、5 遺構・SK5 遺物実測図	95
Fig.28	SI20、21 遺構・遺物実測図	38	Fig.73	SK4、6、7、SH6 遺構・SK4、6 遺物実測図	97
Fig.29	SI22、31、SD33 ～ 35、SX4 遺構・SI22、 31 遺物実測図	40	Fig.74	SK9 ～ 15 遺構・SK10、14、15 遺物実測図	99
Fig.30	SD33 ～ 35、SX4 遺物実測図	41	Fig.75	SK16 ～ 18 遺構・遺物実測図	101
Fig.31	SI23、SK33、36、37 遺構実測図	43	Fig.76	SK19 ～ 22、25 遺構・SK19、21、22 遺物実測図	103
Fig.32	SI23 遺物実測図（1）	44	Fig.77	SK23、24、26 遺構・SK23 遺物実測図	105
Fig.33	SI23 遺物実測図（2）	45	Fig.78	SK27 ～ 29 遺構・SK23、24、26 ～ 29 遺物実測図	106
Fig.34	SI23、SK36 遺物実測図	46	Fig.79	SK30、31 遺構・遺物実測図	109
Fig.35	SI24 遺構・遺物実測図	48	Fig.80	SK32、34、35 遺構・SK34、35 遺物実測図	110
Fig.36	SI25 遺構・遺物実測図	49	Fig.81	SK38 ～ 42 遺構・SK39 ～ 42 遺物実測図	112
Fig.37	SI26 遺構・遺物実測図	50	Fig.82	SK43、44 遺構・SK44 遺物実測図	114
Fig.38	SI27 遺構・SI26、27 遺物実測図	51	Fig.83	SK45、46 遺構・SK44 ～ 46 遺物実測図	116
Fig.39	SI28 遺構実測図	52	Fig.84	SK47 ～ 50 遺構・SK47 ～ 49 遺物実測図	117
Fig.40	SI28 遺物実測図（1）	53	Fig.85	SK51、52、SX13 遺構・SX13 遺物実測図	119
Fig.41	SI28 遺物実測図（2）	54	Fig.86	SK53 遺構実測図	120
Fig.42	SI29、30 遺構・SI29 遺物実測図	56	Fig.87	SK54、55、62、70 遺構・SK54、62 遺物実測図	121
Fig.43	SI29、30 遺物実測図	57	Fig.88	SK56 ～ 58、63 ～ 66 遺構・SK56 ～ 58	
Fig.44	SB1 遺構実測図	59			
Fig.45	SB2 遺構実測図	60			

遺物実測図	123	Fig.106 SD36～38、トレンチ 遺構・SD37、38 遺物実測図	148
Fig.89 SK59～61、67～69 遺構・SK60、67、 69 遺物実測図	124	Fig.107 SD39、40、SX8、9 遺構・SD39 遺物実測図	149
Fig.90 SE1 遺構・遺物実測図	128	Fig.108 SD41、43、44、SX10～12 遺構実測図	150
Fig.91 SH1～3 遺構実測図	130	Fig.109 SD42 遺構・SD41、43、44、SX10～12 遺物実測図	151
Fig.92 SH4、5、7、8 遺構実測図	131	Fig.110 SX1 遺構実測図	152
Fig.93 SH9～17、SX2 遺構・SH13、SX2 遺物実測図	133	Fig.111 遺構外遺物実測図 (1)	157
Fig.94 SD1～3、5、6、7a、7b 遺構実測図	136	Fig.112 遺構外遺物実測図 (2)	158
Fig.95 SD7a、7b、8～11 遺構実測図	137	Fig.113 遺構外遺物実測図 (3)	159
Fig.96 SD10、12～16 遺構・SD5、6 遺物実測図	138	Fig.114 埴輪実測図 (1)	160
Fig.97 SD7a、9 遺物実測図	139	Fig.115 埴輪実測図 (2)	161
Fig.98 SD11～15 遺物実測図	140	Fig.116 埴輪実測図 (3)	162
Fig.99 SD17、20、22 遺構・SD20、22 遺物実測図	141	Fig.117 埴輪実測図 (4)	163
Fig.100 SD25～27、SX7 遺構・SD25、26、 SX7 遺物実測図	142	Fig.118 埴輪実測図 (5)	164
Fig.101 SD28～32、SX5 遺構実測図	143	Fig.119 埴輪実測図 (6)	165
Fig.102 SD29 遺物実測図	144	Fig.120 中世遺物実測図 (1)	166
Fig.103 SD31 遺構・SD30、SX5 遺物実測図	145	Fig.121 中世遺物実測図 (2)	167
Fig.104 SD31 遺物実測図 (1)	146	Fig.122 山新遺跡第10地点 遺構実測図	169
Fig.105 SD31 遺物実測図 (2)	147	Fig.123 神明塚位置図	183
		Fig.124 神明塚採集神獣鏡拓影・実測図	184

写真図版目次

扉

姉崎周辺空中写真（昭和36年撮影）

八幡椎津線（姉崎工区）遠景 南南西から／八幡椎津線（姉崎工区）と姉崎二子塚古墳 写真上が北西
遺物 埴輪 SM17出土／石製品 SI7 SI28 SM7 SM10 SM11 SM18 SK34 遺構外8、9

八幡椎津線（姉崎工区）と姉崎二子塚古墳 南西から／姉崎二子塚古墳
第3地点 調査区遠景（北東から）／第3地点 調査区遠景（南西から）

PL.1 遺構 竪穴住居 SI1 SI2 SI3 SI4 SI5	
PL.2 遺構 竪穴住居 SI7a SI7b SI7c SI8 SI9	
PL.3 遺構 第8地点・竪穴住居 SI10 SI11 SI12 SI13	
PL.4 遺構 第8地点・竪穴住居 SI14 SI15	
PL.5 遺構 第9地点・竪穴住居 SI15 SI16 SI17	
PL.6 遺構 竪穴住居 SI18 SI19 SI20 SI21	
PL.7 遺構 第3地点・竪穴住居 SI21 SI22 SI23	
PL.8 遺構 竪穴住居 SI24 SI25 SI26	
PL.9 遺構 竪穴住居 SI27 SI28	
PL.10 遺構 竪穴住居・掘立柱建物・古墳 SI28 SI29 SI30 SI31 SB1 SM18	
PL.11 遺構 掘立柱建物・古墳 SB2 SB3 SM1 SM2 SM3	
PL.12 遺構 古墳 SM3 SM4 SM5 SM6 SM7	
PL.13 遺構 古墳 SM7 SM8 SM9	
PL.14 遺構 古墳 SM9 SM10	
PL.15 遺構 古墳 SM10 SM11	
PL.16 遺構 古墳 SM11 SM12 SM13	
PL.17 遺構 古墳・溝 SM13 SM14 SD30	

PL.18 遺構 古墳 SM14
 PL.19 遺構 古墳 SM15 SM16 SM17
 PL.20 遺構 古墳・土坑 SM18 SK1 SK2 SK3
 PL.21 遺構 土坑 SK3 SK4 SK5 SK7 SK10 SK12 SK13
 PL.22 遺構 土坑 SK14 SK15 SK16 SK18
 PL.23 遺構 土坑 SK18 SK19 SK20 SK21
 PL.24 遺構 土坑 SK21 SK27 SK28 SK29 SK30
 PL.25 遺構 土坑 SK30 SK31 SK32 SK33 SK34
 PL.26 遺構 土坑 SK34 SK35 SK38 SK40 SK43 SK44 SK45
 PL.27 遺構 土坑 SK45 SK48 SK49 SK53 SK54 SK56
 PL.28 遺構 土坑・井戸 SK57 SK67 SK68 SK69 SK70 SE1
 PL.29 遺構 第10地点・井戸・ピット SE1 SH6 SH7 SH8
 PL.30 遺構 溝 SD2 SD4 SD5 SD6 SD7a SD7b SD8 SD9
 PL.31 遺構 第10地点・溝 SD11 SD12 SD13 SD14 SD15 SD16
 PL.32 遺構 溝 SD15 SD16 SD30 SD31 SD32
 PL.33 遺構 溝・SX SD32 SD34 SD41 SD42 SX1
 PL.34 遺構 第1地点・第3地点・第4地点・白塚出途遺跡・SX SX3 SX4 SX7
 PL.35 遺物 竪穴出土土器 SI3 SI4 SI6 SI7
 PL.36 遺物 竪穴出土土器 SI7 SI8 SI9
 PL.37 遺物 竪穴出土土器 SI9 SI10
 PL.38 遺物 竪穴出土土器 SI10 SI11 SI12 SI13 SI14
 PL.39 遺物 竪穴出土土器 SI14 SI15
 PL.40 遺物 竪穴出土土器 SI15 SI17 SI19 SI21 SI23
 PL.41 遺物 竪穴出土土器 SI23
 PL.42 遺物 竪穴出土土器 SI23
 PL.43 遺物 竪穴出土土器 SI23
 PL.44 遺物 竪穴出土土器 SI23 SI24 SI25
 PL.45 遺物 竪穴出土土器 SI25 SI26
 PL.46 遺物 竪穴出土土器 SI26 SI27 SI28
 PL.47 遺物 竪穴出土土器 SI28
 PL.48 遺物 竪穴出土土器 SI28 SI29
 PL.49 遺物 竪穴出土土器 SI29 SI30
 PL.50 遺物 竪穴・掘立柱建物・古墳出土土器 SI30 SB4 SM2 SM3 SM7 SM8
 PL.51 遺物 古墳出土土器 SM8 SM9
 PL.52 遺物 古墳出土土器 SM9
 PL.53 遺物 古墳出土土器 SM9 SM10 SM11
 PL.54 遺物 古墳出土土器 SM11 SM12
 PL.55 遺物 古墳出土土器 SM12
 PL.56 遺物 古墳出土土器 SM12 SM13 SM14
 PL.57 遺物 古墳出土土器 SM14
 PL.58 遺物 古墳出土土器 SM14
 PL.59 遺物 古墳出土土器 SM14 SM15 SM16
 PL.60 遺物 古墳出土土器 SM16 SM17
 PL.61 遺物 古墳・土坑出土土器 SM17 SM18 SK4 SK18 SK22 SK24 SK27 SK31 SK35
 PL.62 遺物 土坑・溝出土土器 SK35 SK44 SK45 SK67 SD9 SD20 SD22 SD31
 PL.63 遺物 溝・SX・遺構外出土土器 SD31 SX3 SX4 SX5 SX7 SX11 SX12 遺構外
 PL.64 遺物 竪穴出土土器 SI2 SI6 SI7 SI8 SI9 SI11 SI12 SI13 SI14 SI16
 PL.65 遺物 竪穴出土土器 SI17 SI18 SI20 SI21 SI23 SI24 SI25 SI26 SI27
 PL.66 遺物 竪穴出土土器 SI28 SI29 SI30

PL.67 遺物 竪穴・掘立柱建物・古墳出土土器 SI30 SI31 SB4 SM1 SM2 SM3 SM4 SM7
SM8 SM9 SM10

PL.68 遺物 古墳出土土器 SM11 SM12 SM13 SM14

PL.69 遺物 古墳・土坑・出土土器 SM14 SM15 SM17 SM18 SK4 SK5 SK8 SK10 SK14 SK15
SK16 SK17 SK19 SK21 SK23 SK26 SK27 SK30 SK34 SK36 SK40 SK41 SK44 SK45
SK46 SK49 SK54

PL.70 遺物 井戸・ピット・溝・SX出土土器 SE1 SH13 SD5 SD13 SD20 SD29 SD31 SD34 SD37
SD39 SX2 SX3 SX4 SX5 SX12 SX13
土製品 SI18 SI23 SM2 SM9 SM11 SM12 SM14

PL.71 遺物 土製品 SM14 SM16 SM18 SK24 SK41 SD25 SD29 SD30 SD34 SD39 SX3
SX12 遺構外
石製品 SI7 SI8 SI12 SI20 SI23 SI26 SI28 SI29

PL.72 遺物 石製品 SM7 SM9 SM10 SM11 SM14 SM15 SM16 SM18 SK6 SK34 SE1 SD9
SD12 SD15 SD21 SD26 SD29 SD34 SX2 SX13 遺構外
金属製品 SI11 SI14 SI15 SM7 SM8 SM9 SM11 SM14 SK30

PL.73 遺物 金属製品 SK30 SK39 SK44 SD12 SD13 SD19 SD22 SD29 SD30 SD31 SD37
SX4 遺構外
埴輪 SI4 SI24 SI26 SI27 SI28 SM7 SM9

PL.74 遺物 埴輪 SM9 SM10 SM17 SK41 SD13 SD15 SD16 遺構外

PL.75 遺物 自然遺物 SI23 SK23 遺構外
中世 SI4 SI7 SI28 SM9 SM10 SM12 SM14 SM17 SK66 SE1 SD8 SD13 SD16
SD17 SD22 SD25 SD29 SD30 SD31 SD40 遺構外

PL.76 遺物 神明塚採集神獣鏡

PL.77 遺物 神明塚採集神獣鏡拡大・神明塚（棗塚）2017年撮影

表 目 次

表 1	岩石肉眼鑑定結果	175
表 2	器種別石質組成	176
Tab.1	遺構一覧	viii
Tab.2	土器観察表	
Tab.3	土製品・石製品・金属製品観察表	
Tab.4	中世陶器集計表	
Tab.5	遺構計測表	

※ Tab.1以外はDVD-ROMのみ収録。

Tab.1 遺構一覽

掲載遺構 No.	種別	地区名	調査コード	調査時遺構番号	Grid
SI 1	竪穴住居跡	山新遺跡第 10 地点	セ 548	008 号	R14-42
SI 2	竪穴住居跡	山新遺跡第 10 地点	セ 548	006 号	R14-64
SI 3	竪穴住居跡	山新遺跡第 10 地点	セ 548	043 号	S14-62
SI 4	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	058 号	S13-93
SI 5	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	059 号	S13-79
SI 6	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	057 号	T13-20
SI 7a	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	065-1 号	T12-15
SI 7b	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	065-2 号	T12-17
SI 7c	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	065-3 号	T12-18
SI 8	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	068 号	T11-79
SI 9	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	070 号	U11-51
SI 10	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	076 号	U11-05
SI 11	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	079 号	V10-36
SI 12	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	082 号	W09-94
SI 13	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	081 号	W09-73
SI 14	竪穴住居跡	山新遺跡第 8 地点 山新遺跡第 9 地点	セ 489 セ 502	20 号 002 号	W09-09
SI 15	竪穴住居跡	山新遺跡第 8 地点	セ 489	19 号	X09-12
SI 16	竪穴住居跡	山新遺跡第 8 地点	セ 489	16 号	X08-83
SI 17	竪穴住居跡	山新遺跡第 9 地点	セ 502	009 号	X08-33
SI 18	竪穴住居跡	山新遺跡第 9 地点	セ 502	011 号 A	X08-28
SI 19	竪穴住居跡	山新遺跡第 9 地点	セ 502	011 号 B	X08-08
SI 20	竪穴住居跡	山新遺跡第 8 地点	セ 489	06 号	Y07-96
SI 21	竪穴住居跡	山新遺跡第 8 地点	セ 489	05 号	Y07-77
SI 22	竪穴住居跡	山新遺跡第 9 地点	セ 502	023 号	Y07-33
SI 23	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	097 号	A06-32
SI 24	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	49 号	B05-51
SI 25	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	50 号	A05-39
SI 26	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	52 号	B04-93
SI 27	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	33 号	A04-69
SI 28	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	35 号	B04-53
SI 29	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	31 号	C03-36
SI 30	竪穴住居跡	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	30 号	C03-28
SI 31	竪穴住居跡	山新遺跡第 9 地点	セ 502	022 号	Y07-54
SB 1	掘立柱建物跡	山新遺跡第 10 地点	セ 548	039 号	Q15-92
SB 2	掘立柱建物跡	山新遺跡第 8 地点	セ 489	15 号	X08-94
SB 3	掘立柱建物跡	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	087 号	Z06-82
SB 4	掘立柱建物跡	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	34 号	D02-65
SM 1	古墳（方墳）	山新遺跡第 10 地点	セ 548	023 号	Q15-90
SM 2	古墳（方墳）	山新遺跡第 10 地点	セ 548	031 号	Q15-62
SM 3	古墳（方墳）	山新遺跡第 10 地点	セ 548	019 号	Q15-66
SM 4	古墳（方墳）	山新遺跡第 10 地点	セ 548	015 号	Q15-19

掲載遺構 No	種別	地区名	調査コード	調査時遺構番号	Grid
SM 5	古墳（方墳）	山新遺跡第 10 地点	セ 548	017 号	R15-53
SM 6	古墳（方墳）	山新遺跡第 10 地点	セ 548	042 号	S14-61
SM 7	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	061 号	S13-78
SM 8	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	056 号	T12-84
SM 9	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	066 号	U11-60
SM 10	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	069 号	U12-03
SM 11	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	072 号	V11-14
SM 12	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 2 次 山新遺跡第 8 地点 山新遺跡第 9 地点	セ 377 セ 489 セ 502	080 号 81 号 004 号	W09-66
SM 13	古墳（方墳）	山新遺跡第 8 地点	セ 489	02 号	Y08-41
SM 14	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 2 次 山新遺跡第 8 地点 山新遺跡第 9 地点	セ 377 セ 489 セ 502	089 号 01 号 019 号	Y07-55
SM 15	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	084 号	Z06-97
SM 16	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	086 号	A05-72
SM 17	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	48 号・48-B 号	B05-24
SM 18	古墳（円墳）	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	31 号・41 号・45 号	C03-77
SK 1	土坑	山新遺跡第 10 地点	セ 548	024 号	Q15-95
SK 2	土坑	山新遺跡第 10 地点	セ 548	028 号	Q15-84
SK 3	土坑	山新遺跡第 10 地点	セ 548	025 号	R15-07
SK 4	土坑	山新遺跡第 10 地点	セ 548	014 号	R15-02
SK 5	土坑	山新遺跡第 10 地点	セ 548	010 号	R14-72
SK 6	土坑	山新遺跡第 10 地点	セ 548	033 号	R14-66
SK 7	土坑	山新遺跡第 10 地点	セ 548	046 号	R14-68
SK 8	土坑	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	063 号	T13-50
SK 9	土坑	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	071 号	U11-84
SK 10	土坑	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	077 号	U11-45
SK 11	土坑	山新遺跡第 9 地点	セ 502	007 号	W09-15
SK 12	土坑	山新遺跡第 8 地点	セ 489	11 号	X09-32
SK 13	土坑	山新遺跡第 8 地点	セ 489	12 号	X09-43
SK 14	土坑	山新遺跡第 8 地点	セ 489	13 号	X09-44
SK 15	土坑	山新遺跡第 8 地点	セ 489	14 号	X09-44
SK 16	土坑	山新遺跡第 8 地点	セ 489	18 号	X09-13
SK 17	土坑	山新遺跡第 8 地点	セ 489	17 号	X08-84
SK 18	土坑	山新遺跡第 8 地点	セ 489	15 号	X09-15
SK 19	土坑	山新遺跡第 8 地点	セ 489	22 号	X08-89
SK 20	土坑	山新遺跡第 8 地点	セ 489	08 号	Y08-40
SK 21	土坑	山新遺跡第 8 地点	セ 489	07 号	Y08-31
SK 22	土坑	山新遺跡第 9 地点	セ 502	025 号	Y07-90
SK 23	土坑	山新遺跡第 9 地点	セ 502	026 号	Y07-73
SK 24	土坑	山新遺跡第 9 地点	セ 502	016 号	Y07-63
SK 25	土坑	山新遺跡第 9 地点	セ 502	021 号	Y07-34

掲載遺構 No.	種別	地区名	調査コード	調査時遺構番号	Grid
SK 26	土坑	山新遺跡第 9 地点	セ 502	030 号	Y07-56
SK 27	土壙	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	093 号	Z07-34
SK 28	土壙	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	094 号	Z07-14
SK 29	土壙	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	095 号	Z07-05
SK 30	土壙	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	088 号	Z06-54
SK 31	土坑	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	092 号	Z06-58
SK 32	土坑	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	096 号	Z06-38
SK 33	土坑	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	103 号	A06-40
SK 34	土壙	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	085 号	Z06-16
SK 35	土坑	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	098 号	Z16-19
SK 36	土坑	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	104 号	A06-20
SK 37	土坑	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	102 号	A06-13
SK 38	土坑	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	101 号	A05-88
SK 39	土壙	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	100 号	A05-45
SK 40	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	37 号	B04-34
SK 41	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	36 号	B04-17
SK 42	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	38 号	B04-08
SK 43	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	44 号	C03-90
SK 44	土坑群	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	05 号	C03-23
SK 45	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	42 号	C03-69
SK 46	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	47 号	D03-34
SK 47	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	43 号	D03-03
SK 48	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	17 号	D02-92
SK 49	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	04 号	D02-74
SK 50	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	03 号	D02-75
SK 51	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	06 号 - b	D02-73
SK 52	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	06 号 - a	D02-74
SK 53	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	27 号	C03-07
SK 54	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	28 号	C02-88
SK 55	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	29 号	D02-70
SK 56	土坑群	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	23 号	C02-69
SK 57	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	22 号	D02-51
SK 58	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	24 号	D02-51
SK 59	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	16 号 - 2	D02-33
SK 60	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	16 号 - 1	D02-33
SK 61	土坑群	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	15 号	D02-34
SK 62	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	25 号	C02-67
SK 63	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	20 号	C02-68
SK 64	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	21 号	C02-58
SK 65	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	19 号	C02-49
SK 66	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	18 号	D02-40
SK 67	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	11 号	D02-22

掲載遺構 No	種別	地区名	調査コード	調査時遺構番号	Grid
SK 68	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	10 号	D02-23
SK 69	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	12 号	D02-24
SK 70	土坑	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	07 号	D02-45
SE 1	井戸状遺構	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	08 号	C03-04
SH 1	ピット	山新遺跡第 10 地点	セ 548	037 号	P16-28
SH 2	ピット	山新遺跡第 10 地点	セ 548	032 号	P16-08
SH 3	ピット群	山新遺跡第 10 地点	セ 548	035 号	Q16-00
SH 4	ピット	山新遺跡第 10 地点	セ 548	030 号	Q16-00
SH 5	ピット群	山新遺跡第 10 地点	セ 548	034 号	Q15-67
SH 6	ピット	山新遺跡第 10 地点	セ 548	047 号	R14-68
SH 7	ピット	山新遺跡第 10 地点	セ 548	044 号	R14-37
SH 8	ピット	山新遺跡第 10 地点	セ 548	045 号	R14-36
SH 9	ピット	山新遺跡第 9 地点	セ 502	028 号	Y07-64
SH 10	ピット	山新遺跡第 9 地点	セ 502	029 号	Y07-64
SH 11	ピット	山新遺跡第 9 地点	セ 502	032 号	Y07-65
SH 12	ピット	山新遺跡第 9 地点	セ 502	031 号	Y07-65
SH 13	ピット	山新遺跡第 9 地点	セ 502	027 号	Y07-65
SH 14	ピット	山新遺跡第 9 地点	セ 502	033 号	Y07-55
SH 15	ピット	山新遺跡第 9 地点	セ 502	034 号	Y07-56
SH 16	ピット	山新遺跡第 9 地点	セ 502	035 号	Y07-43
SH 17	ピット	山新遺跡第 9 地点	セ 502	036 号	Y07-26
SD 1	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	036 号	P16-07
SD 2	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	027 号	P16-15 ～ Q16-02
SD 3	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	029 号	P16-09 ～ Q16-03
SD 4	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	026 号	Q15-93
SD 5	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	022 号	P15-79 ～ R15-63
SD 6	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	020 号	Q15-73 ～ Q93
SD 7 - a	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	018 号 A	Q15-51 ～ R15-54
SD 7 - b	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	018 号 B	Q15-66 ～ 70
SD 8	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	016 号	Q15-36 ～ R15-33
SD 9	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	002 号	Q15-07 ～ R14-96
SD 10	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	007 号・041 号	R14-75 ～ 82
SD 11	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	004 号	R14-65 ～ 80
SD 12	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	001 号	R14-56 ～ 98
SD 13	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	009 号	R14-56 ～ 98
SD 14	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	005 号	R14-47 ～ 61
SD 15	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	021 号	R14-39 ～ 99
SD 16	溝	山新遺跡第 10 地点	セ 548	040 号	S14-30 ～ 80
SD 17	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	060 号	S14-12 ～ 18
SD 18	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377		S13-94
SD 19	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	062 号	S13-69 ～ T13-61
SD 20	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	064 号	S13-45 ～ U11-97

掲載遺構 No.	種別	地区名	調査コード	調査時遺構番号	Grid
SD 21	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	067 号	T12-47
SD 22	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	055 号	T13-11 ~ U12-63
SD 23	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377		U11-27 ~ 36
SD 24	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377		U10-97 ~ U11-88
SD 25	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	074 号	V10-09 ~ 89
SD 26	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	073 号	V10-00 ~ 53
SD 27	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	083 号	V09-98 ~ V10-17
SD 28	溝	山新遺跡第 9 地点	セ 502	003 号	W09-26
SD 29	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	078 号	W09-28 ~ X09-80
SD 30	溝	山新遺跡第 8 地点 山新遺跡第 9 地点	セ 489 セ 502	03 号・10 号 005 号	W08-98 ~ Y07-89
SD 31	溝	山新遺跡第 9 地点	セ 502	001 号	X08-34 ~ Y07-98
SD 32	溝	山新遺跡第 8 地点	セ 489	04 号	X08-66 ~ Y08-53
SD 33	溝	山新遺跡第 9 地点	セ 502	012 号	Y07-46
SD 34	溝	山新遺跡第 9 地点	セ 502	018 号	Y07-44
SD 35	溝	山新遺跡第 9 地点	セ 502	017 号	Y07-35
SD 36	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	090 号	Z06-47 ~ 80
SD 37	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	091 号	Z06-42 ~ A05-89
SD 38	溝	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	099 号	A05-86 ~ 97
SD 39	溝	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	39 号	B04-08 ~ 24
SD 40	溝	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	46 号	C04-10・11
SD 41	溝	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	01 号	C03-41 ~ D02-55
SD 42	溝	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	32 号	C02-87 ~ C03-29
SD 43	溝	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	09 号	C03-17 ~ D02-82
SD 44	溝	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	13 号	D02-13 ~ 30
SX 1	包含層	山新遺跡第 10 地点	セ 548	003 号	R14-85
SX 2	土器集中	山新遺跡第 9 地点	セ 502	015 号	Y07-64
SX 3	遺物斜面堆積	山新遺跡第 9 地点	セ 502	014 号	Y07-72
SX 4	土器集中	山新遺跡第 9 地点	セ 502	013 号	Y07-43
SX 5	土器集中	山新遺跡第 9 地点	セ 502	008 号	X08-52
SX 6	不明遺構	山新遺跡第 8 地点	セ 489		Y08-61
SX 7	遺物出土	山新遺跡第 3 地点 2 次	セ 377	075 号	V09-88
SX 8	貝層	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363		C04-24
SX 9	焼土硬化面	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	40 号	C03-93
SX 10	遺物集中	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	26 号	C02-88
SX 11	遺物集中	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	14 号	C02-79
SX 12	遺物集中	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363	02 号	C02-77
SX 13	縄文遺物集中	山新遺跡第 3 地点 1 次	セ 363		D02-73

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

本報告書は、市原市が計画する都市計画道路八幡椎津線（姉崎工区）の建設に先立って発掘調査を実施した、山新（さんしん）遺跡の一部及び白塚出途（しらつかでど）遺跡の調査成果について掲載している。

都市計画道路八幡椎津線（姉崎工区）については、平成9年8月20日付けで市原市長小出善三郎より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出された。これを受けて、千葉県教育庁文化財課、市原市教育委員会ふるさと文化課が現地踏査を行い、平成9年10月29日付け教文第6－1138号で、千葉県教育委員会教育長より、照会地28,000㎡のうち18,000㎡に遺跡が存在する旨の回答がなされた。

この結果にもとづき、市原市土木部、千葉県教育庁文化財課、市原市教育委員会ふるさと文化課で埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行い、地区内に所在する埋蔵文化財については、発掘調査による記録保存とする措置がとられることとなった。当初、発掘調査は財団法人市原市文化財センターへの委託事業として実施している。なお、工事対象範囲には、近隣住民の生活道路が含まれていたことから、その時点で発掘調査が困難であった部分の取り扱いについては、市教育委員会ふるさと文化課による工事立会いとした。

発掘調査は平成10年度の第1地点を皮切りとして、平成28年度の第10地点まで断続的に実施されたが、この間調査組織が変更し、当初市原市が財団法人市原市文化財センターに業務委託する形で実施したが、平成18（2006）年3月に財団が解散したため、それ以後、現在に至るまで市原市の組織である市原市埋蔵文化財調査センターが業務を担っている。

第2節 遺跡周辺の環境

地理的環境（Fig.1・2）

市原市は、房総半島のほぼ中央に位置する。市域が36km×22kmと南北に長く、標高は、南部の丘陵地帯にある大福山で292mのピークを示し、北部へ向け次第に低くなる地勢を示す。この丘陵地に水源を持った養老川が、市中央を南から北に貫流して東京湾に至る。市域にはこの他に東京湾に注ぐ2本の河川、北側に村田川、南側に椎津川が流れ、これら河川の周囲には水田可耕地となる沖積地が広がる。このうち養老川については、近世以降、船や筏による水運が物資の輸送に重要な役割を果たしたことが知られている（藤原1979）。

山新遺跡・白塚出途遺跡の所在する海岸平野は、養老川下流域左岸に広がる南北6km、東西4.2kmの範囲を持つ（Fig.1）。ここには東京湾の海退によって形成された砂堆列が形成され、養老川や小河川に侵食された砂堆列上には縄文時代後期からの生活痕跡が残る。

歴史的環境（Fig.1・2）

分布地図上では、山新遺跡・白塚出途遺跡が位置する養老川と椎津川に挟まれた沖積地には、砂堆列上を中心に遺跡が存在するが、実態の判明している事例は限られている。姉崎二子塚古墳の調査が

古く、それ以外については個人住宅や、福祉施設の建設に伴った単発的な調査が多い。これらの成果の中では山新遺跡永津前地区（小川2013）からは、弥生時代後期前半の久ヶ原期の竪穴住居跡が検出されているが、都市計画道路建設に伴う調査である山新遺跡第2次（小橋2002）では中期中頃の宮ノ台式期の竪穴住居跡を検出しており、砂堆上での集落開始時期として認識されている。他にも姉崎上野合遺跡（木對1990）、山新遺跡（鶴岡2005）など古墳時代前期、中期の遺構が検出されており、姉崎古墳群とその背景にある集落については、低地での展開が断片的な資料の蓄積からその動態を追うことが可能となってきている。

ほかに、15世紀後半代とみられる、道路跡と周辺居住区とみられるピット群、墓域や鍛冶関連遺物を含む中規模の貝層を検出した棗塚遺跡（蜂屋2000ほか）が位置している。

沖積地の南側に広がる丘陵地帯は通称袖ヶ浦台地と呼ばれる。その台地上北辺部には式内社である姉崎神社が鎮座するほか、後に上海上国造につながる首長層の奥津城とされる姉崎古墳群が展開している。姉崎古墳群には100mを超える規模の古墳が含まれ、古くから研究対象となってきた。これまでに多くの研究者の説が示されているが、今富塚山古墳（前方後円墳 110m）→姉崎天神山古墳（前方後円墳 130m）→釈迦山古墳（前方後円墳 93m）→姉崎二子塚古墳（前方後円墳 110m）→姉崎山王山古墳（前方後円墳 69m 消滅）→原1号墳（前方後円墳 75m 消滅）→鶴窪古墳（前方後円墳 60m）→堰頭古墳（前方後円墳 60m）→六孫王原古墳（前方後方墳 45m）という流れが一般的には知られている。これに古墳時代終末期の大型円墳とされる海保大塚（古墳改変の出羽三山塚 60m）が続くとされる説も出ているが、調査事例に限られ、群中の変遷は必ずしも確定的なものとはなっていない。また、富士見塚古墳（円墳 25m）や木戸窪古墳（円墳 規模不明）、海保3号墳（円墳 29m）、徳部台古墳（方墳？ 規模不明）など、内容がある程度判明している古墳も確認できる。

首長系古墳とそれに関連する古墳以外に、周辺では調査事例が蓄積されている。姉崎天神山古墳に近接した姉崎台遺跡中の調査である姉崎東原遺跡B地点（高橋1993）では古墳時代前期の集落と前方後方墳を検出し、古墳時代前期から中期の集落跡が検出された畑木小谷遺跡（北見1999ほか）、海保遺跡群（大山2014）、椎津川左岸の妙経寺遺跡では古墳時代中期から終末期に至る古墳等が検出され（小出2000）、集落と墓域の動態の検証が行える環境になりつつある。

第3節 発掘調査の概要

概 要 (Fig.3)

都市計画道路八幡椎津線は、市原市の臨海部を北東から南西方向に貫通する路線で、本報告はこの路線の姉崎工区の建設に伴い平成10年度から平成28年度まで断続的に発掘調査した9地点を対象としている。

調査は総延長約1.5kmの姉崎工区のうち、工事環境の整った区間から発掘調査を実施している。結果として設定したグリッドは、姉崎工区全体を意識したものにはなっていない。起点となっているのは山新遺跡第3地点で、20m×20mの大グリッドを西から東へAから昇順に、この第3地点から西方向へ向かってXから降順に設定している。この大グリッドの中を2m×2mの小グリッドに区切り、北西隅を起点に00から99まで設定している。報告ではこのグリッドをそのまま使用している。

調査は対象面積の10%に対してトレンチを設定して確認調査を実施し、遺構が確認された範囲について本調査を実施している。ただし、調査範囲については、対象範囲が集落を横断しているため、生活道路を中心として発掘調査時で掘削不可範囲については本調査範囲に含めず工事立会を行っている。

本調査時には、調査区毎に検出した遺構に対して遺構番号を付けているが、報告段階で新たに付与した（Tab.1）。基本土層については、確認調査時のトレンチ断面図を掲載して示している（Fig.122）。なお、報告中で遺構の時期区分については基本的に以下のとおりとしている。

1 期	弥生時代中期後半
2 期 a・b 期	弥生時代後期
3 期	弥生時代終末期（弥生時代終末から古墳時代移行期）
4 期 a・b・c 新古期	古墳時代前期
5 期 a・b 新古期	古墳時代中期前半
6 期	古墳時代中期後半から後期前半
7 期	古墳時代後期後半から古墳時代終末期

【参考文献】

- 藤原文夫 1979『市原市史 別巻』市原市教育委員会
小川浩一 2013『市原市山新遺跡永津前地区』市原市教育委員会
北見一弘 1999「畑木小谷遺跡」『平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
北見一弘・鶴岡英一 2000「畑木小谷遺跡」『市原市畑木小谷遺跡・椎津茶ノ木（第2次）―不特定遺跡発掘調査報告書（3）―』（財）市原市文化財センター
小橋健司 2002『市原市文化財センター年報 平成11年度』（財）市原市文化財センター
木對和紀 1990「姉崎上野合遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会
大村 直・鶴岡英一 2005「山新遺跡」『平成16年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
蜂屋孝之 2000「6. 棗塚遺跡」『市原市文化財センター年報 平成12年度』（財）市原市文化財センター
高橋康男 1993『姉崎東原遺跡B地点』（財）市原市文化財センター
大山祐喜他 2014『市原市海保地区遺跡群Ⅰ』国際文化財株式会社
小出紳夫 2000『平成8年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会



Fig.1 山新遺跡・白塚出途遺跡 位置図

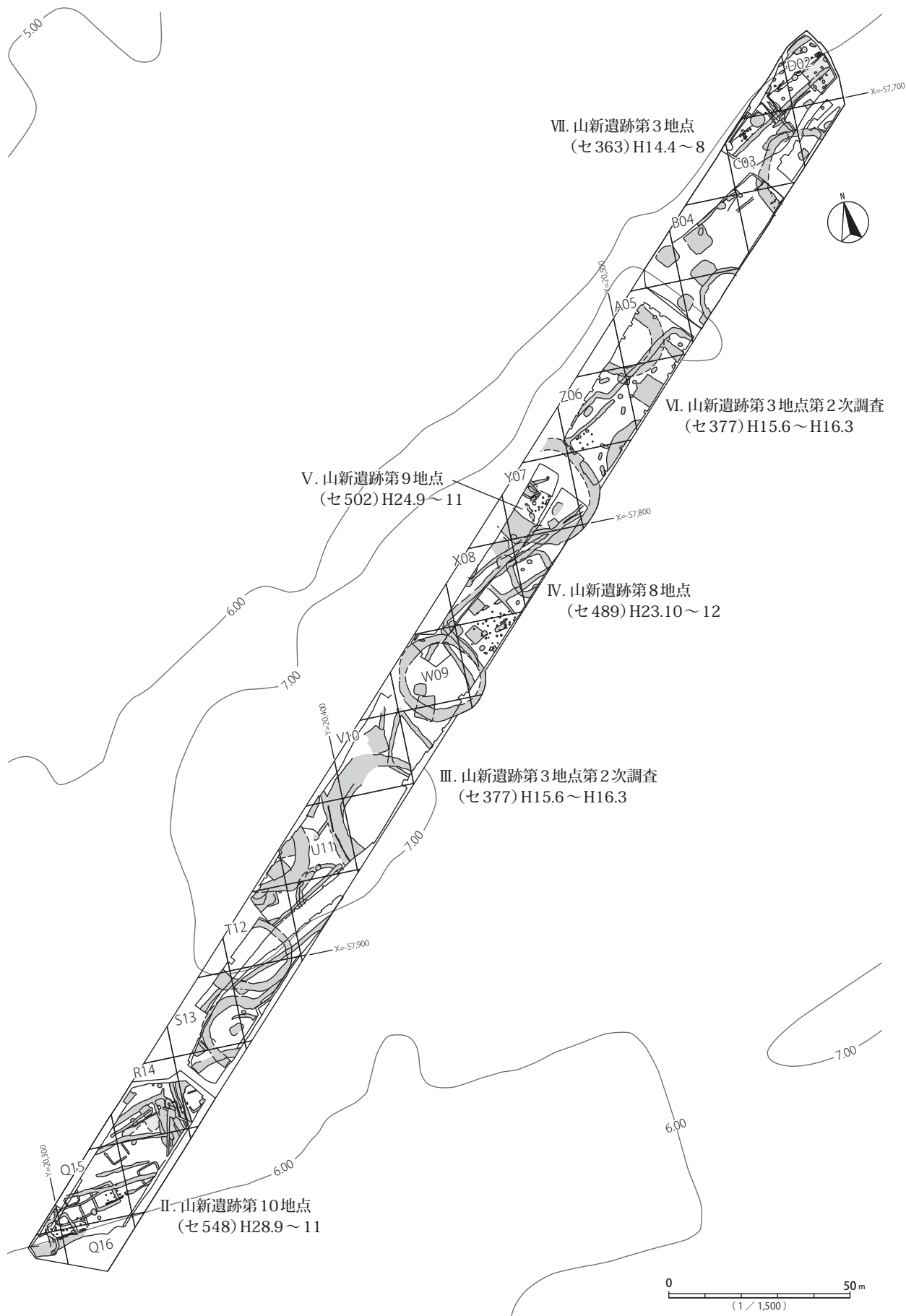


Fig.4 山新遺跡本調査区

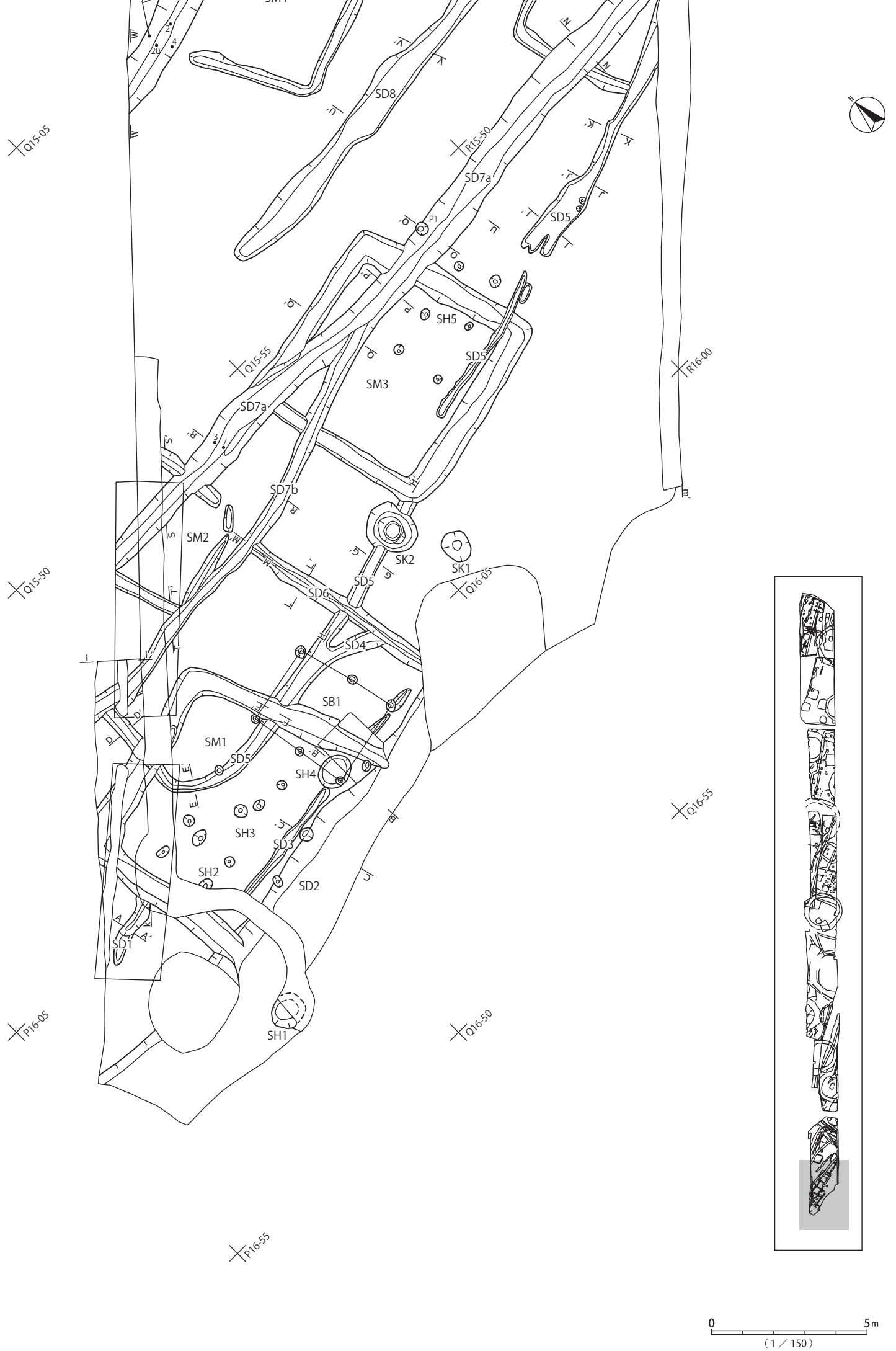


Fig.5

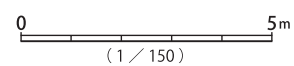
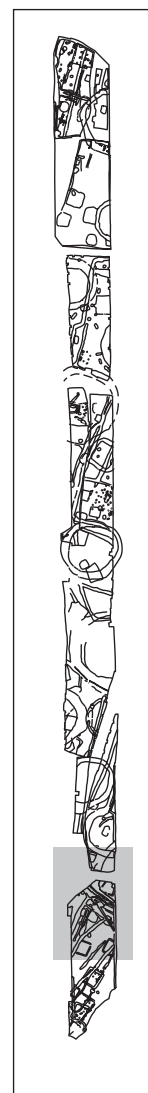
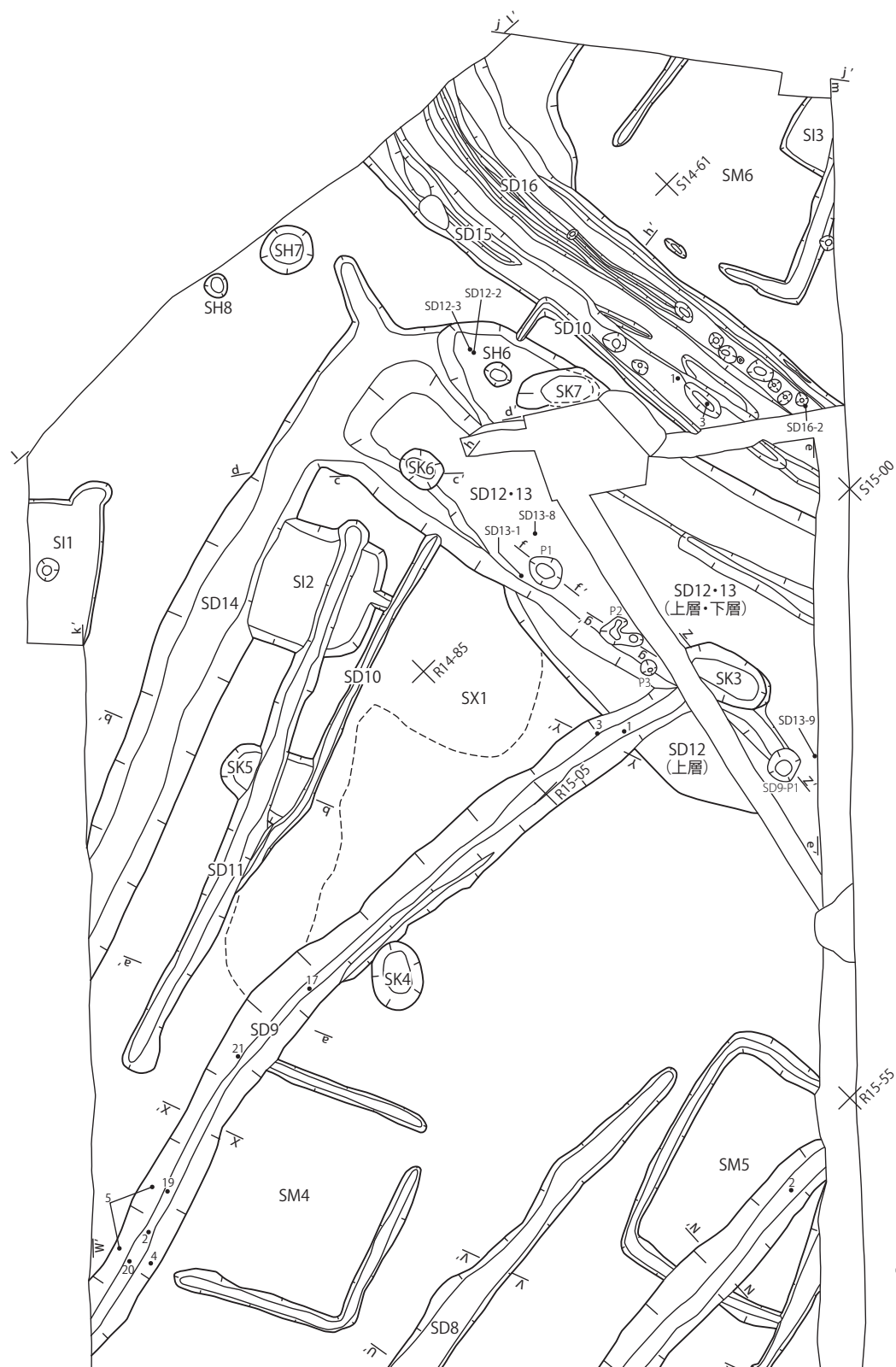
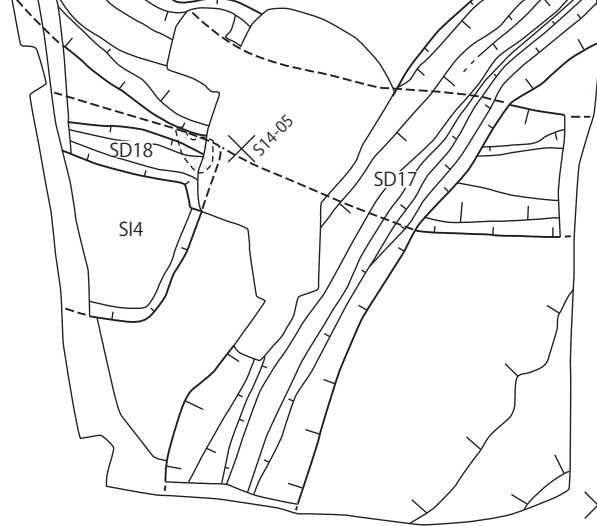


Fig.6

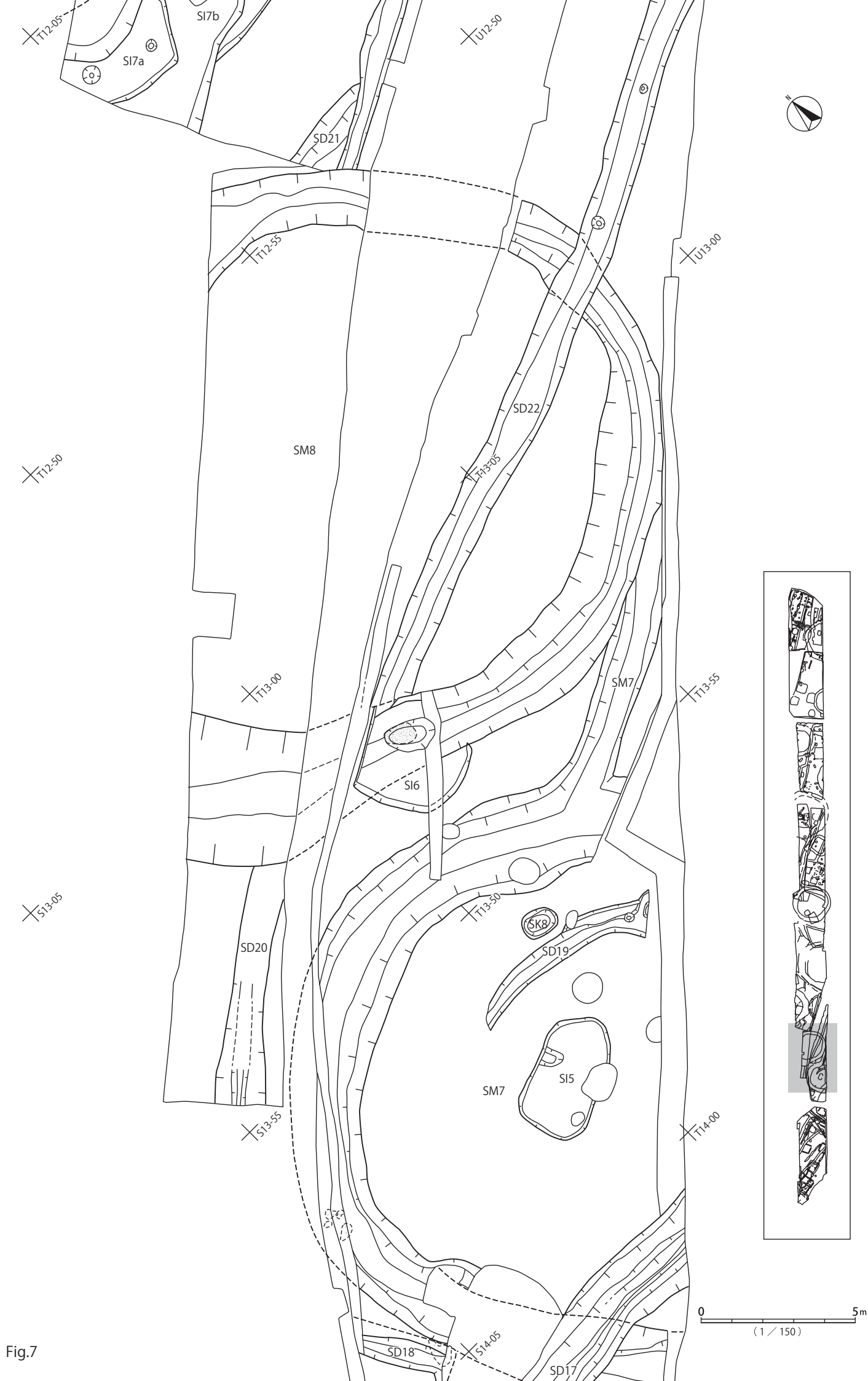


Fig.7

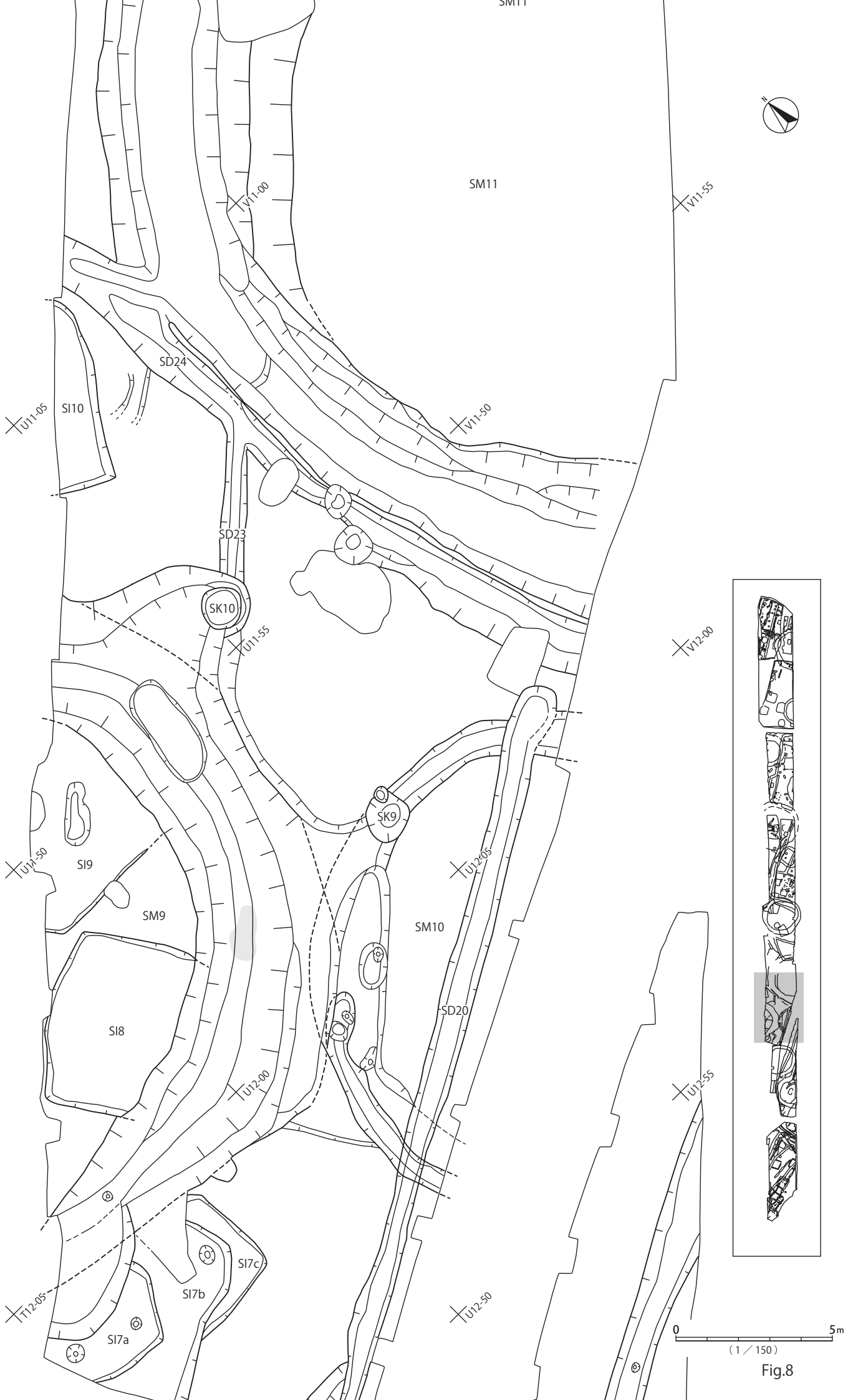


Fig.8

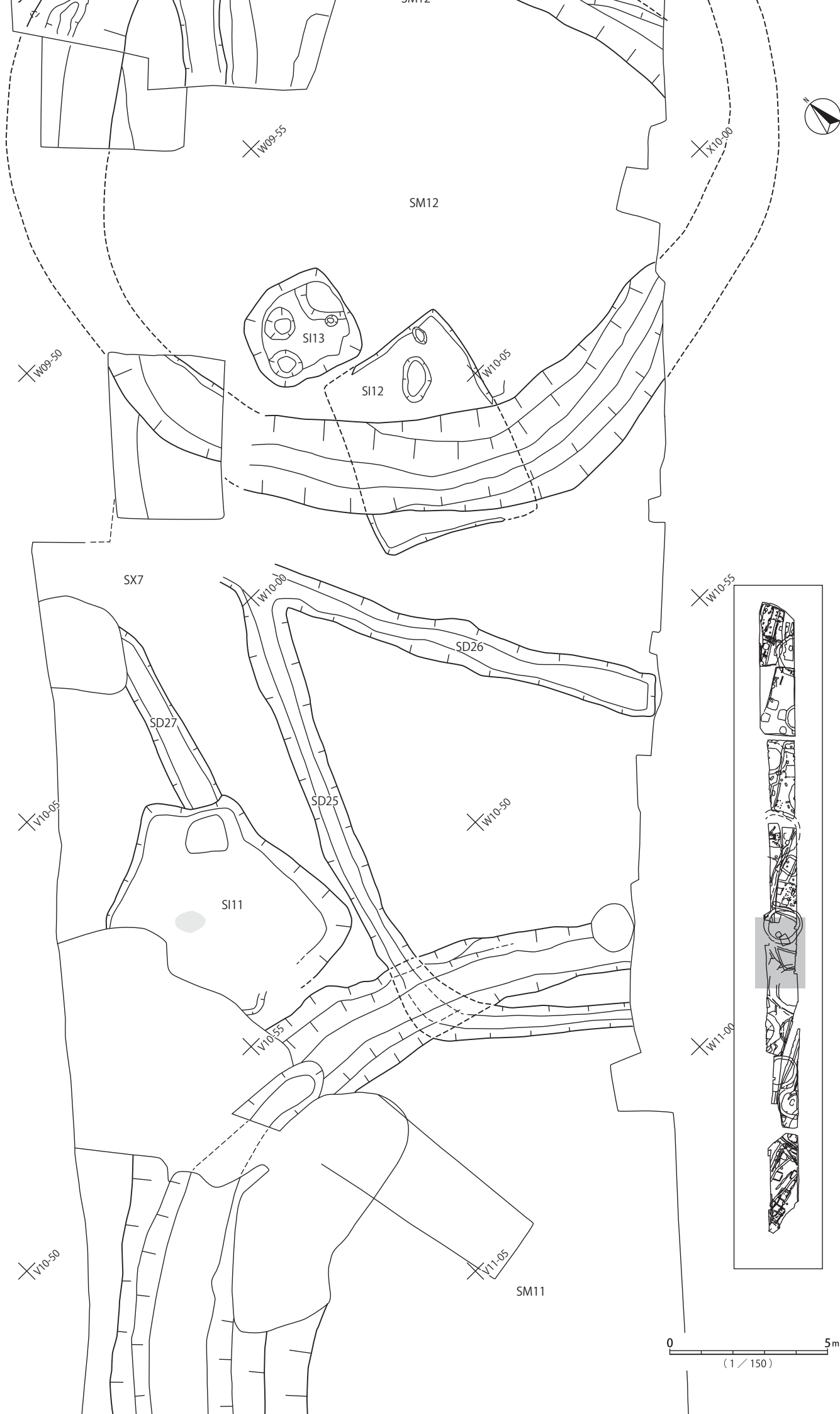


Fig.9

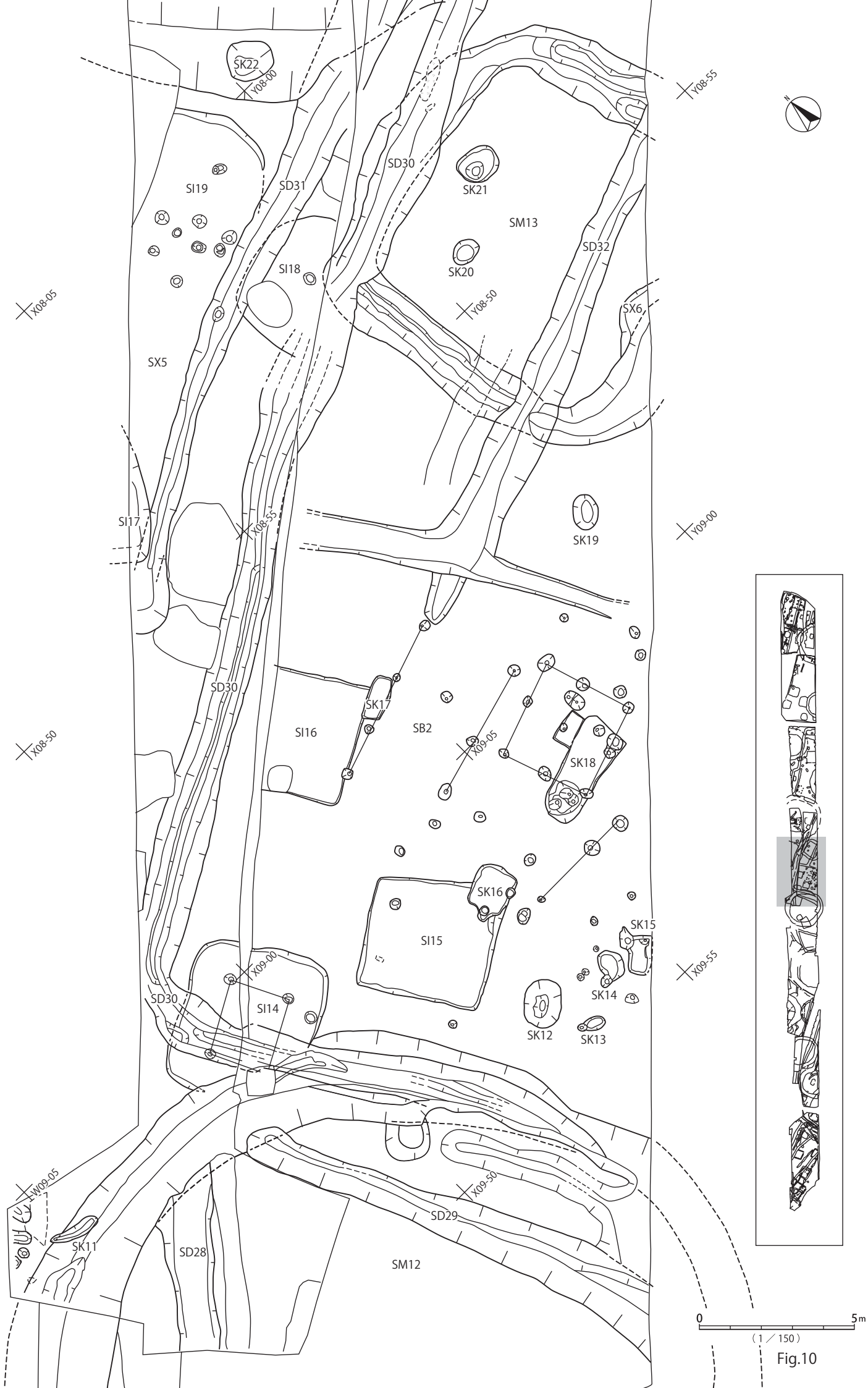


Fig.10

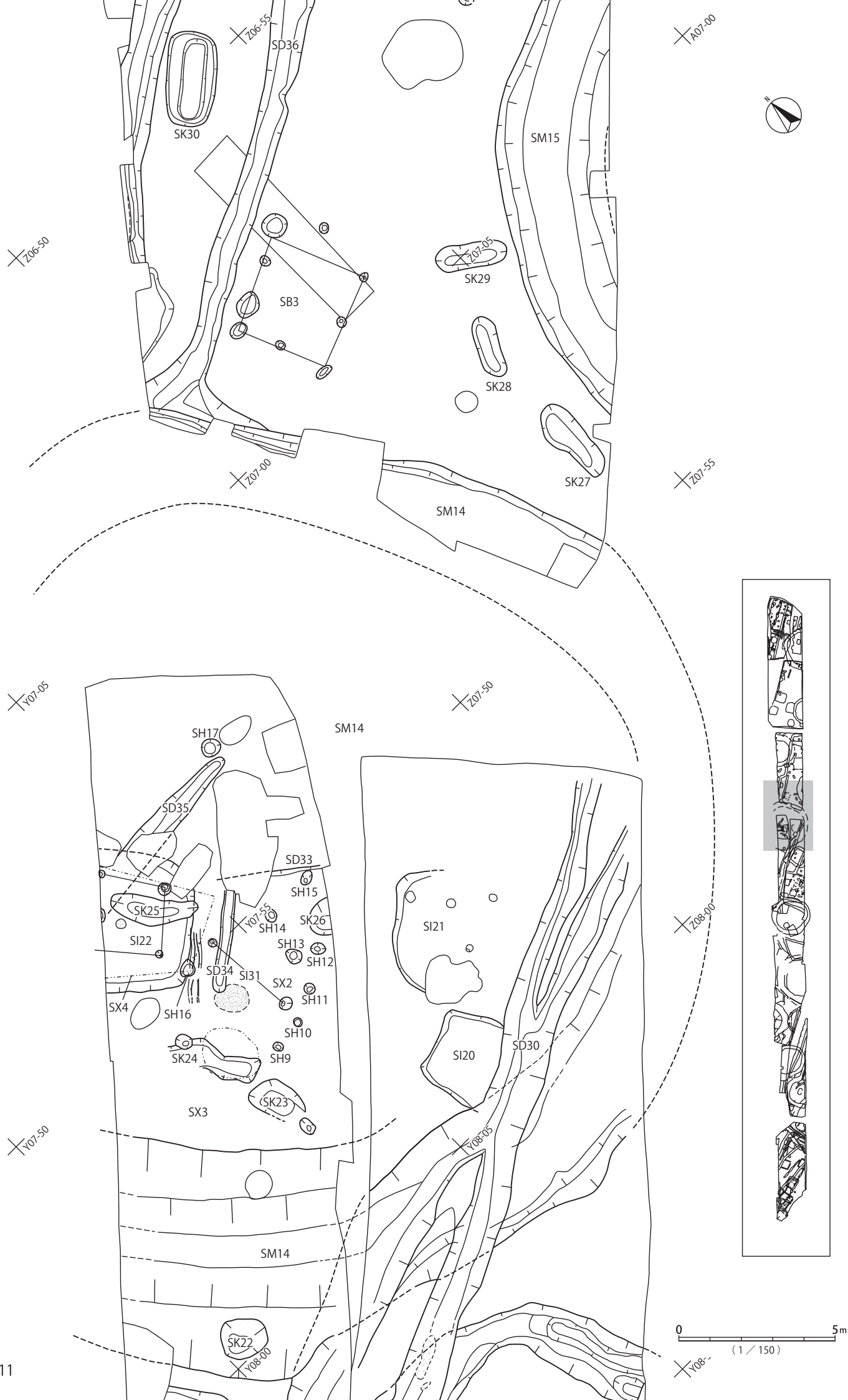
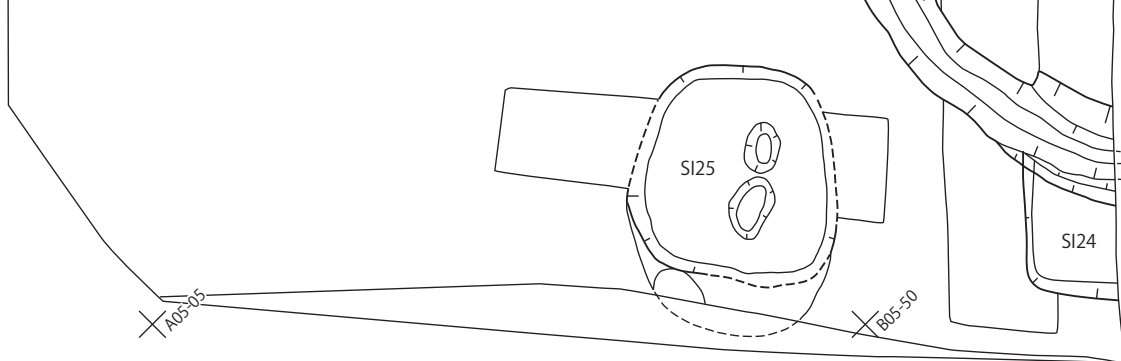
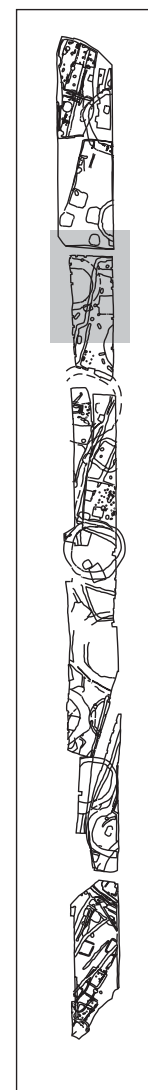


Fig.11



✕ B06-00



✕ A07-00
0 5m
(1/150)

Fig.12

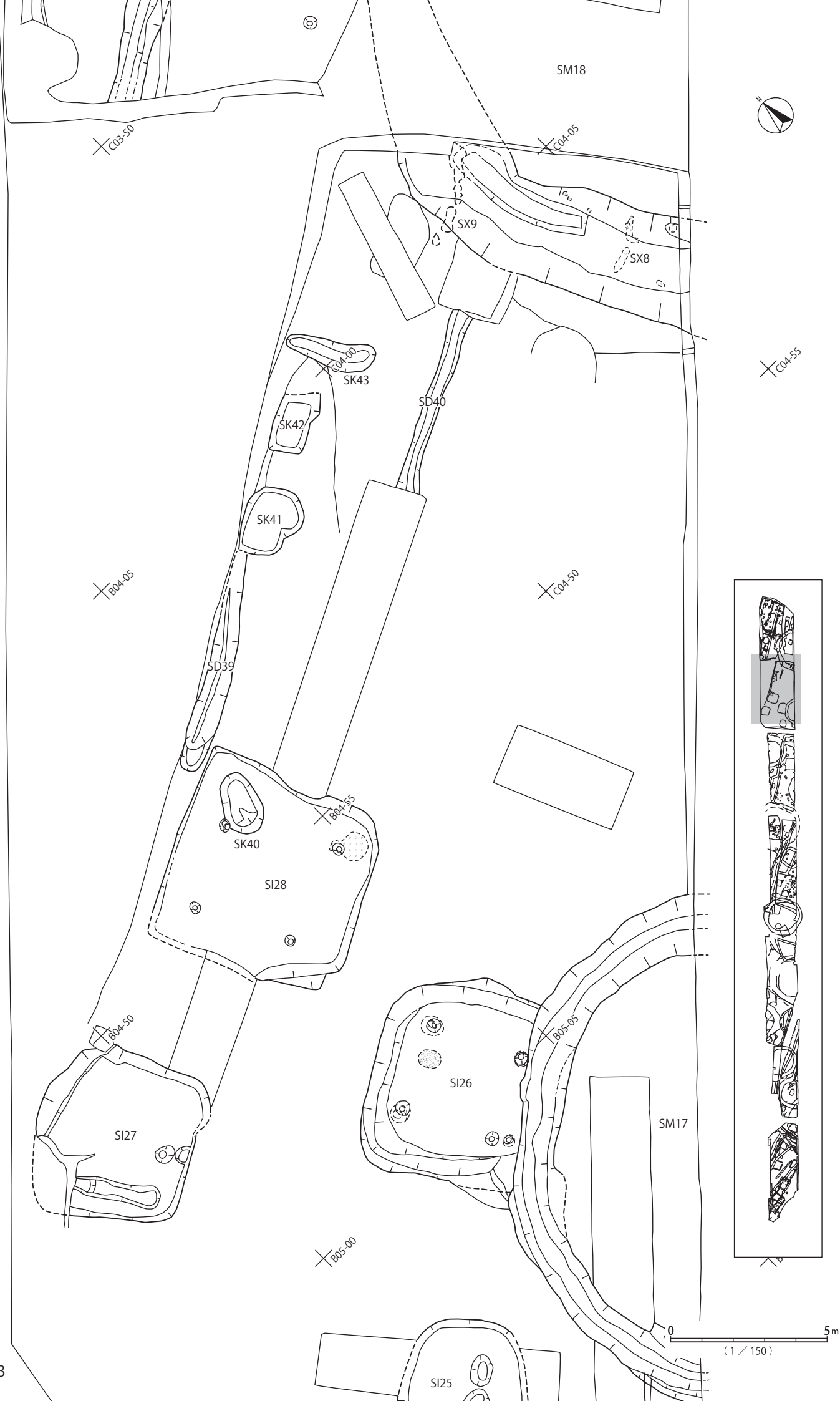


Fig.13

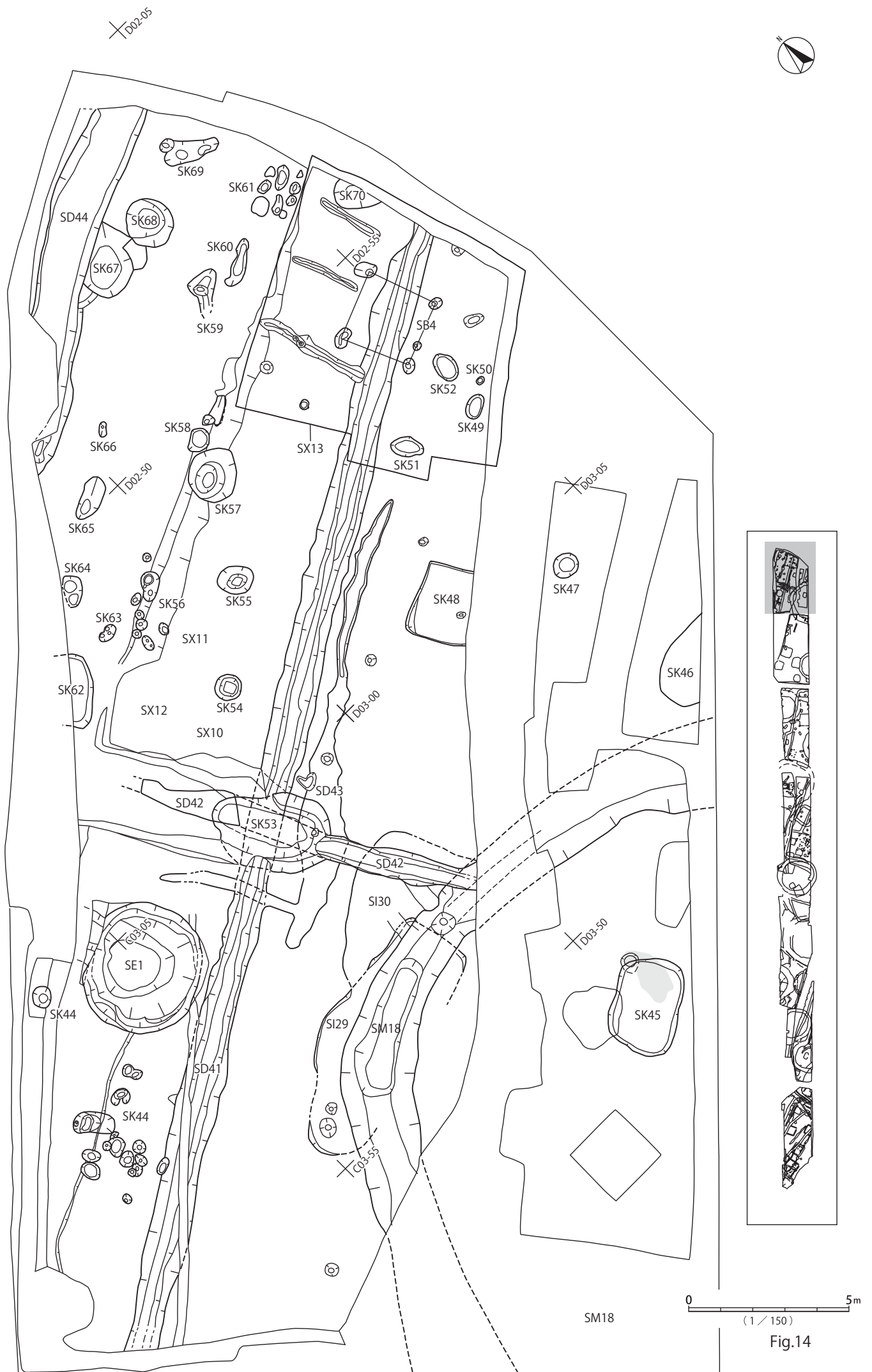


Fig.14

第2章 遺構と遺物

概要

山新遺跡・白塚出途遺跡では、竪穴住居（建物）跡31軒、掘立柱建物跡4棟、古墳18基、土坑・土壇70基、井戸1基、ピット群17箇所、溝状遺構44条、その他の遺構13基を検出した。遺構の時期は縄文時代後期から近世に至る。

山新遺跡における共通する特徴として、砂堆上に立地することから地山が砂であること、また、覆土は各時代に共通して砂質を含む黒褐色有機質土であることなどが挙げられる。さらに遺構の第一埋没土とみられる土層においては、有機質土内の砂の含有率が高くなり、地山との境界が判別し難い例が多数見受けられた。こうした状況が顕著に認められたのは竪穴住居（建物）跡で、通常台地上では床面を認識する主要な要素である硬化面について、山新遺跡・白塚出途遺跡ではその検出率が極めて低く、これに連動する現象であるかの如く、炉跡、支柱穴跡など台地上で一般的に認められる付属施設の検出事例も極めて少ない。このことには前述の、地山が砂であることが関連するとみられるが、竪穴住居の使用期間や建物の使用目的にも関わっている可能性がある。

第1節 竪穴住居（建物）跡

今回の山新遺跡・白塚出途遺跡の調査では、竪穴住居（建物）跡を31軒検出している。

また、先述した概要でも触れているが、山新遺跡・白塚出途遺跡の遺構の検出状況の傾向として、竪穴住居跡の状態として明確な床面の捕捉が困難な事例が多数を占めた。また、遺物が床面から20cm以上となる高い出土レベルに集中する傾向が認められた。これに関連して遺構の第一埋没土以降の土層から遺物が出土する例が多数を占めている。これらの現象は、単純にその立地のみで語るべきではないが、地山が砂であることから、遺構の埋没速度が台地上に比べて早いことに起因する可能性がある。竪穴住居（建物）跡の廃絶時に第一埋没土中に遺物が含まれない状況も想定されるが、出土する遺物に時期差が明瞭ではないものに対しては、床面から浮いた遺物についても遺構に帰属するものとして判断している。よって遺構時期の判定にかかるその精度は、やや幅を持ったものとなっている。

本報告では竪穴住居（建物）跡の規模や主軸方位などはTab.5の遺構計測表に記載し、本節においては説明上必要と認められない限り記述していない。

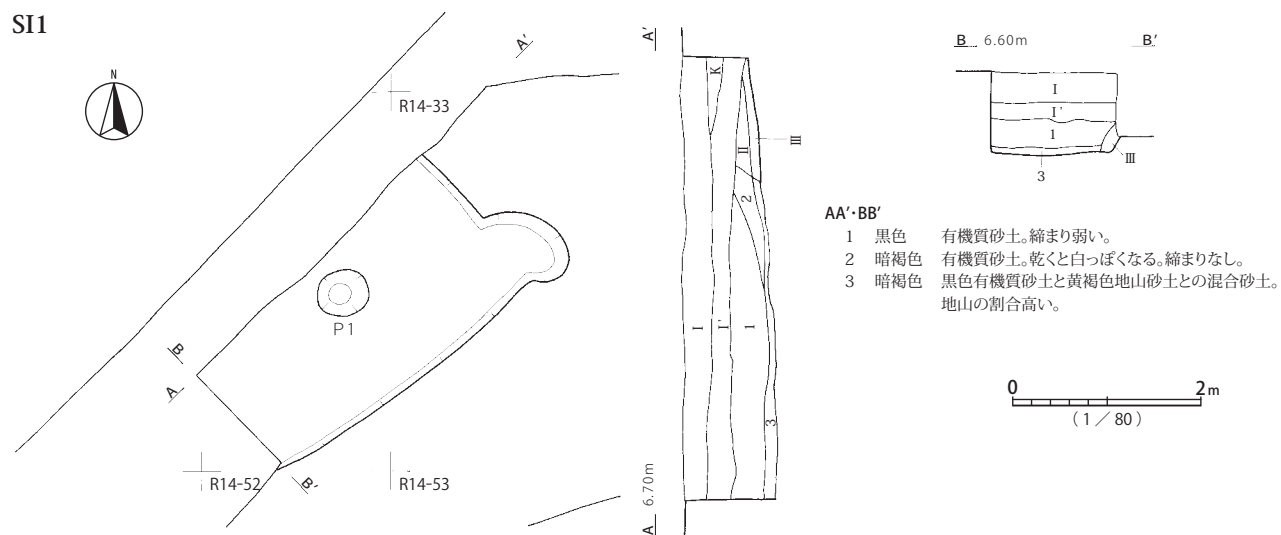
SI1 セ548山新遺跡第10地点（Fig.15）

SI1はR14-42付近に位置する。大部分は調査区外に位置し、検出は遺構全体の1/4以下とみられる。SI2が南側に隣接する。別遺構との切合いは無い。

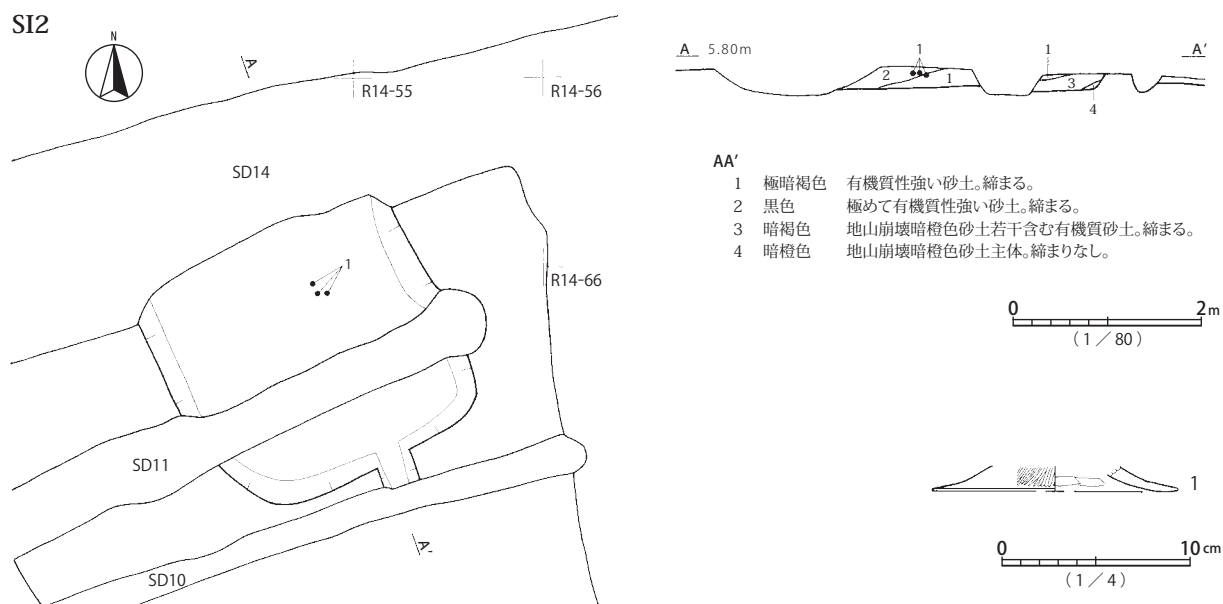
平面形状は、方形を呈するとみられる。付属する施設はP1とした柱穴のみである。硬化面は認められない。

出土遺物中図化相当の遺物は出土していない。そのため本遺構の帰属時期は断定できないが、平面形態から古墳時代以降と判断した。

SI1



SI2



SI3

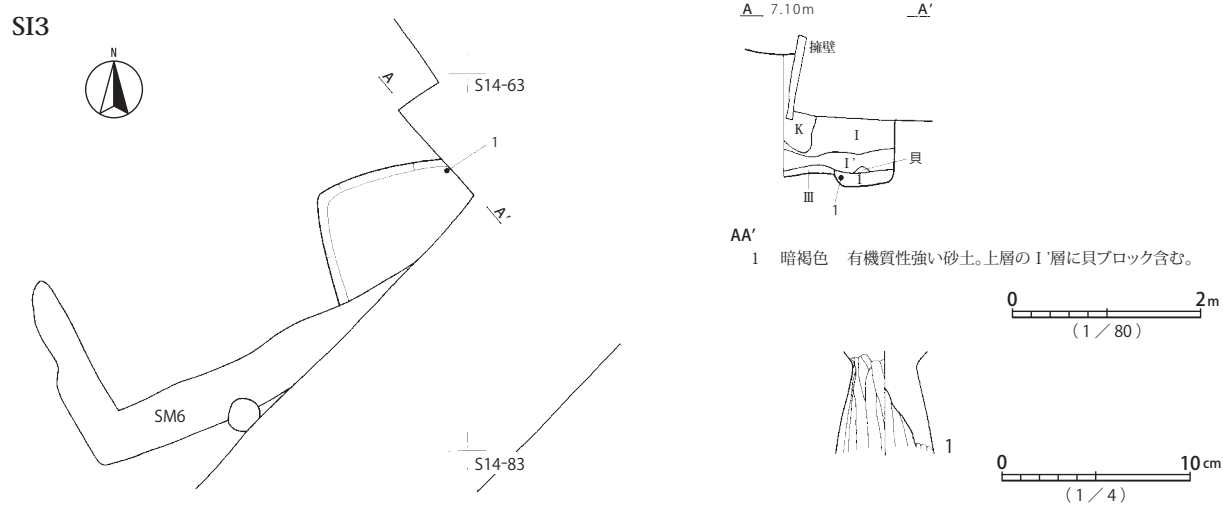


Fig.15 SI1~3 遺構・SI2,3 遺物実測図

SI2 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.15)

SI2はR14-64付近に位置する。北側にSI1が隣接する。SD10、SD11が本遺構を掘り込んでいるため、本遺構はSD10、SD11に対して先行する。

平面形状は、隅丸方形を呈するが、北側をSD14によって失っている。付属施設は確認されていない。硬化面は認められない。小規模であるため方形の土坑である可能性もあるが、現場所見と同様に竪穴住居跡と判断した。

出土遺物は、1は土師器高坏形土器の脚部裾部で床面からやや浮いた位置から出土している。

本遺構の帰属時期は、出土土器から4期と考えられる。

SI3 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.15)

SI3はS14-62付近に位置する。大部分は調査区外に位置し、検出は遺構全体の1/4以下とみられる。SM6とした古墳の周溝内側に位置しており、土層断面図上では確認できないが本遺構の南側を古墳周溝が掘り込んでいるとみられ、本遺構がSM6に対して先行すると判断した。

平面形状は方形を呈するとみられるが、規模も含め復元し難い。掘り込みは極めて浅い。覆土直上に貝ブロックを検出している。

出土遺物は、1は土師器高坏形土器の脚部柱状部で、壁際から出土している。

本遺構の帰属時期は断定し難いが、土器と古墳の時期から5期としておく。

SI4 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.16)

SI4はS13-93付近に位置する。北側半分程は調査区外に位置するとみられる。北東側でSD18、SM7と重複する。土層断面図から、本遺構がSD18、SM7に対して先行する。

平面形状は隅丸方形を呈するとみられる。付属する施設は主柱穴を含め確認していない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、覆土下層の床面近くに集中して出土している。1は土師器甕形土器、2、3は土師器坏形土器、4、5は土師器高坏形土器柱状部、6、7は土師器壺形土器、8は須恵器坏である。9は鉄製品で刀子切先とみられる。8以外は本遺構に帰属するものとみられる。土師器坏形土器が丸底で比較的口径が大きいことから、本遺構は3b期の所産と判断した。

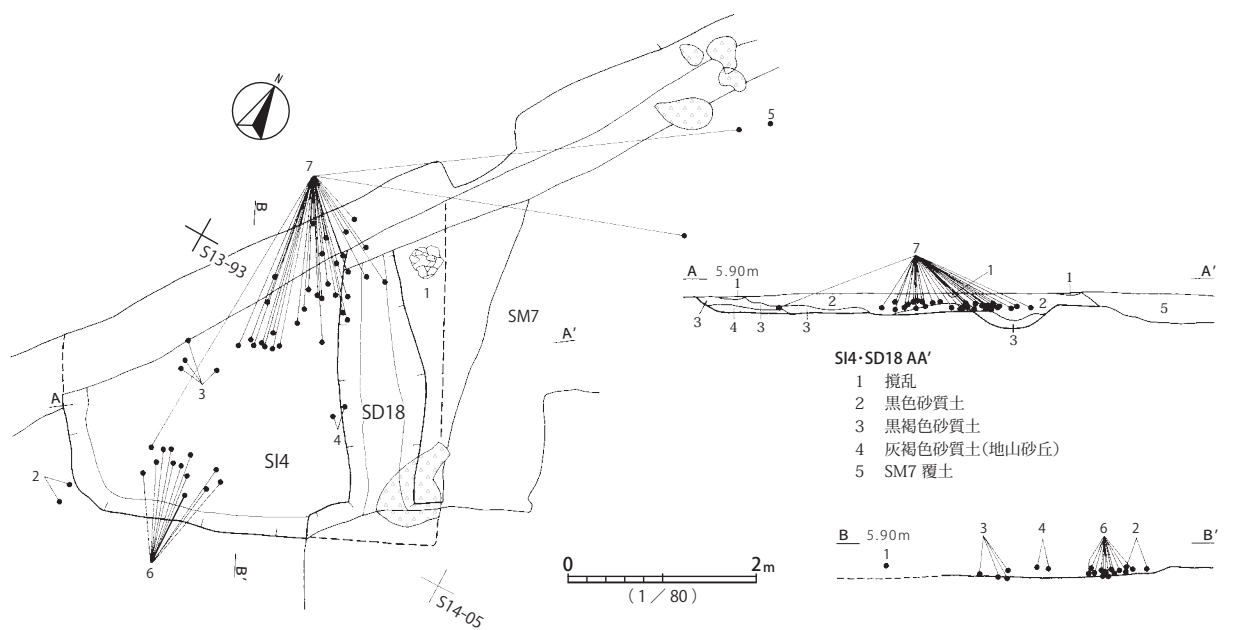
SD18はSI4と同じくS13-93付近に位置し、土層断面からSI4に対し後出する。SM7との先後関係は不明だが、遺構の方向が周辺の遺構との間で規則性を見出せないことから、より新しい段階と考えられ、SI4出土の須恵器坏形土器が本遺構に帰属する可能性がある。

本遺構の帰属時期は5b新期とする。

SI5 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.17)

SI5はS13-79付近に位置する。北東側にSD19、SK8が位置し、近世以降の土坑に南側で攪乱を受けている。本遺構の位置はSM7の墳丘中央部に位置するが、先後関係を見出させる遺構は無い。

平面形状は、隅丸の不整形方形を呈し、付属する施設は主柱穴を含め確認していない。硬化面も認められない。確認面からの掘り込みは極めて浅く、床面は平坦である。北側壁に接して掘り込みが1箇所



SI4

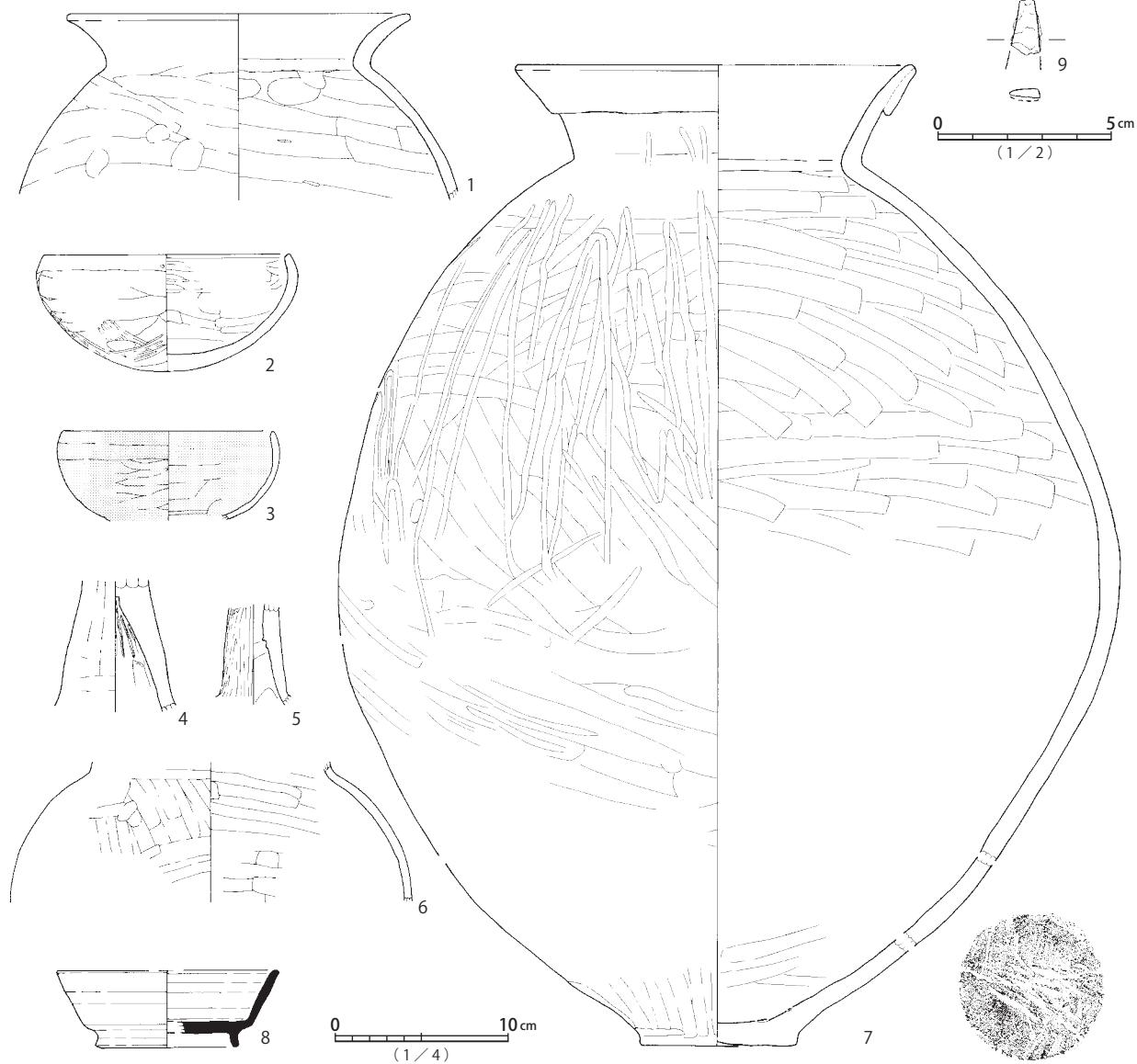
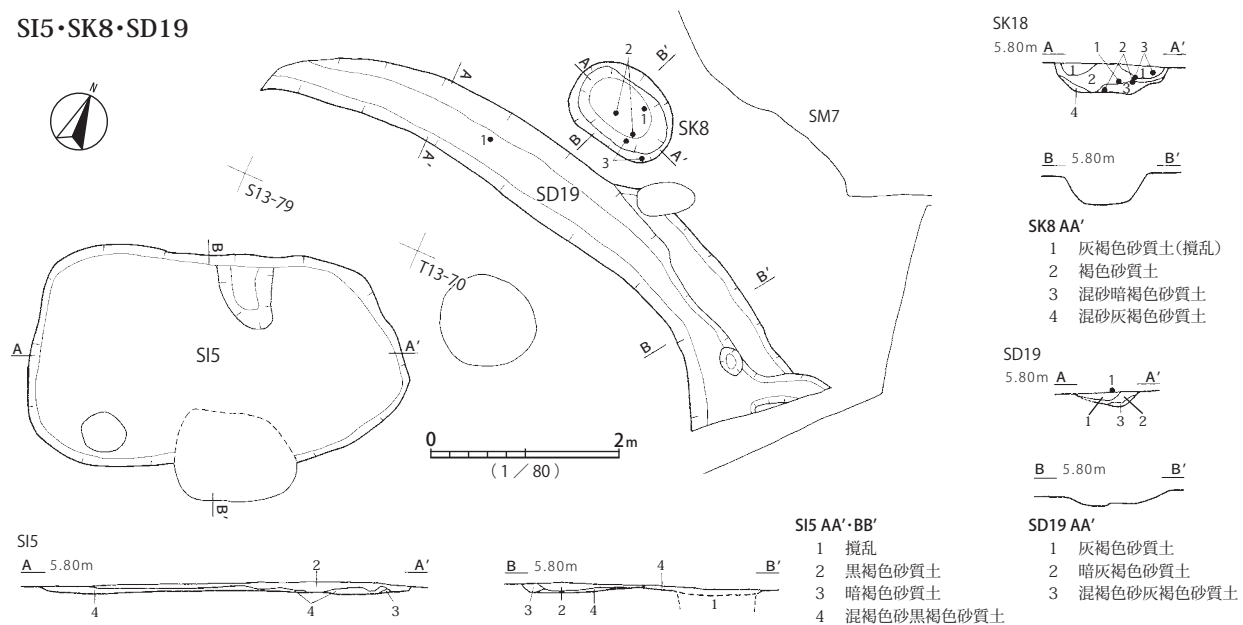
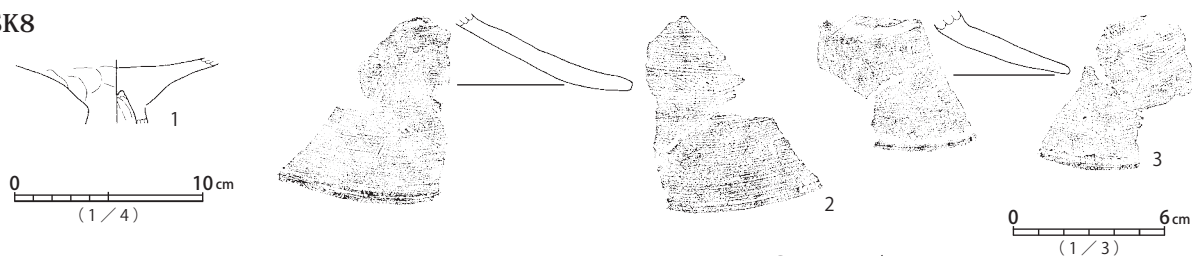


Fig.16 SI4、SD18 遺構・SI4 遺物実測図

SI5・SK8・SD19



SK8



SI6

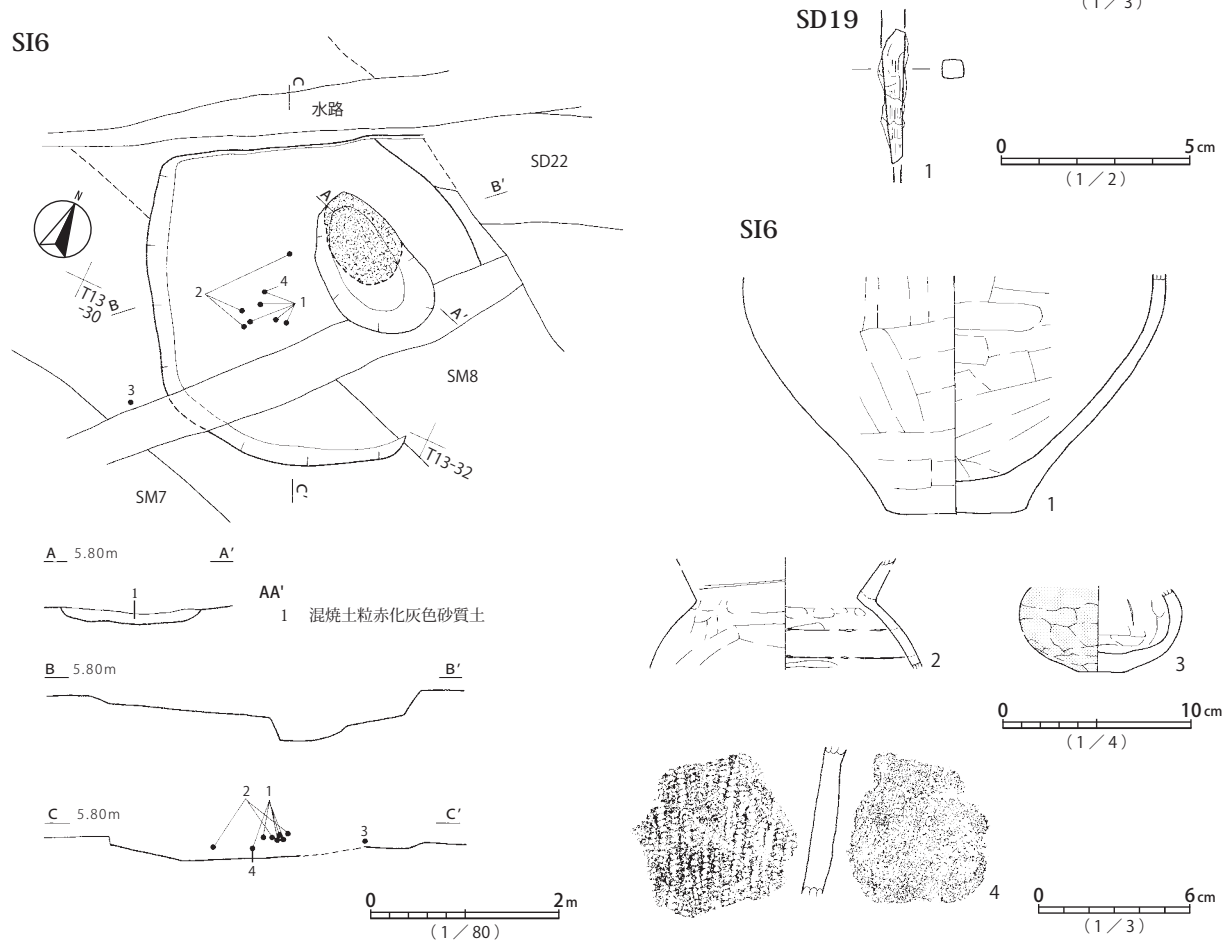


Fig.17 SI5、6、SK8、SD19 遺構・SI6、SK8、SD19 遺物実測図

所認められるが、本遺構との関係は不明である。竪穴住居跡と判断したが、積極的ではない。SM7に関連する施設である可能性も否めない。

出土遺物中で図化相当の遺物は出土していない。

本遺構の帰属時期は不明である。

SK8はT13-50付近に位置し、南東側にSD19が近接する。平面形状は不整楕円形を、断面形は逆台形を呈する。遺物は覆土中位以下より出土している。1から3が土師器高坏形土器もしくは器台形土器とみられる。

本遺構の帰属時期は出土土器から4期と判断した。

SD19はS13-69からT13-61にかけて位置し、南西側にSI5、北東側にSK8が近接するが重複は無い。遺構確認面からの掘り込みは極めて浅く、断面形状も安定的ではない。特に南側では底面が2箇所に分かれ状を呈するため、掘り返しが行われているか、部分的に別遺構が重複している可能性もある。遺構は南側調査区外に伸びると見られるが、北側でも深度が浅くなるものの断面形状に変化が認められないことから、更に北側に伸びていた可能性がある。

出土遺物は1が鉄鏃と判断したが、釘である可能性もある。覆土上位で出土している。

本遺構の帰属時期はSM7に対して先行する可能性があるが、推定の範囲として、遺構プランがSM7に対し同心円状に曲がることから、残存する墳丘裾に沿って掘られた溝とも見做せる。

SI6 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.17)

SI6はT13-20付近に位置する。SM8、SD22が重複する。土層断面図が無いため先後関係は推定の範囲となるが、本遺構がSM8、SD22に対して先行するものと判断した。

平面形状は、北側で排水用の水路の攪乱を受けており、東側も重複する遺構により欠損しているが、本来は楕円形に近い隅丸方形を呈するものとみられる。付属する施設は、遺構中央東寄りに焼土粒を含む砂質土を覆土とする落ち込みが検出されており、本遺構に伴う炉とみられる。その他支柱穴を含む諸施設は確認していない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、全て床から浮いて出土している。1は弥生時代後期壺形土器、2、3は土師器壺形土器、4は縄文時代後期深鉢である。

本遺構の帰属時期は、1の壺形土器から4c期としておく。

SI7a、SI7b、SI7c セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.18・19)

SI7aはT12-15付近に位置する。北側でSM9が、東側でSI7b、SI7cが重複する。土層断面図から、本遺構はSM9に対して先行し、SI7bに対し後出する。SI7cとの先後関係は不明である。

平面形状は、北東側をSM9に掘り込まれ、北西側は調査区外にあるものの、遺存する南側プランから、胴張りの隅丸方形を呈するとみられる。付属する施設はP1、P2とした支柱穴以外は確認していない。床硬化面は認められない。

SI7bはT12-17付近に位置する。北側でSM9が、西側でSI7a、東側でSI7cが重複する。土層断面図から本遺構は、SM9、SI7aに対し先行する。SI7cとの先後関係は不明である。

平面形状は、遺存範囲に限られるが、胴張りの隅丸方形を呈するとみられる。付属する施設はP3、

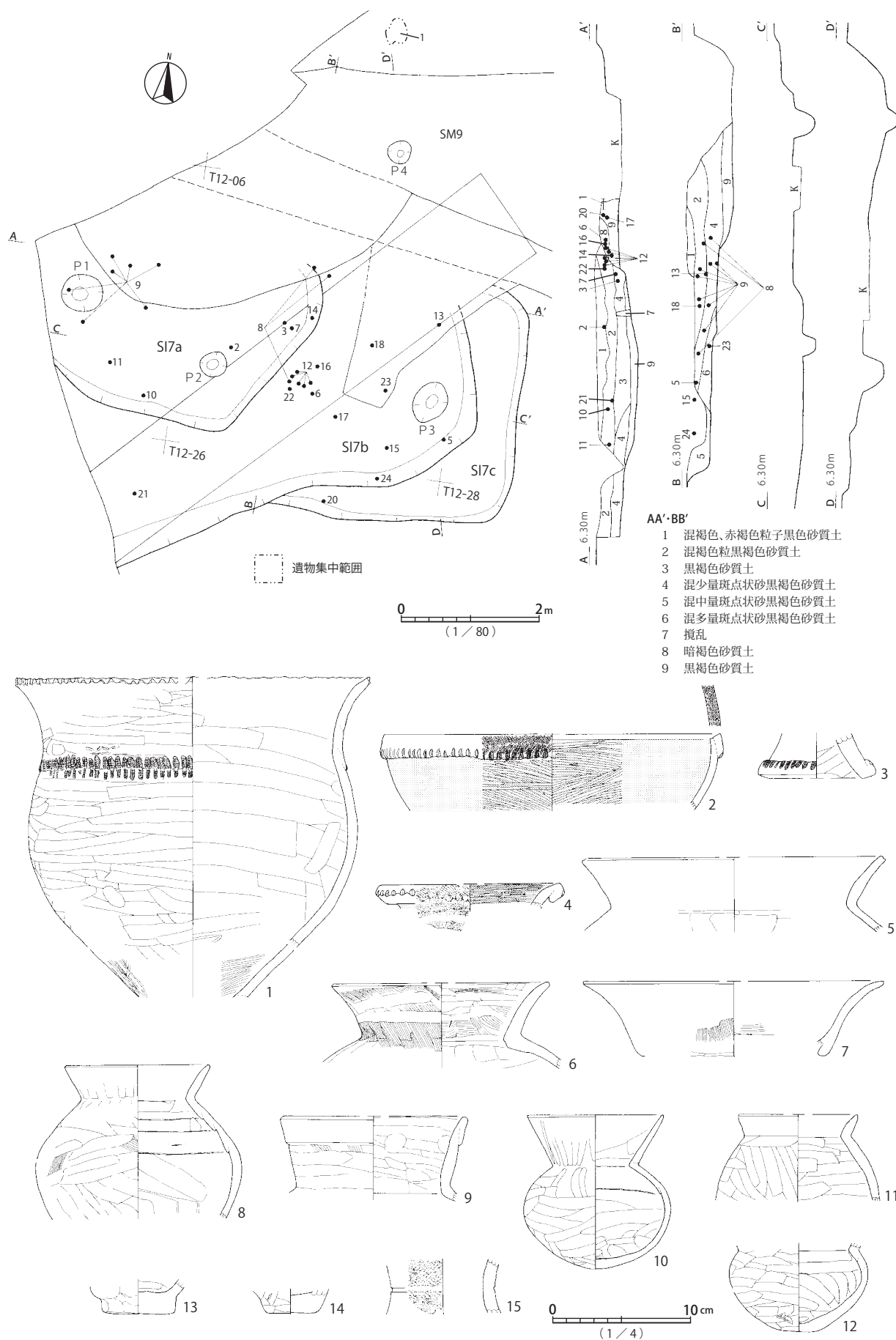


Fig.18 SI7a、7b、7c 遺構・遺物実測図

P4としたピットが2基検出されている。位置的には貯蔵穴のように見える。これ以外の諸施設は確認していない。床硬化面は認められない。

SI7cはT12-18付近に位置する。北側にSM9が、西側にSI7a、SI7bが重複する。遺構の先後関係を示す土層断面図が無いため、その新古については推定となるが、本遺構はSM9に対して先行し、SI7bに対しては後出するものと判断した。SI7aとの先後関係は不明である。

平面形状は、西側、北側壁を失っているものの、遺存範囲から隅丸方形を呈することがわかる。

出土遺物はSI7a、SI7bいずれも覆土中位以上の高い位置から出土している。1は弥生土器の甕形土器で、2は弥生土器の浅鉢形土器、3は弥生土器の高坏形土器、4は弥生土器の広口壺形土器、5、6は土師器甕形土器、7は土師器高坏形土器、8から12は土師器壺形土器、13は土師器甕形土器、14は土師器壺形土器、15は弥生土器の壺形土器、16、17、18は土師器高坏形土器の柱状部、19は弥生土器壺形土器、20は弥生土器甕形土器である。21から24は石製品で、21は有孔円盤、22は凹石、23、24は砥石である。

重複して後出するSM9の周溝と、北側にある時期不明の掘り込みによって遺物の出土位置と時期が混在しており、これは廃棄段階の原位置を保っていない状態と見られたため、個別に帰属遺構を同定することは難しい。遺構の先後関係と大きく3時期に渡る遺物相から、帰属時期はSI7aが2a期、SI7b、SI7cが4c期としておく。

SI8 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.19・20)

SI8はT11-79付近に位置する。南側をSM9の周溝により欠損する。東側にSI9が、西側にSI7a、SI7b、SI7cが近接するがいずれも重複関係にはない。本遺構は土層断面図からSM9に対して先行する。

平面形状は、僅かに胴張りの方形を呈する。付属する施設は中央付近に機能が不明なP1としたピットが位置する以外は確認していない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、覆土中位以下に集中する傾向が確認できる。

1から5が土師器甕形土器、6、7が土師器壺形土器、8から11が土師器高坏形土器、12は須恵器甕形土器、13は縄文時代後期深鉢形土器、14は軽石で、3面に加工痕が認められる。

本遺構の帰属時期は、5a期と考えられる。

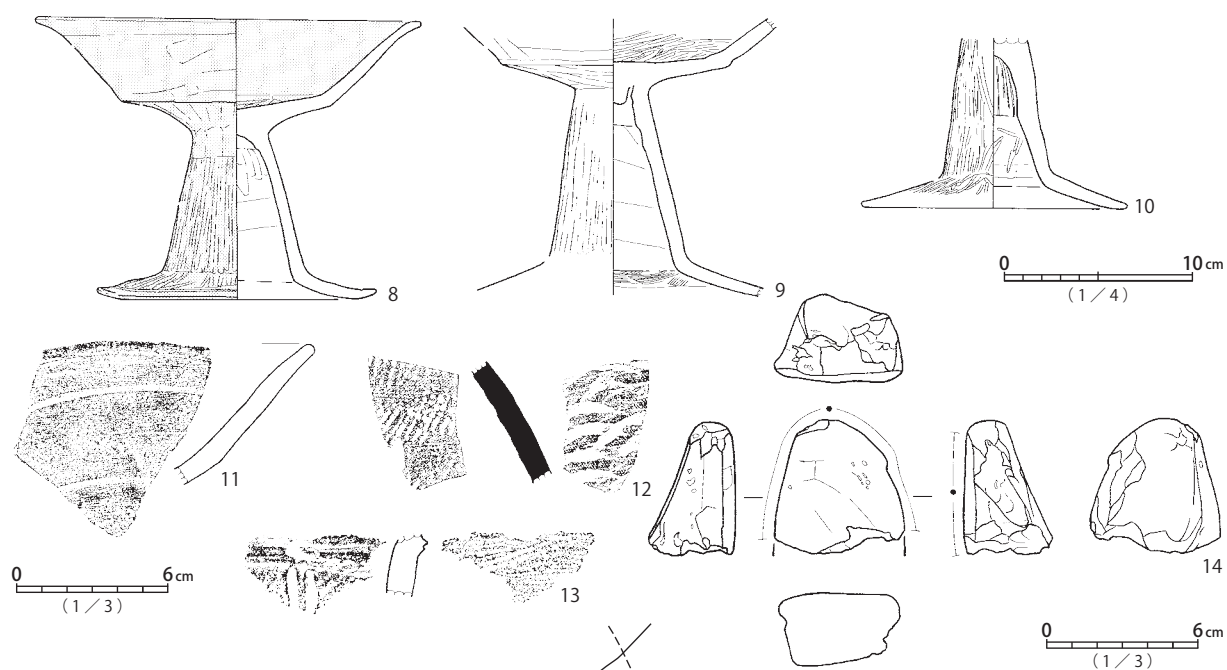
SI9 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.20・21)

SI9はU11-51付近に位置する。南から東側にかけてSM9の周溝により欠損する。南側にSI8が近接するが重複関係にはない。本遺構は土層断面図からSM9に対して先行する。また、竪穴中央付近に位置する土坑は、土層図によると本遺構より後出する。

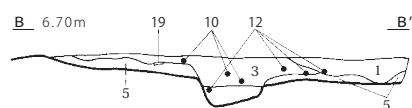
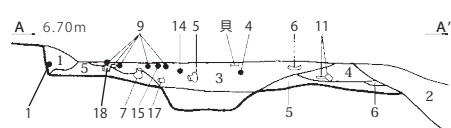
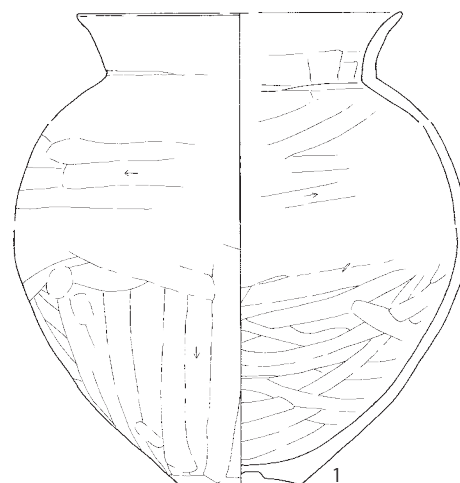
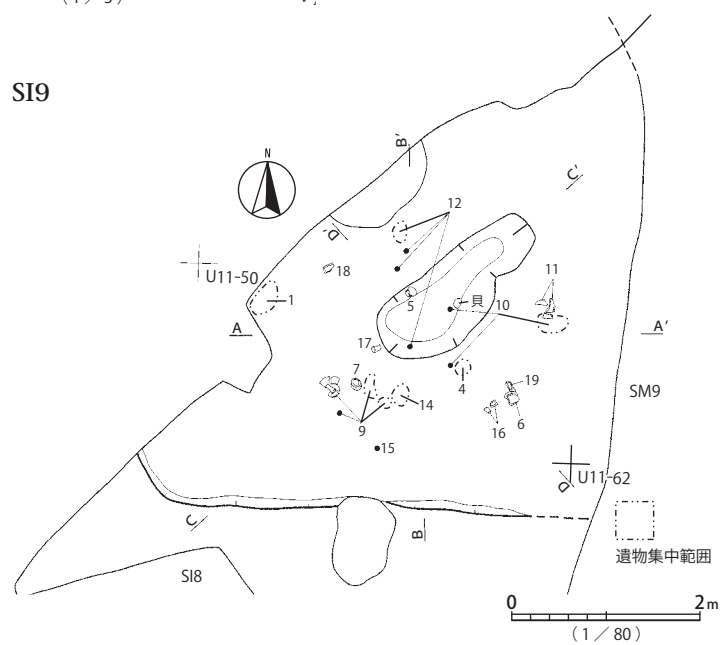
平面形状は、方形を呈するとみられる。付属する施設は確認していない。床硬化面は認められない。SI8とは主軸方向が異なる。

出土遺物は、壁際から出土している1を含め覆土中位から下層に集中して出土している。

1から4は土師器甕形土器、5から8は土師器壺形土器、9から19は土師器高坏形土器、20は板状を呈する不明鉄製品である。また、微量の貝ブロックを伴うが、貝層中には時期を同定する遺物を伴っていない。本遺構廃絶時の堆積か、更に後世のものであるかは判断できない。

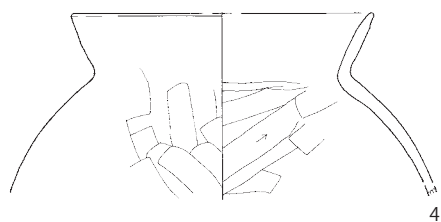
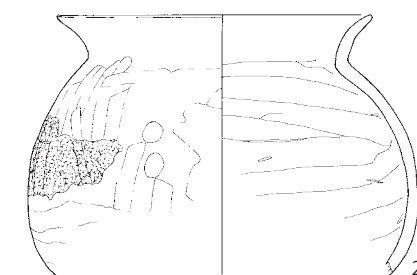
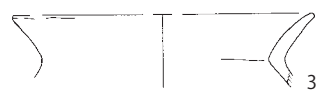


SI9



AA'-BB'

- 1 攪乱・客土
- 2 SM9 覆土
- 3 黑褐色砂質土
- 4 硬化黑褐色土
- 5 混黄褐色砂褐色砂質土
- 6 黑色砂質土



0 10cm
(1/4)

Fig.20 SI9 遺構・SI8、9 遺物実測図

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

SI10 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.21)

SI10はU11-05付近に位置する。遺構の殆どが調査区外に位置する。西側にSM9、東側にSM11及びSD24が隣接するがいずれも重複関係にない。南側に浅い溝状の遺構が近接して位置するが、本遺構との関係は不明である。

平面形状は、方形を呈するとみられる。付属する施設は確認していない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、1、2が床面を覆う覆土下層から、3、4が壁際のやや浮いた位置から出土している。

1から3は土師器壺形土器、4は土師器坏形土器でいずれも本遺構に伴うものと判断した。

本遺構の帰属時期は、5b古期と考えられる。

SI11 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.22)

SI11はV10-36付近に位置する。北側にSD27、東側にSD25、南側にSM11が位置する。西側は攪乱坑によって大きく欠損する。SD27とは重複関係にあり、土層断面を見る限りは本遺構が後出するように見えるが、断定的ではない。竪穴内北東には攪乱坑が1箇所認められる。

平面形状は、2軒の竪穴が重複するような状況を呈するが、調査時の図面ではそのような所見はなく、ここでも重複関係を示す根拠を提示できないため不整形の竪穴住居跡1軒として報告する。付属する施設は、竪穴のほぼ中央部に炉とみられる楕円形の焼土範囲が認められる以外には確認されていない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、覆土中位より下層に集中して出土している。1から3は土師器壺形土器、4、5は土師器高坏形土器、6は板状の不明鉄製品である。

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

SI12 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.22・23)

SI12はW09-94付近に位置する。北側にSI13が近接するが重複関係は無い。遺構中央でSM12と重複し、土層断面図によると本遺構が先行する。

平面形状は、遺存部位から長方形を呈するとみられるが、炉や入り口施設等を確認していないため、主軸方位は断定的ではない。床硬化面は認められない。P1、P2としたピットについては、その性格、機能について資料はない。

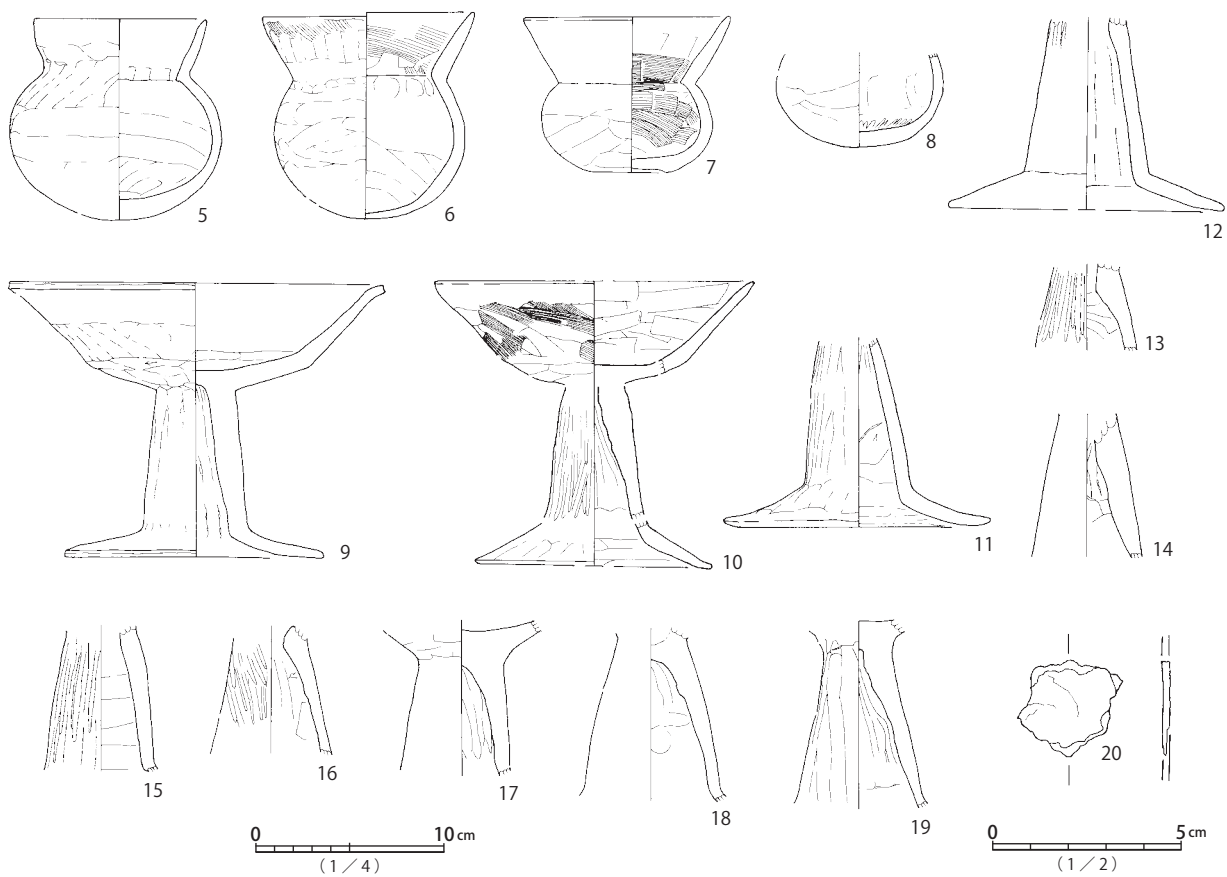
出土遺物は、遺構北東隅に集中して出土している。床面直上のものを含み、全ての遺物が覆土下層に位置することから本遺構に伴うものと判断した。

1は土師器壺形土器、2は土師器坏形土器、3は土師器高坏形土器、5は輝石デイスait製製の磨石である。

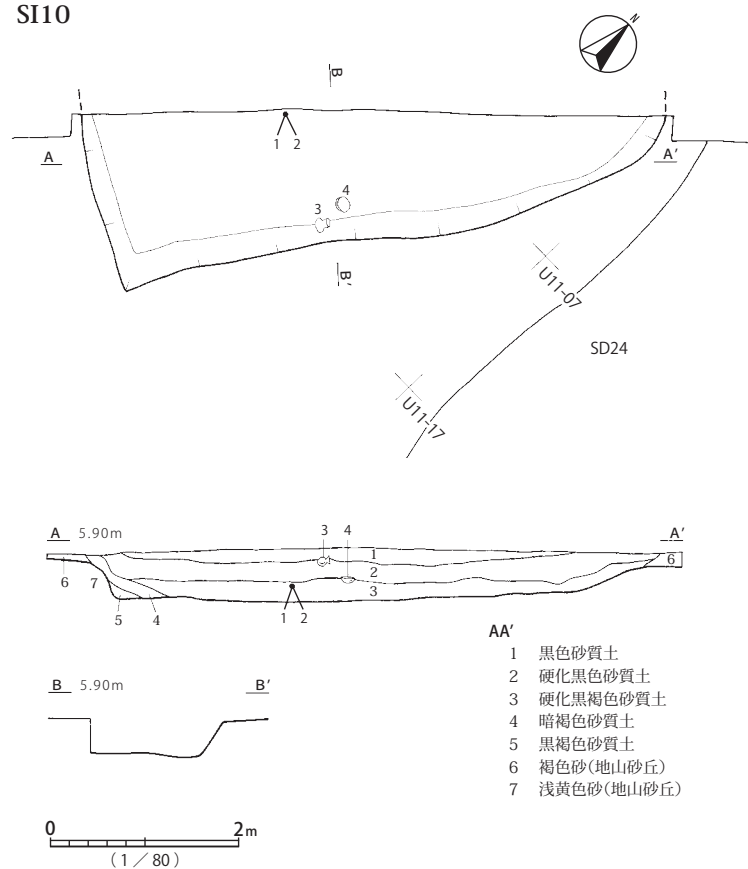
本遺構の帰属時期は、5b古期と考えられる。

SI13 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.23)

SI13はW09-73付近に位置する。南側にSI12が近接するが、重複関係は無い。SM12の墳丘範囲



SI10



- 1 黑色砂質土
- 2 硬化黑色砂質土
- 3 硬化黑褐色砂質土
- 4 暗褐色砂質土
- 5 黑褐色砂質土
- 6 褐色砂(地山砂丘)
- 7 浅黄色砂(地山砂丘)

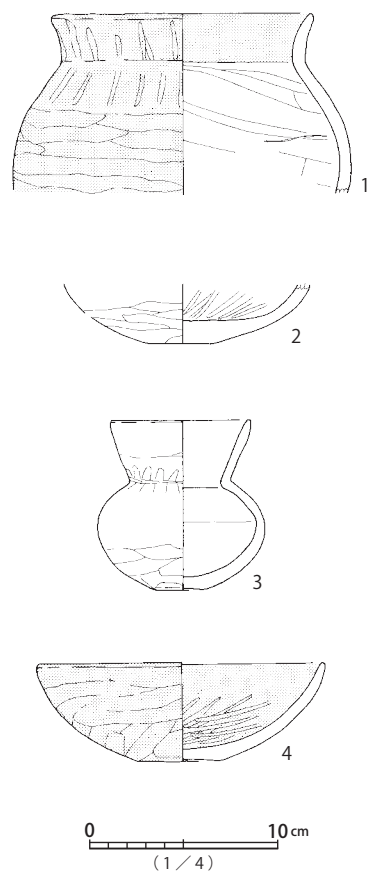
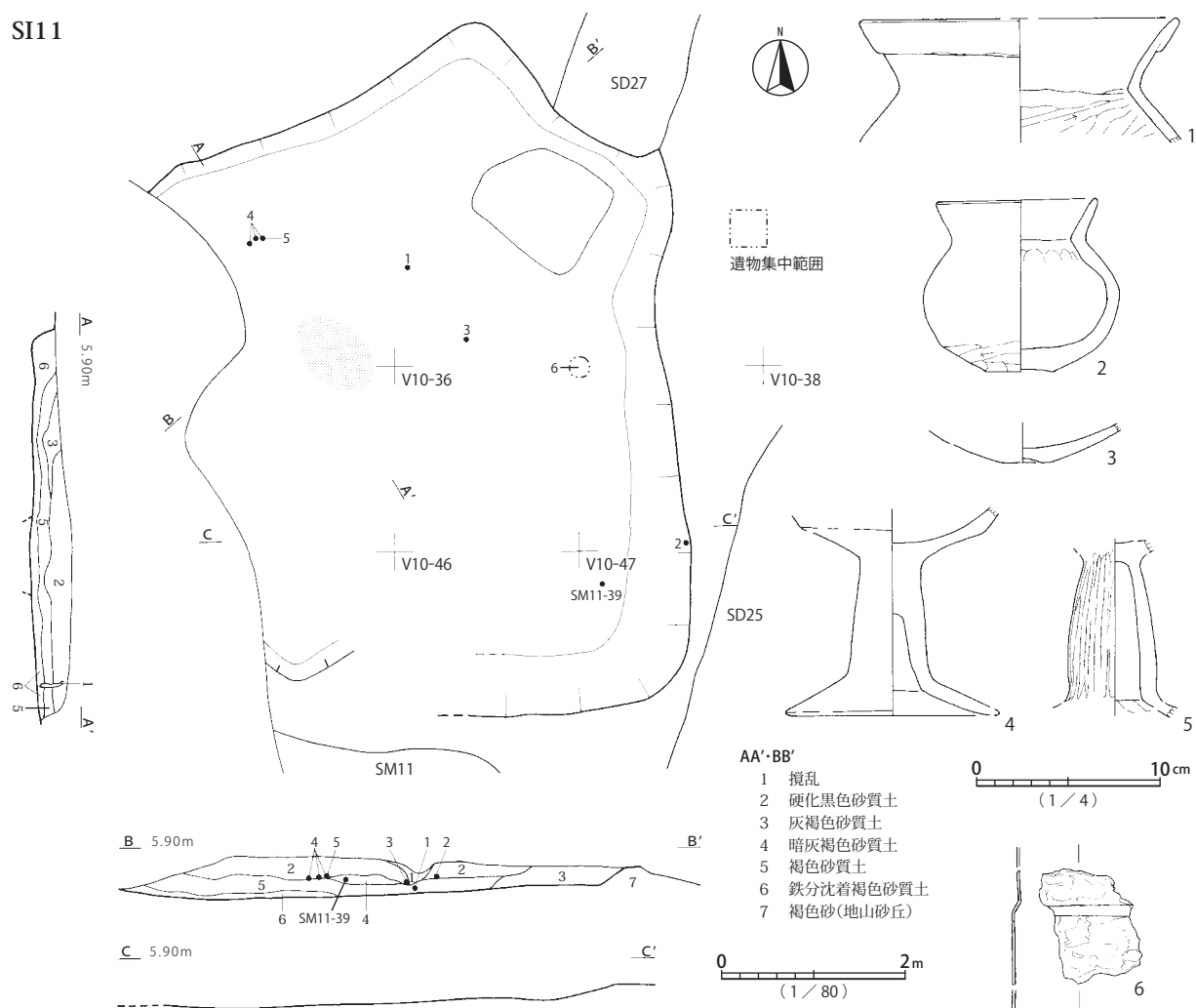


Fig.21 SI10 遺構・SI9、10 遺物実測図

SI11



SI12

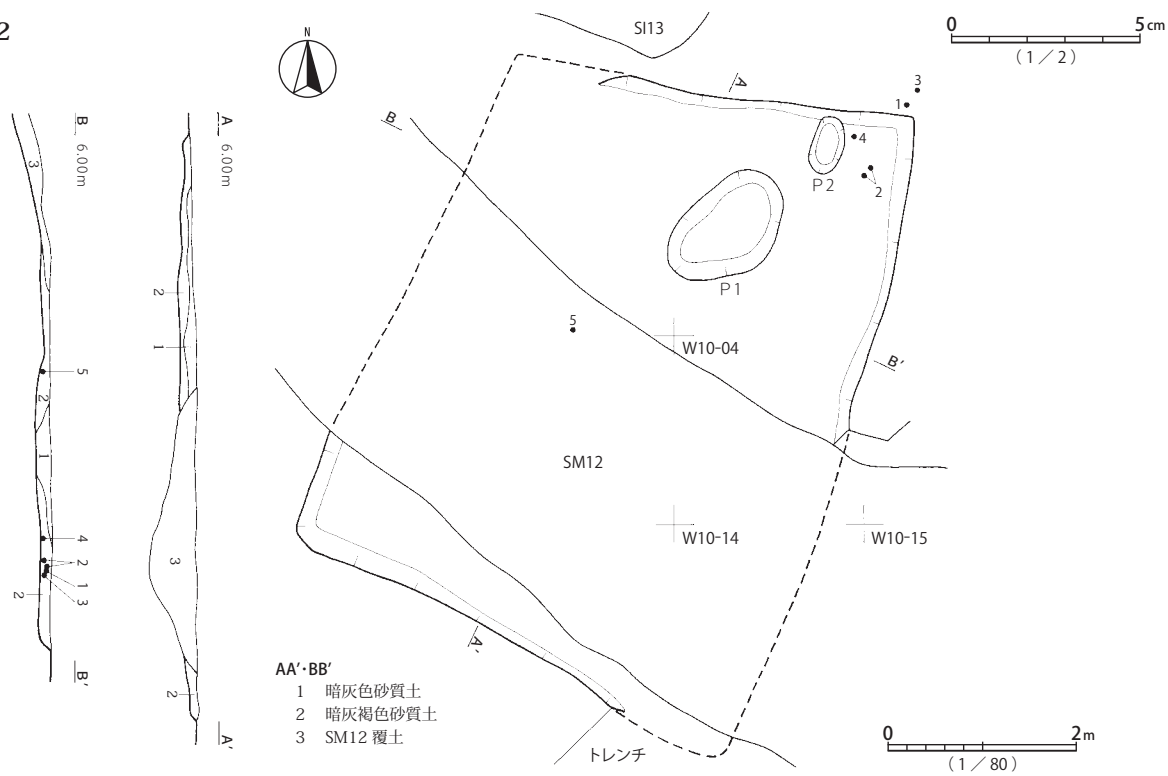


Fig.22 SI11、12 遺構・SI11 遺物実測図

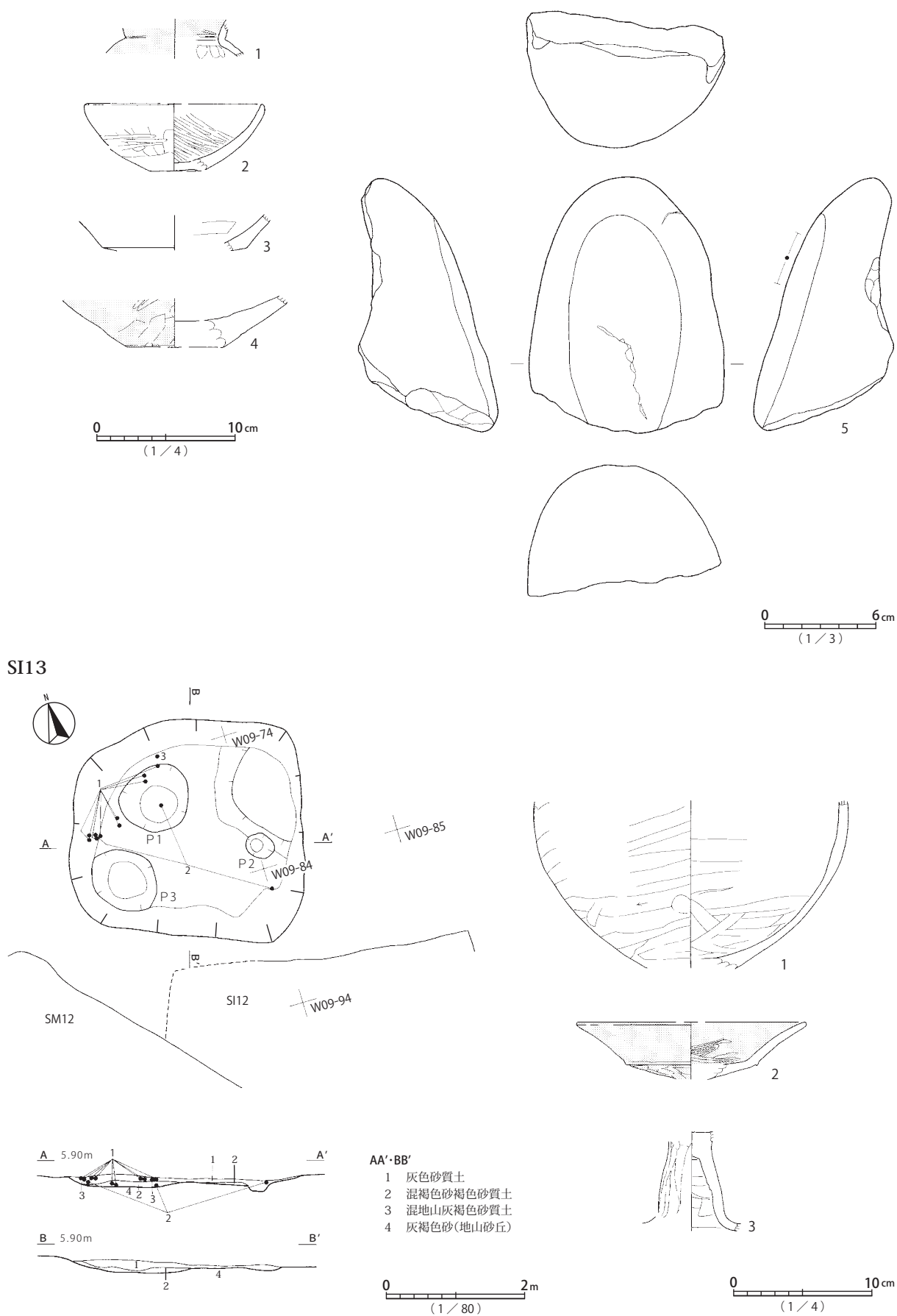


Fig.23 SI13 遺構・SI12、13 遺物実測図

にあるものの、先後関係は不明である。

平面形状は、隅丸方形を呈し、規模は1辺が3m程度と極めて小規模である。ピットが3箇所認められるがその性格は不明である。北東隅にはひな壇状の高まりが検出されている。遺構深度は深いところでも30cm程度で、浅いところでは20cmに満たない。床硬化面は認められない。中規模の土坑である可能性も否めないが、発掘調査段階の所見どおり竪穴住居跡と判断した。

出土遺物は、覆土中に明確な集中が認められないが、全て本遺構に伴うものと判断した。

1は土師器甕形土器、2、3は土師器高坏形土器である。

本遺構の帰属時期は、5b古期と考えられる。

SI14 セ489山新遺跡第8地点、セ502山新遺跡第9地点 (Fig.24・25)

SI14はW09-09付近に位置する。南側にSM12、北側にSD30が近接し、重複する。本遺構は土層断面図からSM12に対して先行する。SD30に対しては、土層第7層をSM12覆土としたが、平面位置ではSD30の覆土とも見なし得ることから、本遺構が先行すると判断した。

平面形状は隅丸方形を呈し、南隅をSM12周溝によって欠損する。付属施設は主柱穴を3箇所を確認している。P4としたピットは平面位置から貯蔵穴の可能性があるが、小規模である。炉跡を捕捉していないが、P4を貯蔵穴と判断した。主軸方位は北西と推定でき、平面形状は主軸に対してやや幅広となる。その他の施設は確認していない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、覆土中位より上位となる傾向が認められ、遺構廃絶後の一括投棄とも考えられるが、遺跡の傾向を鑑みて本遺構に伴うものと判断した。

1から3は土師器甕形土器、4から10は土師器壺形土器、11から18、20は土師器高坏形土器、19は高坏もしくは器台形土器、22は鉄鎌とみられるが、柄に挿入して固定するための折返しと、刃部との方向が、通常とは反対の関係にある。

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

SI15 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.25)

SI15はX09-12付近に位置する。北西から西側にSI14、SM12が近接し、北東側にSI16、東側にSB2とそれに伴うピット群が隣接する。本遺構の東側でSK16が重複しているが、先後関係は遺物から本遺構がSK16に対して先行する。

平面形状は方形を呈する。東側にP1、P2としたピットが通常の主柱穴位置に認められるが、本遺構に伴うのか、東側に展開するピット群に含まれるのか判断し難い。深さのみ見れば台地上で検出されるものとは比べようもない程浅い。その他の施設は確認していない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、覆土中位より上位に集中する傾向がある。1は土師器甕形土器、2から4は土師器小型壺形土器、5は不明鉄製品である。他に遺構の中央部を除く隅付近から炭化物と貝の小ブロックが出土している。

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

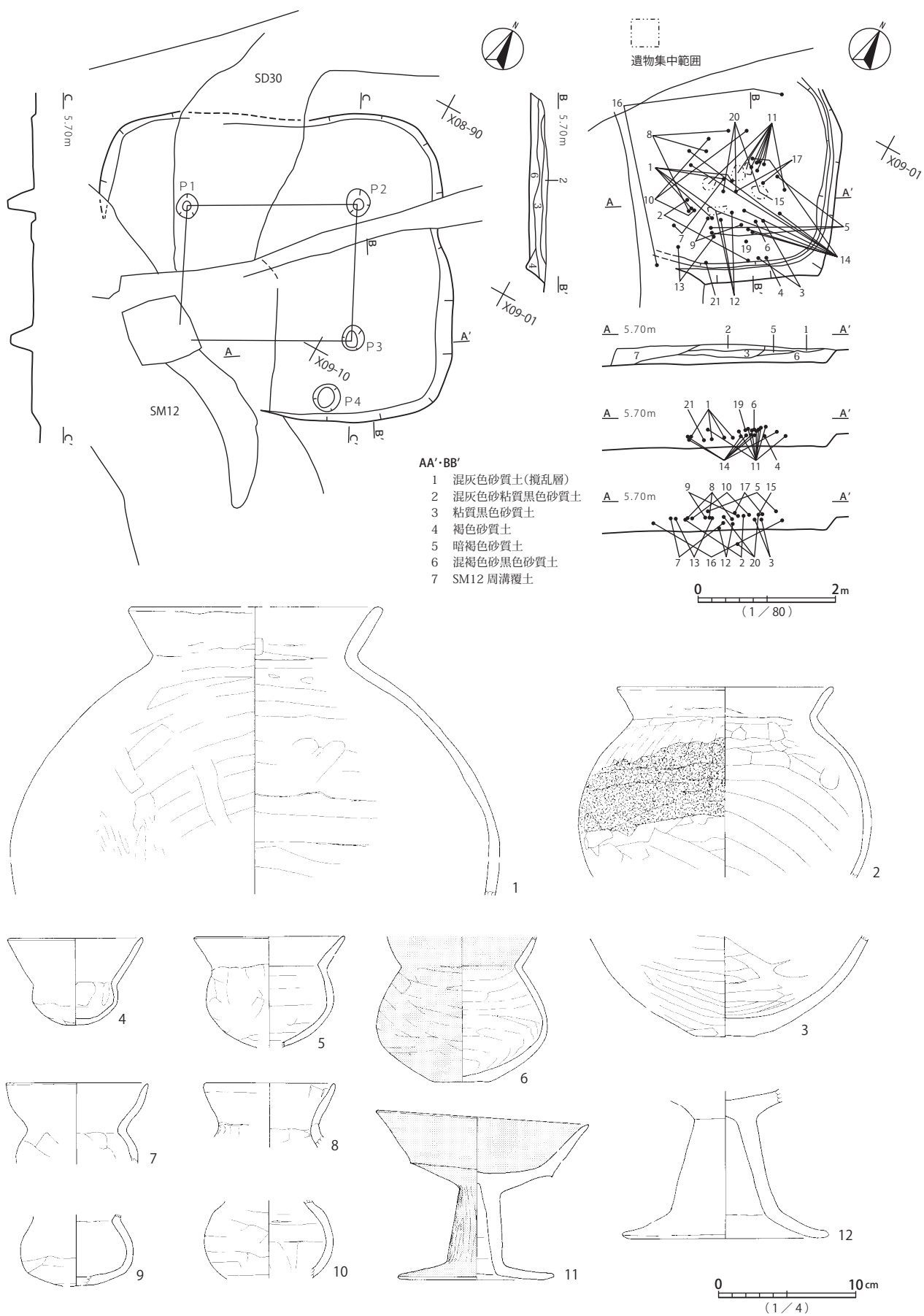
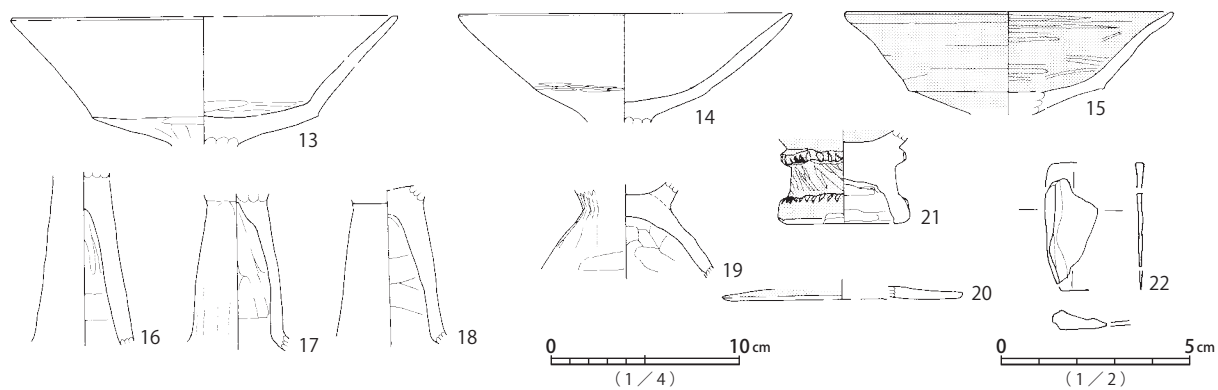
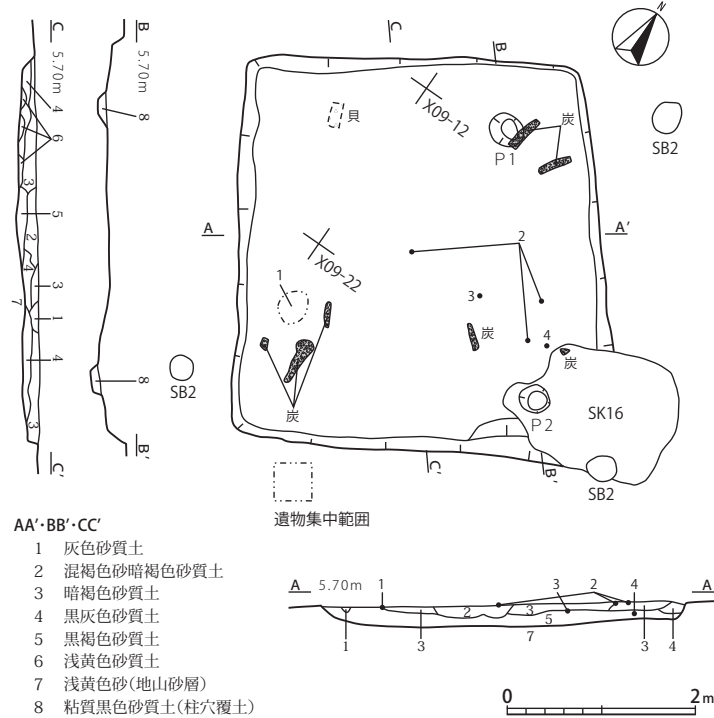


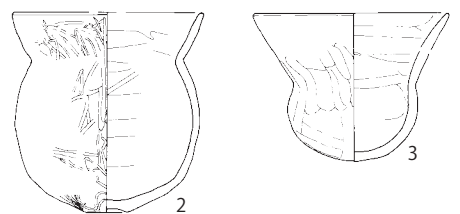
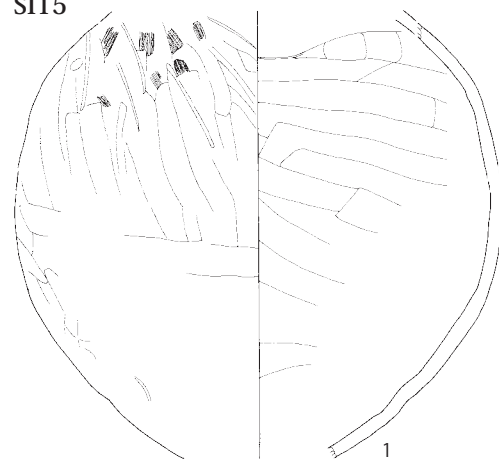
Fig.24 SI14 遺構・遺物実測図



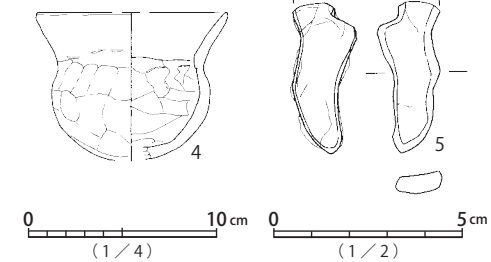
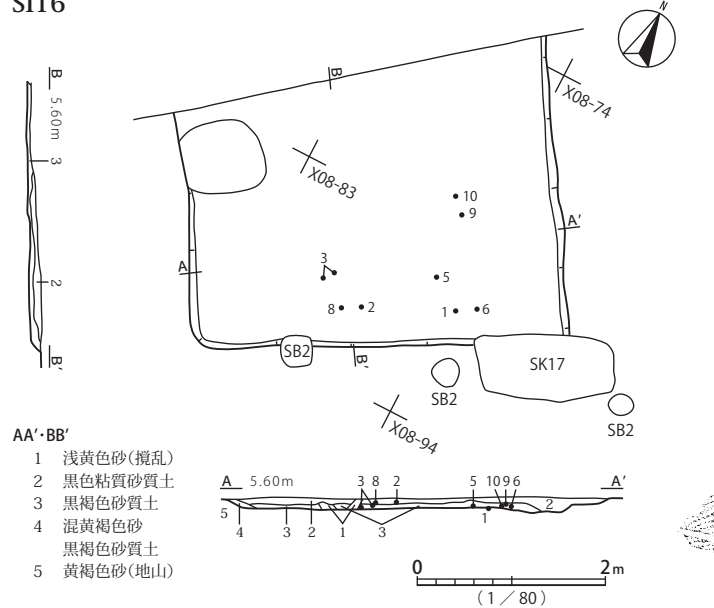
SI15



SI15



SI16



SI16

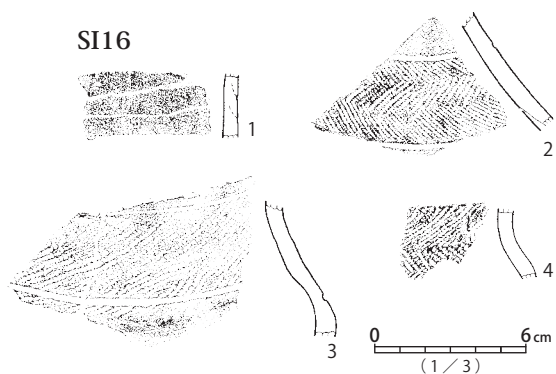
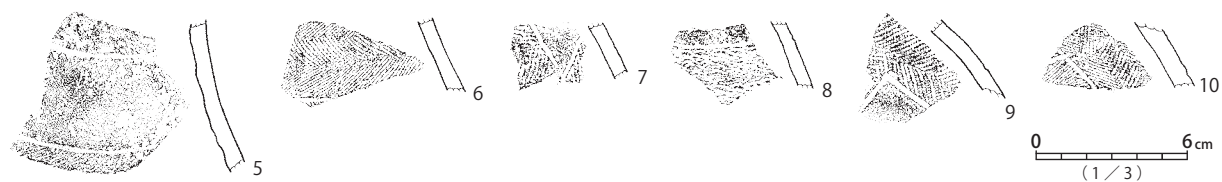
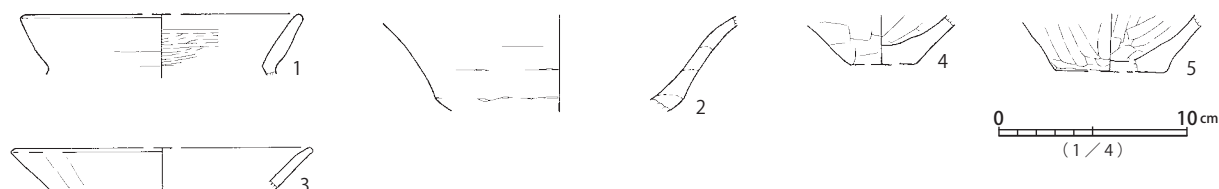
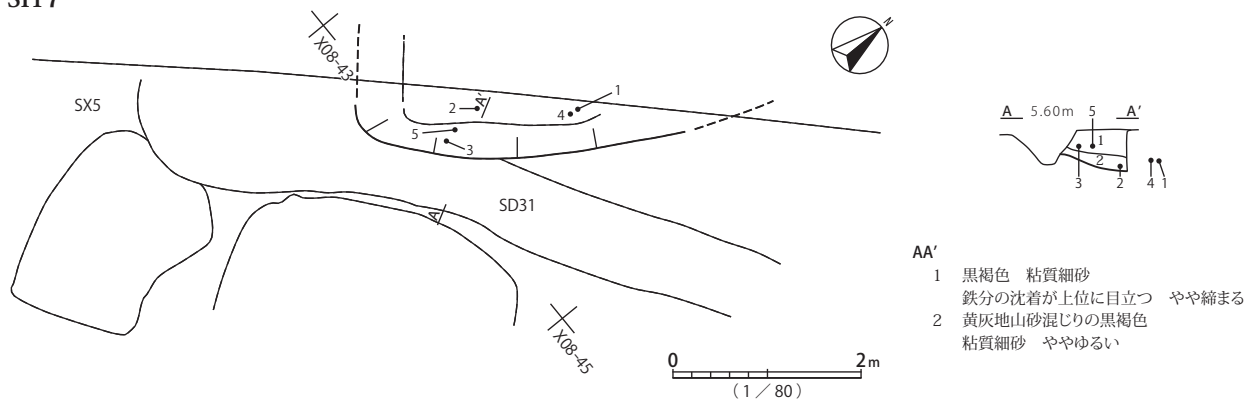


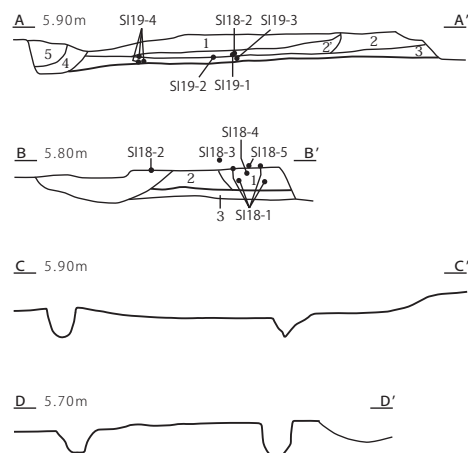
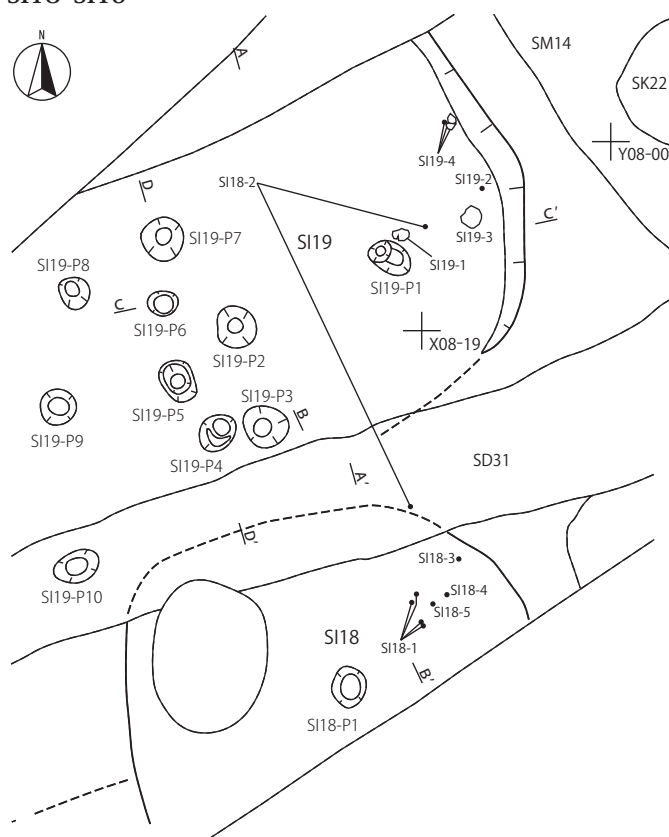
Fig.25 SI15、16 遺構・SI14～16 遺物実測図



SI17



SI18・SI19



SI19 AA'

- 1 黒褐色 粘質細砂 下位に地山砂ブロック ゆるい
- 2 黒褐色～にぶい黄褐色 下位に地山砂ブロックが多く混じる ゆるい漸移層
- 2' 若干黒味の強い2層 ほとんど差はない
- 3 にぶい黄色 地山細砂層と覆土の漸移層 ゆるい 地山直上
- 4 黒褐色 細砂 ゆるい 攪乱
- 5 赤味を帯びた4層 ゆるい 攪乱

SI18 BB'

- 1 黒褐色 粘質砂にまばらに黒褐色細砂が混じる やや締まる 土器片多い
- 2 黒褐色～暗褐色 粘質砂 ゆるい
- 3 にぶい黄褐色 細砂 ゆるい 漸移層

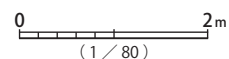


Fig.26 SI17～19 遺構・SI16、17 遺物実測図

SI16 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.25・26)

SI16はX08-83付近に位置する。南側でSK17、SB2が重複し、本遺構がSK17に対して先行する。北側にSD30が近接する。

平面形状は方形を呈するが、北側のSD30に向けて遺構確認面が低くなり、また調査区が変わることもあり、本遺構の北側1/3程度は捕捉していない。西側壁付近で攪乱を受けている。付属する施設は確認していない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、覆土中位より下位から集中して出土している。

1から10は弥生後期久ヶ原式期の壺形土器である。

本遺構の帰属時期は、遺構の平面形状と遺物の時期が整合しない。ここでは現場の所見を重視して4から5期としておく。

SI17 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.26)

SI17はX08-33付近に位置する。東側に土器が集中して出土したSX5が近接し、南側にSD31が重複する。更に南側には攪乱坑が位置する。断面図上ではSD31が本遺構を掘り込んでいることから、本遺構がSD31に対して先行する。

平面形状は、方形を呈するとみられるが、遺構の南端を検出したのみで、その殆どは調査区外に位置する。付属する施設は確認していない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、覆土中位より下層に集中して出土している。

1は土師器甕形土器、2、3は土師器高坏形土器、4、5は土師器甕形土器である。

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

SI18 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.26・27)

SI18はX08-28付近に位置する。北側にSI19が近接し、北側でSD31、南側でSD30、SM13と重複する。遺構西側に攪乱坑が位置する。先後関係は、土層断面図から本遺構がSD31に対して先行する。

平面形状は、隅丸方形を呈するとみられるが、遺構の遺存状態は良くない。付属する施設は遺構中央付近にP1としたピットが1箇所認められる。床硬化面は認められない。

出土遺物は、床面から浮いた状態で出土している。1は弥生土器甕形土器、2、5は弥生土器浅鉢形土器、3、4は弥生土器壺形土器、6は棒状の土製品である。

本遺構の帰属時期は、2a期と考えられる。

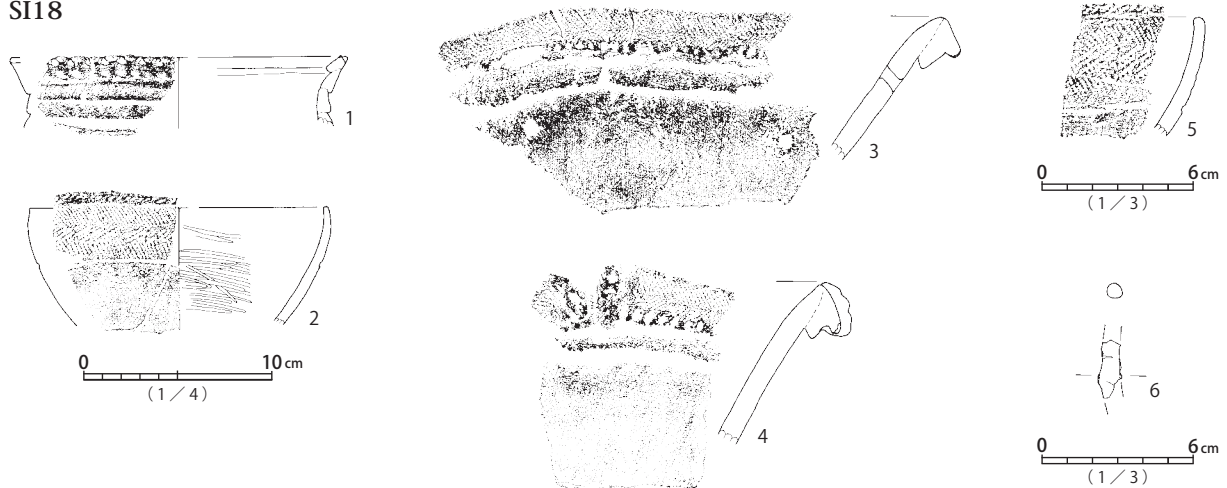
SI19 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.26・27)

SI19はX08-08付近に位置する。東側にSM14、SK22、西側にSX5、南側にSI18が近接する。北側で攪乱坑、南側でSD31と重複する。先後関係は土層断面図から本遺構がSD31に対して先行する。

平面形状は、隅丸方形もしくは楕円形を呈するとみられるが、遺存状態は良くなく、遺構の東壁の一部以外は明瞭ではない。付属する施設はP1からP10を捕捉しているが、本遺構に伴うものか判断できない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、覆土中位より下位の床付近に集中して出土している。

SI18



SI19

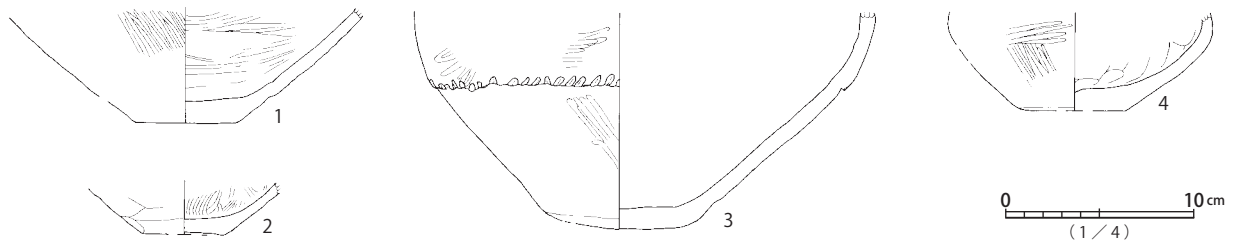


Fig.27 SI18、19 遺物実測図

1、2は弥生土器甕形土器、3、4は弥生土器鉢形土器である。

本遺構の帰属時期は、3期と考えられる。

SI20 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.28)

SI20はY07-96付近に位置する。北東側にSI21が近接し、南側でSD30と重複する。SM14の墳丘内に位置する。先後関係は土層断面図から本遺構がSD30に対して先行する。

平面形状は、不整形方を呈するとみられるが、南側半分を欠損する。付属する施設は確認していない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、2以外は覆土中位より上層から出土している。1は土師器壺形土器、2は土師器高環形土器、3は土師器甕形土器、4は頁岩製の敲石である。

本遺構の帰属時期は、4期と考えられる。

SI21 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.28)

SI21はY07-77付近に位置する。南西側にSI20が近接する。SM14の墳丘内に位置する以外遺構の重複はない。

平面形状は、隅丸方形もしくは不整形方を呈するとみられるが、遺構南東側は遺存状態が良好とはいえず不明瞭となる。南側に攪乱坑、それ以外にピット状の新しい掘り込みが4箇所認められる。付属する施設は確認していない。床硬化面は認められない。南東方向に地山が傾斜することと関連して

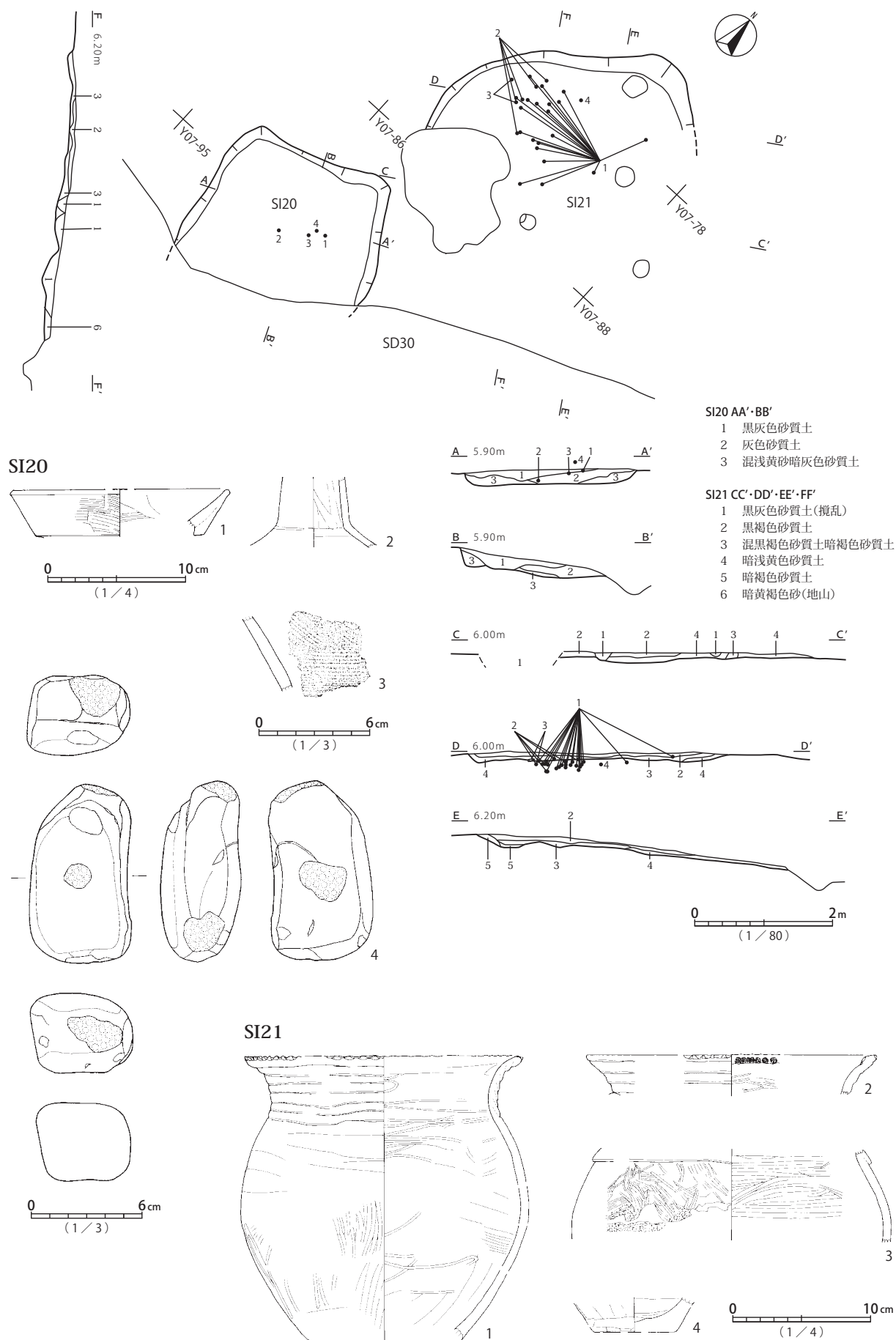


Fig.28 SI20、21 遺構・遺物実測図

床面も傾斜するように検出されている。

出土遺物は、床面付近に集中して出土している。1 から 4 は弥生土器甕形土器である。

本遺構の帰属時期は、2a 期としておく。

SI22 セ 502 山新遺跡第 9 地点 (Fig.29)

SI22 は Y07-33 付近の SM14 の墳丘内に位置する。南側で SI31、北側で SD35 と、中央付近で SK25 と重複する。土層断面図から本遺構は SD35 に対して先行するが、SK25 との先後関係は不明である。また、本遺構覆土上層に土器が集中している地点を SX4 としている。

平面形状は胴張りの隅丸方形を呈するが、遺構北西側は調査区外となる。北東側の壁は攪乱が激しく SD35 にも切られるため、ほとんど遺存していない。付属する施設は P1 から P3 が支柱穴、中央付近に炉を検出している。床硬化面は認められない。なお、南東壁の遺構範囲外に並行して幅狭の溝状遺構が検出されているが、本遺構に伴うかは不明である。

出土遺物は、上層の SX4 より下位では散漫で、床面から浮いた状況で出土している。1 から 3 は弥生土器甕形土器である。

本遺構の帰属時期は、古墳時代前期と考えられる。

SI31 セ 502 山新遺跡第 9 地点 (Fig.29)

SI31 は Y07-54 付近に位置する。SI22 の南側に灰褐色でやや赤味を帯びた土が楕円形に認められており、これを炉跡と判断し、周辺を竪穴住居跡とした。附属施設としては、炉周辺のピットを P1、P2 としたが、位置は支柱穴と見做し難い。平面形状は不明瞭だが、SI22 の南側にある溝状遺構が本遺構の周溝になる可能性がある。床硬化面は認められない。

出土遺物は、炉内から出土している。1、3 は弥生土器壺形土器、2 は弥生土器甕形土器、4 は土師器甕形土器である。

本遺構の帰属時期は、2 期と考えられる。

SD33 は Y07-46 付近に位置する。北西に SI22、南西に SI31 が隣接する。

平面的には直線的に南東方向から北西方向に伸びるとみられるが、東側の立ち上がりのみ遺存し、西側では確認できない。断面形状は不明である。

本遺構は溝状遺構として報告するが、位置関係から SI31 の東側の壁の可能性も考えられる。

出土遺物は、底面から浮いた状況で出土している。1 は土師器高坏形土器、2 は土師器甕形土器である。

SD34 は Y07-44 付近に位置する。SI31 と重複するが先後関係は土層断面図では判断できないが平面図上では本遺構が SI31 に対し後出する。

平面は直線的に SI31 炉付近から南西方向に伸びるが、端部は攪乱坑により不明である。断面形状はレンズ状で、幅はほぼ均一である。

出土遺物は、壁面から出土している。1 は土師器甕形土器、2 は粘土紐状の土製品、3 は流紋岩製

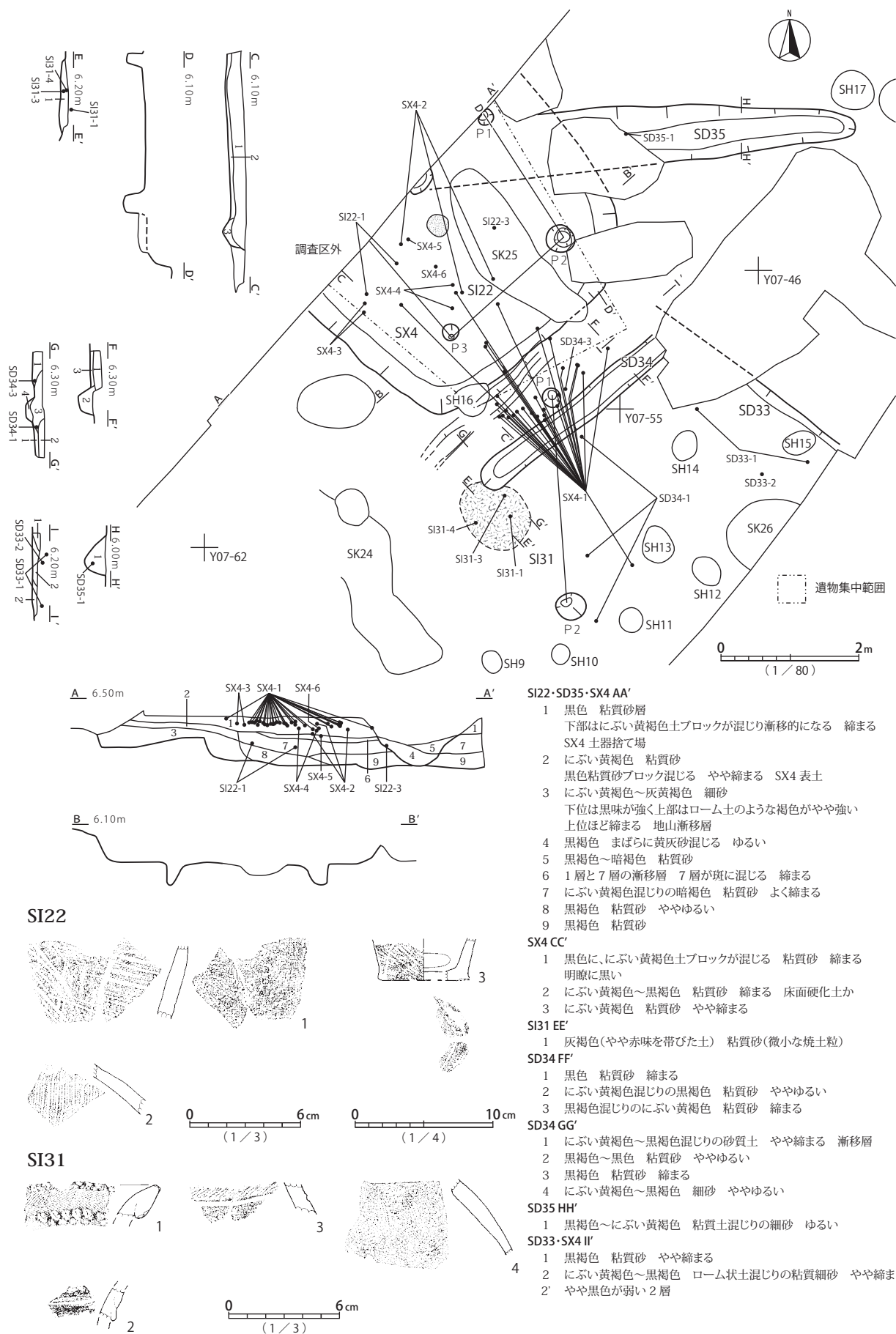


Fig.29 SI22、31、SD33～35、SX4 遺構・SI22、31 遺物実測図

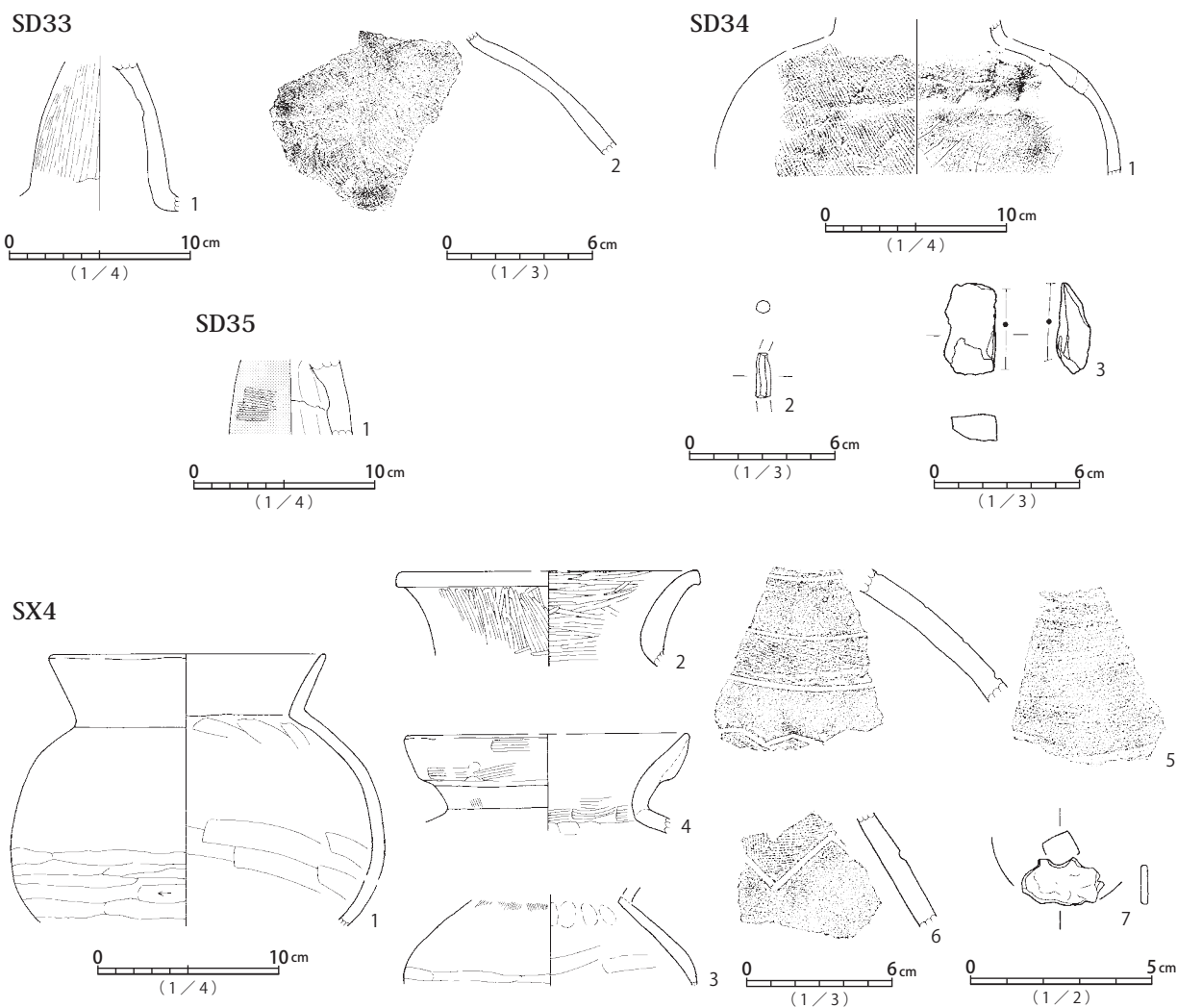


Fig.30 SD33～35、SX4 遺物実測図

の砥石である。

SD35はY07-35付近に位置する。SI22と重複し、断面図では本遺構がSI22に対し後出する。

平面的には直線的に西方向に伸び、調査区外に至る。断面形状はレンズ状を呈する。

出土遺物は、覆土中位から下位から出土している。1は土師器高坏形土器である。

SX4はY07-43付近のSI22覆土上位から南東に広がる土器集中地点である。プランは不明瞭で、土器の出土状況は南東側に偏りが見られるものの、水平位置はほぼ等しい。焼土や炭化物は検出していない。

出土遺物は、1、2が土師器甕形土器、3、4が土師器壺形土器、5、6は弥生土器壺形土器、7は鉄銭である。

帰属時期は、4c期としておく。

SI23 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.31～34)

SI23はA06-32付近に位置する。北側のSM16、南西側のSM15の間にあり、SD37が近接する。周囲にSK33、36、37が位置するが、重複関係はない。

平面形状は、方形を呈するとみられるが、遺構南東側は調査区外に広がる。付属する施設は支柱穴と見られるピットがP1からP4、それ以外にP5からP7が列状に並ぶ。炉は認められないが、遺構北西壁の中央付近が外側に広がっており、カマドの存在が想定される。しかし構築材が皆無であるため、カマドの存在は肯定できない。また、遺構北東壁に並行して、P2から伸びる溝状の掘り込みを確認しているが土層断面図を見ると、その延長にある範囲に同様な掘り込みがみられ、覆土である8層上位が水平に近いことから、8層上面が床であり、それ以下は竪穴構築時の痕跡の可能性はある。

床の硬化面は認められない。

1から18は土師器甕形土器、19から27は土師器壺形土器、28は土師器坏形土器、29から63は土師器高坏形土器、64から66は弥生土器甕形土器、67から69は弥生土器壺形土器である。70は土錘、71は凝灰岩質砂岩製の磨石、72は砂岩製の用途不明品、73は種子炭化物である。

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

SK33はA06-40に位置する。SI23の西側に隣接する。

平面形状は楕円形を呈し、断面形は逆台形もしくはレンズ状を呈する。

出土遺物は無い。

遺構の性格は不明だが、SI23に関連して機能した可能性がある。

SK36はA06-20に位置する。SI23の北側に近接する。

平面形状は不整楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は覆土中から土師器甕形土器1点が出土している。

遺構の性格は不明だが、SI23に関連して機能した可能性がある。

SK37はA06-13に位置する。SI23の東側に隣接する。

平面形状は長楕円形を呈し、断面形は不整形である。

出土遺物は無い。

遺構の性格は不明だが、SI23に関連して機能した可能性がある。

SI24 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.35)

SI24はB05-51付近に位置する。SM17周溝と重複し、土層断面図から本遺構がSM17に対し先行する。

平面形状は、方形を呈するとみられるが、東側をSM17周溝に切られ、遺構の半分ほどは南東側の調査区外に広がるとみられる。付属する施設は確認していない。床硬化面は認められない。

出土遺物は、覆土中位から上層と下層に分かれ、壁際に集中して出土している。1は土師器甕形土器、2から5は土師器壺形土器、6から9は土師器高坏形土器である。

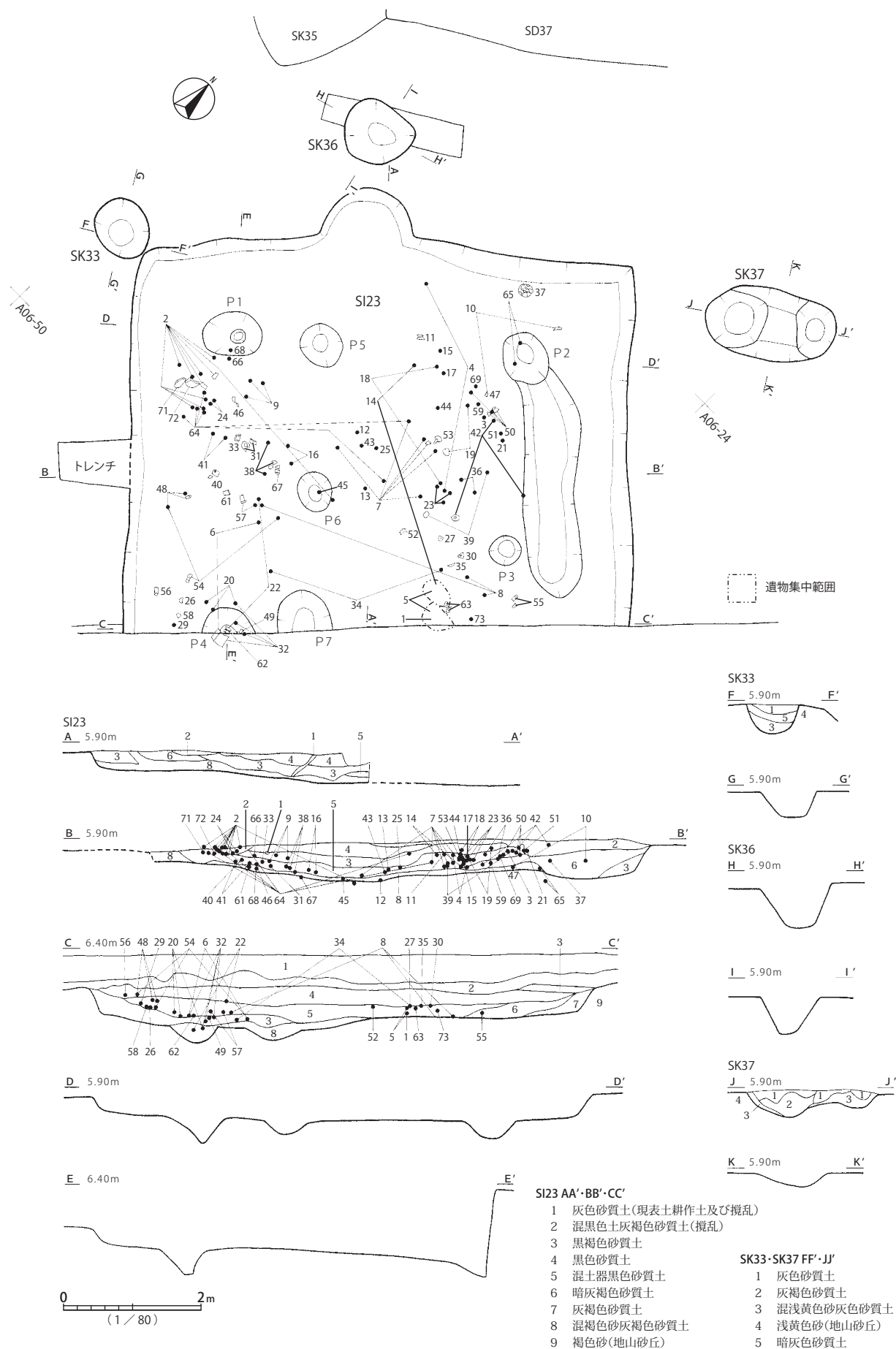


Fig.31 SI23, SK33, 36, 37 遺構実測図

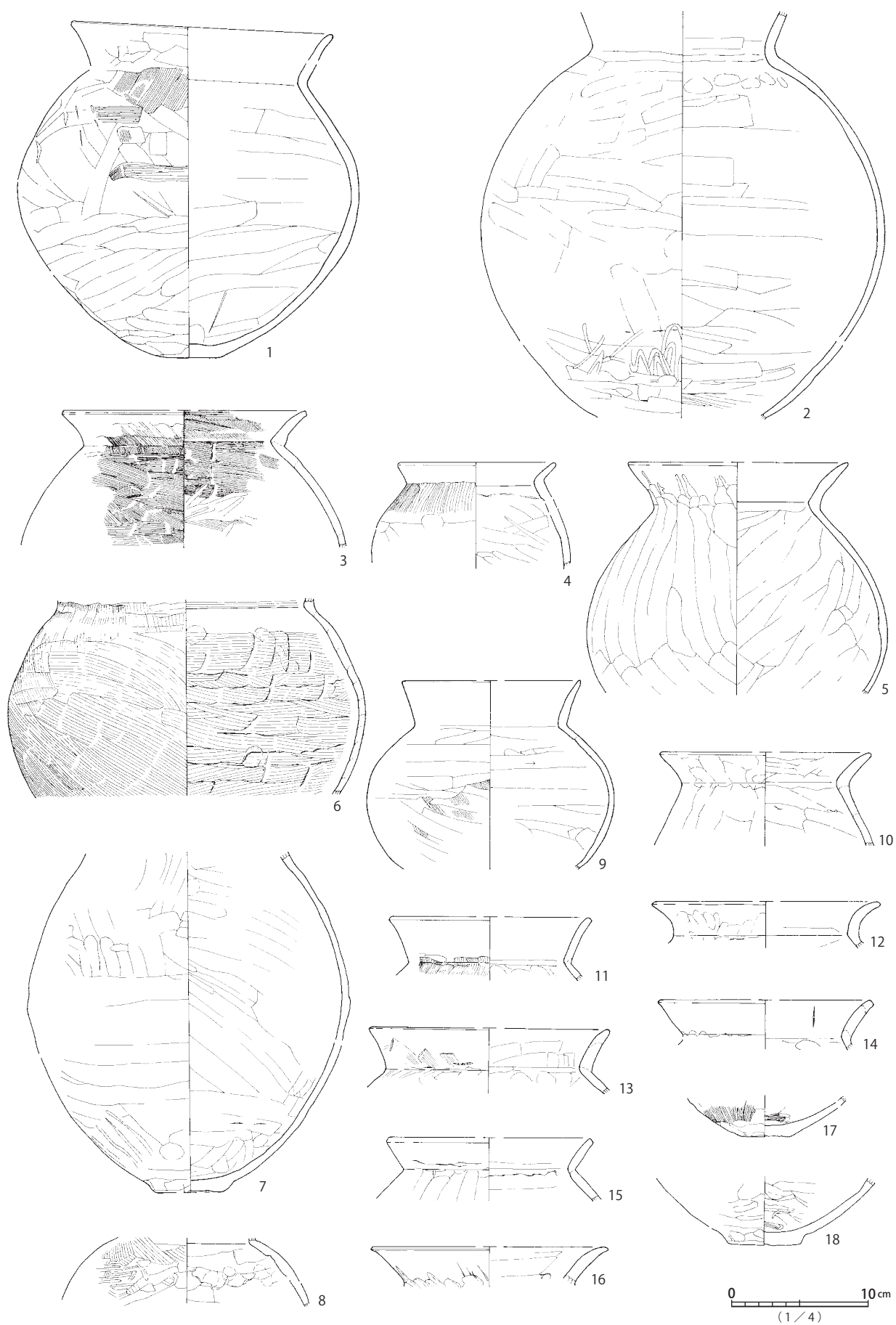


Fig.32 SI23 遺物実測図(1)

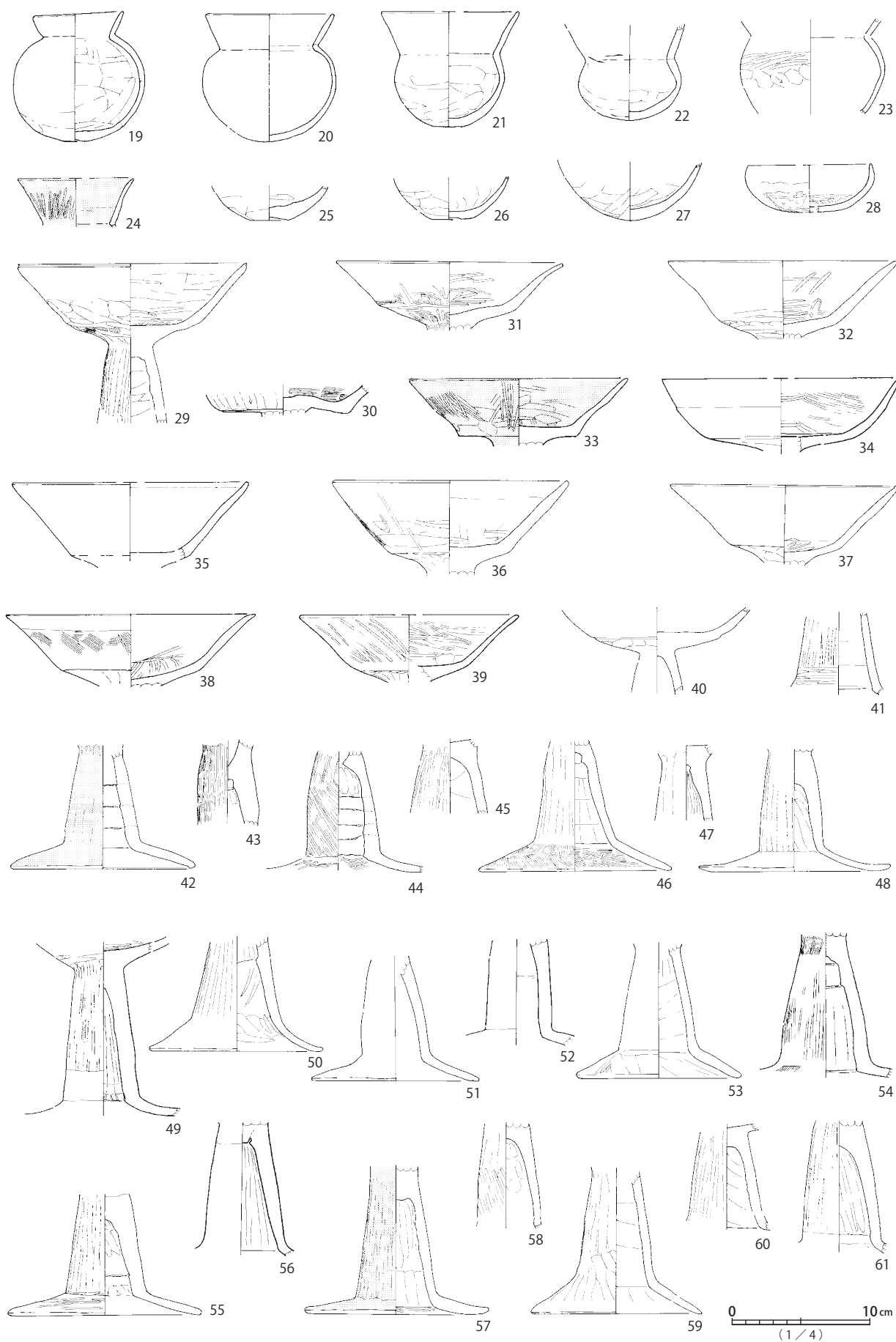


Fig.33 SI23 遺物実測図(2)

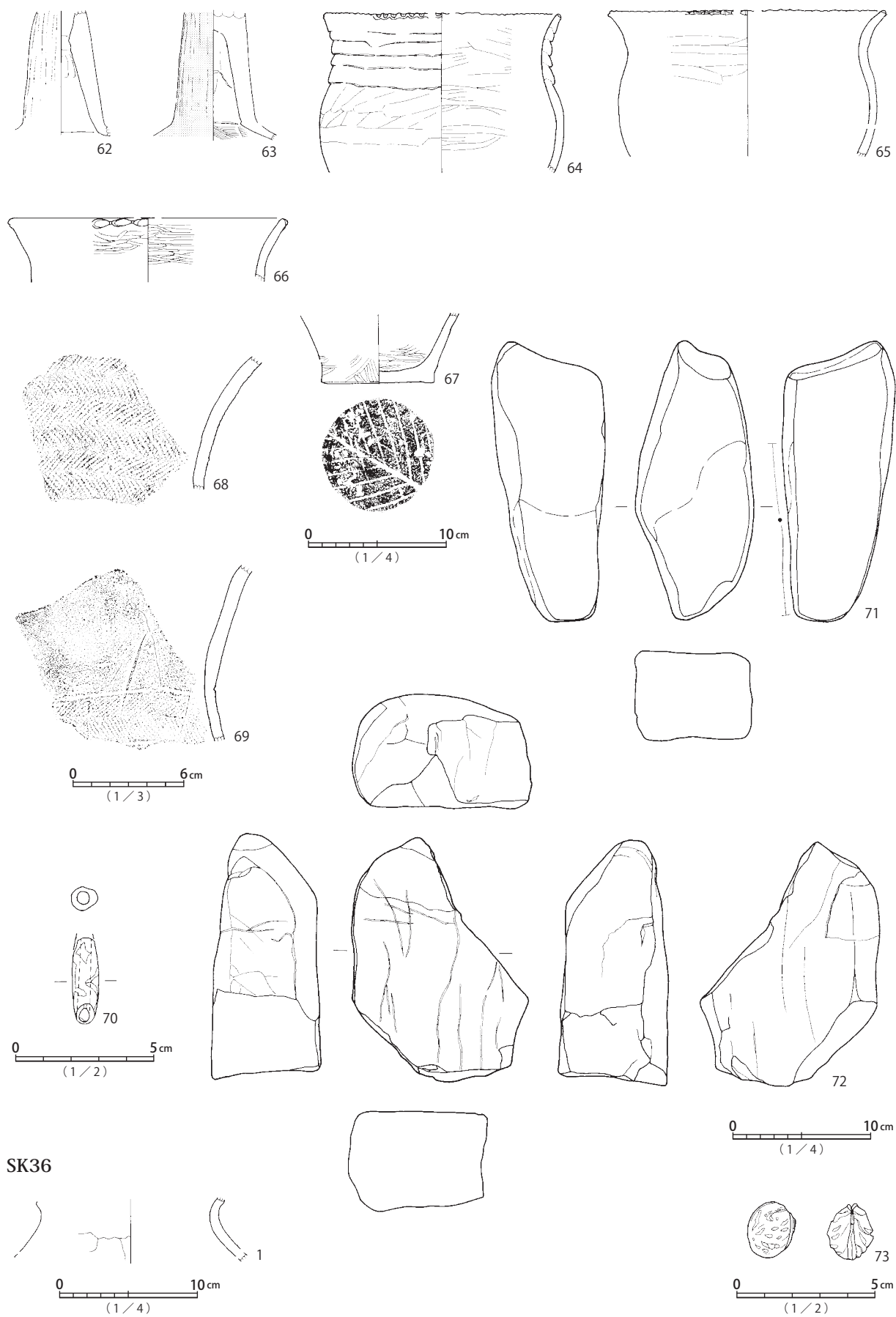


Fig.34 SI23、SK36 遺物実測図

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

SI25 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.36)

SI25はA05-39付近に位置する。南東側にSI24、SM17が隣接するが、遺構の重複は無い。

平面形状は、隅丸方形もしくは不整楕円形を呈するが、遺構上端ラインは南西側に更に広がる可能性がある。遺構中央部付近にP1、P2としたピットを2箇所検出している。他に付属する施設は確認していない。床硬化面は認められない。通常の竪穴住居跡に比べ、遺構規模が狭小であることから土坑である可能性も否めないが、底面が平滑であること、この規模の土坑が本遺跡では皆無であることから、現場所見どおり、竪穴住居跡として報告する

出土遺物は、全て床からやや浮いた覆土中層付近に集中して出土している。1から4、8、9が土師器甕形土器、5、6が土師器壺形土器、7は土師器坏形土器、10から18は土師器高坏形土器である。

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

SI26 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.37・38)

SI26はB04-93付近に位置する。北側から西側にかけてSI28、SI27、SI25が隣接し、南側でSM17と重複する。土層断面図から本遺構がSM17に対して先行する。

平面形状は、隅丸方形を呈するが、南側をSM17によって失う。付属する施設はP1からP5が主柱穴で北西側主柱穴間に炉を1基検出している。床硬化面は認められない。

出土遺物は、覆土中位付近に集中して出土している。1から6が土師器甕形土器、7から9が土師器壺形土器、10から12が土師器高坏形土器、13が白雲母片岩製の不明石製品である。他に円筒埴輪片が出土している (Fig.114)。

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

SI27 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.38)

SI27はA04-69付近に位置する。東側にSI28、SI26、SI25、SM17が隣接するが、遺構の重複は無い。

平面形状は、不整形を呈する。北側から北西側にかけて平面プランが不整形となり、特に北西隅ではひな壇状の張り出しが存在する。主柱穴は確認できず、P1、P2としたピットは入り口施設であろうか。床硬化面は認められない。西壁に並行して位置する溝状の掘り込みは竪穴掘削時の床下構造とみられる。

出土遺物は、覆土中位から下層、床面直上から出土している。1は土師器甕形土器、2から4は土師器壺形土器、5から7は土師器高坏形土器、8は土師器坏形土器である。他に円筒埴輪片が出土している (Fig.114)。

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

SI28 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.39～41)

SI28はB04-53付近に位置する。西側にSI27、南側にSI26が隣接する。北側でSK40と重複し、土層断面図から本遺構がSK40に対して先行すると判断できる。遺構中央を東西方向に確認調査次のト

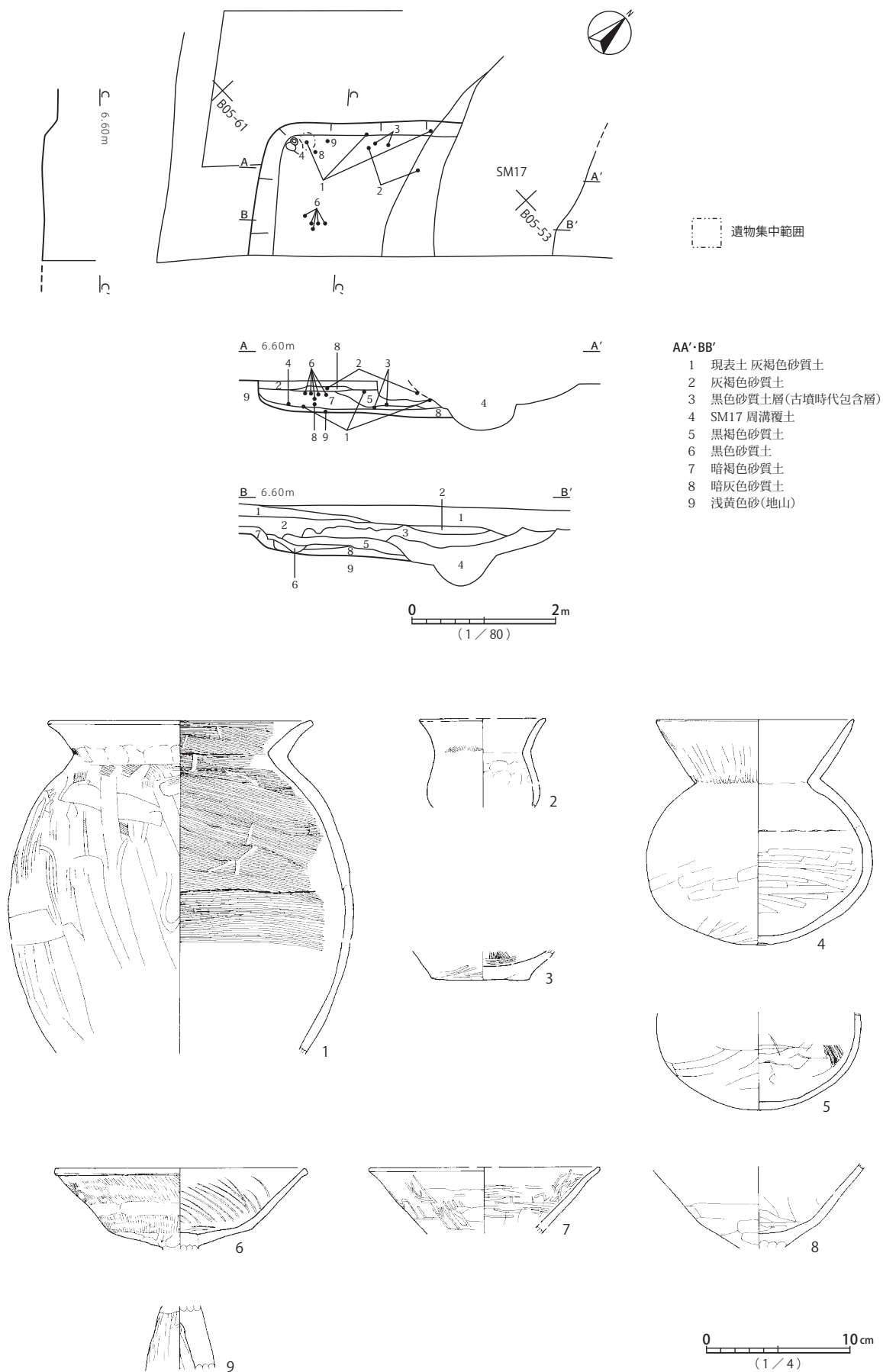


Fig.35 SI24 遺構・遺物実測図

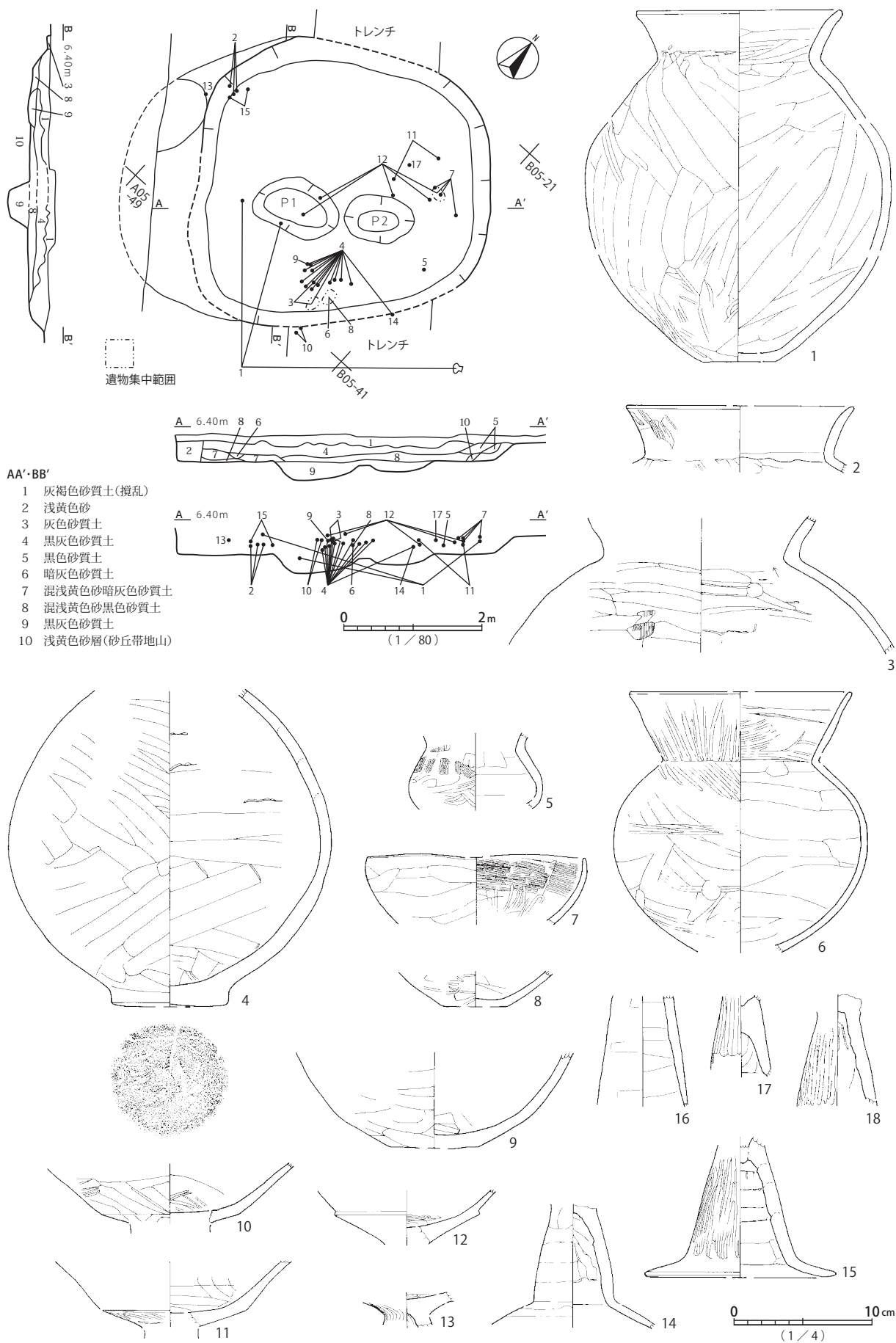


Fig.36 SI25 遺構・遺物実測図

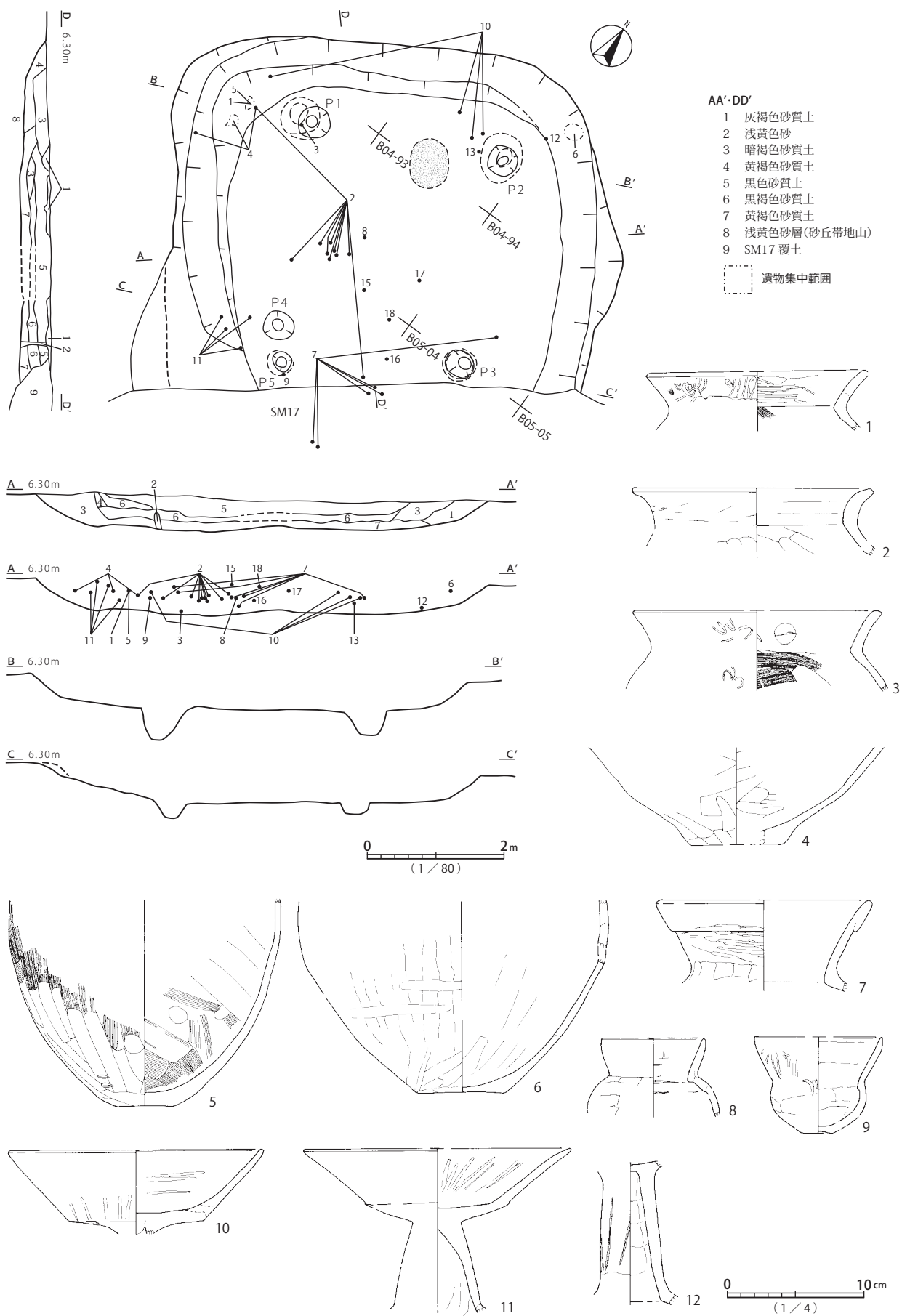


Fig.37 SI26 遺構・遺物実測図

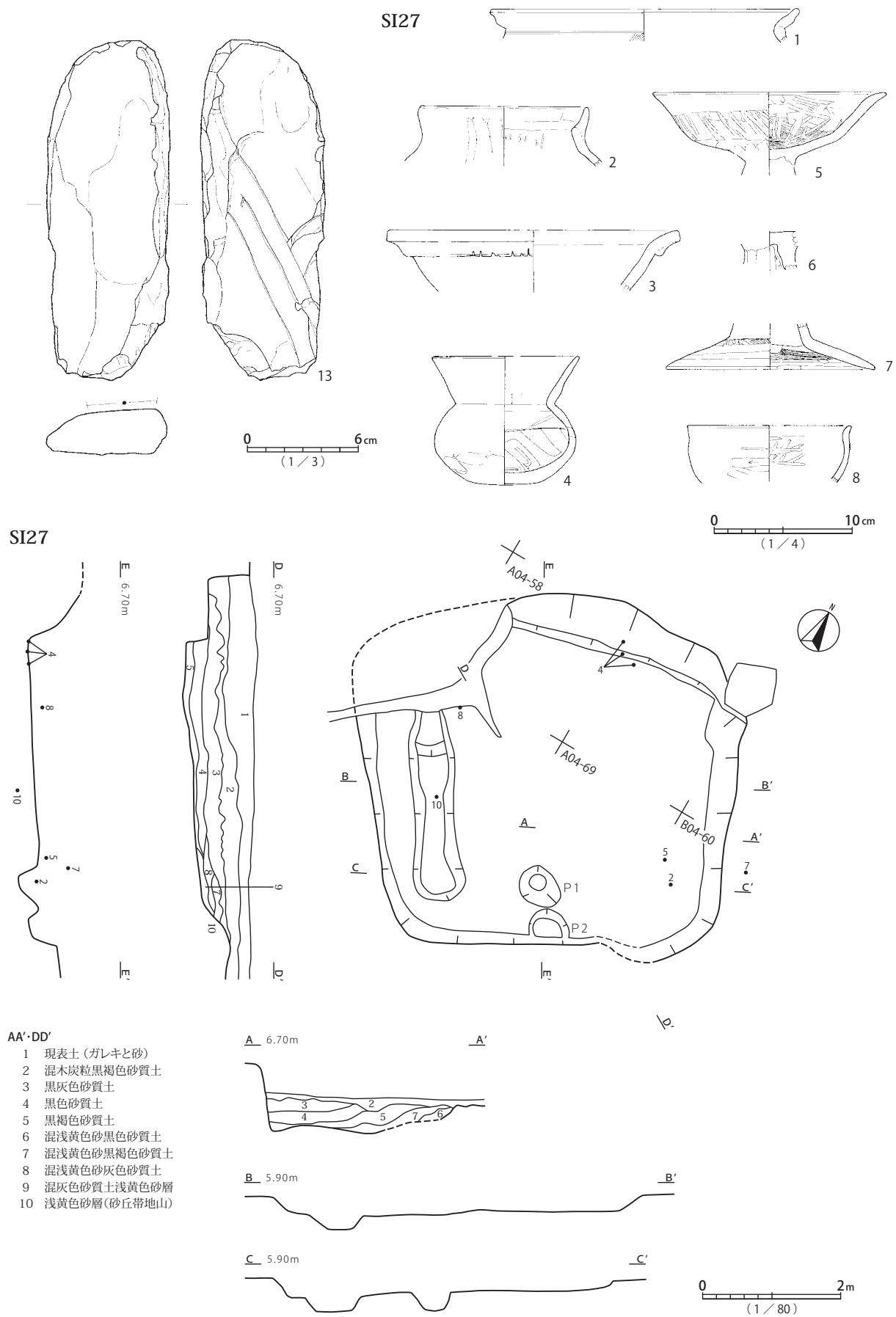


Fig.38 SI27 遺構・SI26、27 遺物実測図

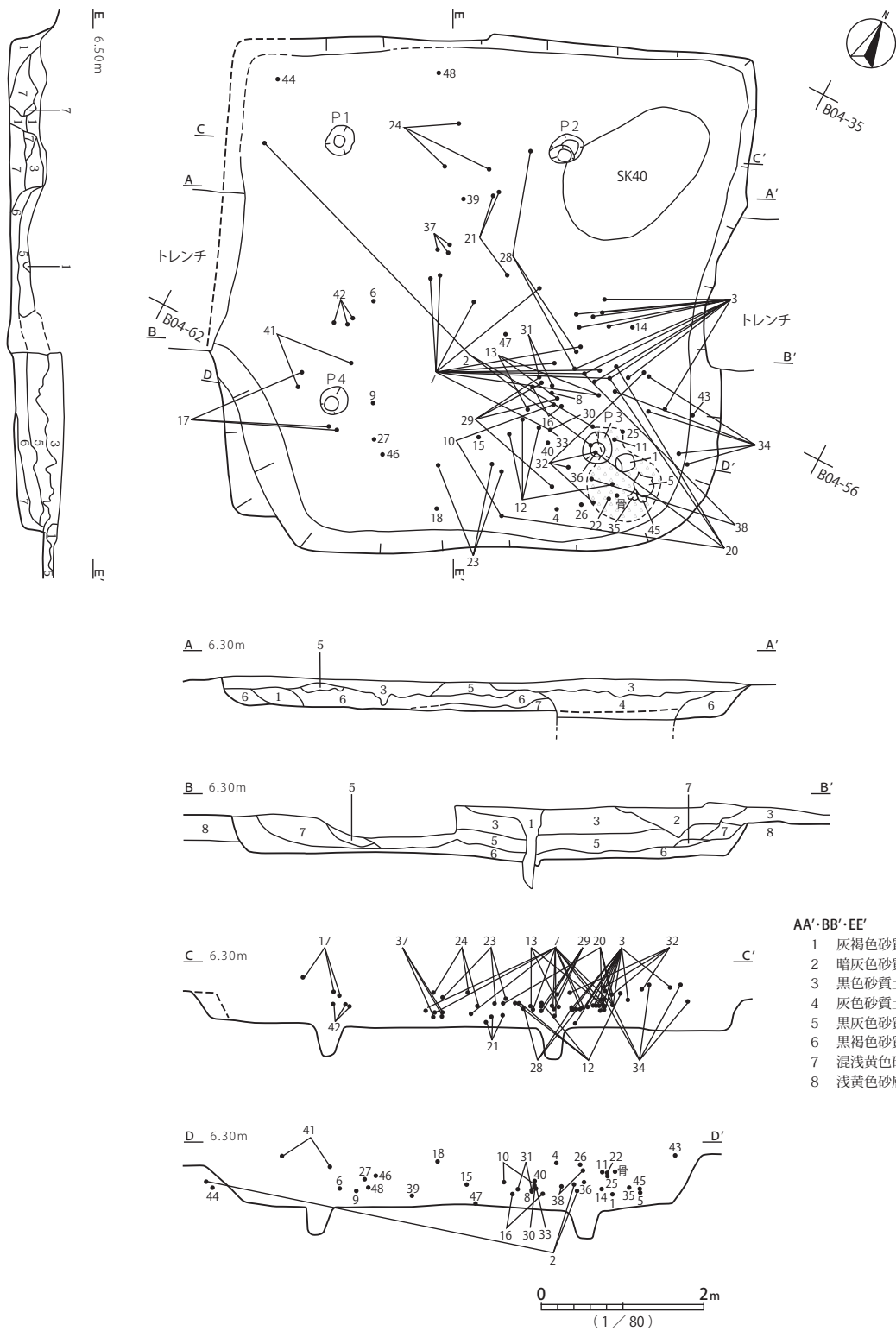


Fig.39 SI28 遺構実測図

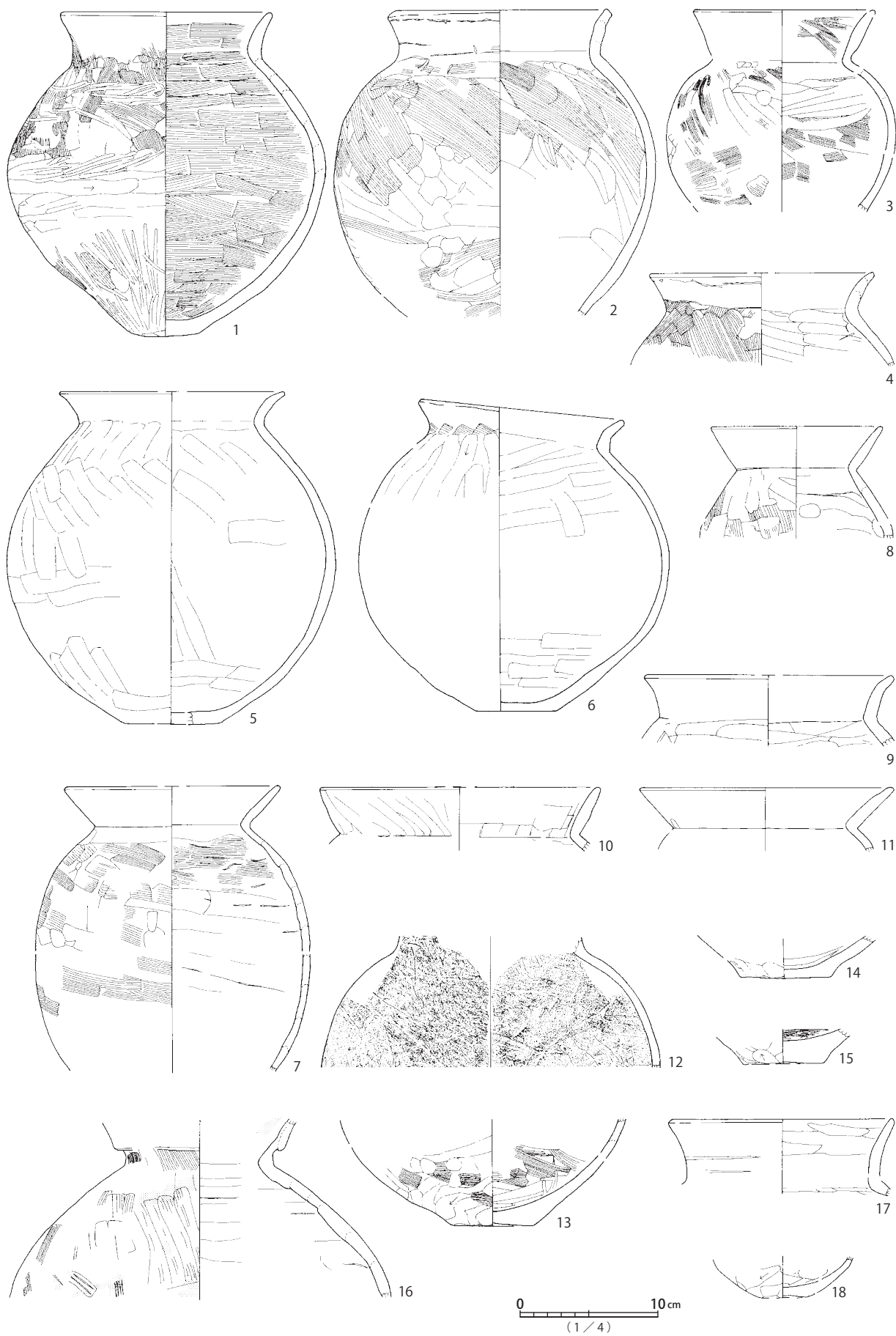


Fig.40 SI28 遺物実測図(1)

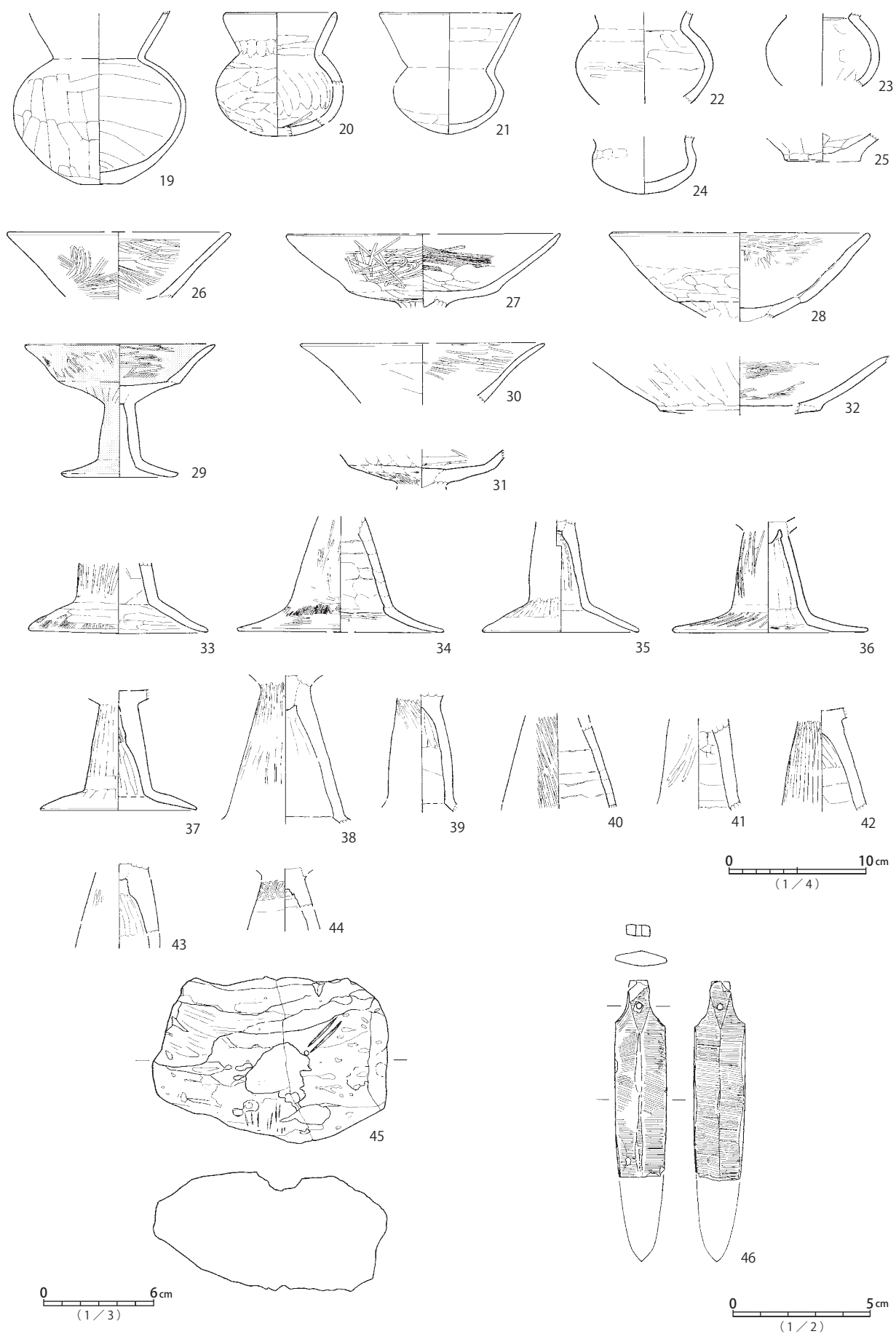


Fig.41 SI28 遺物実測図(2)

レンチが横断しているほか、B-B' では上層からの攪乱が若干認められる。

平面形状は方形を呈するが、南西隅がやや歪んでいる。P1からP4とした主柱穴が検出されており本遺跡の調査では希少な事例となる。炉や床硬化面、貯蔵穴、周溝などは認められない。

出土遺物は南東側に集中して出土している。出土レベルは20cm以上床面から浮いて集中する状態を示す。1から15は土師器甕形土器、16から25は土師器壺形土器、26から44は土師器高坏形土器、45は軽石製の砥石状の石製品で、一部に金属製の刃物痕とみられる直線的な傷が認められる。46は粘板岩製の剣形石製模造品で、茎部の一部と切先を欠損する。茎部と両面に鐫を作り出しており、同種の石製模造品としては古い形態を示すとみられる。

本遺構の帰属時期は、4c期と考えられる。

SI29 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.42・43)

SI29はC03-36付近に位置する。東側でSI30、南側でSM18と重複する。土層断面図からは本遺構がSM18に対して後出するよう見えるが、確定的ではない。SI30に対しては先後関係が不明である。

平面形状は、東西方向に長い不整形方形を呈するが、西端部で丸く張り出すなど本来の遺構プランであるか不確定である。床硬化面は認められない。竪穴住居跡とする根拠は弱い、現場所見に従う。

出土遺物は、SI30、SM18の重複範囲からの出土が主体で、帰属する遺物の抽出が難しい。

1から4、11から15は土師器甕形土器、5、6、8、9は土師器高坏形土器、7は土師器壺形土器、10は須恵器長頸壺、17は石英斑岩製の敲石である。

本遺構の帰属時期は、遺構の重複関係と10の須恵器を重視すれば4期と考えられるが、確実ではない。

SI30 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.42・43)

SI30はC03-28付近に位置する。西側でSI29、南側でSM18、東側でSD42と重複する。土層断面からは本遺構がSM18に対して先行するよう見えるが、確定的ではない。SI29に対しては先後関係が不明である。

平面形状は隅丸方形を呈するが、遺構南側プランは確認していない。付属施設、床硬化面は認められない。

出土遺物は、遺構全面に散在しているが、SM18周溝内に位置する遺物も含んでおり、帰属する遺物の抽出が難しい。

1から7、20、21は土師器甕形土器、8、9は土師器壺形土器、10から19は土師器高坏形土器、22、23は弥生土器甕形土器である。

本遺構の帰属時期は、5a期と考えられる。

SI31 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.29)

SI22の項を参照。

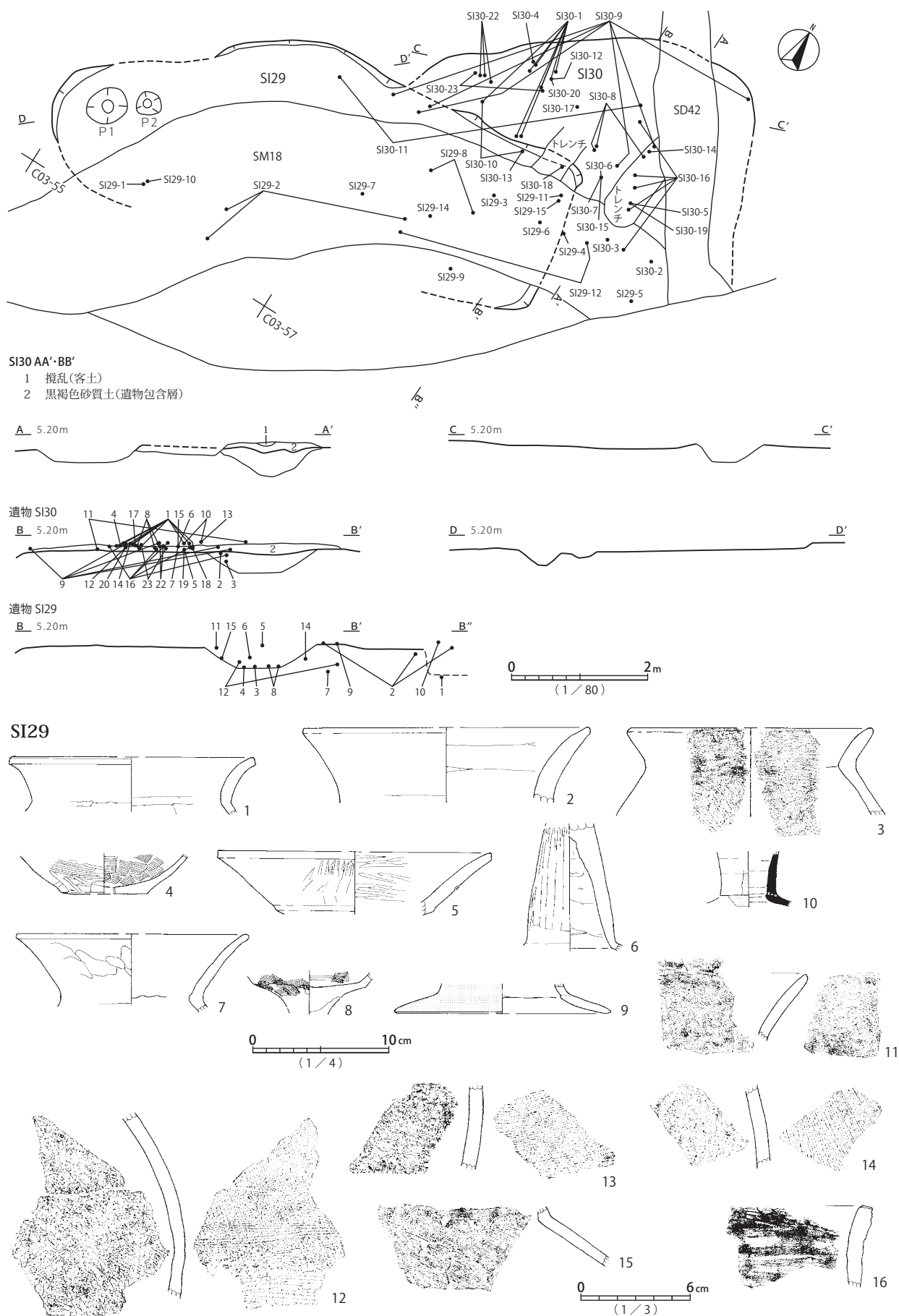


Fig.42 SI29、30 遺構・SI29 遺物実測図

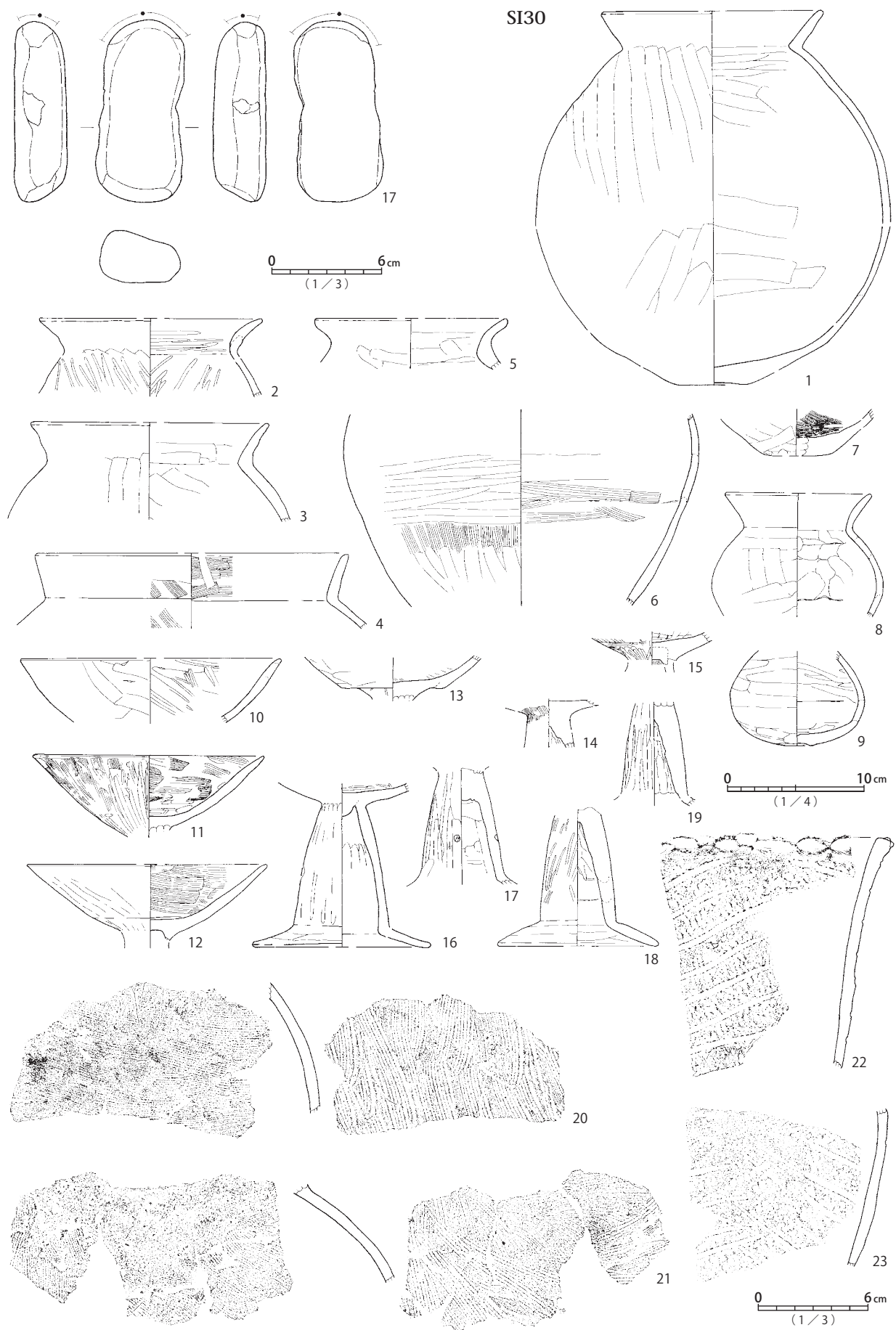


Fig.43 SI29、30 遺物実測図

第2節 掘立柱建物跡

SB1 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.44)

SB1はQ15-92付近に位置する。南側は後背湿地となり砂堆の端部となっている。SM1、SD3、SD5、SH4と重複し、東側に本遺構と並行してSD6が隣接、更に東側にSH5とした掘立柱建物跡の可能性もあるピット群が位置している。本遺構の周辺では竪穴住居跡は検出されていない。遺構の先後関係は土層断面図からは本遺構に対してSH4が後出すること以外は判然としない。

平面形状は1間×2間の東西方向に長い長方形となるが、柱穴間は北側のP1-P2間に比べP5-P6間が広くなるためやや不整形となる。ただし、後述するSH3 (Fig.91) のP2、P4、P6、P8からP10の位置関係から、これらを取り込んだ2間×3間の東西方向に長い建物である可能性も指摘できる。付属する施設は認められない。柱は抜き取り痕跡が無く、柱筋が明瞭で、柱あたりも検出している。

出土遺物は無い。

遺構の帰属時期は、不明である。

SB2 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.45)

SB2はX08-94付近に位置する。北側にSI16、西側にSI15、SK16が近接し、南西方向にはSK12からSK15が位置し、SK18と重複するが、遺構の先後関係は判然としない。

SB2とした範囲は、P1からP10までの2間×2間に復元した建物のほか、P32からP35、P13からP15、P27からP29としたピット列、その他の周辺ピット群を含めている。これらは、いずれもピット内の土層情報が乏しく、底面のレベルを中心に構成している。方法としては検討の余地があり確定的ではないものの、建物と同時に機能したかは別として、東西方向にピットが並ぶ傾向を看取できることから、ひとまとまりとしてここで扱うこととした。またP19からP31、P18からP30、SI15の主柱穴の可能性もあるP22からP30など、ほかにも南北方向を意識した列状配置としての把握も可能である。SD30と一定の間隔をおいて位置し、この中にピット群が収まっており、同時に機能した可能性もある。

出土遺物は無い。

遺構の帰属時期は不明である。

SB3 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.46)

SB3はZ06-82付近に位置する。北側にSD36、西側にSM14周溝が近接する。やや距離をおいて東側にSI23が位置する。遺構の重複は無い。

平面形状は1間×1間の方形としたが、柱穴間に小ピットが2箇所認められる。ピット位置を厳密に見ればやや不整形となるがここでは隅を直角に復元している。土層断面、平面図を見る限り柱の痕跡は認められず、建物跡ではない可能性も否めない。付属する施設は認められない。

出土遺物は無い。

遺構の帰属時期は不明である。

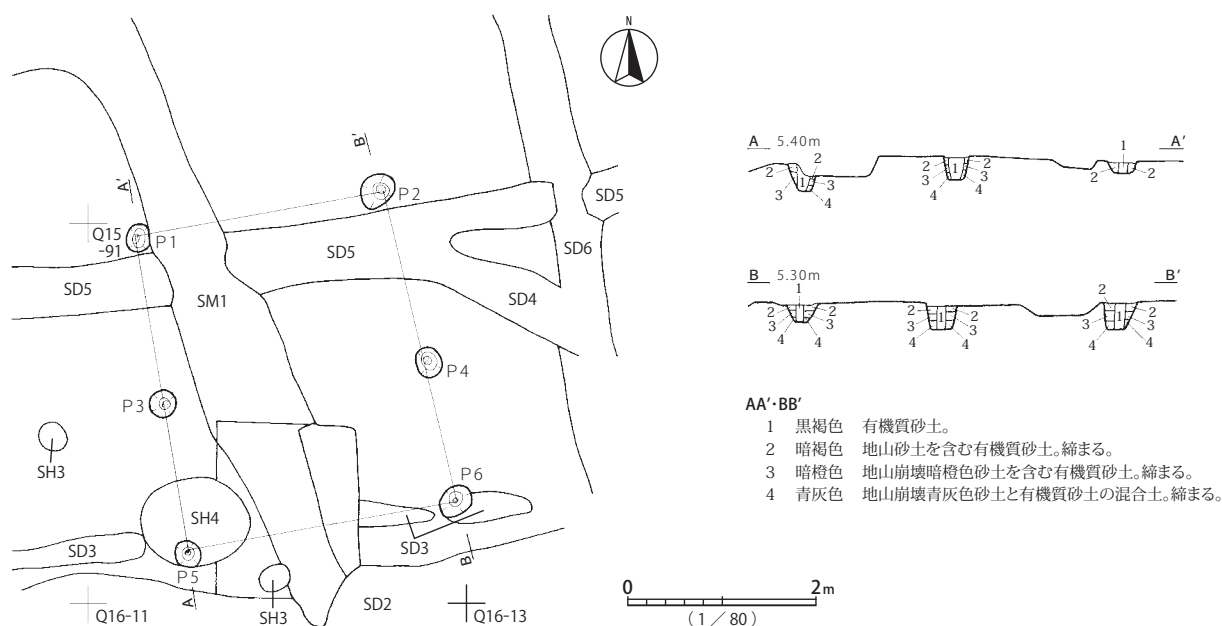


Fig.44 SB1 遺構実測図

SB4 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・46)

SB4はD02-65付近に位置する。北側にSK70、南側にSK49からSK52の土坑群が近接する。遺構中央でSD41と重複するが、先後関係は不明である。また、北側には遺構番号は付与していないが、南北方向の細い溝状遺構が3条位置する。また、本遺構を中心とした6m×7mの範囲は縄文時代後期の遺物が比較的まとまって出土している範囲であり、包含層調査が行われているためSX13 (Fig.85)として報告している。

平面形状は1間×1間の方形となるが、柱穴間が1m程度と通常の掘立柱建物とは異なり、小規模の竪穴住居跡の支柱穴に近い規模である。土層情報が乏しく、ピット底面の水平レベルも均一的とはいえない。P6についても一連の遺構とする根拠に乏しいが、ここでは現場所見を優先して、同一遺構として報告する。付属する施設は認められない。柱は抜き取り痕跡が無く、柱筋は不明である。

出土遺物は、1が土師器甕形土器でP6から、2は弥生土器の甕形土器で、P2から出土している。遺構の帰属時期は不明である。

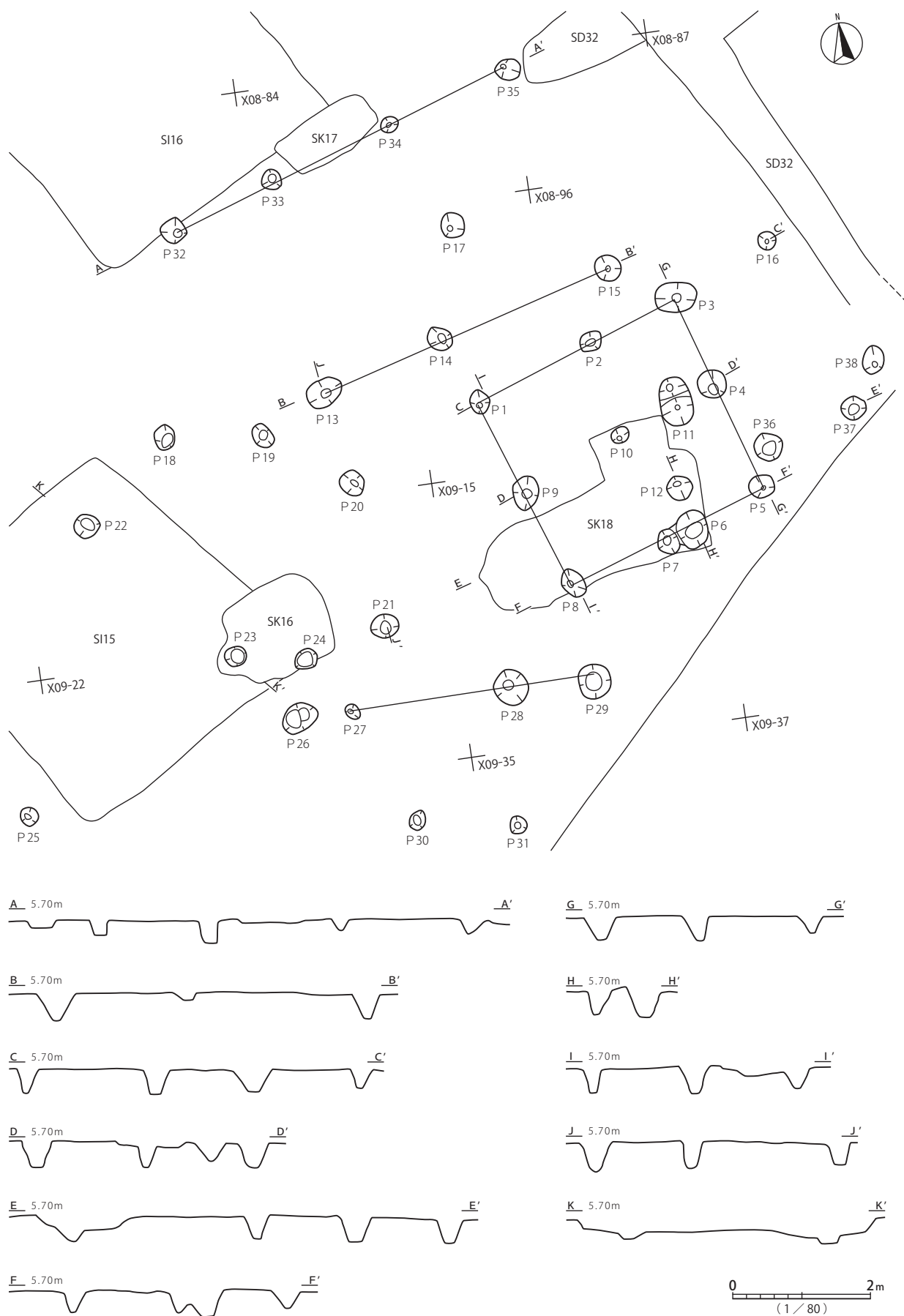
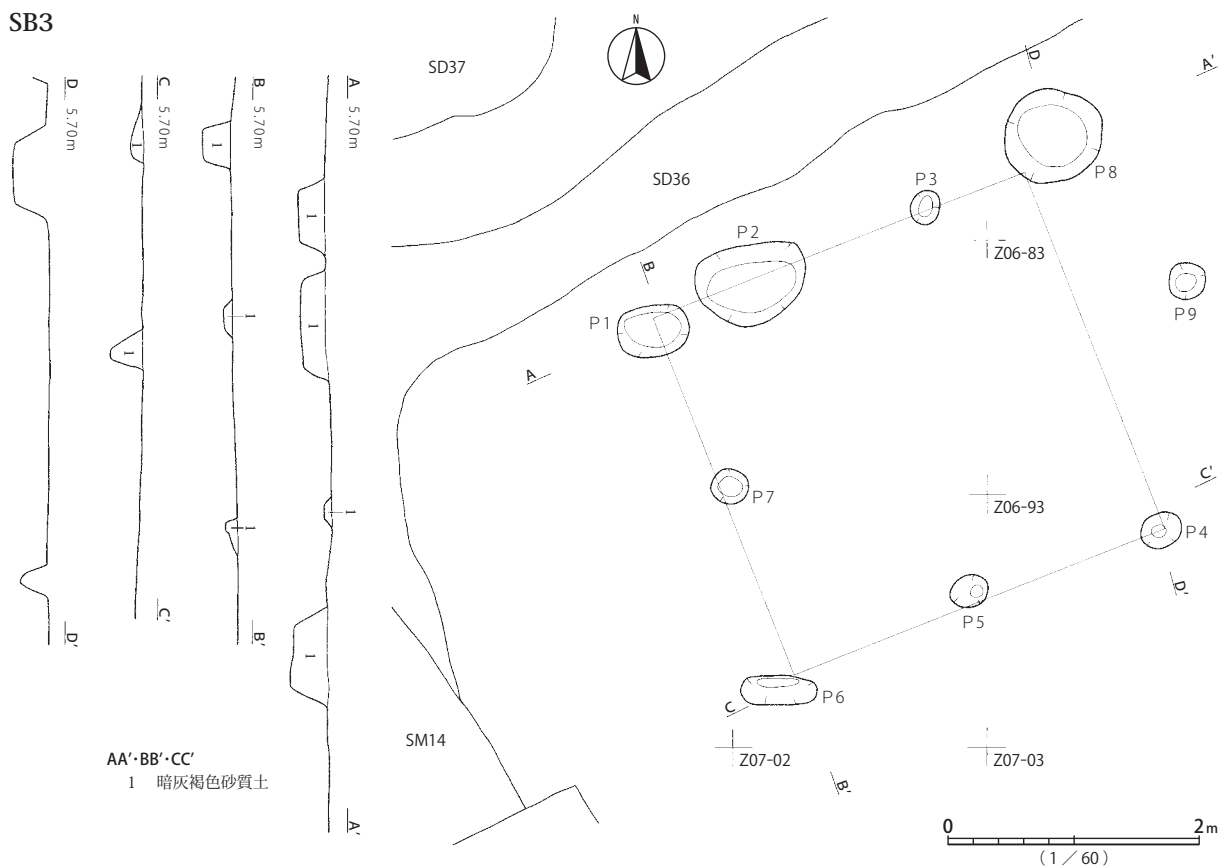


Fig.45 SB2 遺構実測図

SB3



SB4

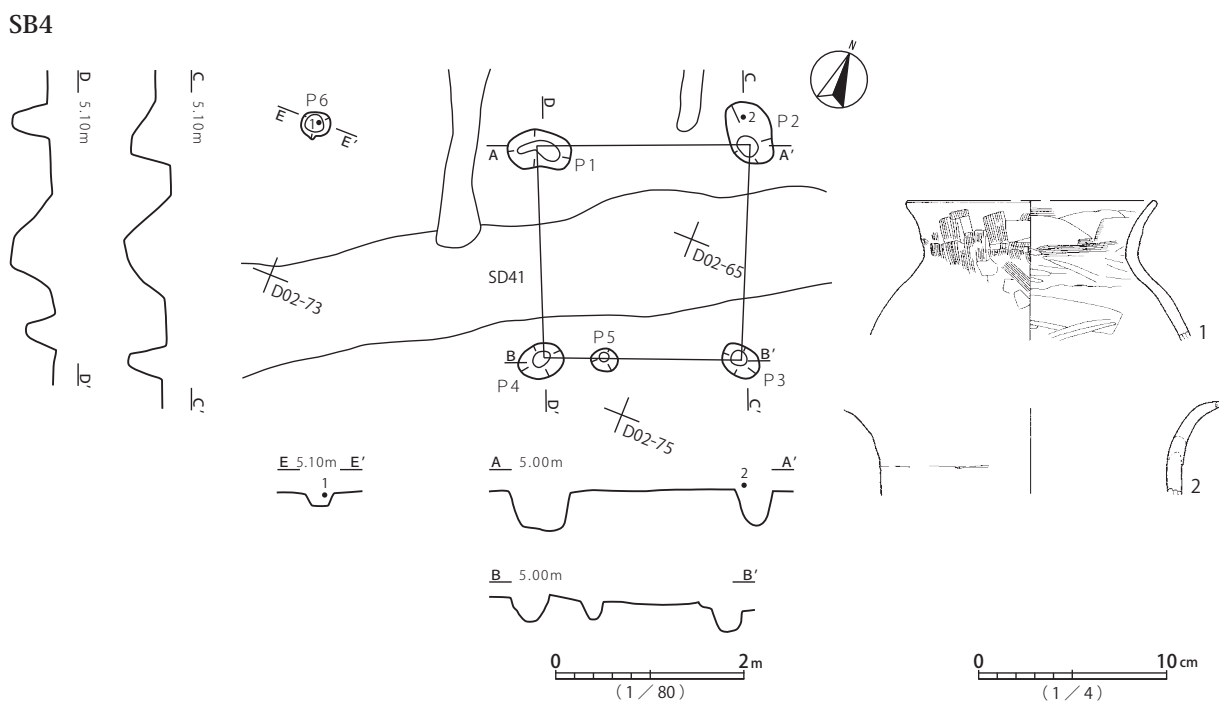


Fig.46 SB3、4 遺構・SB4 遺物実測図

第3節 古墳

SM1 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.47)

SM1はQ15-90付近に位置する。SB1、SD1、SD2、SD3、SD5、SH2、SH3、SH4と重複する。東側にSM3が位置する。先後関係は図面上ではいずれも判然としないが、本遺構は溝状遺構に対してはこれに先行するものとみられる。

墳形は方墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。南側の周溝位置にはSD2が重複しており、遺存していない。あるいは、古墳の位置が砂堆縁辺部にあることから、南側周溝が造られていない可能性もある。現状で確認できる周溝は平面形がコの字形で、東西方向の幅は、北側より南側で広がっている。周溝幅は北側周溝に比べ、東、西周溝はやや安定していないように見える。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図が無いので判り難いが、土層断面図を見ると、目立った傾斜は存在しない。周溝の断面形は北側周溝の一部で逆台形を呈するが、その他はレンズ状に近い。主体部や周溝内土壌など埋葬施設は確認していない。

出土遺物は、周溝覆土中位より上で出土しているが、総じて少量である。1は土師器壺形土器、2は土師器甕形土器、3は土師器器台形土器、4は土師器高坏形土器である。

帰属時期は、5期とするが確定的ではない。

SM2 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.48)

SM2はQ15-62付近に位置する。SD7a、SD7bと重複する。やや離れて南西側にSM1、東側にSM3が位置する。先後関係は、本遺構に対してSD7a、SD7bが後出するようにみえるが、断定的ではない。

墳形は方墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。北側の周溝位置は調査区外となっている。現状で確認できる周溝は北側で開口する平面形コの字形であるが、南東隅付近で途切れている。平面形は東側周溝が北側に向けて外側に開いているため、方形よりはひし形に近い。周溝幅は東側周溝が、西側、南側周溝に比べて幅広となっているものの、それぞれはほぼ安定している。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図が無いので判り難いが、土層断面図を見ると、西側周溝のみ他に比べて2倍以上深い。周溝の断面形は西側が左右非対称の逆台形である以外は、レンズ状を呈する。主体部や周溝内土壌など埋葬施設は確認していない。

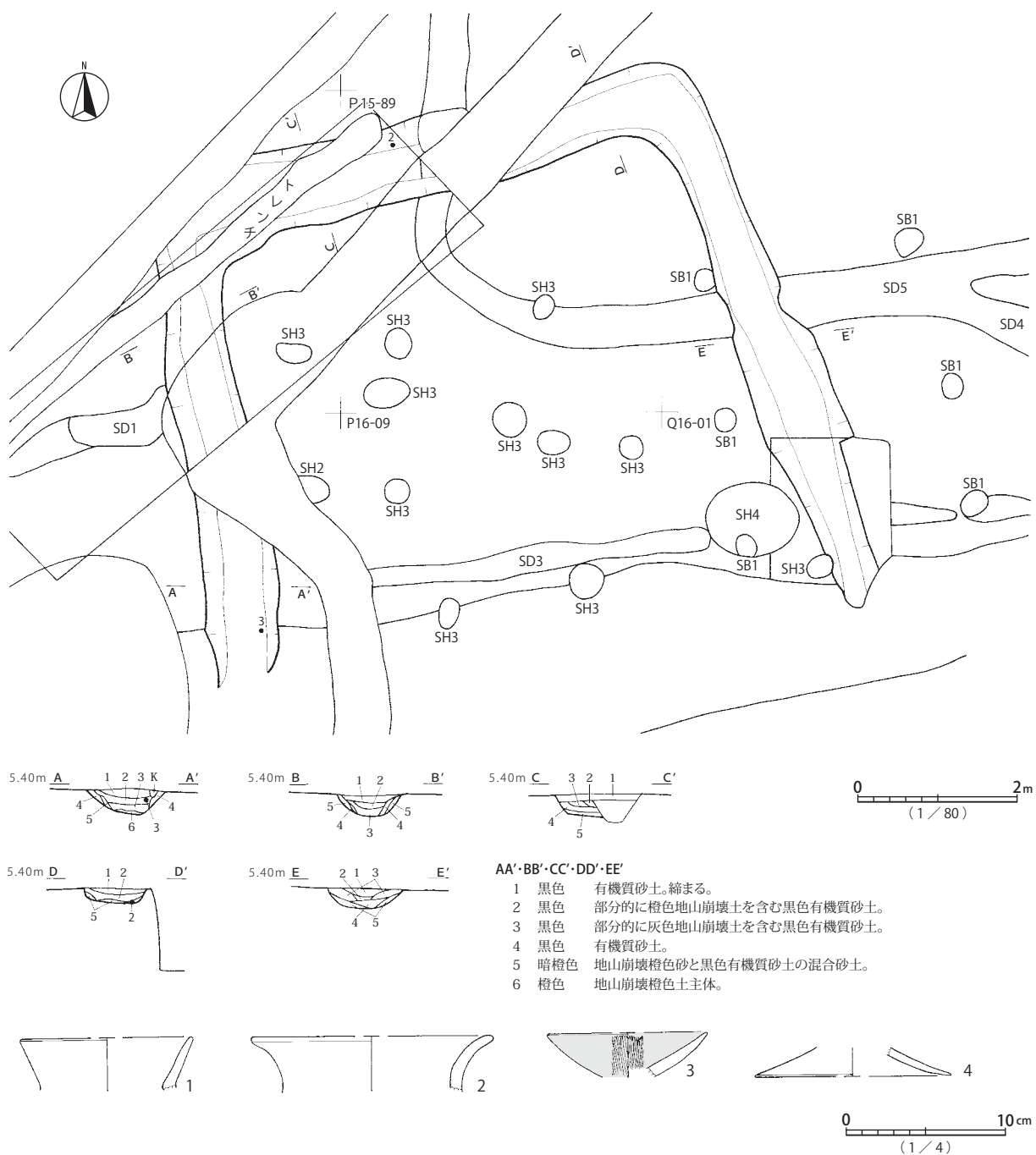
出土遺物は、いずれも確認調査時に出土していることからわかるように、西側周溝の覆土中位より上でのみ出土している。遺物量は総じて少量である。1は土師器器台形土器、2、3は土師器高坏形土器、4は須恵器甕、5は土錘である。

帰属時期は、5期とするが確定的ではない。

SM3 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.49)

SM3はQ15-66付近に位置する。SD7a、SD7b、SD5、SH5と重複する。西側にSK2が近接する。西側にはやや離れてSM2、SM1が位置する。先後関係については、本遺構はSD7a、SD7b、SD5、SH5に対して先行する。

墳形は方墳である。墳丘盛土は確認していない。周溝は全周しているがその幅は四方で一定ではな



く、東側、南側周溝に比べ、北側、西側周溝は幅狭となっているが、各辺では周溝幅は安定している。周溝底面の幅は南東隅周辺で安定していない。周溝底面の水平レベルは、等高線図が無いので判り難いが、土層断面図を見ると、西側周溝が浅くなっている。周溝の断面形は南側周溝の一部でレンズ状を呈するが、その他は逆台形に近い。主体部や周溝内土壌など埋葬施設は確認していない。

出土遺物は、東側周溝を中心に墳丘東半分で出土している。出土レベルは周溝覆土中位付近に集中する。1から3は土師器壺形土器、4、5は土師器甕形土器、6は土師器台付甕形土器、7は土師器高坏形土器である。

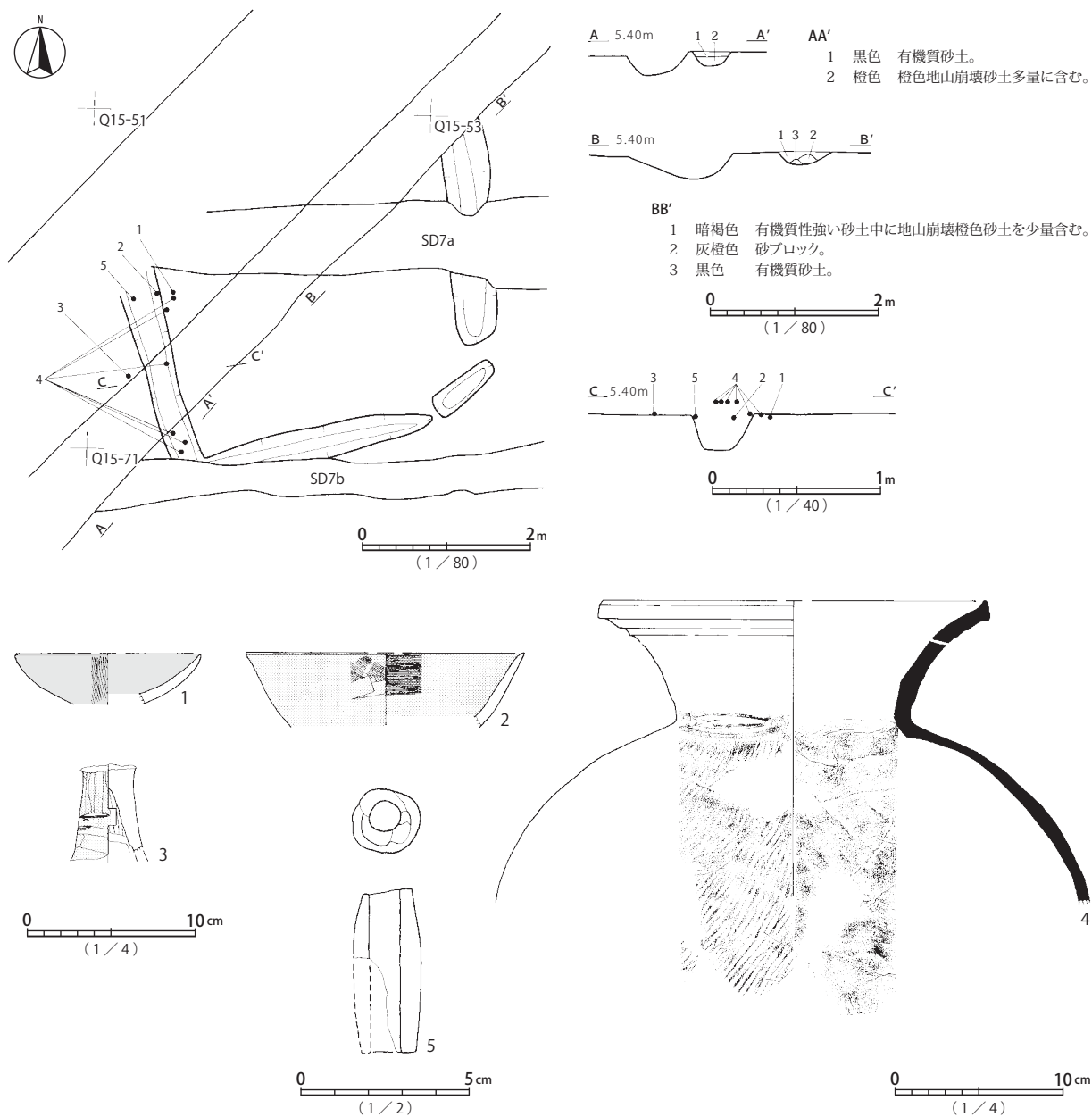


Fig.48 SM2 遺構・遺物実測図

帰属時期は、5期とするが確定的ではない。

SM4 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.50)

SM4はQ15-19付近に位置する。SD9と重複する。南側にSD8が近接し、やや離れて南西側にSM3、南側にSM5が位置する。先後関係は本遺構がSD9に対し先行する。

墳形は方墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。北側の周溝位置にはSD9が重複しており、遺存しない。あるいは、元来北側周溝が造られていない可能性もある。現状で確認できる周溝は平面形がコの字形で、西側、南側周溝は連続するが、東側周溝は独立して位置するように見え、北西隅、南東隅は陸橋状に明瞭に開口している。周溝の幅は、三方で目立った違いは無い。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図が無いので判り難いが、土層断面図を見ると

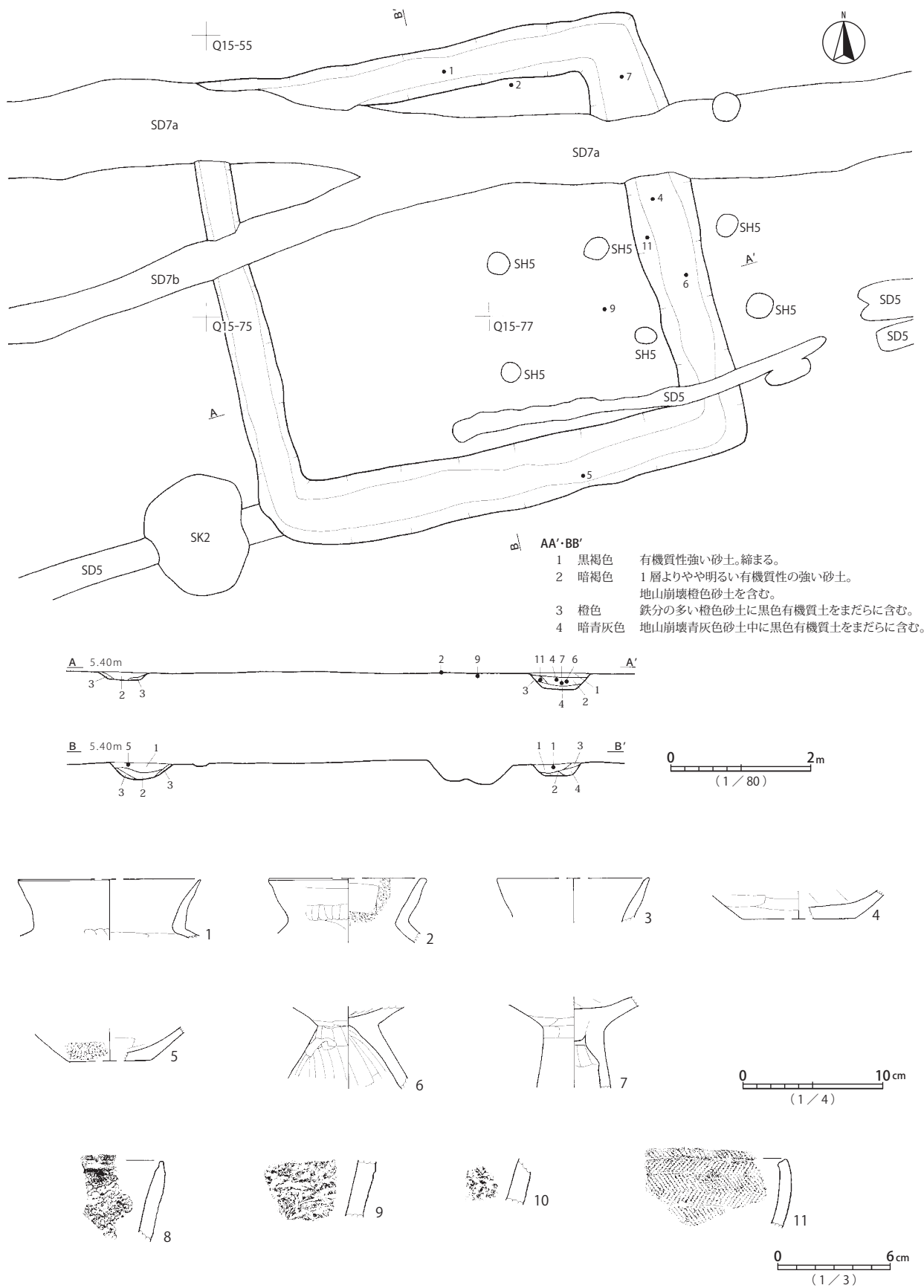


Fig.49 SM3 遺構・遺物実測図

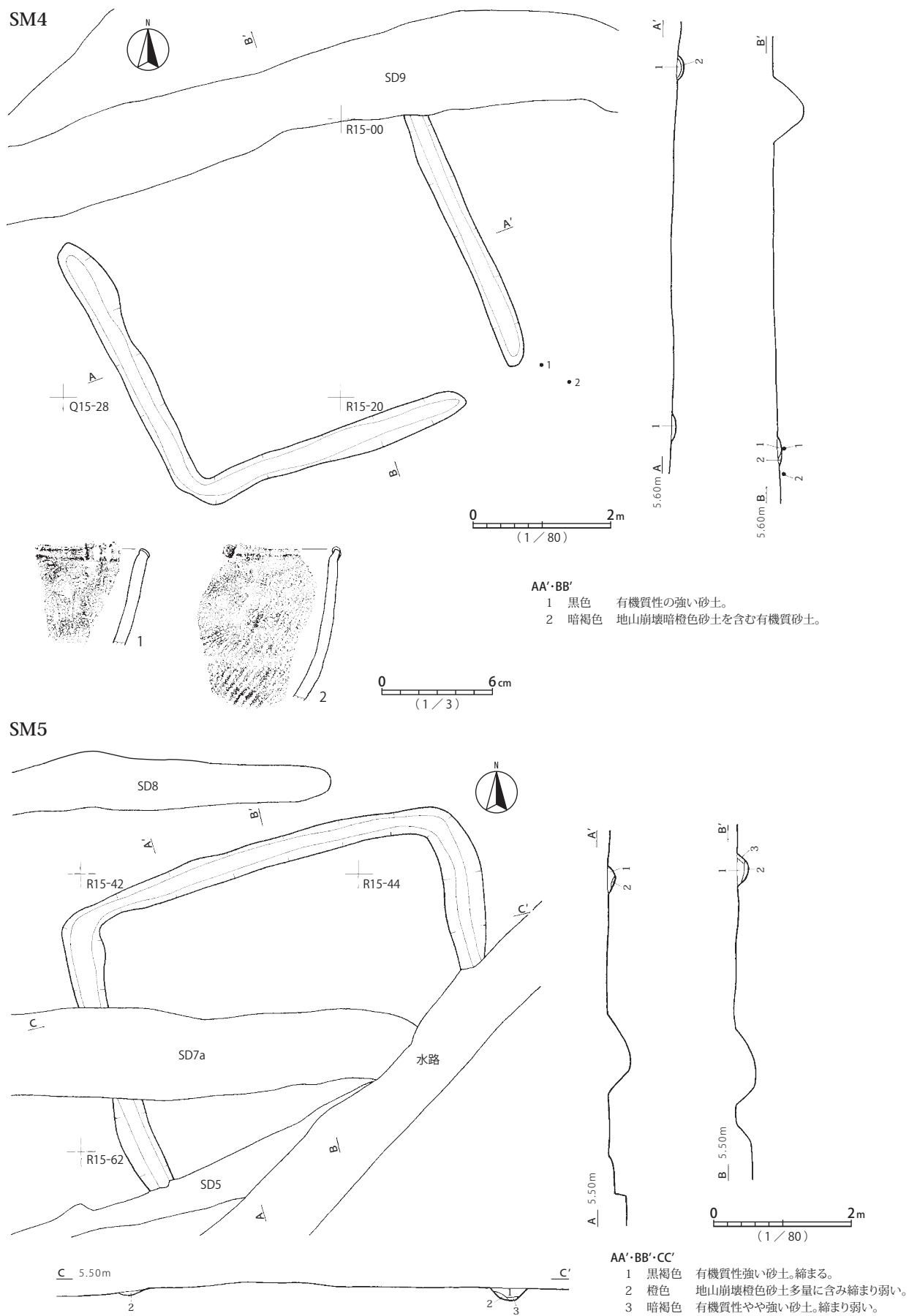


Fig.50 SM4, 5 遺構・SM4 遺物実測図

東側に傾斜しているように見える。周溝の断面形はレンズ状に近い。主体部や周溝内土壌など埋葬施設は確認していない。

出土遺物は古墳範囲外から出土した縄文土器のみである。

帰属時期は、5期とするが確定的ではない。

SM5 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.50)

SM5はR15-53付近に位置する。SD5、SD7aと重複する。北側にSD8が近接し、やや離れて北側にSM4、西側にSM3が位置する。先後関係は、本遺構がSD5、SD7aに対して先行する。

墳形は方墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。南側の周溝位置にはSD5が重複しているほか、この範囲が調査区外に広がっている可能性がある。また、砂堆縁辺部にあることから、南側周溝が造られていない可能性もある。現状で確認できる周溝は平面形がコの字形を呈する。周溝幅は北側周溝に比べ、東、西周溝は幅広で且つやや安定していないように見える。周溝底面の幅はこれに連動せず、安定的である。周溝底面の水平レベルは、等高線図が無いので判り難いが、土層断面図を見ると、目立った傾斜は存在しない。周溝の断面形はレンズ状に近い。主体部や周溝内土壌など埋葬施設は確認していない。

出土遺物は認められない。

帰属時期は、5期とするが確定的ではない。

SM6 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.51)

SM6はS14-61付近に位置する。SI3と重複する。西側にSD15、SD16、SD17が近接し、先後関係は図面上では判然としないが、本遺構がSI3に対して後出するとみられる。

墳形は方墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。東側の周溝位置は調査区外となっており確認していない。現状で確認できる周溝は、北側周溝と南側周溝の平面形がハの字形で、西側周溝が南側周溝から連続しているが、北西隅に向かって途切れる。周溝の幅は、北側より南側、西側で広がっている。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図が無いので判り難いが、土層断面図を見ると、目立った傾斜は存在しない。周溝の断面形はレンズ状に近い。主体部や周溝内土壌など埋葬施設は確認していない。

出土遺物は確認していない。

帰属時期は、5期とするが確定的ではない。

SM7 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.52、114)

SM7はS13-78付近に位置する。SI4、SI5、SD17、SD18、SD19、SK8と重複する。東側にSM8が位置する。先後関係は土層断面図からは、本遺構がSD18に対して先行する。SI4に対しては周溝内で竪穴住居プランを確認していないことから、これより後出するものと判断した。

墳形は円墳と考えられる。東側で北東方向に伸びる溝状遺構が周溝に連続しており、一見前方後円形を呈するが、断面形や上端幅の相異から、この溝状遺構については周溝ではないと判断した。ただし、現場段階ではこの溝状遺構と古墳周溝間での時期差を確認してはならず、遺物の取り上げも同一遺構

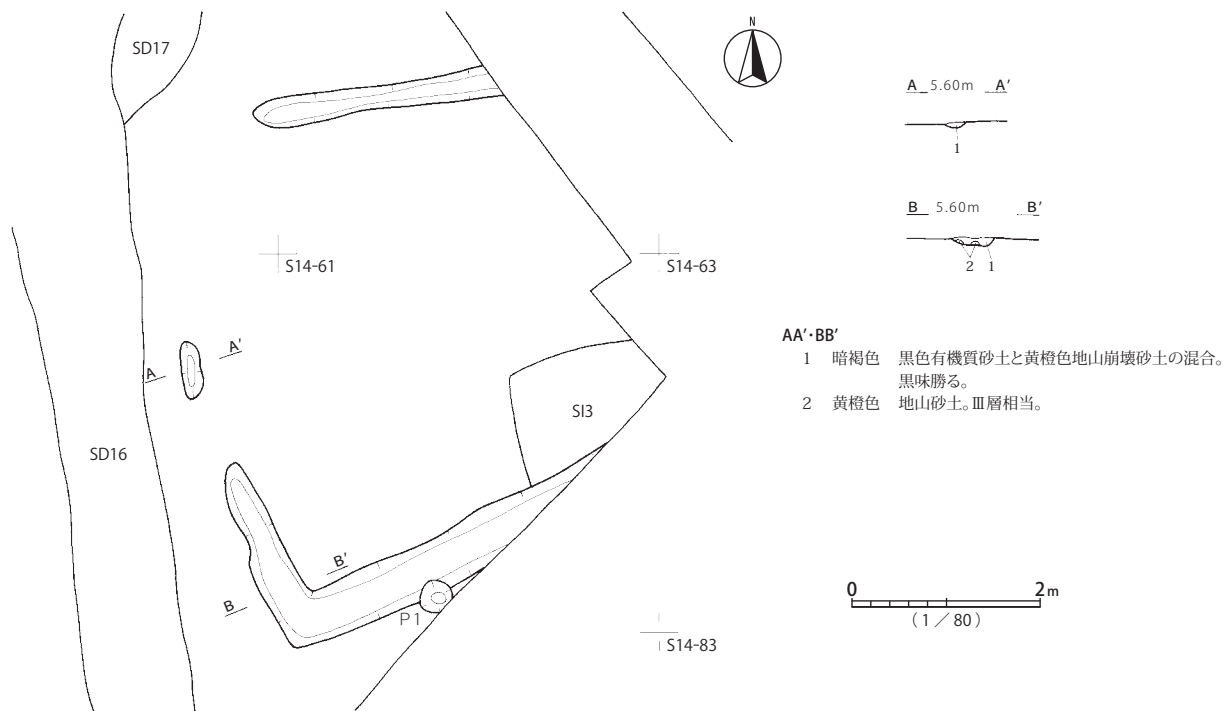


Fig.51 SM6 遺構実測図

として処理していることから、本報告では溝状遺構としてSD番号を付与せず、将来的な墳形の再検討に資するため、ここでまとめて報告することとした。

本古墳の墳丘盛土は確認していない。南東側の周溝位置については、調査区外となることから不明である。現状で確認できる周溝は半円形で、周溝幅は安定している。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、西側で僅かに深くなるが、目立った傾斜は存在しない。周溝の断面形はレンズ状に近いが、底面と法面の境界が不明瞭であることが特徴である。主体部や周溝内土壌など埋葬施設は確認していない。

出土遺物は、周溝覆土中位より上で出土しているが、総じて少量である。1から4は土師器高坏形土器、6は流紋岩製砥石、7は蛇紋岩製剣形石製模造品である。8から10は鉄製品であるが本遺構には伴わない。11、12は円筒埴輪片である（Fig.114）。

帰属時期は、5b新期と考えられる。

SM8 セ377山新遺跡第3地点2次（Fig.53・54）

SM8はT12-84付近に位置する。SI6、SD20、SD21、SD22と重複する。南西側にSM7が近接する。このSM7から北東方向に伸びる溝状遺構と本遺構周溝南側が重複し、土層断面図から本遺構が溝状遺構に対して先行する。同様にSM8→SD21→SD20であることが判る。SI6及びSD22については、現場所見を踏まえSI6→SM8→SD22としておく。

墳形は円墳と考えられるが、周溝北西側については調査区外になるため形状は確認できていない。また、古墳の北西側の範囲で周溝が極端に幅広となっているが、これは北西側周溝の検出と図化が本調査終了後に工事立会いとして行われたことに起因する。

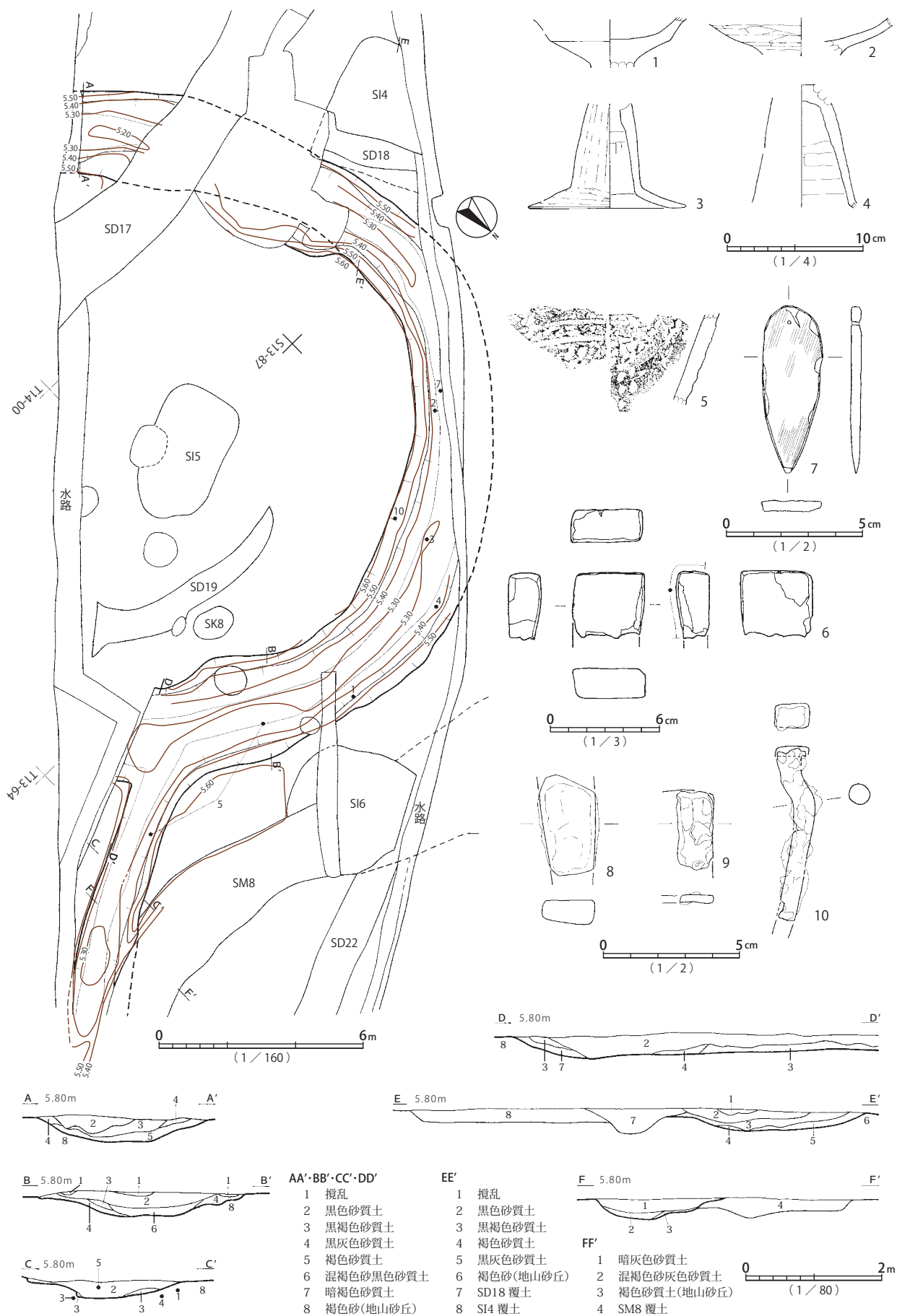


Fig.52 SM7 遺構・遺物実測図

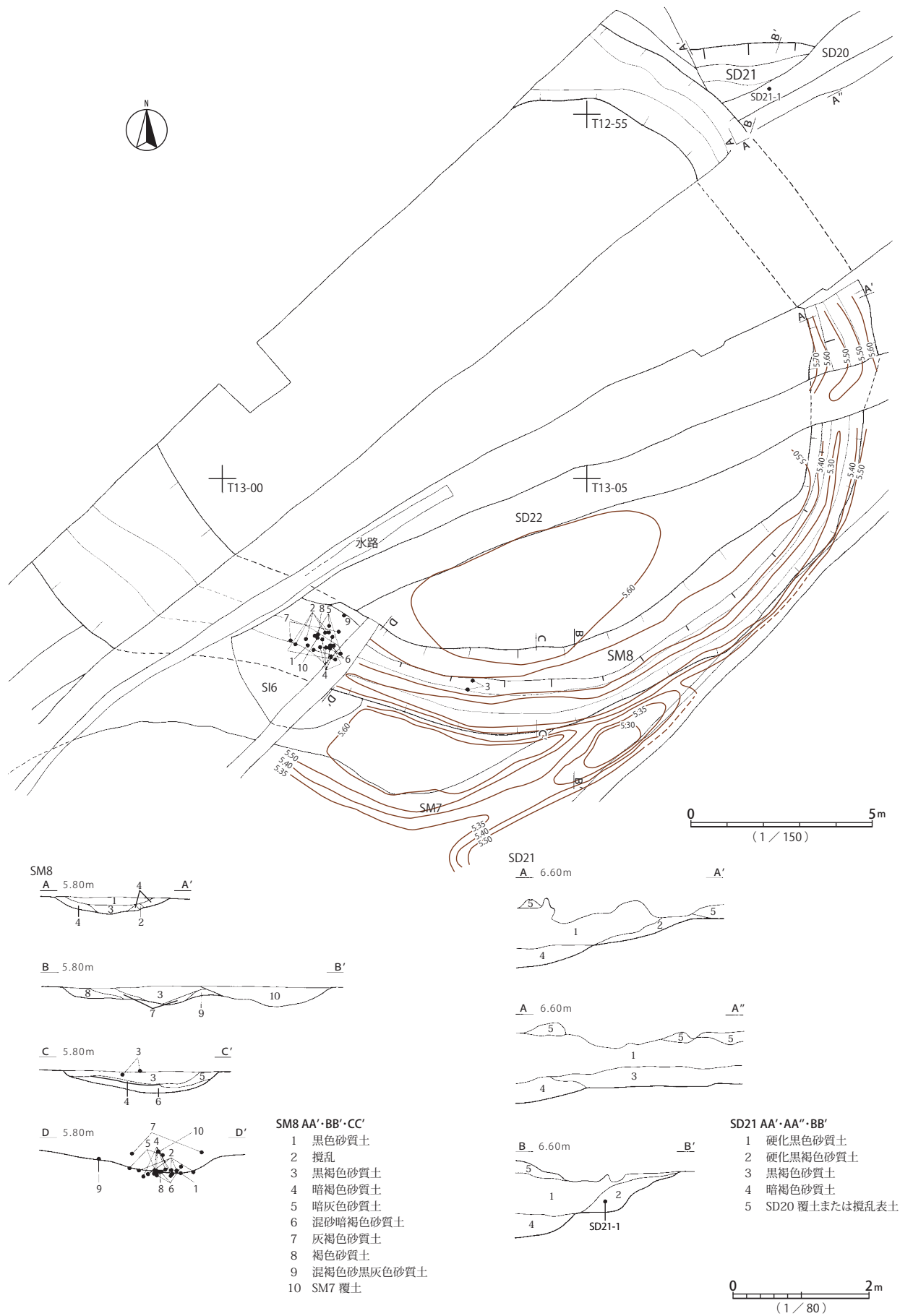


Fig.53 SM8、SD21 遺構実測図

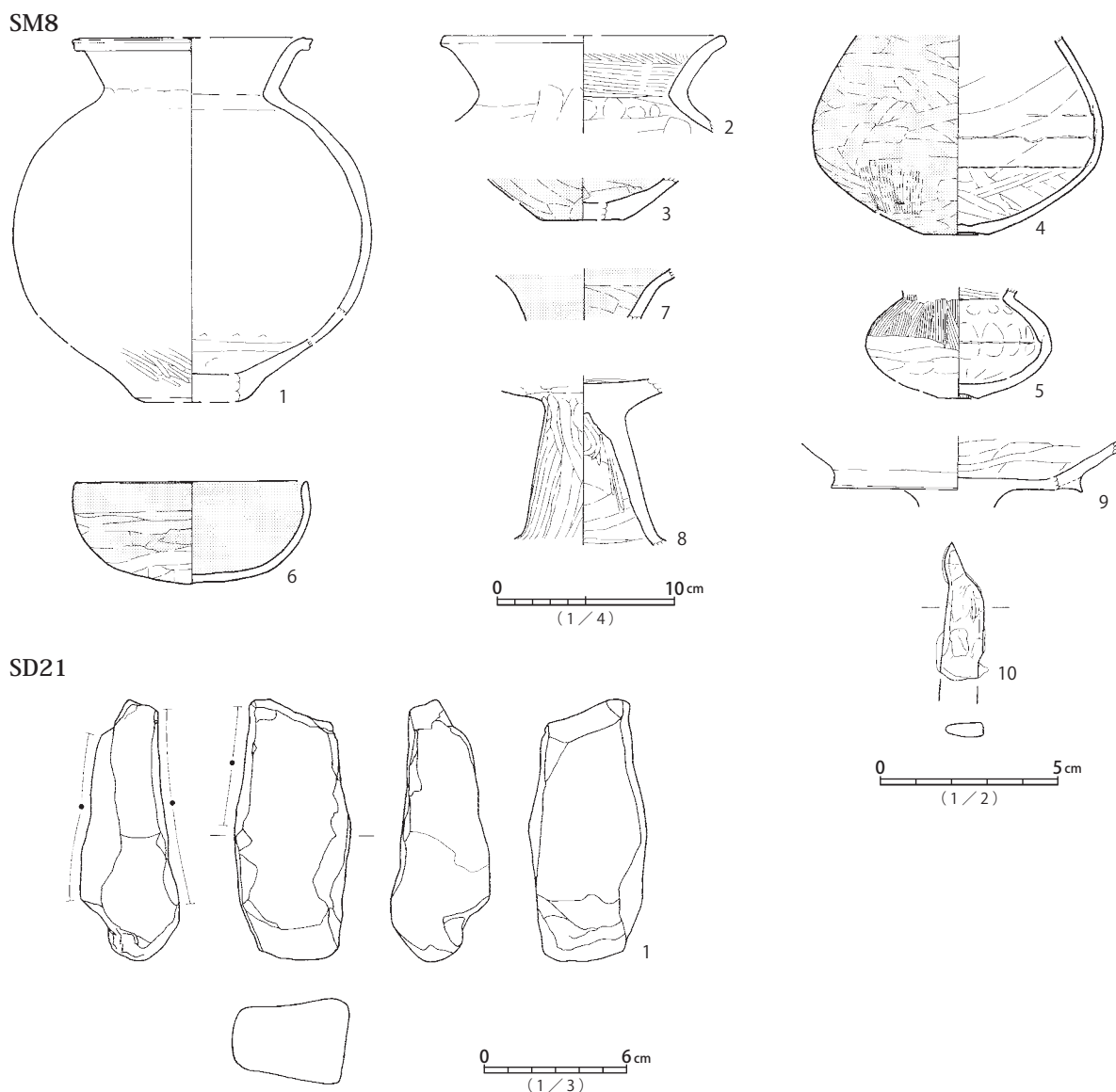


Fig.54 SM8、SD21 遺物実測図

本古墳の墳丘盛土は確認していない。周溝幅はやや安定していないように見える。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルについては目立った傾斜は存在しない。周溝の断面形はレンズ状を呈するが、僅かに墳丘側法面の傾斜が緩く、外側法面の傾斜がより強くなっている。ただし、法面から底面にかけての変換点は明瞭ではない。主体部や周溝内土壌など埋葬施設は確認していない。

出土遺物は、SI6と重複する周辺の周溝覆土下層から集中して出土している。1から3は土師器甕形土器、4、5、7は土師器壺形土器、6は土師器坏形土器、8、9は土師器高坏形土器である。この内1は壺形土器としたほうが適切かもしれない。7は二重口縁壺の可能性がある。10は鉄製の刀子としたが、刃部は不明瞭であり確定的ではない。

帰属時期は、5b新期と考えられる。

SD21はT12-47付近に位置する。南側でSD20、SM8と重複し、土層断面図から、先後関係はSM8→SD21→SD20と判断した。

平面的には直線的に東西方向に伸びるとみられるが、検出範囲が狭小であるため確定的ではない。断面形状は、下部では隅丸の逆台形を呈するが、上部では法面がムクリ状になる。

出土遺物は、覆土中から出土しており、1が砂岩製の砥石である。

SM9 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.55～57)

SM9はU11-60付近に位置し、遺構の半分以上は調査区外に広がる。北東側にはSI10、SD24、SM11が近接し、SI7a～c、SI8、SI9、SK10、SD23、SM10と重複する。先後関係は土層断面図から、SI8→SM9では明瞭だが、それ以外は判然としない。ここでは現場所見から本遺構はSI7a～c、SI9に対し後出すると判断した。また、SM10との先後関係は、断面図上では判断が難しい。位置関係から判断して本遺構がSM10に対して先行するとしておく。

墳形は円墳と考えられる。周溝南西側と北東側で他遺構と重複する関係からか、平面プランが不自然に褶曲したように見える。周溝幅は南西側が他に比べて幅狭となる。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは目立った傾斜は存在しないが、北東側で2箇所深くなる範囲があり、周溝内土壌とみられる。周溝の断面形はレンズ状を呈するが、法面は墳丘側で傾斜が強く、外側で緩くなる傾向が伺える。また、底面から法面へは明瞭な変換点を認められない。墳丘内に埋葬施設は確認できないが、周溝内土壌が存在する。明確なものは周溝北東側のSK10付近(E-E'、F-F')である。土層断面図から、周溝が1/3程度埋まってから掘削されていることが判る。棺の痕跡や、人骨は確認できないが底面付近に焼土範囲が認められる。他にもこの周溝内土壌の南側で周溝が深くなる範囲があり、その範囲に重なるように焼土が認められており、周溝内土壌である可能性が認められる。こうした周溝範囲に対するはたらきかけの痕跡は他にもあり、SK10周辺とSI7a～c周辺の周溝の褶曲したような範囲で、現場所見では、土層による明瞭な切合状況は確認されておらず、古墳増築後の近い時期にこうした行為が行われた可能性がある。

出土遺物は、周溝の北東側、東側、南西側に集中しており、東側のC-C'断面付近では周溝底付近から出土しているが、それ以外は覆土中層付近からの出土となっている。1、5、6は土師器壺形土器、2は土師器坏形土器、3、4は土師器甕形土器、7は土師器鉢形土器、8から21は土師器高坏形土器、22は須恵器埴瓶、23から35は弥生土器壺形土器、36、37が土錘、38が蛇紋岩製小玉、40が鉄鏃である。

41から69は埴輪である(Fig.114、115)。埴輪は円筒埴輪の小片が主体であるが、42の黒斑のある朝顔形埴輪のように、接合可能な個体や、櫛描文を施した個体も少数含んでいる。出土位置は、周溝南東側のSM10と接する範囲にその集中がみられ、出土レベルは覆土下層から中層に至っている。

帰属時期は、5b期とするが遡る可能性がある。周溝内への追葬、もしくは祭祀は6世紀後半まで認められる。

SM10 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.55～57)

SM10はU12-03付近に位置する。遺構の半分以上は調査区外に広がる。北東側にはSI10、SD24、SM11が近接し、SK9、SD20、SM9と重複する。先後関係はSM9→SM10と判断したが、確定的ではない。SD20に対しては本遺構が先行するとみられる。

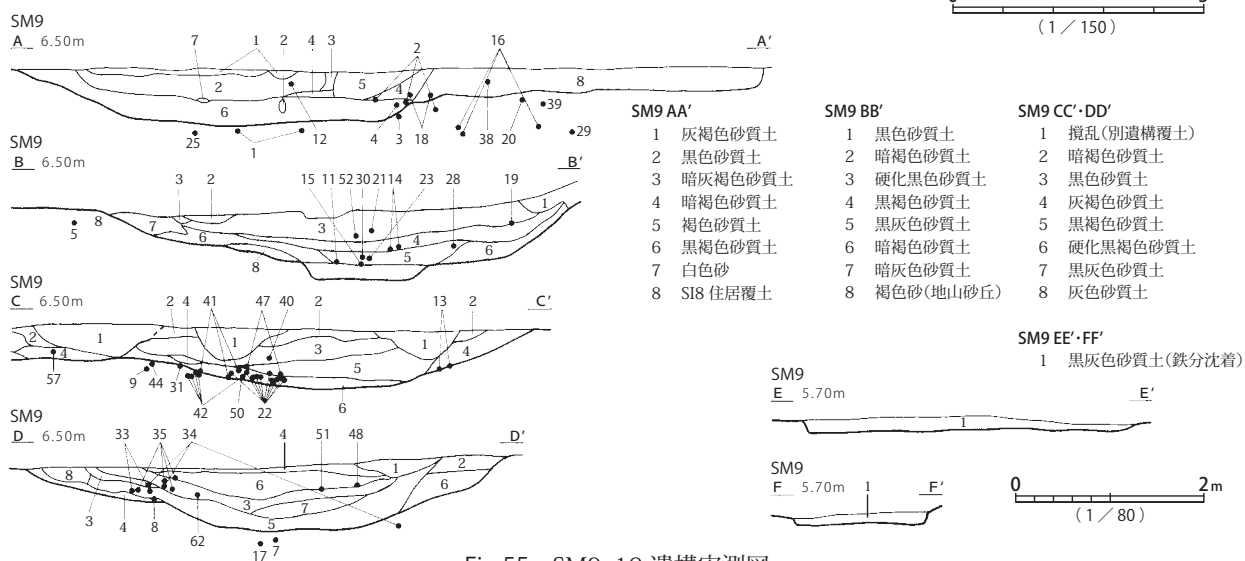
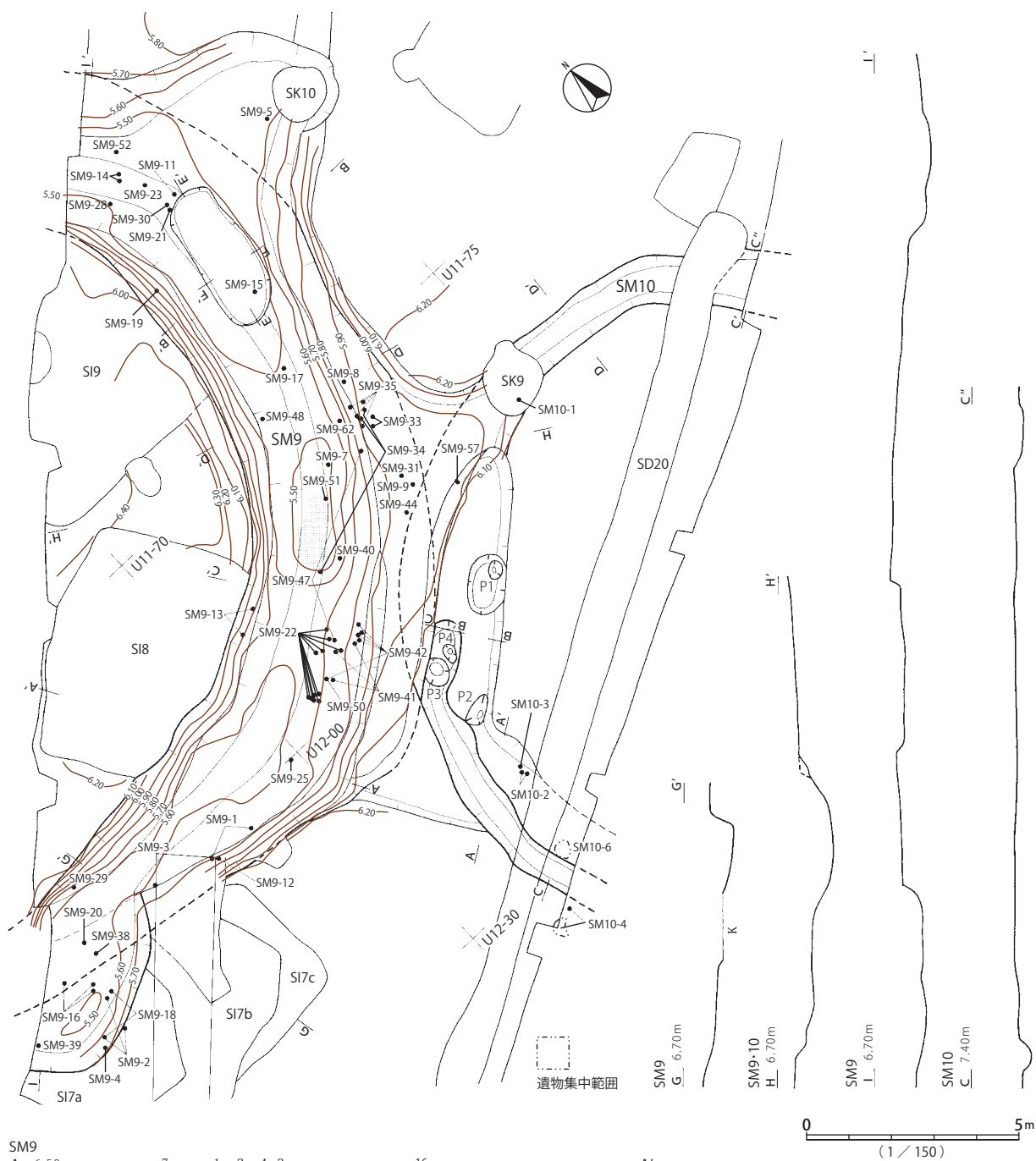


Fig.55 SM9、10 遺構実測図

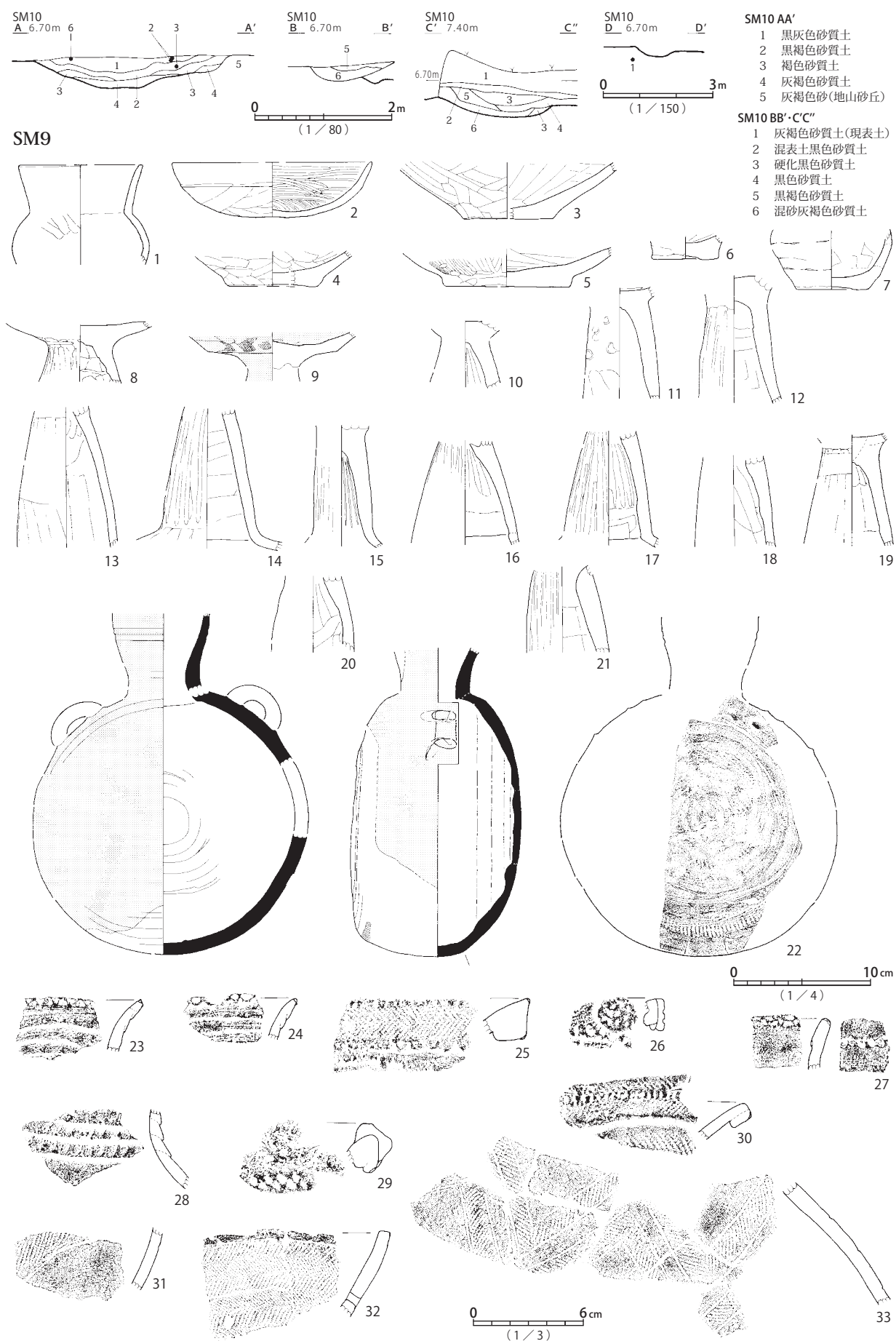


Fig.56 SM10 遺構・SM9 遺物実測図

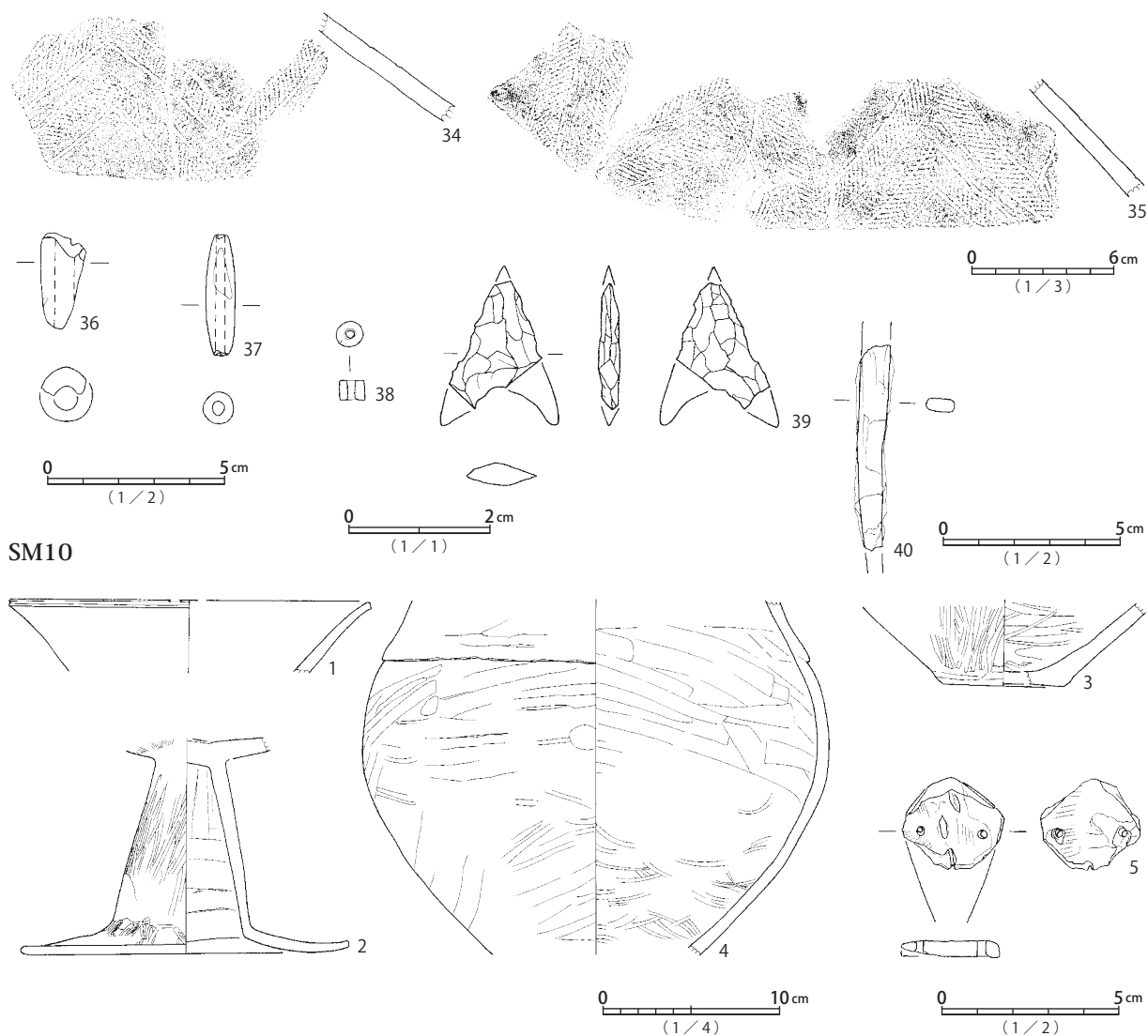


Fig.57 SM9、10 遺物実測図

墳形は円墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。周溝幅はほぼ均等に安定しており、総じて幅狭である。しかし、検出した周溝の中央部が墳丘側に入り込んでいるように見え、これが本来の周溝であるか判断が難しい。この部分の土層断面図ではSM9周溝を掘り込んでおり、SM9→SM10との理解からは矛盾はないが、SM10本来の周溝であるかは判断できない。ここでは平面形を鑑みて、古墳の先後関係とは別に、SM10周溝内に、時期を大きく開けずに後出する溝状の掘り込みがあったと理解しておく。周溝底面の幅は周溝上端ラインに連動して安定している。周溝底面の水平レベルは、等高線図が無いので判り難いが、土層断面図を見ると東側が高く、西にかけて傾斜しているようにみえる。周溝の断面形はレンズ状に近く、底面と法面の明瞭な変換点は確認できない。墳丘内における埋葬施設や、周溝内土壌などの埋葬施設は確認していない。

出土遺物は、周溝覆土中位より上で出土しているが、総じて少量である。1、2は土師器高坏形土器、3、4は土師器甕形土器、5は滑石製の有孔円盤である。6から8は円筒埴輪で、6は接合個体で、7、8は櫛描文が施されている埴輪小片である (Fig.116)。出土位置は周溝南西側とみられる。

帰属時期は、5b 古期としておく。

SM11 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.59)

SM11はV11-14付近に位置する。遺構の半分以上は調査区外に広がる。SD23からSD25と重複する。西側にSI10、北側にSI11が近接するが重複関係にはない。西側にSM9、SM10が近接し、やや離れて東側にSM12が位置する。先後関係は、本遺構がSD24、SD25に対し先行することが土層断面図から判る。SD23については周溝北側を直進するものとみられるが、周溝土層断面図には現れていない。この点のみ見れば本遺構より先行するようであるが、確定的ではない。SD24については周溝外縁に沿うように位置するという特徴がある。

墳形は円墳と考えられる。墳丘盛土はE-E'によれば残存しているように見える。現状で確認できる周溝の平面形は半円形で、周溝幅は南西側に比べ東側では極端に狭くなっている。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図を見る限り北西側の一部が、他に比べ0.6から0.7mほど深くなっている。この範囲においては周溝内土壌の存在を疑うべきだが、土層断面図を見る限りその根拠となる状況は見出せない。

周溝の断面形はレンズ状を呈する。周溝の法面の傾斜は、墳丘側がその外側に対し強くなっているようにみえるが、顕著ではない。周溝底から法面への変換点も明瞭ではない。墳丘内における埋葬施設や、先に可能性に触れた周溝内土壌等は確認していない。

出土遺物は、周溝西側のSD24と接し、P1、P2としたピットが位置する範囲に集中が認められる。出土レベルは周溝覆土下層から上層に至るまで偏り無く出土している。1から5は土師器甕形土器、6から16、18は土師器壺形土器、17は土師器坏形土器、19、20は土師器鉢形土器、21から35は土師器高坏形土器、36は土師器器台形土器、38は須恵器甕、39は土製紡錘車紡輪部、40は土錘、41は粘板岩製の剣形石製模造品、42は砂質泥岩製の磨石、43、44は不明鉄製品である。

帰属時期は、5b 古期としておく。

SM12 セ377山新遺跡第3地点2次、セ489山新遺跡第8地点、セ502山新遺跡第9地点 (Fig.60～62)

SM12はW09-66付近に位置し、3つの調査区に渡っている。遺構の北西側と南東側の一部が調査区外となる。SD28からSD30、SI12からSI14、SK11と重複し、やや離れて北東側にSI15、SK12からSK16、南東側にSD25からSD27、SI11、SM11が位置する。

先後関係では、土層断面図から本遺構はSI12に対して後出する。その他の遺構については、図面上では判然としない。

墳形は円墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。現状で確認できる周溝は平面形が円形で、北西側、南東側で調査区外となる。周溝幅は一定ではなく、特に南東側で急激に幅狭となる。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図によると目立った傾斜は看取できない。周溝の断面形は拡張A、Bの断面では逆台形を呈するが、その他はレンズ状に近い。墳丘内での埋葬施設や、周溝内土壌などの埋葬施設は確認していない。

出土遺物は、古墳の北側、南西側、南側からある程度のまとまりをもって出土している。出土レベ

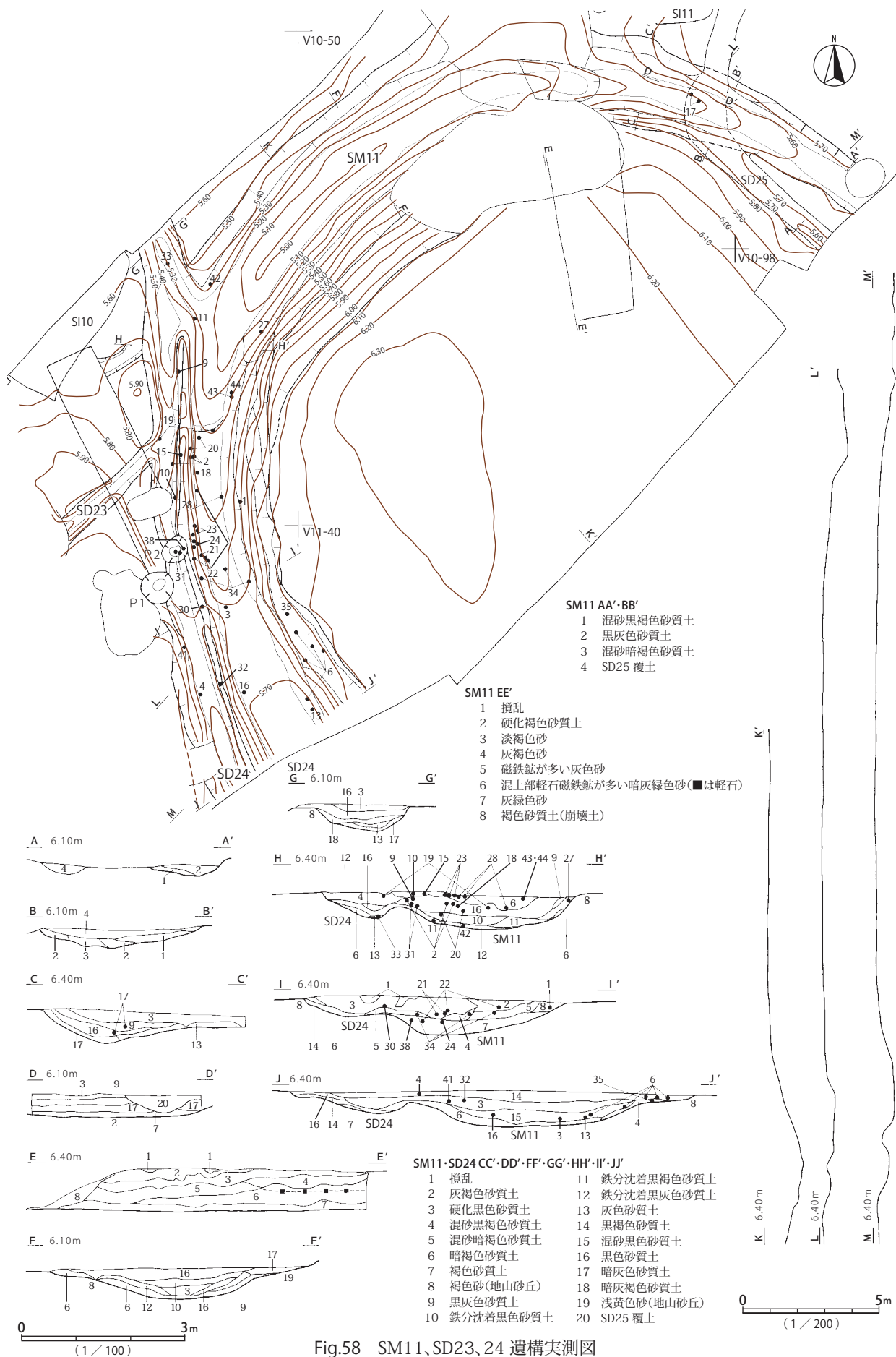


Fig.58 SM11、SD23、24 遺構実測図

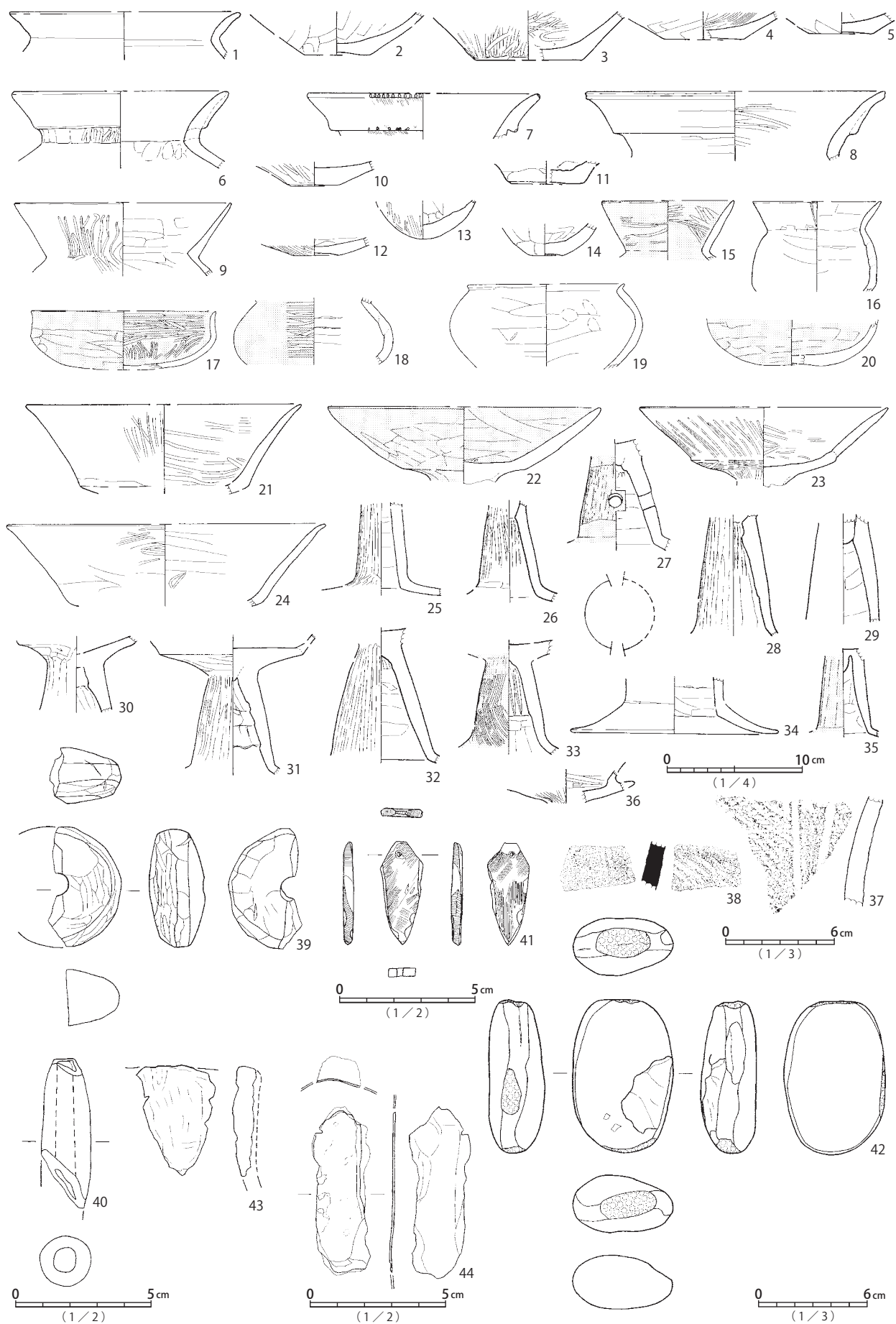
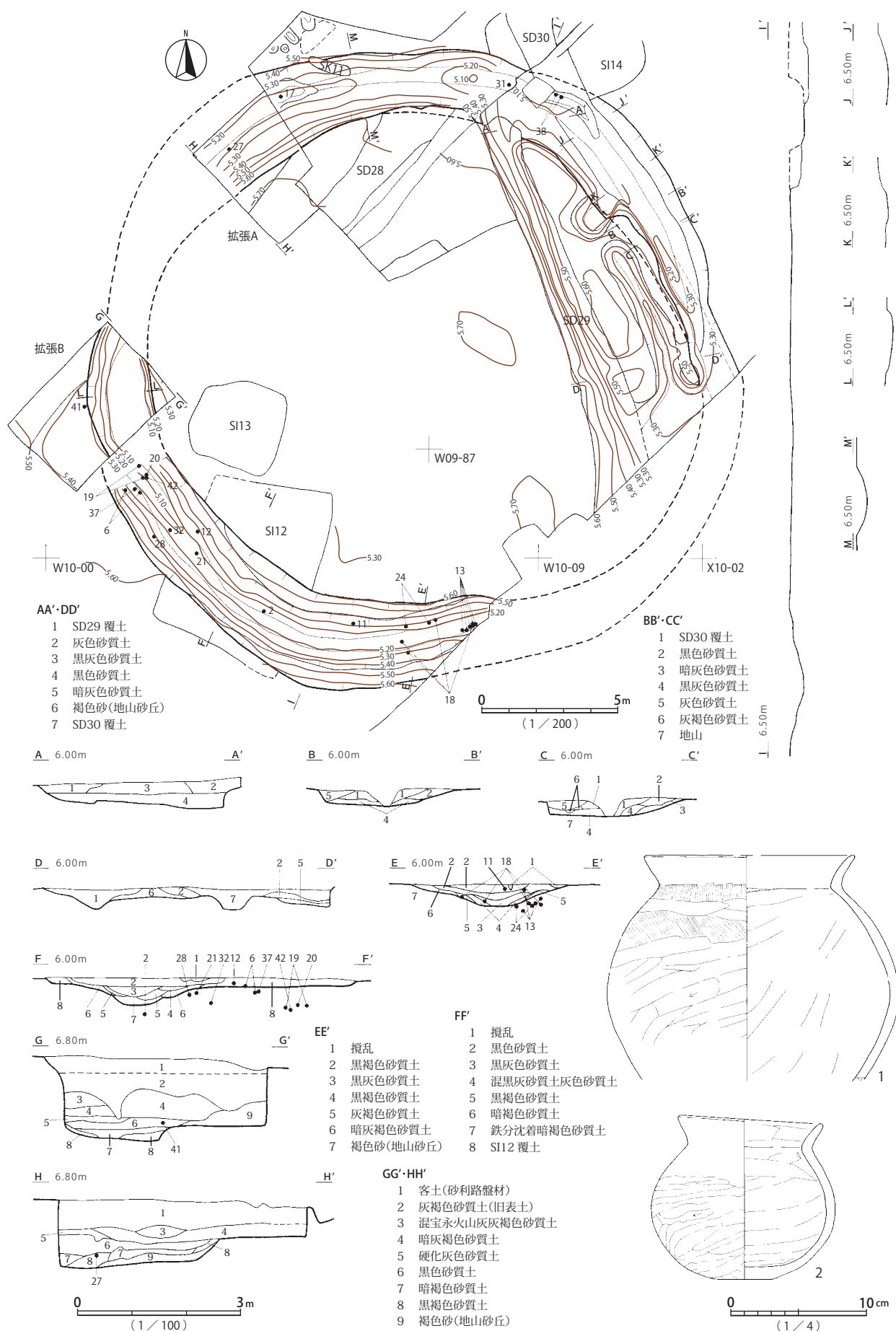


Fig.59 SM11 遺物実測図



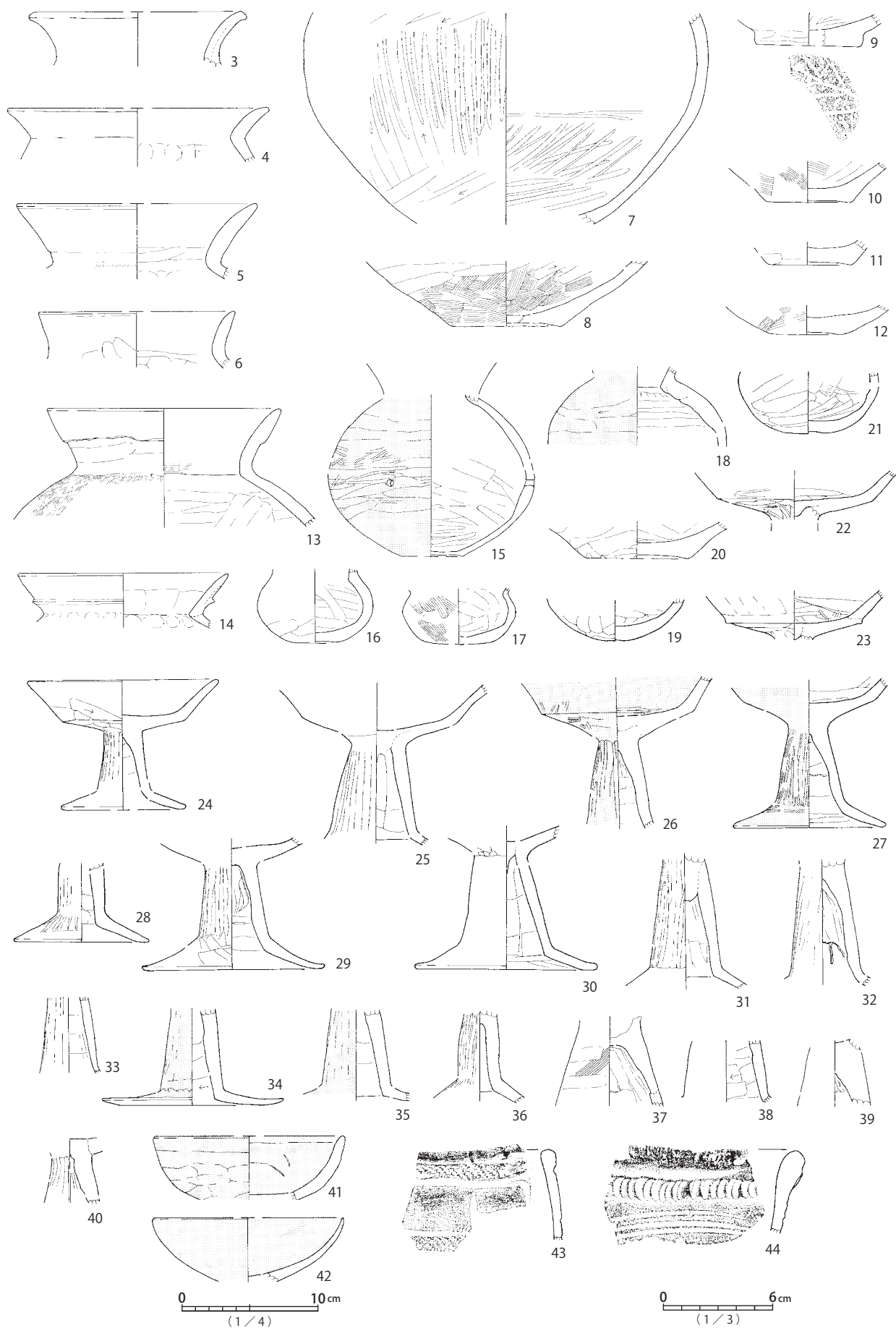


Fig.61 SM12 遺物実測図

ルは周溝覆土中位より下層からの出土が多い傾向がある。1、2、4、6から8、10から12は土師器甕形土器、3、5、9、13から21は土師器壺形土器、22から40、42は土師器高坏形土器、41は土師器坏形土器、51、52は手捏ね土器、53、54は把手状の土製品である。

帰属時期は、5b新期と考えられる。

SM13 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.62・64)

SM13はY08-41付近に位置する。南東側が調査区外となっている。SD30、SD32、SK20、SK21、SX6と重複する。北西側でSI18と重複している可能性がある。やや離れて北側にSI19、西側にSI16が位置し、北東側にSM14が近接する。先後関係はSX6に対して後出すること以外は、図面上いずれも判然としない。

墳形は方墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。現状で確認できる周溝は、北西隅と南東隅周辺を欠いている。平面形は方形を呈するが、隅丸で、この範囲のみ周溝幅が極端に狭くなる。周溝幅は隅以外では均等で、安定しているように見える。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図が無いので判り難いが、土層断面図を見ると、目立った傾斜は存在しない。ただし、東側周溝においては、周溝底を掘り込むような狭小の土坑が存在する。周溝の断面形は逆台形に見えるが、レンズ状に近く、底面から法面への変換点が不明瞭な部分がある。墳丘部と周溝内から埋葬施設とみられる遺構は確認していない。

出土遺物は、北西隅付近に若干のまとまりを見せるが、総じて少量である。出土レベルは周溝覆土中位より下で出土している傾向がある。1、2は土師器甕形土器、3は土師器壺形土器、4、5は土師器高坏形土器である。3の壺形土器は突帯状の頸部を持つ特徴的な形状を呈する。

本遺構の帰属時期は、4c期とするが、次段階となる可能性を含む。

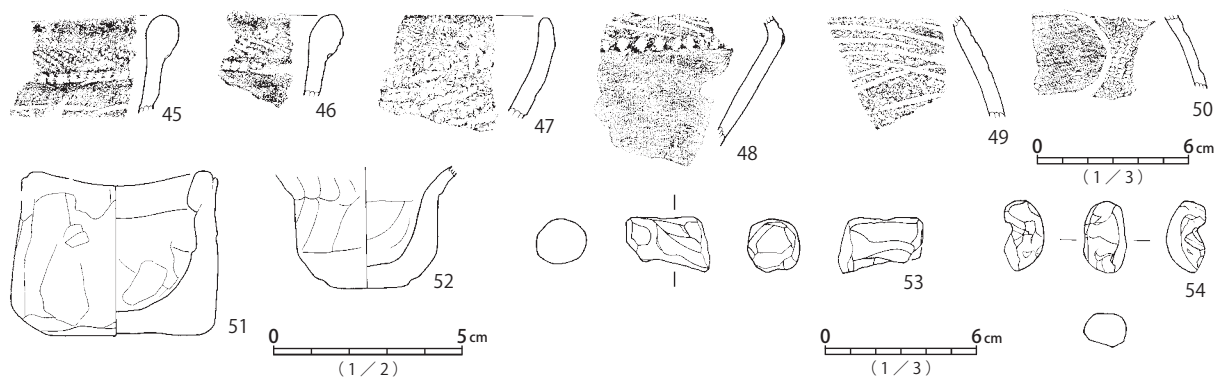
SX6はSM13南側の周溝内側方台部に位置する不明遺跡である。明確な掘り込みをもち、一部の検出ではあるが、平面形隅丸方形を想定可能である。遺物はなく、付属施設も認められないため不確実ではあるが、堅穴住居跡である可能性もある。帰属時期は不明である。

SM14 セ377山新遺跡第3地点2次、セ489山新遺跡第8地点、セ502山新遺跡第9地点

(Fig.63～66)

SM14はY07-55付近に、3つの調査区に渡って位置する。遺構の半分以上が調査区外に広がると見られる。SI20、SI21、SI22、SI31、SD30、SD31、SD33からSD35、SK22からSK26、SX3と重複する。南側にSM13、東側にSM15が近接する。先後関係は、SK22、SX3に対して本遺構が先行することが土層断面図上で確認できる。溝を除くそれ以外の遺構はいずれも判然としないものの、現場所見から、本遺構に対し先行するとみられる。

墳形は円墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。現状で確認できる周溝は断片的ではあるが、復元すると北東側でややひしゃげている円形となる。周溝幅は南西部のみで知り得るが、極端に異なるように見えるのは、調査区間の遺構確認面の違いで生じた検出幅の違いとみられる。周溝底面の水平レベルは、等高線図が無いので判り難いが、土層断面図を見ると、目立った傾斜は存在しない。周



SM13・SX6

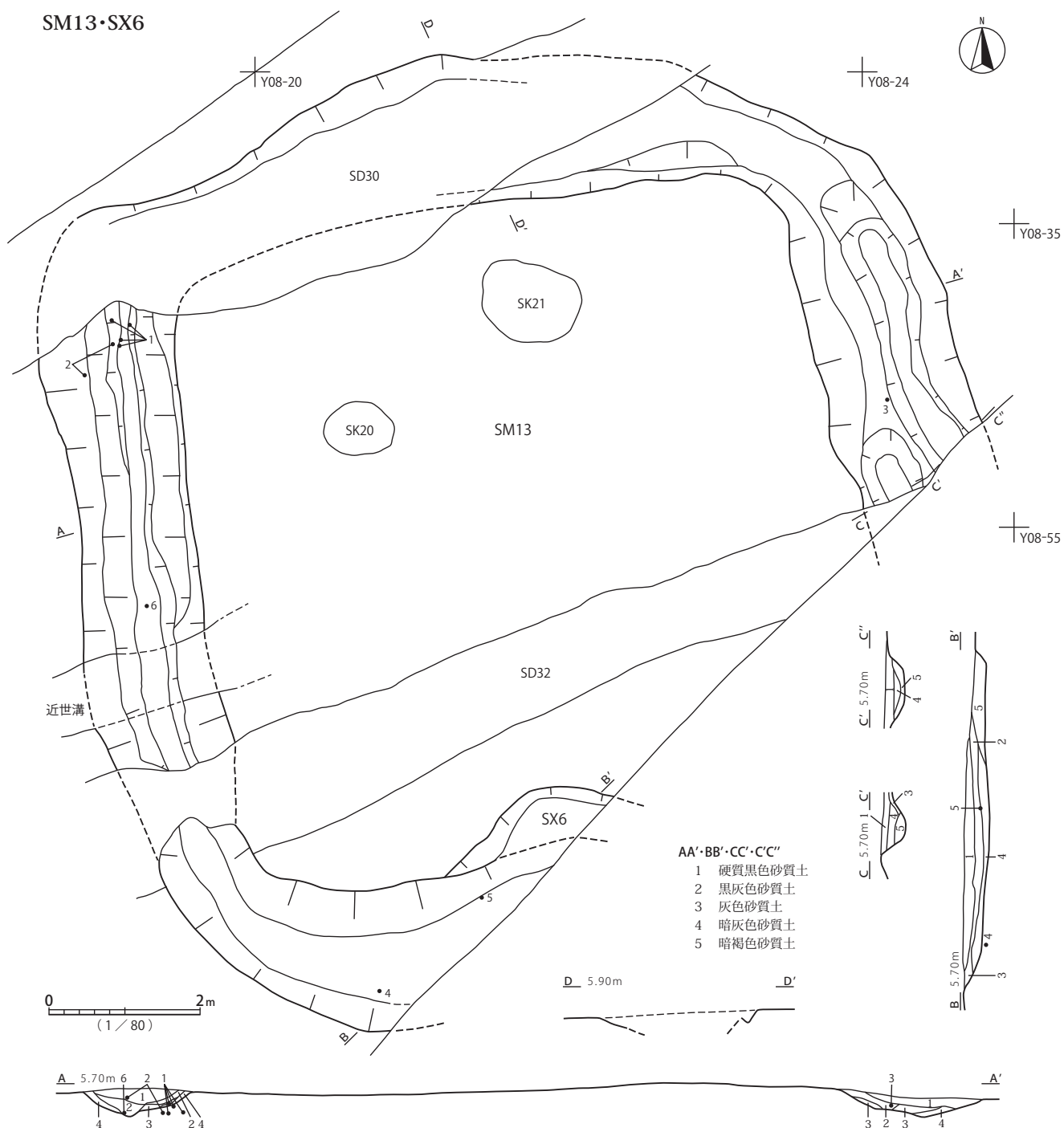
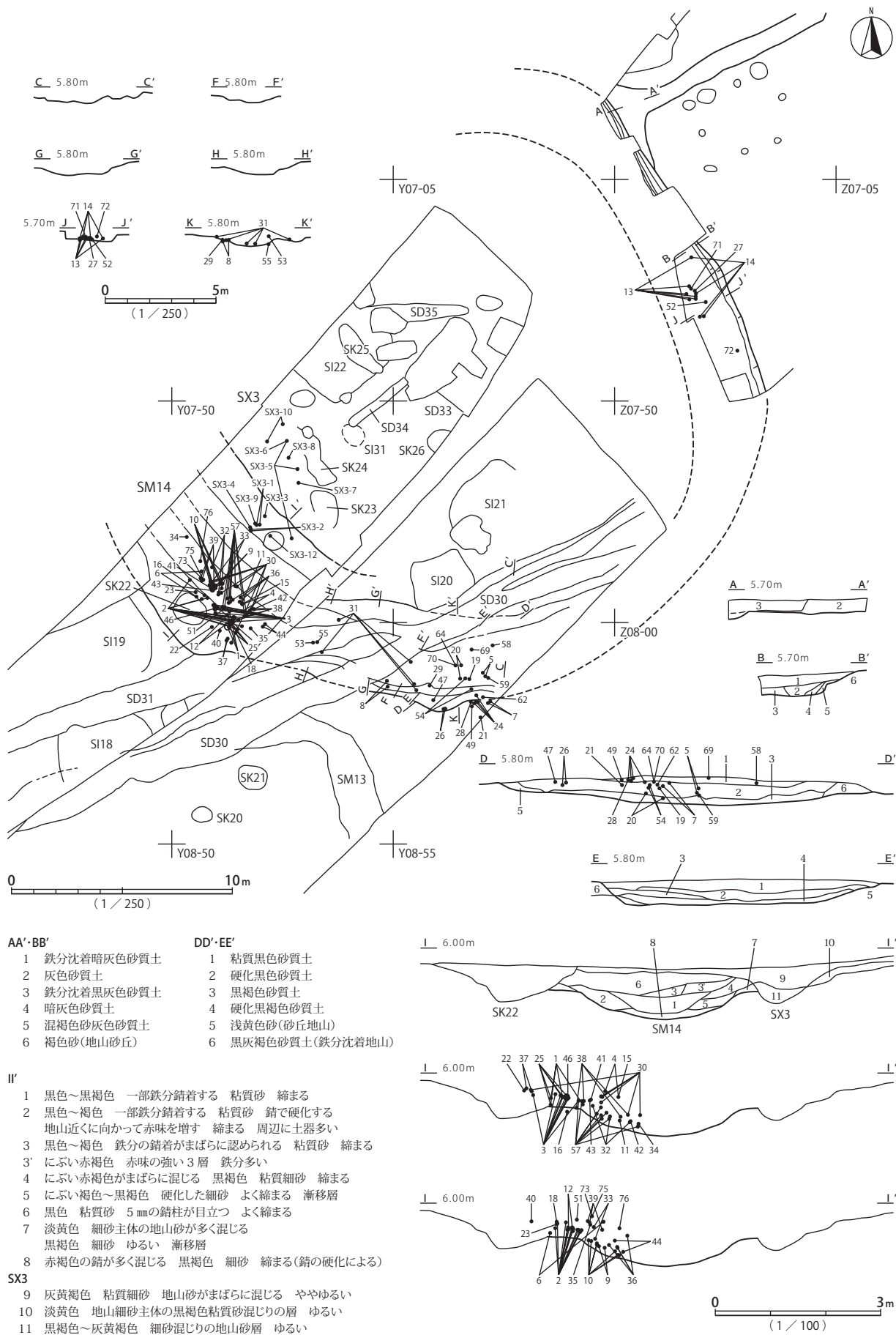
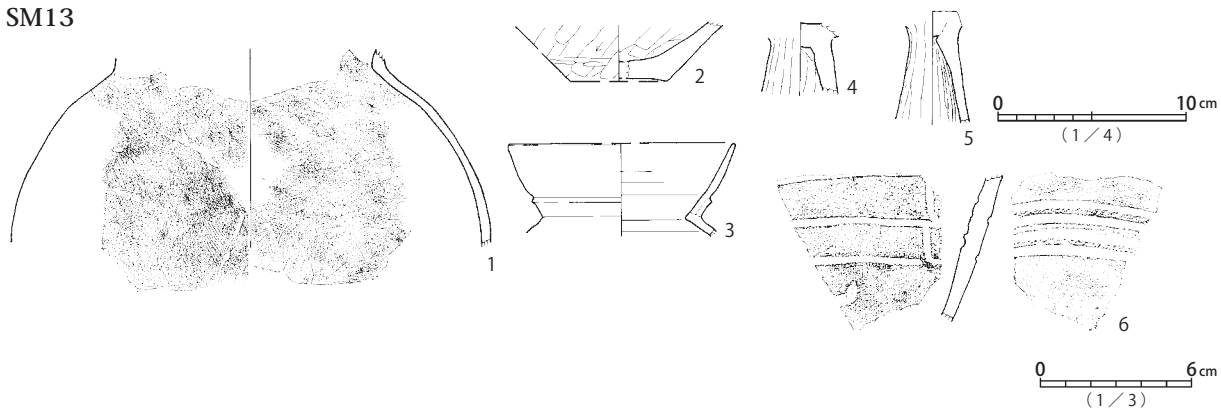


Fig.62 SM13, SX6 遺構・SM12 遺物実測図



SM13



SM14

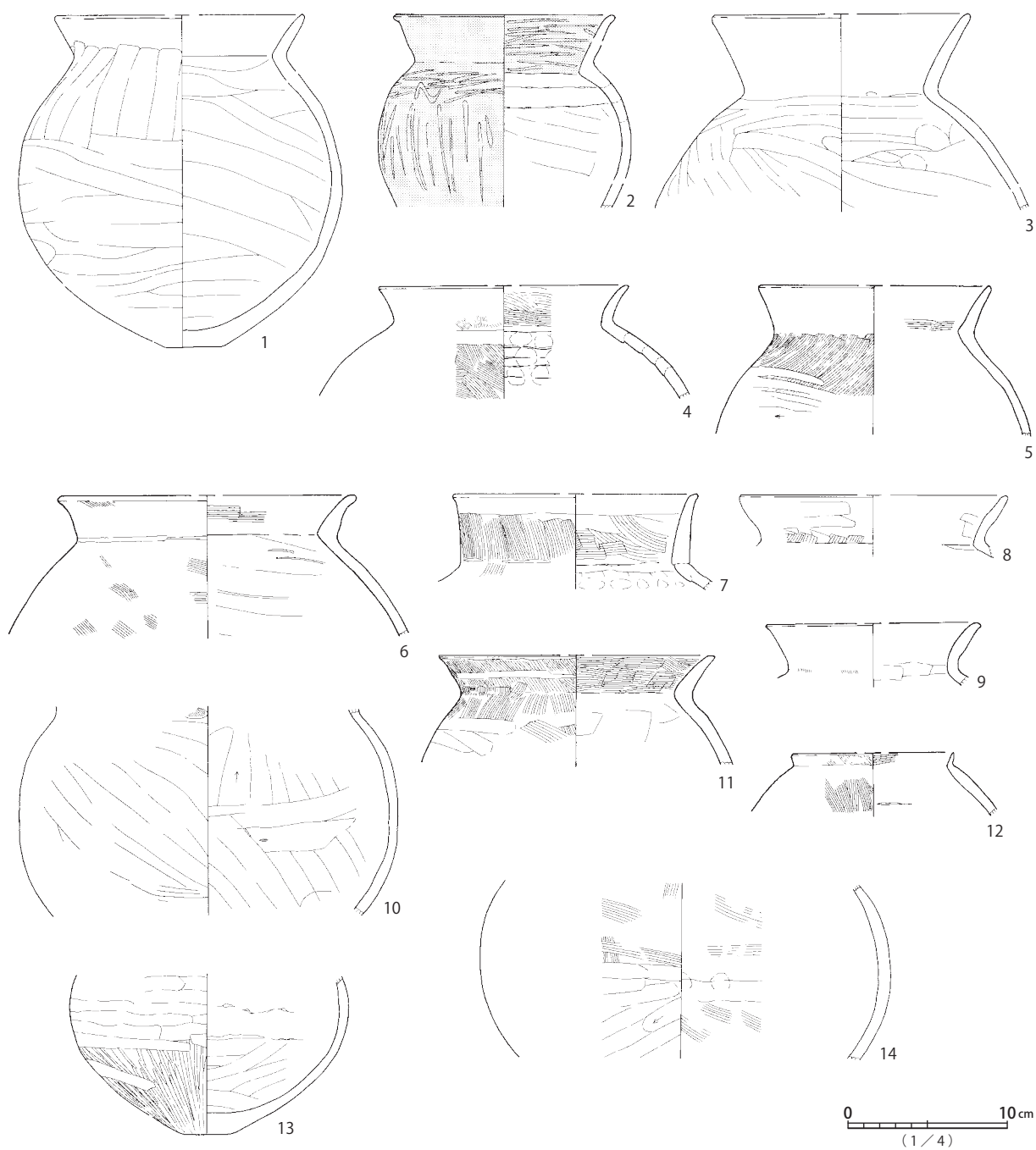


Fig.64 SM13、14 遺物実測図

溝の断面形は一部E-E'で逆台形を呈するが、その他はレンズ状を呈する。墳丘内での埋葬施設や周溝内土壌などは確認していない。

出土遺物は、3箇所集中する。特にI-I'周辺では多くの遺物が集中して出土している。出土レベルは周溝外側法面直上から周溝外縁部覆土上層に至る。南側での集中地点もやはり周溝外側法面から外縁部にかけてである。出土レベルは周溝覆土中位より下である。1、3から12、14から22は土師器甕形土器、2、13、23から29は土師器壺形土器、30から55は土師器高坏形土器、56は土師器甕形土器の転用甕か、57は土師器甕形土器、58から70は土錘、71は穿孔痕のある不明土製品、72は流紋岩製砥石、73、75は鋳留め痕のある鉄製品、74は鉄鏃とみられる。

帰属時期は、5a期と考えられる。

SX3はY07-72付近のSM14墳丘部南西端に位置する。西側にはSM14周溝が、東側にはSK23、SK24が近接する。近接するSM14周溝の外側法面付近には古墳に伴う遺物の集中地点が検出されている。調査当初は周溝内側法面に位置する落ち込みとして認識されていたが、周囲に遺物が散在するため、その範囲を含めて不明遺構として報告する。

本遺構はSM14周溝の墳丘側法面に連続する傾斜面を中心に位置するが、直径1m程の土坑状の落ち込み以外は明瞭な遺構プランは確認していない。

出土遺物は、土坑状の落ち込みに集中して出土している。1は土師器甕形土器、2から4は土師器壺形土器、5から10は土師器高坏形土器、11は筒型の用途不明土製品である。

帰属時期は、4期と考えられる。

SM15 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.67)

SM15はZ06-97付近に位置する。遺構の一部が検出されたのみで、その殆どは南東側の調査区外に広がるものとみられる。重複する遺構は無く、周溝西側の外縁付近にSK27からSK29が近接する。北側にやや離れてSB3や単独の土壌であるSK30が位置し、東側にはSI23が近接する。

遺構の一部の検出に留まっているため、墳形は断定できないが、周辺古墳の墳形を参考に円墳としておく。墳丘盛土は確認していない。現状で確認できる周溝の平面形は円弧状で、周溝幅は均等で安定している。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図を見ても目立った傾斜は存在しない。周溝の断面形はA-A'で左右非対称の逆台形を呈するが、その他はレンズ状に近い。墳丘は一部を検出したが、盛土は無く特筆するものは認められない。墳丘内において埋葬施設は確認していない。周溝内土壌も認められない。

出土遺物は、少量で散漫な分布を示す。1から3は土師器甕形土器、4、5は土師器高坏形土器、6は砂岩製の磨石である。

帰属時期は、5期と考えられる。

SM16 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.68)

SM16はA05-72付近に位置する。遺構の半分は調査区外に広がると見られるが、検出した遺構の遺存状態が良好ではなく、周溝の一部を確認したのみである。本遺構の周囲には南西側にSK34、SK30

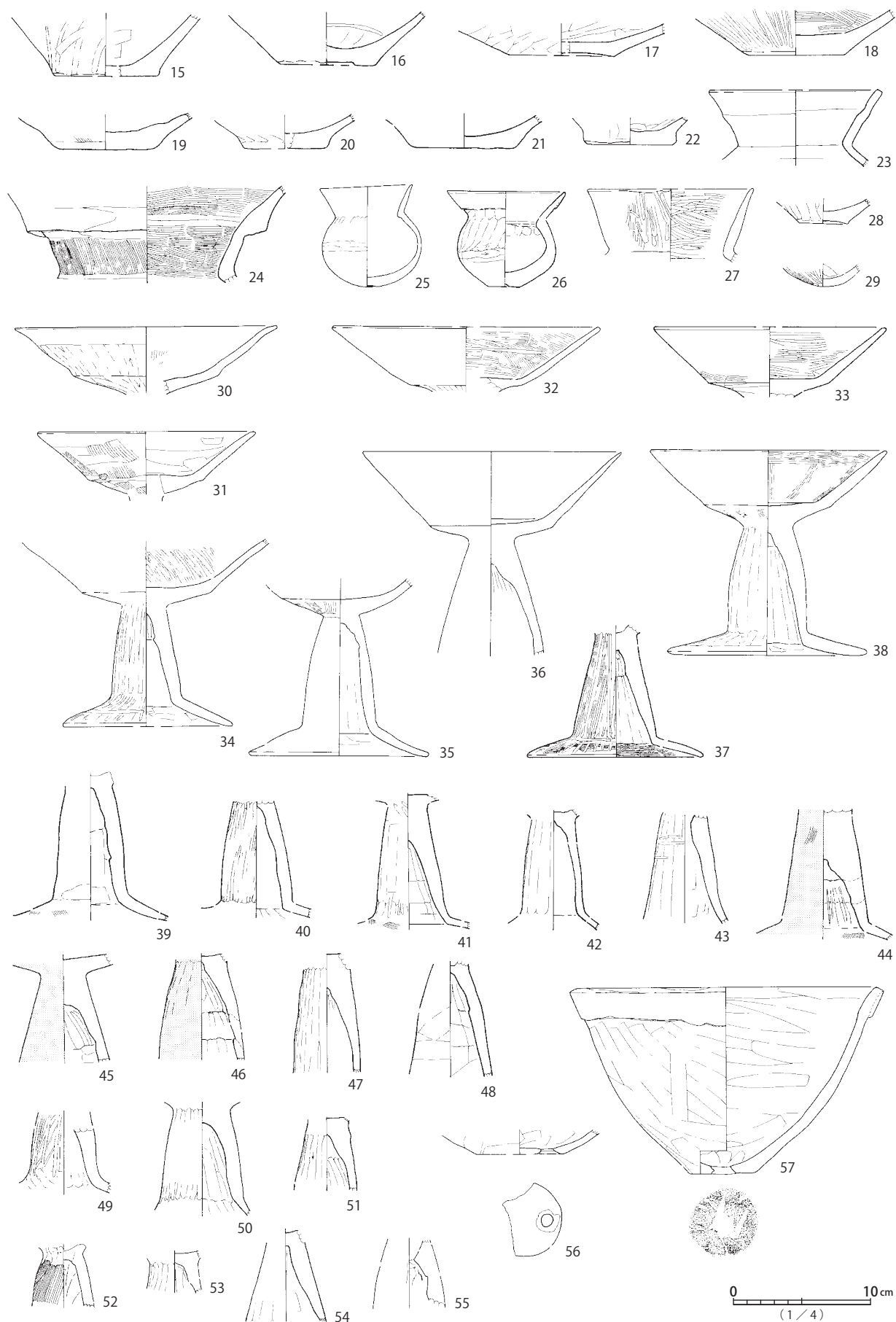
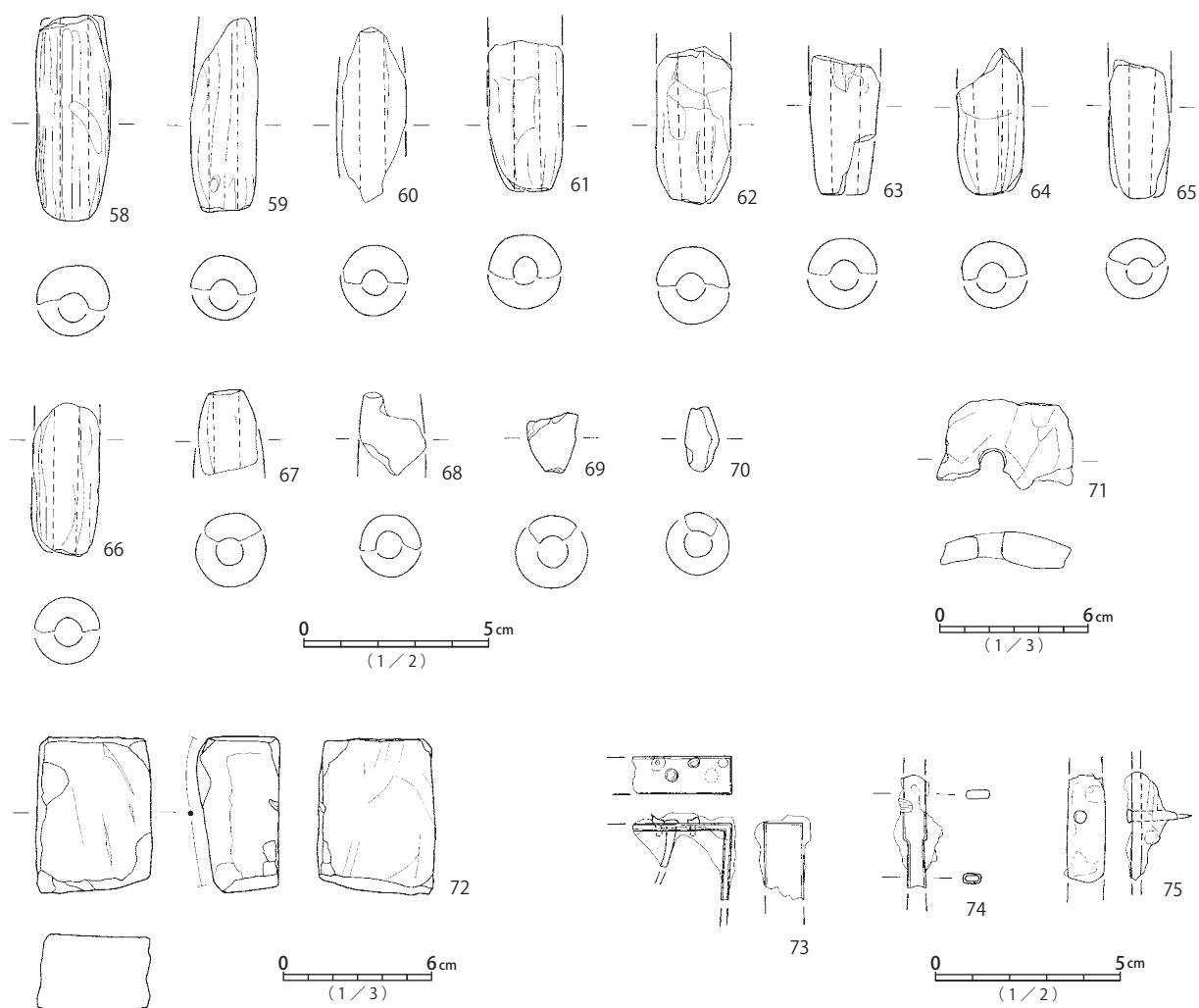


Fig.65 SM14 遺物実測図



SX3

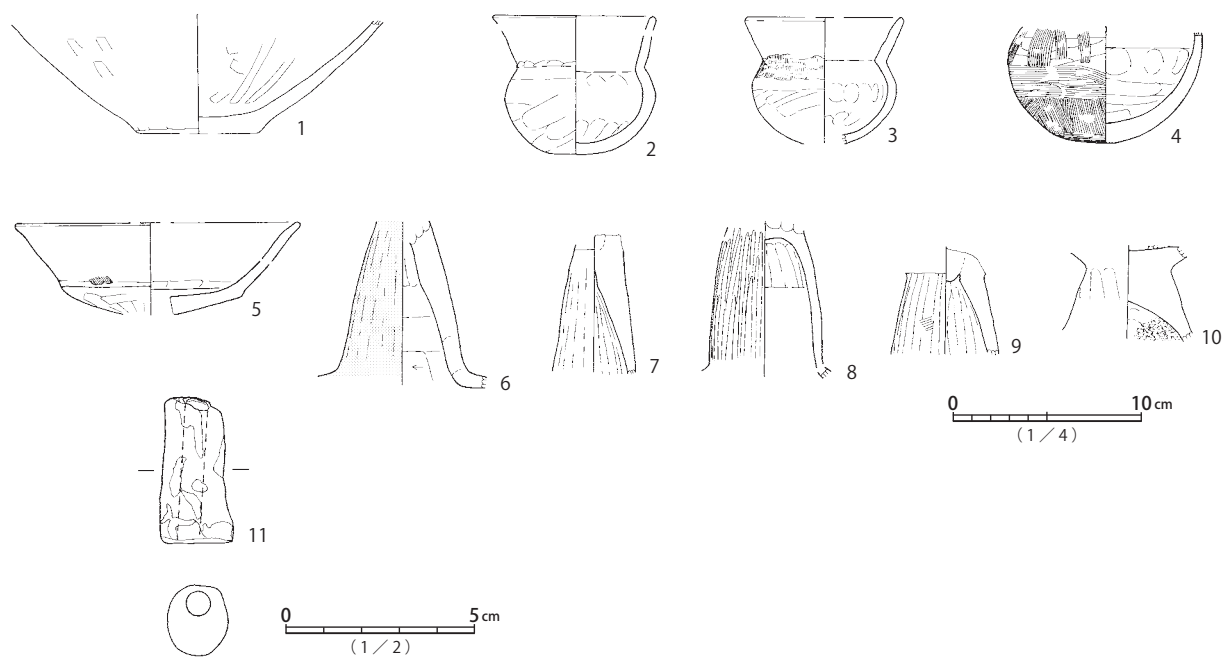


Fig.66 SM14, SX3 遺物実測図

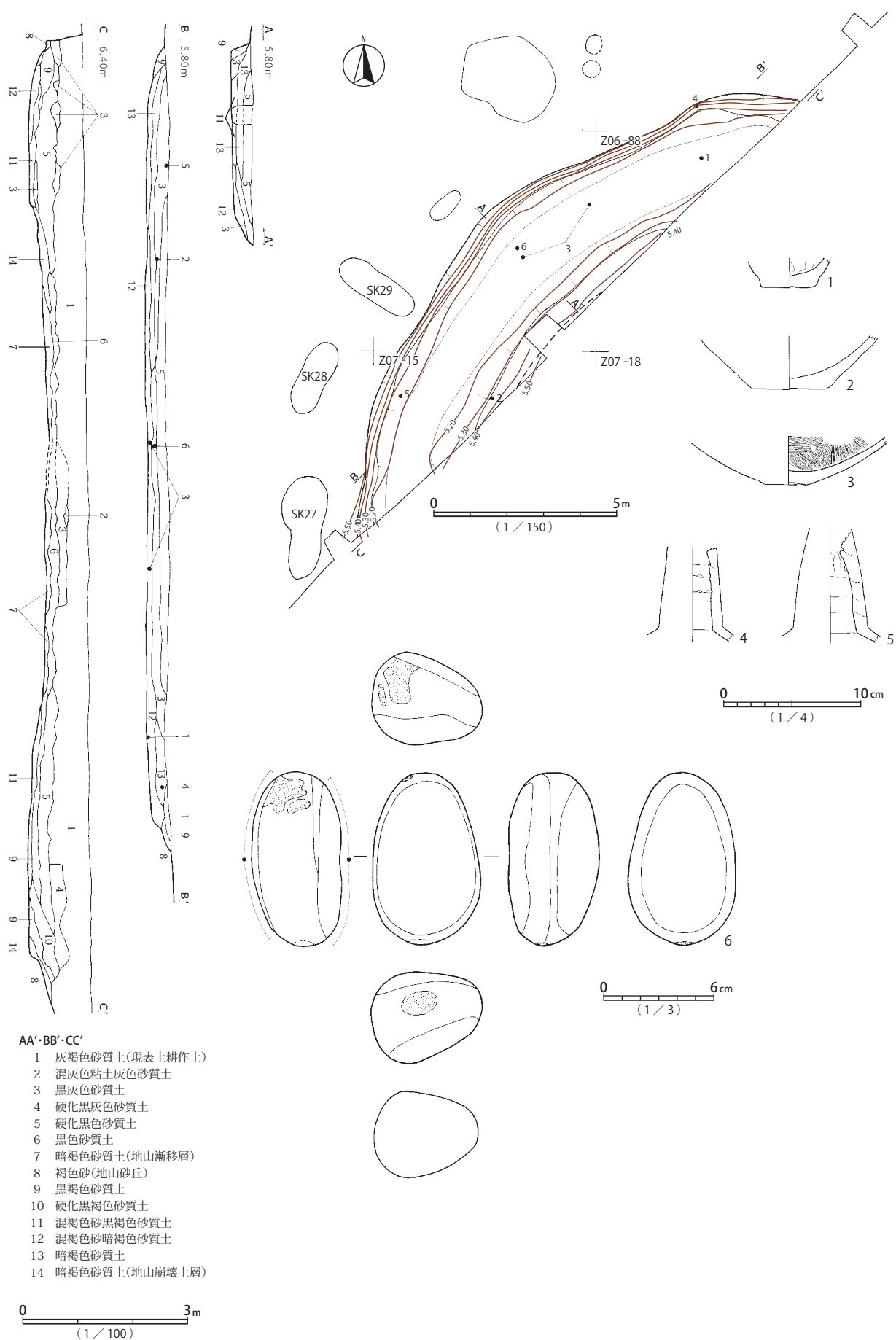


Fig.67 SM15 遺構・遺物実測図

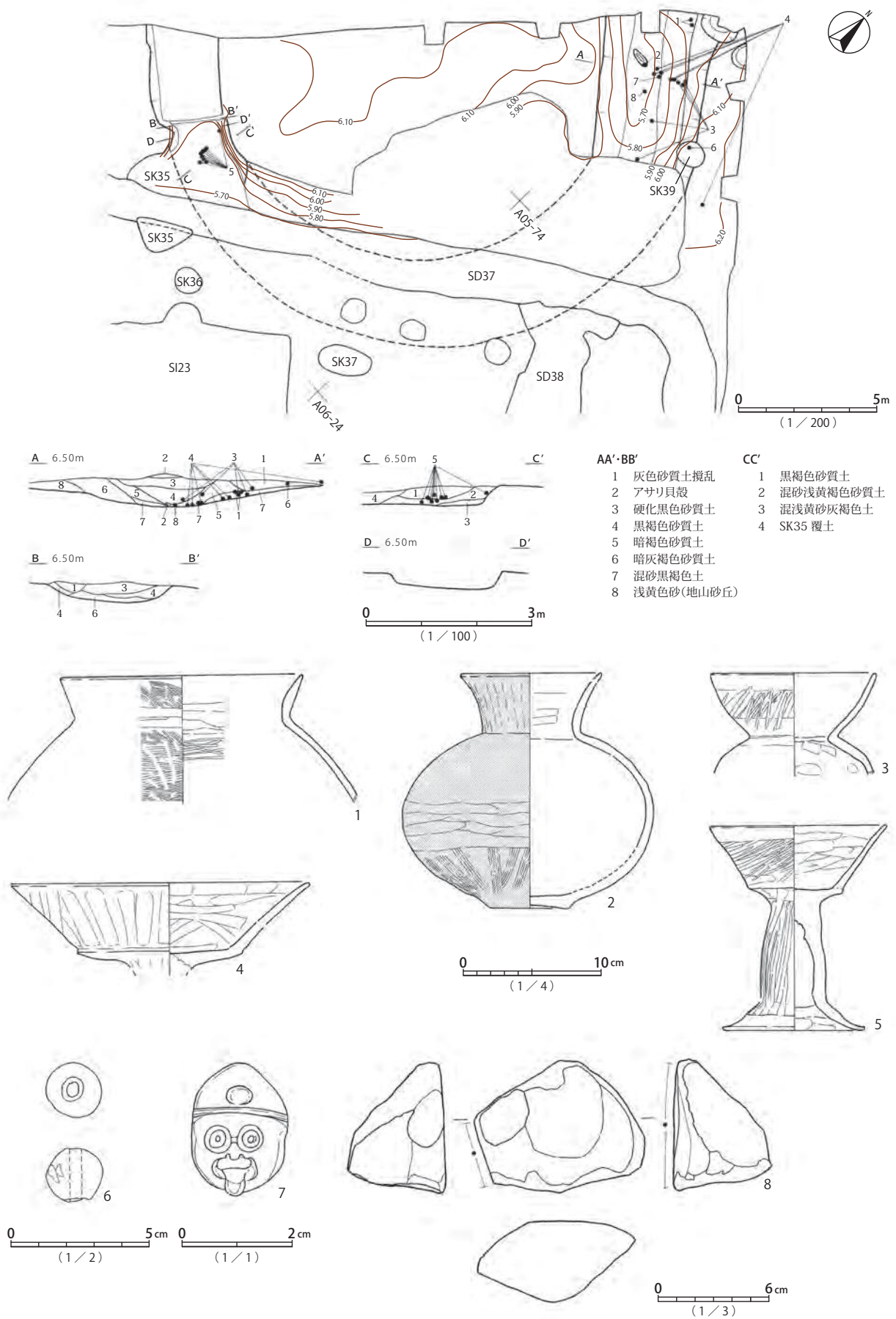


Fig.68 SM16 遺構・遺物実測図

などの単独の土壌が、南側にはSI23が、東側にはSI25が位置する。また、SK35、SD37、SD38、SK39などと重複関係にあるとみられるが、遺構の遺存状態が良くないため、その先後関係は図面上いずれも判然としない。

墳形は円墳としておく。墳丘盛土は確認していない。現状で確認できる周溝は、調査区東端にある直線的な溝と、その西側10m程のところに位置する落ち込みで、いずれも周溝と判断し、この間を補足して墳丘の直径13m程の円墳に復元している。しかし、時期的には方墳である可能性も否めない。周溝幅は東側の周溝を見る限り、安定していて、周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図を見ると、目立った傾斜は存在しない。周溝の断面形はC-C'では逆台形を呈するように想定されるが、遺存状態が良好なA-A'ではレンズ状を呈する。

埋葬施設については、墳丘、周溝内含めて確認していない。しかし、西側に位置するSK34 (Fig.12)の存在に関連した本墳の理解については注意を要する。まずこのSK34が位置する周囲は、本墳周溝外縁部西側に不自然な高まりとなっている。これを自然地形としても理解可能だが、古墳の周辺環境として、このような自然地形としての凹凸が存在することは、古墳の築造段階での「盛土をする」という行為目的においては疑問が残る。これに加え、重複するSD37は、本墳の墳丘を避けて掘られているとみられるが、西側の高まりについてもこれを避けるために線形を屈曲させている。以上から、この西側の高まりは、本墳築造後に生じた可能性が認められることになる。しかし資料の限界もあり、ここでは、本墳の墳形改変の可能性のみを記すにとどめる。

出土遺物は、周溝東側と、西側で覆土中位より下から出土している傾向がみられる。1は土師器甕形土器、2、3は土師器壺形土器、4、5は土師器高坏形土器、6は土玉、7は泥めんこ、8は玄武岩質凝灰岩の敲石である。

帰属時期は、4c期と考えられる。

SM17 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.69・116・117・118)

SM17はB05-24付近に位置するが、遺構の南半分は調査区外に広がるとみられる。西側にSM16、やや離れて北東側にSM18が位置する。本遺構はSI24、SI26と重複し、先後関係は本遺構がSI24、SI26に対して後出するとみられるが、確定的ではない。やや離れて北東側にSM18、西側にSM16が位置する。

墳形は円墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。現状で確認できる周溝は、平面形が円弧形で、周溝幅は均一で安定しているように見える。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図を見ると目立った傾斜は存在しない。周溝の断面形は漏斗形を呈する。墳丘及び周溝内に埋葬施設は確認していない。

出土遺物は、周溝東側、北西側、南西側の3箇所集中し、特に北西側の遺物量が突出している。出土レベルはいずれも周溝覆土中位より上に集中する傾向がみられる。1、2は土師器壺形土器、3から6は土師器高坏形土器、7は須恵器坏である。8から94 (Fig.116～118)は円筒埴輪で、13、14は接合復元個体で、黒斑があり、櫛描文を施文している。13は口縁部に横位の櫛描波状文、2段目に櫛描格子文を施文し、2孔1対の円形透孔が穿たれている。突帯は断面が台形を呈する。14は2段目に櫛描で円弧の組合せによる幾何学文が施文され、2孔1対の円形透孔が穿たれている。突帯の断面は、上下端部と中央が突出する三稜突帯を巡らせている。埴輪は小片が多数を占めるが、周溝北西

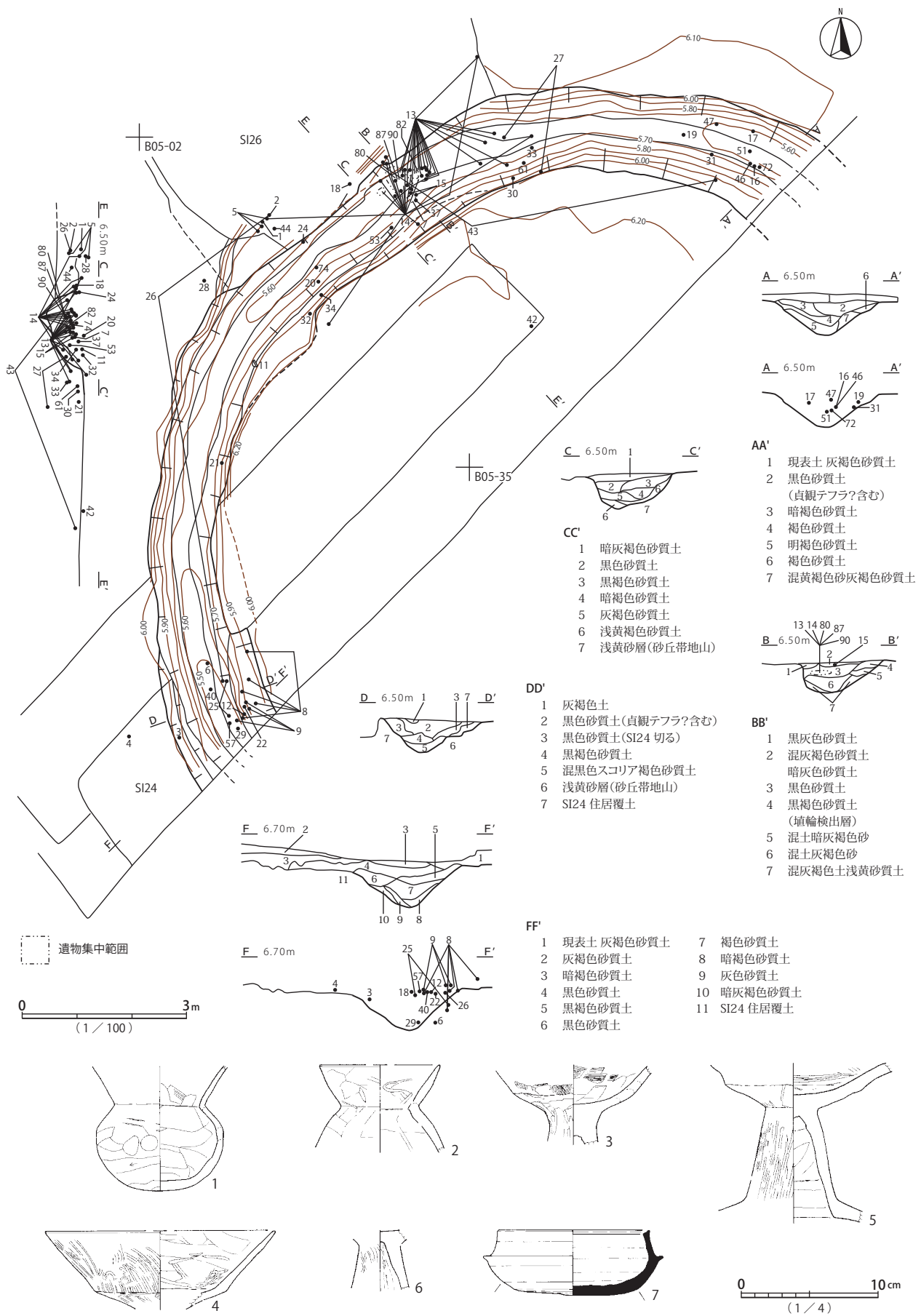


Fig.69 SM17 遺構・遺物実測図

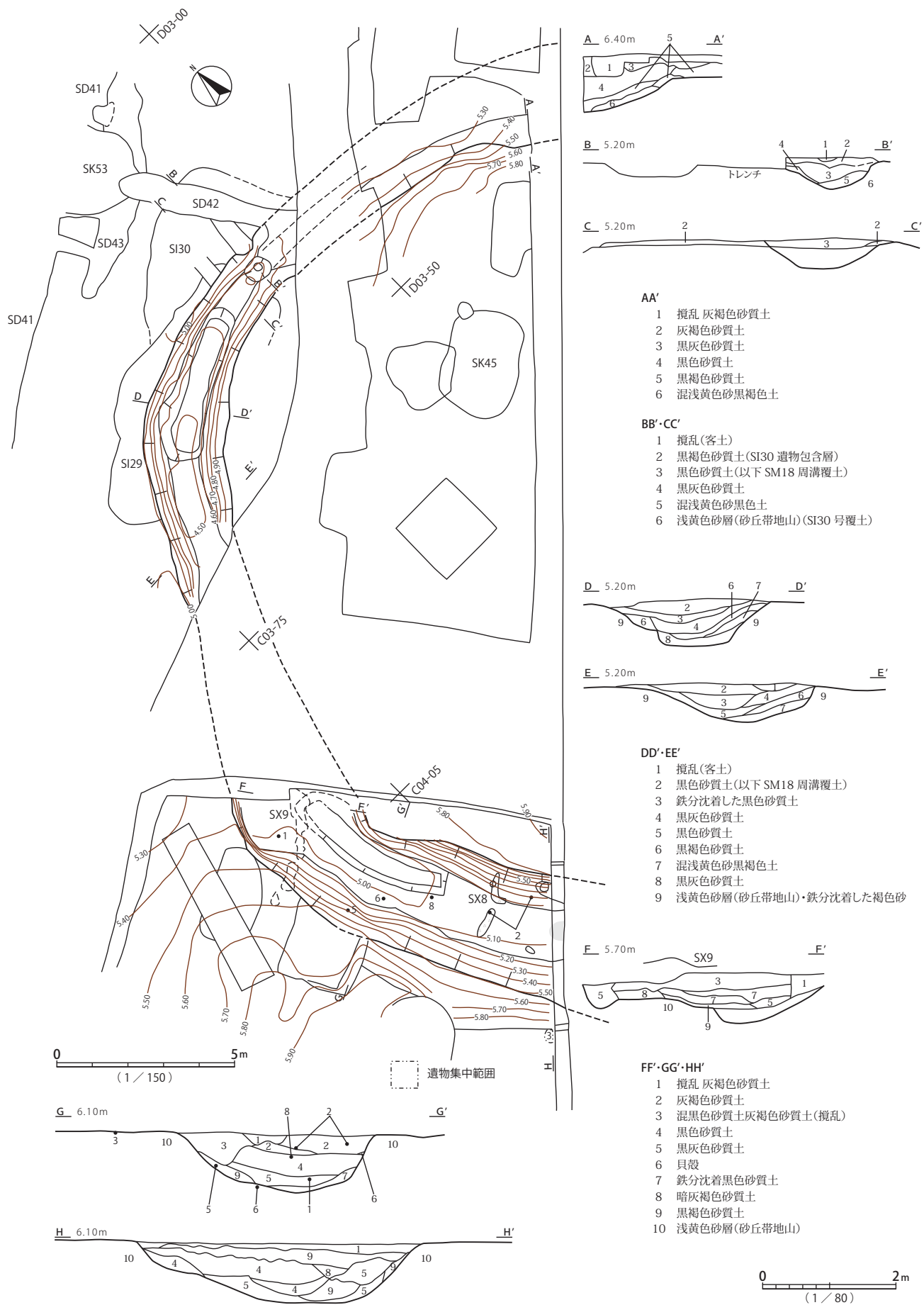


Fig.70 SM18 遺構実測図

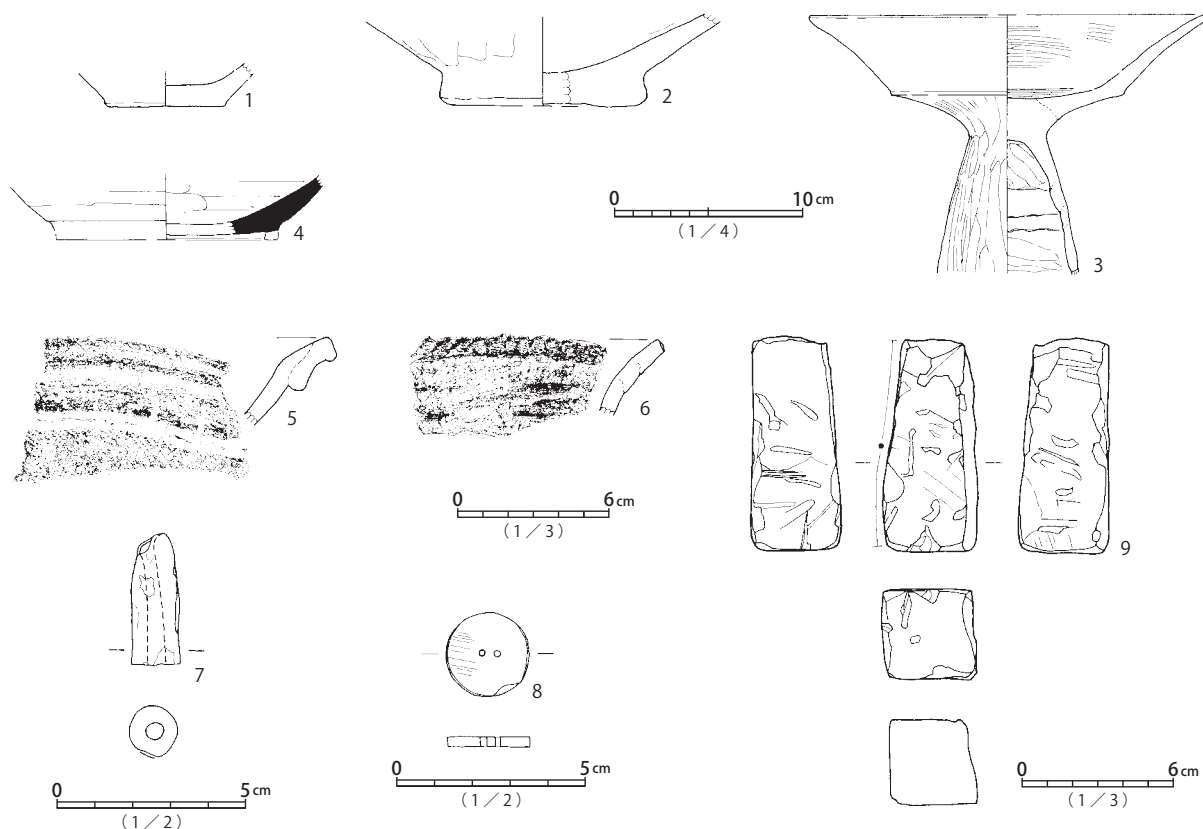


Fig.71 SM18 遺物実測図

側覆土中に集中がみられる。7の須恵器坏が近い場所から出土している。

帰属時期は、6期と考えられる。

SM18 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.70・71)

SM18はC03-77付近に位置するが、遺構の南東側半分は調査区外に広がると見られる。検出範囲については小さな調査区が3箇所に分かれていることもあり、状況は良いとはいえない。周溝北西側でSI29、SI30、SD42と、南西側でSX8とSX9と重複する。やや離れて南西側にSM17が位置する。先後関係は土層断面図から、本遺構がSI29、SI30に対して後出し、確定的ではないが、SD42に対しては本遺構が先行する可能性がある。

墳形は円墳と考えられる。墳丘盛土は確認していない。現状で確認できる周溝は平面形が半円形で、周溝幅は安定していないように見える。周溝底面の幅もこれに連動している。周溝底面の水平レベルは、等高線図を見ると目立った傾斜は存在しないが、北西側と南西側各1箇所で、同規模の掘り込みが認められている。遺物の共伴は認められないが、周溝内土壌の可能性がある。周溝の断面形は、墳丘側法面の傾斜が強くなる非対称の逆台形を呈する。墳丘部での埋葬施設は確認していない。

出土遺物は、顕著な集中は見られないが、南西側にまとまりが認められる。出土レベルは底面付近と覆土中位より上に分かれる。1は土師器甕形土器、2は土師器壺形土器、3は土師器高坏形土器、4は須恵器長頸壺、7は土錘、8は蛇紋岩製の有孔円盤、9は流紋岩製の砥石である。

帰属時期は、5期と考えられる。

第4節 土坑・土壇・井戸

SK1 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・72)

SK1はQ15-95付近に位置する。北側にSK2、SD5、SM3が近接する。遺構の重複は無い。

平面形状は楕円形を呈する。断面形状はレンズ状を呈する。

出土遺物は無い。

遺構の性格・遺構の帰属時期は、不明である。

SK2 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・72)

SK2はQ15-84付近に位置する。東側にSM3、南側にSK1が近接する。東西方向に伸びるSD5と重複する。先後関係は本遺構がSD5に対して後出することが土層断面図から判る。

平面形状は不整楕円形を呈する。断面形状は下位が筒状に近い逆台形から長方形を呈し、上位は大きく開く。土層断面図によると、7層に接する土層の様子は、有機質の構造物に対する裏込めのようにも見える。SD5とも重なることから、一体で機能した可能性がある。

出土遺物は無い。

遺構の性格、帰属時期は不明である。

SK3 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・72・118)

SK3はR15-07付近に位置する。SD9、SD12、SD13と重複する。先後関係は土層断面図では判然としない。

平面形状は、長楕円形を呈し、断面形状は逆台形に近い。

出土遺物は、円筒埴輪1点が出土している。

遺構の性格は不明確だが、SD12、SD13法面に位置することから、同様な位置関係にある土坑、ピット、SD9-P1、SD13-P1、P2、P3、SK13-P3、SK6などと一緒に機能した可能性もある。

遺構の帰属時期は、不明である。

SK4 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・73)

SK4はR15-02付近に位置する。西側にSM4が隣接し、北側でSD9と重複する。先後関係は、土層断面図から、本遺構がSD9に対して先行する。

平面形状は楕円形で、断面形は明瞭な逆台形を呈する。

出土遺物は、覆土上位から出土している。

遺構の性格は不明である。

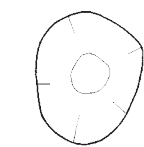
1は弥生土器甕形土器である。

遺構の帰属時期は、2期と考えられる。

SK5 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・72)

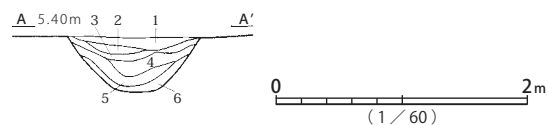
SK5はR14-72付近に位置する。北側にSD14、SI1が、東側にはSI2が、南側にはSD9が隣接する。

SK1



Q15-96

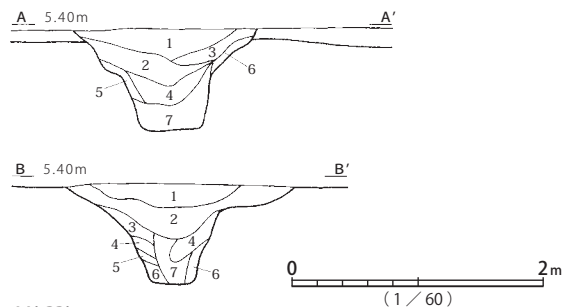
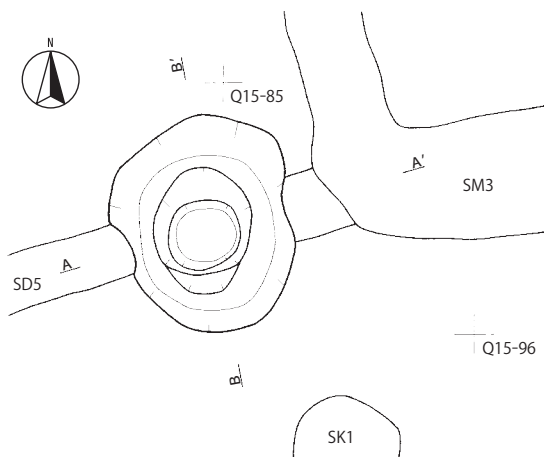
Q16-06



AA'

- 1 黒色 有機質砂土。締まる。
- 2 暗褐色 有機質砂土と暗灰色砂土との混合土。締まる。
- 3 暗褐色 有機質砂土中に地山崩壊暗褐色砂土混入。締まる。
- 4 黒色 有機質砂土。粘性強く締まる。
- 5 黒色 有機質砂土と暗灰色砂土主体。有機質性強く粘性締まりあり。
- 6 暗灰色 地山崩壊灰色砂土が多い有機質砂土の混合土。

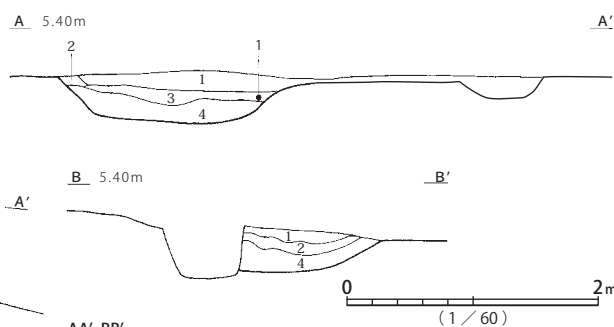
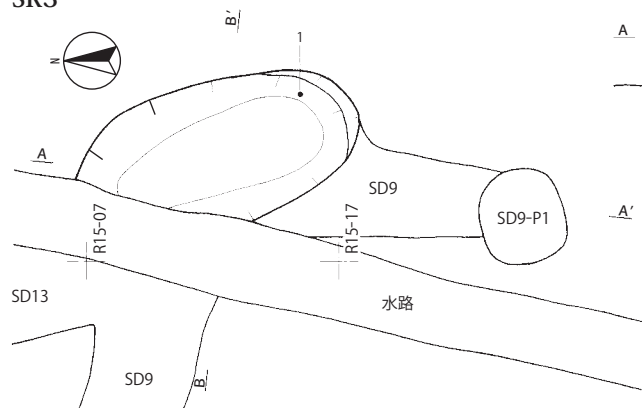
SK2



AA'・BB'

- 1 黒色 有機質砂土。締まる。
- 2 黒色 1層より有機質性強い砂土。締まる。
- 3 暗褐色 有機質性強い砂土中に地山崩壊暗褐色砂土を部分的に含む。
- 4 黒色 有機質砂土。粘性強く締まる。
- 5 黒褐色 粘性のある有機質砂土。地山崩壊暗褐色砂土をブロック状に含む。
- 6 暗褐色 地山崩壊暗褐色土主体。粘性の強い黒色有機質砂土をブロック状に含む。
- 7 黒色 有機質性の強い黒色砂土。締まる。

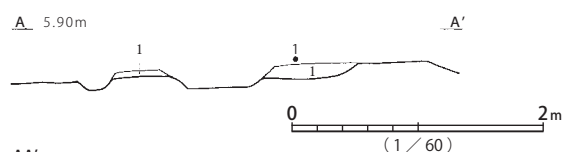
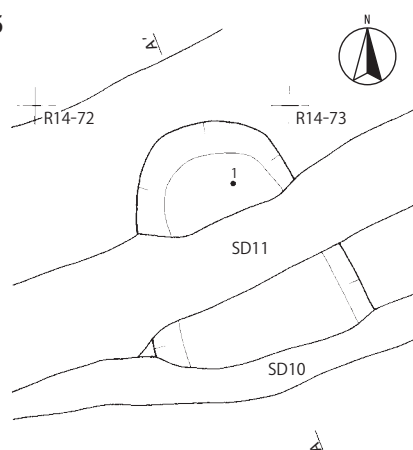
SK3



AA'・BB'

- 1 黒褐色 有機質砂土。粘性強く締まる。SD9 覆土。
- 2 暗褐色 有機質性やや強い砂土。締まり弱。SK3 覆土。
- 3 暗褐色 暗褐色砂土を斑に含む。やや有機質性強く締まりなし。
- 4 黒色 有機質粘土砂。粘性非常に強く粘る。

SK5



AA'

- 1 暗褐色 有機質性強い砂土。締まる。遺物含む。

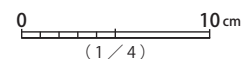
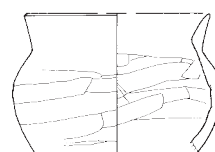


Fig.72 SK1～3, 5 遺構・SK5 遺物実測図

SD10、SD11、SX1 とは重複している。先後関係は土層断面図から、本遺構がSD10、SD11に先行することが判る。

平面形状は、長楕円形を呈すると見られるが、南側を欠損している。断面形はレンズ状を呈するが、確認面からの掘り込みが極めて浅く、明確には言えない。

出土遺物は、遺構確認面付近から小型の土師器甕形土器が出土している。

遺構の性格は不明である。

SK6 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・73)

SK6はR14-66付近に位置する。SD12、SD13の範囲と重複し、西にSI2、東にSD15、SD16が隣接する。先後関係は不明確である。

平面形状は楕円形を呈し、断面形は明瞭に逆台形を示す。

出土遺物は、覆土最上位から茶臼の破片が出土しているが、本遺構が完全に埋没してからの遺物となる。

遺構の性格は明確ではないが、SD9-P1、SK3などが同様にSD12、SD13の法面状に位置することから、一連で機能した可能性もある。

遺構の帰属時期は、中世以降としておく。

SK7 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・73)

SK7はR14-68付近に位置する。西側にSK6、SD14が、北側にSH6、SD10が隣接する。SD12、SD13の範囲と重複する。先後関係は不明瞭である。

平面形状は不整長楕円形を呈し、断面形は不明である。

出土遺物はない。

遺構の性格、遺構の帰属時期については、明確ではないが、SD12、SD13以降、中世から近世としておく。

SH6はR14-68付近に位置する。周辺にSK6、SK7、SD10、SD14が近接し、SD12、SD13の範囲と重複する。

平面形状は楕円形を呈し、断面形は不明である。

出土遺物はない。

遺構の性格は不明である。

遺構の帰属時期は、明確ではないが、SD12、SD13以降、中世から近世としておく。

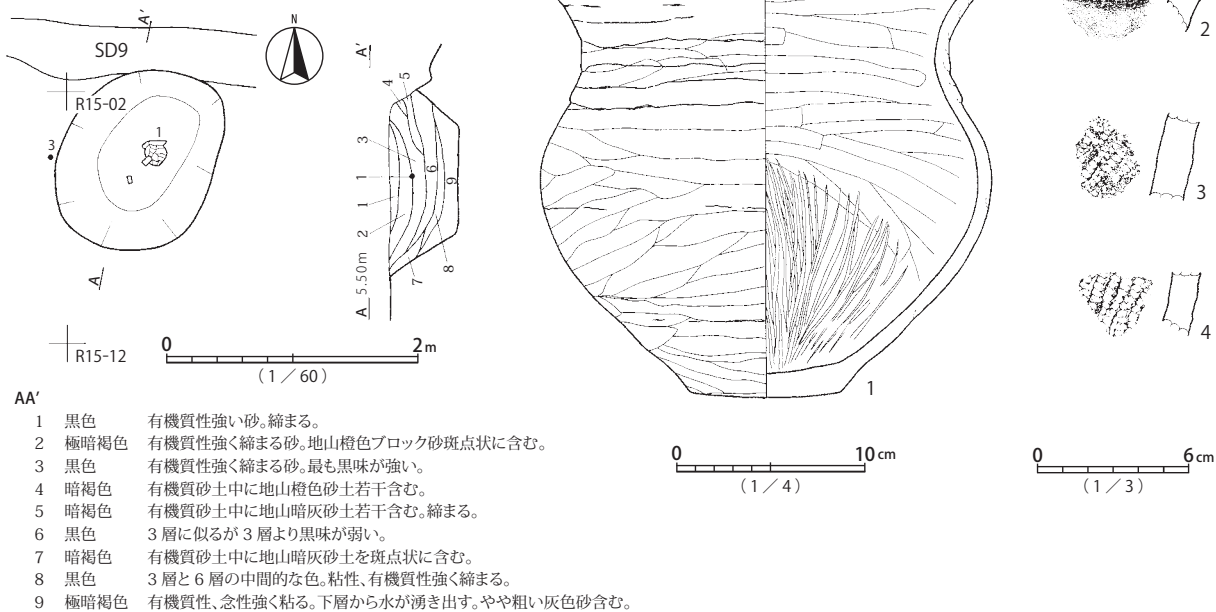
SK8 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.7・17)

SI5の項を参照。

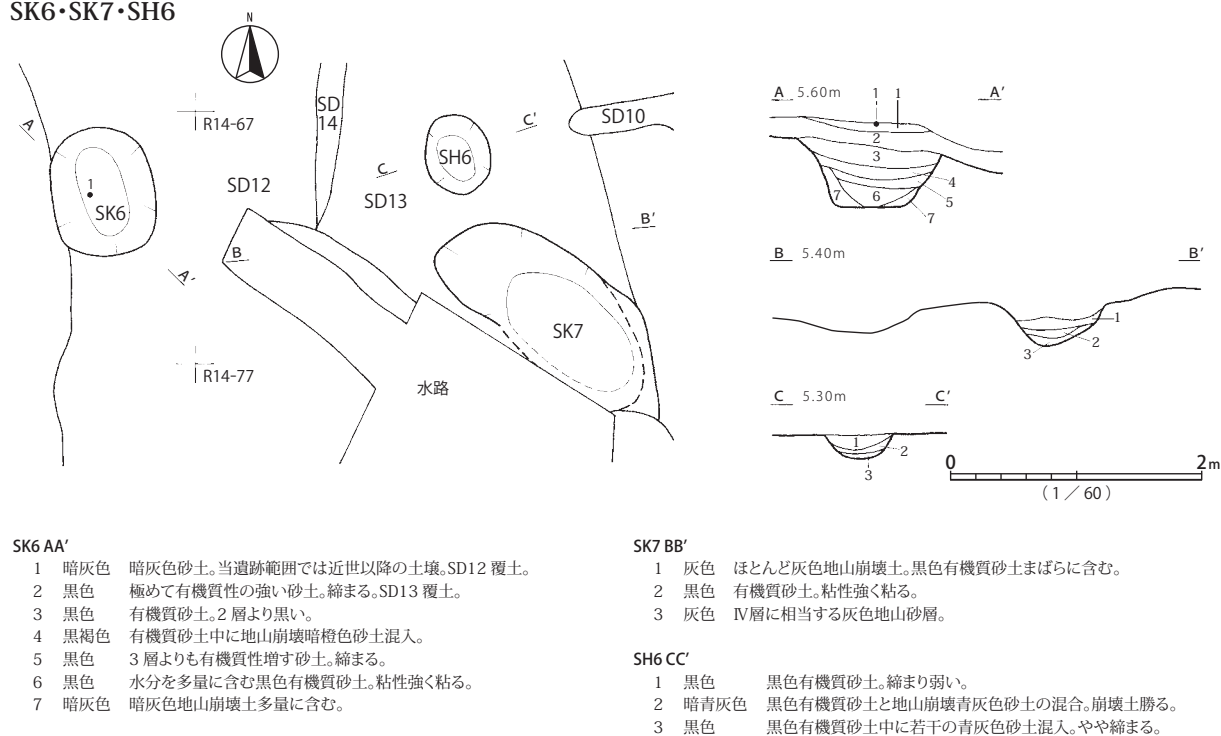
SK9 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.8・74)

SK9はU11-84付近、SM10の周溝に重複する。周辺にはSD20、SM9が隣接する。北側にやや離れ

SK4



SK6・SK7・SH6



SK6

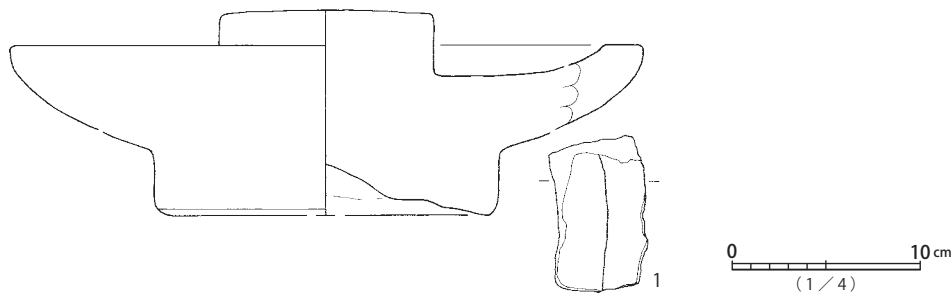


Fig.73 SK4、6、7、SH6 遺構・SK4、6 遺物実測図

てSK10が位置する。先後関係は明確ではないが、平面プランの切合状況から、本遺構がSM10に対して後出するものとしておく。

平面形状は、不整楕円形を呈し、断面形は逆台形となる。北東側に小ピットが位置するが、同時に機能したものかは判定できない。

出土遺物は無く、遺構の性格は不明である。

遺構の帰属時期は、SM10より後出する以外は不明である。

SK10 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.8・74)

SK10はU11-45付近、SM9周溝の褶曲部に位置する。SD23とも重複している可能性がある。南側にはやや離れてSK9が位置する。先後関係は明確ではないが、SM9と同時期、SD23に対して先行する範囲のものとしておく。

平面形状は円形に近い楕円形を呈する。

出土遺物は、覆土中位より土師器甕形土器片が出土している。

遺構の性格は不明である。

遺構の帰属時期は、5期以降である。

SK11 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.10・74)

SK11はW09-15付近、SM12周溝内に位置する。西側には遺構番号を付与していないが、同様な形状を持つ掘り込みが複数所在する。SM12に対する先後関係は不明である。

平面形状は不整長楕円形で、断面形は不明である。

出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK12 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.10・74)

SK12はX09-32付近に位置する。北側にはSI15、SB2とそれに伴うピット群、西側にはSM12が隣接、SK13、SK14、SK15、SK16と共に土坑群を形成する。重複する遺構は無い。

平面形状は、均整の取れた楕円形を呈し、断面形はレンズ状を呈する。

出土遺物は無い。

遺構の性格は確定的ではないが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に伴って機能した可能性がある。

遺構の帰属時期は、現場所見どおり5から6期としておく。

SK13 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.10・74)

SK13はX09-43付近に位置する。北側にはSI15、SB2とそれに伴うピット群、西側にはSM12が隣接、SK12、SK14、SK15、SK16と共に土坑群を形成する。重複する遺構は無い。

平面形状は楕円形を呈し、確認面からの掘り込みが極めて浅いため断面形は不明瞭であるが、北西側のピット状の掘り込みが非対称の逆台形を呈する。

出土遺物は無い。

遺構の性格は確定的ではないが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に伴って機能した可能性がある。

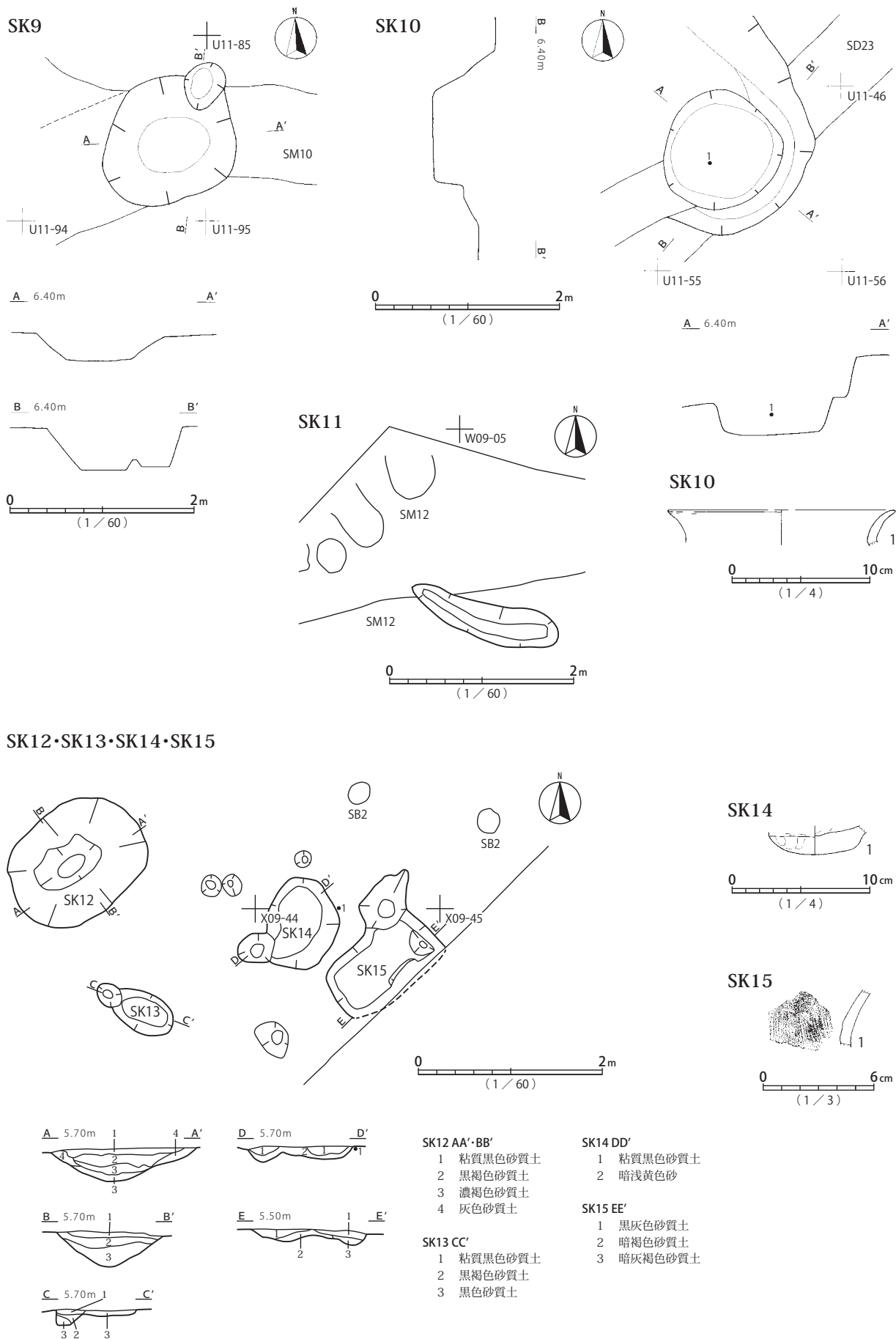


Fig.74 SK9~15 遺構・SK10、14、15 遺物実測図

遺構の帰属時期は、現場所見どおり 5 から 6 期としておく。

SK14 セ 489 山新遺跡第 8 地点 (Fig.10・74)

SK14 は X09-44 付近に位置する。北側には SI15、SB2 とそれに伴うピット群、西側には SM12 が隣接、SK12、SK13、SK15、SK16 と共に土坑群を形成する。重複する遺構は無い。

平面形状は不整形を呈し、断面形は逆台形に近い形状を呈する。

出土遺物は、土師器甕形土器が遺構上端付近から出土している。

遺構の性格は確定的ではないが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に伴って機能した可能性がある。

遺構の帰属時期は、現場所見どおり 5 から 6 期としておく。

SK15 セ 489 山新遺跡第 8 地点 (Fig.10・74)

SK15 は X09-44 付近に位置する。北側には SI15、SB2 とそれに伴うピット群、西側には SM12 が隣接、SK12、SK13、SK14、SK16 と共に土坑群を形成する。重複する遺構は無い。

平面形状は方形を呈するが、遺構南東側は調査区外に伸びる可能性もある。断面形は不定形を呈し、遺構底面が平坦ではない。

出土遺物は、土師器甕形土器が覆土中より出土している。

遺構の性格は確定的ではないが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に伴って機能した可能性がある。

遺構の帰属時期は、現場所見どおり 5 から 6 期としておく。

SK16 セ 489 山新遺跡第 8 地点 (Fig.10・75)

SK16 は X09-13 付近に位置する。東側には SB2 とそれに伴うピット群、西側には SM12 が隣接、南側の SK12、SK13、SK14、SK15 と共に土坑群を形成する。SI15 と重複し、先後関係は土層断面図から本遺構が SI15 に対して後出する。

平面形状は隅丸方形を呈し、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は覆土上層から土師器壺形土器とみられる土器片が 1 点出土している。

遺構の性格は確定的ではないが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に伴って機能した可能性がある。

遺構の帰属時期は、竪穴住居跡とは明確な時期差が存在するが、現場所見どおり 5 から 6 期としておく。

SK17 セ 489 山新遺跡第 8 地点 (Fig.10・75)

SK17 は X08-84 付近に位置する。北側には SD30、南側には SB2、南西側には SI15、SK12 から SK16 までの土坑群が隣接する。SI16 と重複し、SB2 の北側ピット列と接するが、主軸方向がこれらと大きく違わない。先後関係は土層断面図から SI16 に対して本遺構が後出する。

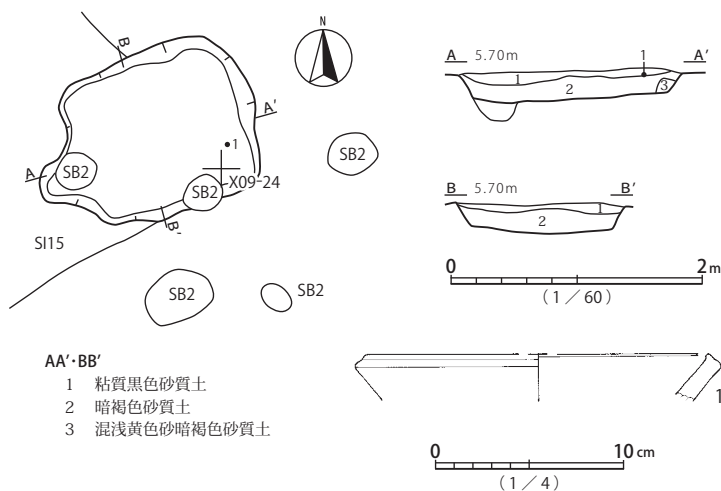
平面形状は長方形を呈する。遺構確認面からの掘り込みが極めて浅いため、断面形は明瞭ではない。

出土遺物は、覆土中から弥生土器壺形土器が 1 点出土している。

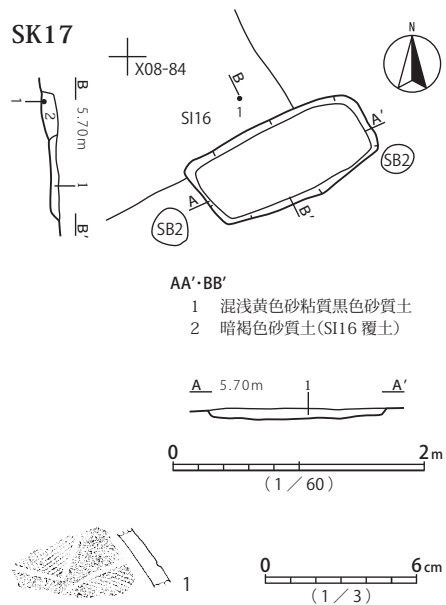
遺構の性格は確定的ではないが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に伴って機能した可能性がある。

遺構の帰属時期は、竪穴住居跡とは明確な時期差が存在するが、現場所見どおり 5 から 6 期としておく。

SK16



SK17



SK18

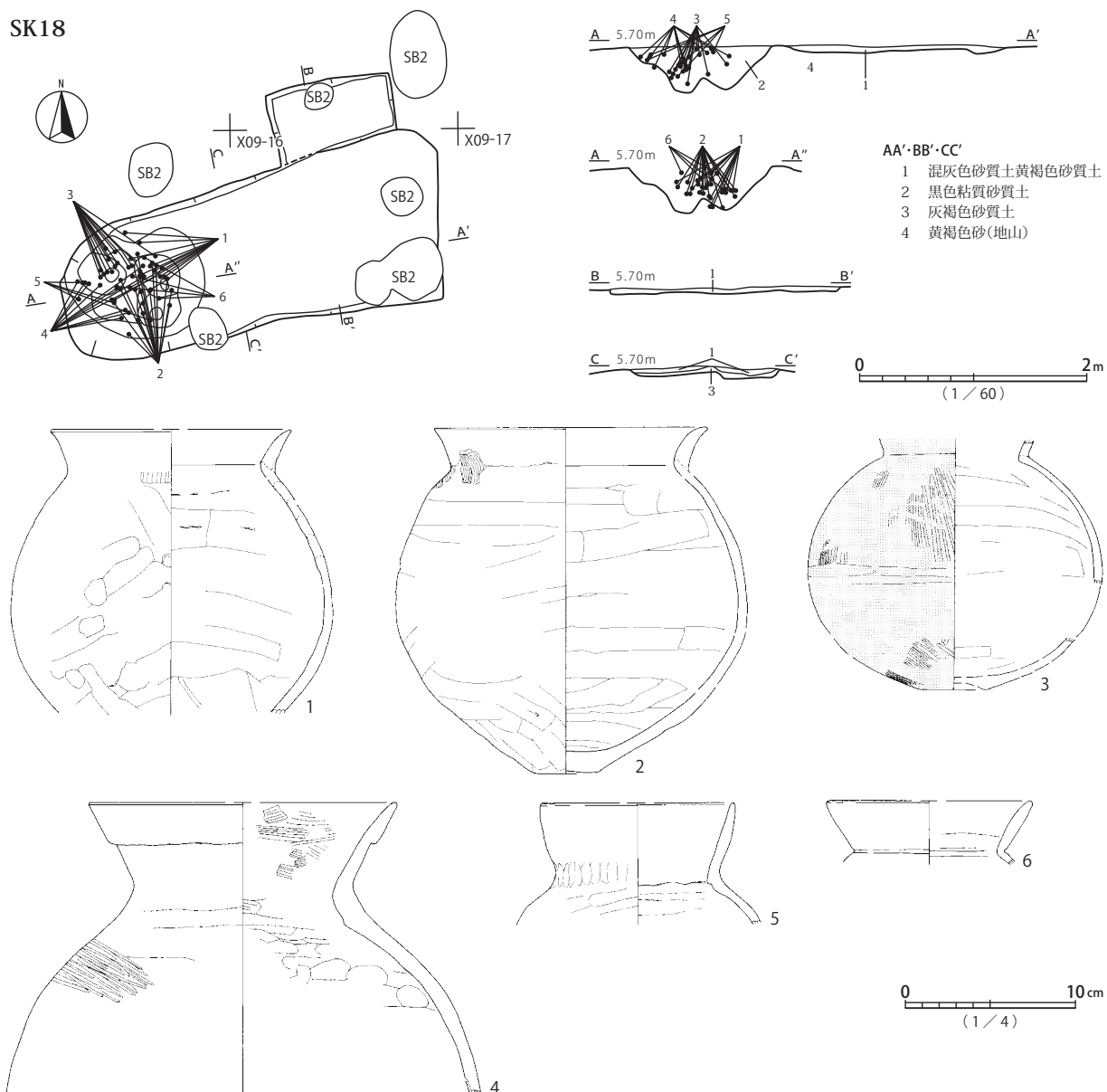


Fig.75 SK16~18 遺構・遺物実測図

SK18 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.10・75)

SK18はX09-15付近に位置する。北側にはSI16、東側にはSD32、西側にはSI15、SM12、南側にSK12、SK13、SK14、SK15が隣接する。SB2とそれに伴うピット群と重複し、主軸方向はほぼ同様である。本遺構とSB2の先後関係は不明瞭である。

平面形状は隅丸の長方形を呈するが、北側に方形の張り出し部が接続している。断面形はその殆どが遺構確認面からの掘り込みが浅いため、不明瞭だが、西側にある平面形楕円形の掘り込みは、底面が平坦ではないものの漏斗状に近い形を呈する。

出土遺物は、西側の掘り込み覆土中から集中して出土している。1、2は土師器甕形土器、3から6は土師器壺形土器である。

遺構の性格は確定的ではないが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に伴って機能した可能性がある。

遺構の帰属時期は、竪穴住居跡とは明確な時期差が存在するが、現場所見どおり5から6期としておく。

SK19 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.10・76)

SK19はX08-89付近に位置する。北側にSD32、東側にSM13、西側にSB2、SK18など土坑群が隣接する。遺構の重複は無く、単独の土坑である。

平面形状は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は、覆土中位に集中して出土している。1から3は弥生土器の甕形土器、4は弥生土器の壺形土器である。

遺構の性格は確定的ではないが、SI18などの竪穴住居に伴って機能したものとしておく。

遺構の帰属時期は、2期と考えられる。

SK20 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.10・76)

SK20はY08-40付近、SM13の墳丘部に位置するが、それ以外に重複する遺構は無い。先後関係は不明瞭である。

平面形状は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は無く、遺構の性格は不明である。

遺構の帰属時期は、明確ではないが、SM13に先行する2期としておく。

SK21 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.10・76)

SK21はY08-31付近、SM13の墳丘部に位置するが、それ以外に重複する遺構は無い。先後関係は不明瞭である。

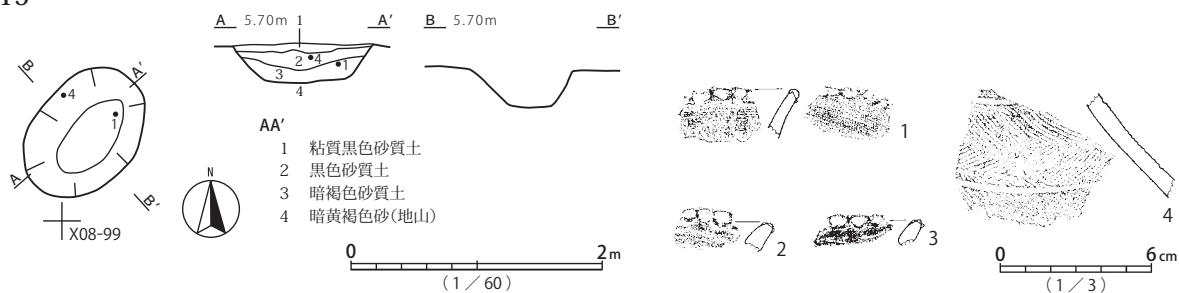
平面形状は楕円形を呈し、断面形は逆台形に近い形状を呈する。

出土遺物は覆土中より土師器器台形土器が出土している。

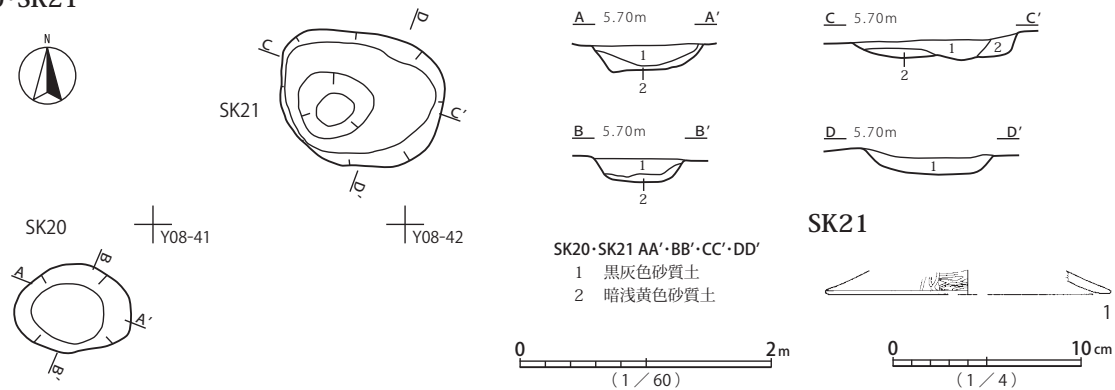
遺構の性格は不明である。

遺構の帰属時期は、出土遺物から考えれば古墳時代前期に含まれるが、SM13に先行する2期からの幅があるものとしておく。

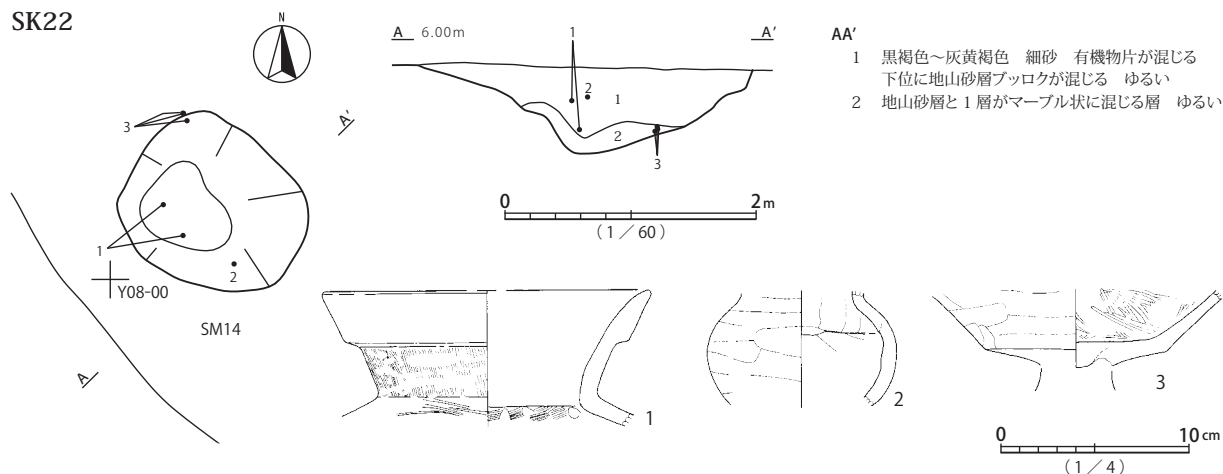
SK19



SK20・SK21



SK22



SK25

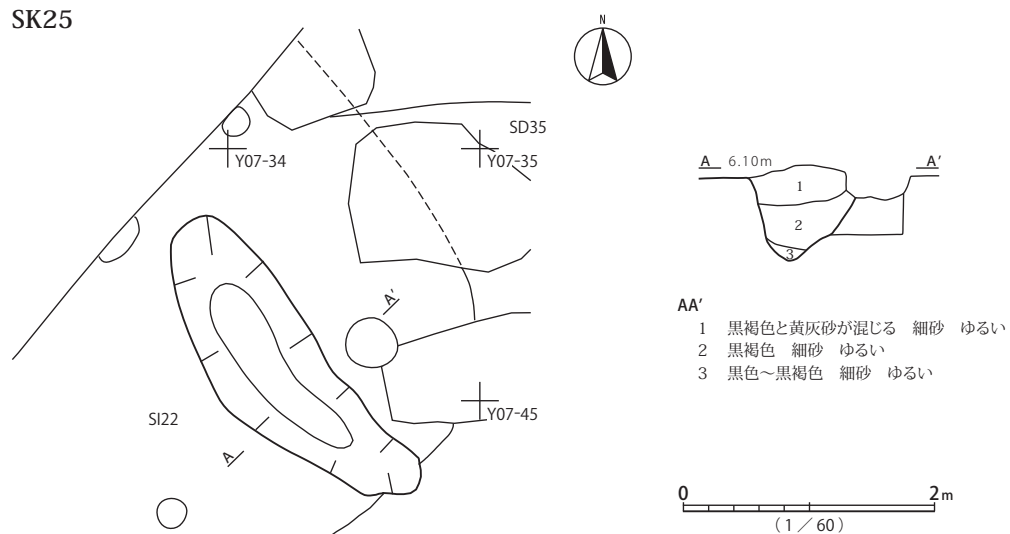


Fig.76 SK19～22、25 遺構・SK19、21、22 遺物実測図

SK22 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.10・76)

SK22はY07-90付近に位置、SM14周溝内に位置する。西側にSI19、南側にSD30、SM13が隣接する。SM14以外に遺構の重複はない。本遺構とSM14の先後関係は明瞭ではない。

平面形状は不整楕円形、断面形は不整形な漏斗状を呈する。

出土遺物は覆土中位より下層から出土している。

1、2は土師器壺形土器、3は土師器高坏形土器である。

遺構の性格は不明だが、遺構の帰属時期は、SM14と大きな時期差は無いものとみられる。

SK23 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・77)

SK23はY07-73付近、SM14墳丘内に位置する。北側にSI31、SI22、東側にSI20、SI21が隣接する。SM14以外の遺構との重複関係はない。

平面形状は不整楕円形を呈し、断面形は不整形を呈する。

出土遺物は覆土中位ほどに集中して出土する傾向がある。

1、2、4から6、8から12、14、16、17は弥生土器の甕形土器、3、23は弥生土器の浅鉢形土器、7、13、15、18から22は弥生土器の壺形土器、24は種子炭化物である。

遺構の性格は不明だが、出土遺物からSI22と同時期に機能した可能性があり、遺構の帰属時期は、2期と考えられる。

SK24 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・77・78)

SK24はY07-63付近、SM14墳丘内に位置する。南側にSK23が近接する。SM14以外の遺構との重複関係はない。

平面形状は不整形を呈し、溝状に細長い。断面形はレンズ状を呈する。

出土遺物は、覆土中位より上から出土している。

1、2は土師器壺形土器、3、4は土師器高坏形土器、5は弥生土器の壺形土器、6、7は不明土製品である。

遺構の性格は不明であるが、帰属時期は、SM14に近い5a期と考えられる。

SK25 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・76)

SK25はY07-34付近、SM14墳丘内にあるSI22の竪穴住居内に位置する。北側にSD35、南側にSD34が隣接する。SI22との先後関係は不明瞭である。

平面形状は不整長楕円形を呈し、断面形は不整形な漏斗状に近い形状を呈する。

出土遺物は無い。

遺構の性格、帰属時期は不明である。

SK26 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・77・78)

SK26はY07-55付近にSM14墳丘内に位置する。北側にSI22、西側にSK23、SK24が隣接する。

SM14以外の遺構で本遺構と先後関係にある遺構は無い。

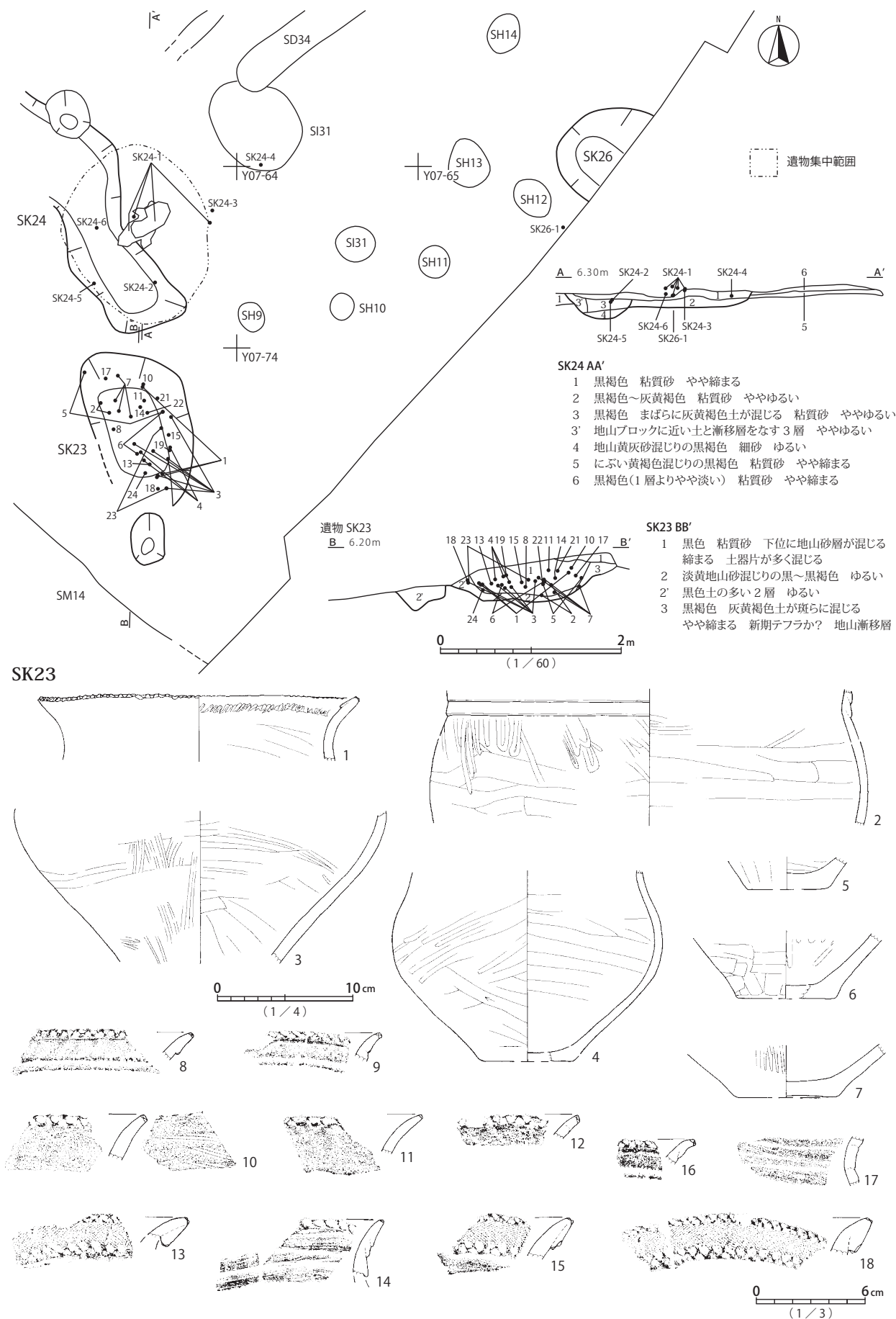


Fig.77 SK23, 24, 26 遺構・SK23 遺物実測図

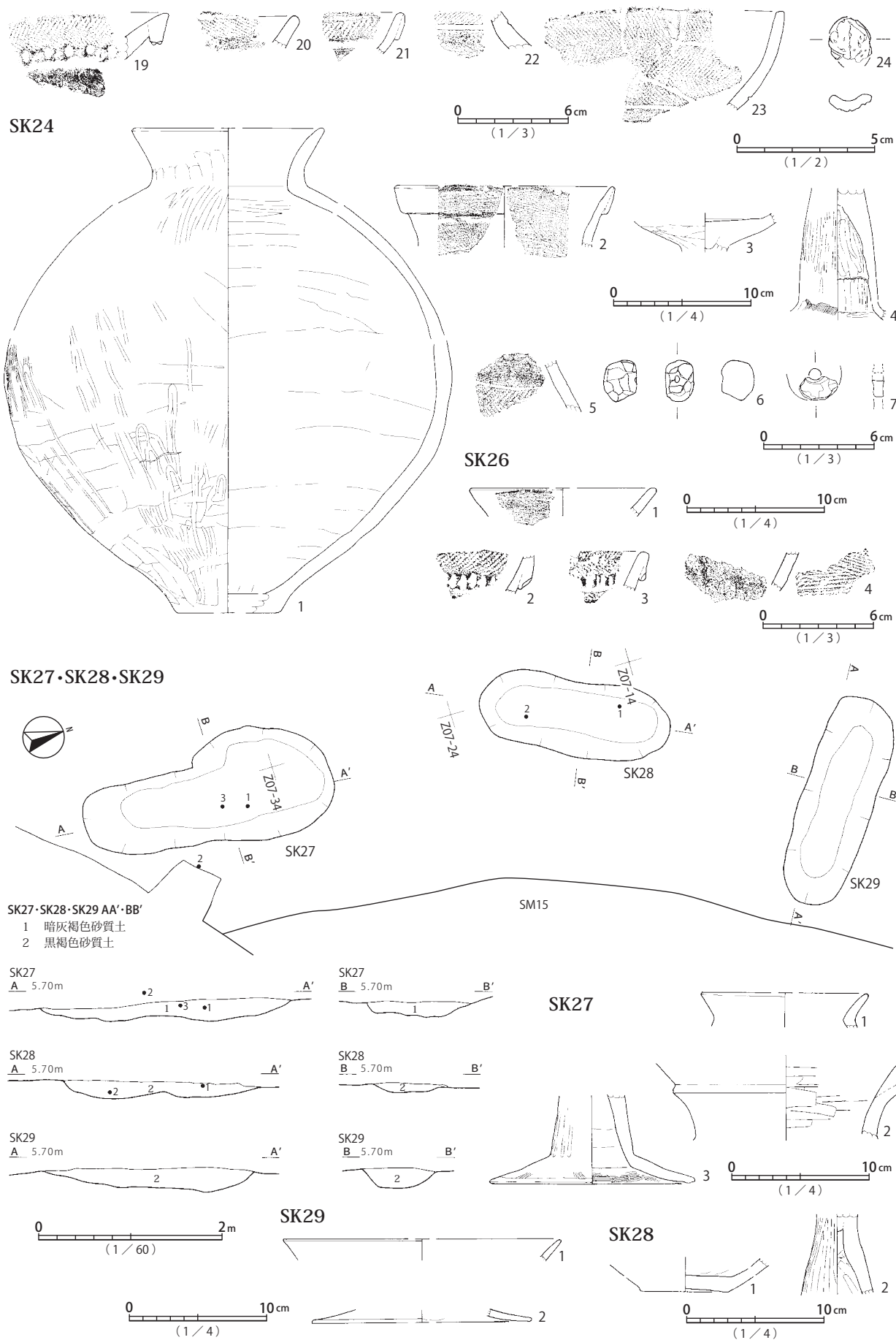


Fig.78 SK27～29 遺構・SK23、24、26～29 遺物実測図

平面形状は楕円形を呈するとみられるが、遺構の南側半分は調査区外に広がるとみられる。断面形は不明である。

出土遺物は、覆土中から出土している。1、4は土師器甕形土器、2、3は弥生土器の壺形土器とみられる。

遺構の性格、帰属時期は不明である。

SK27 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.11・78)

SK27はY07-34付近に位置する。東側にSM15、西側にSM14が近接する。遺構の重複は無い。

平面形状は長楕円形を呈し、断面形はレンズ状を呈する。

出土遺物は、覆土中位より上から出土している。

1は土師器甕形土器、2は土師器壺形土器、3は土師器高坏形土器である。

遺構の性格は、SM15の周溝外縁に沿って位置することからSK28、SK29と共に土壌群を形成しているものとみられる。

遺構の帰属時期は、5期と考えられる。

SK28 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig. 11・78)

SK28はZ07-14付近に位置する。東側にSM15、西側にSM14が近接する。遺構の重複は無い。

平面形状は長楕円形を呈し、断面形はレンズ状を呈する。

出土遺物は、覆土中位より上から出土している。

1は土師器甕形土器、2は土師器高坏形土器である。

遺構の性格は、SM15の周溝外縁に沿って位置することからSK27、SK29と共に土壌群を形成しているものとみられる。

遺構の帰属時期は、5期と考えられる。

SK29 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig. 11・78)

SK29はZ07-05付近に位置する。東側にSM15、西側にSM14が近接する。遺構の重複は無い。

平面形状は長楕円形を呈し、断面形はレンズ状を呈する。

出土遺物は、覆土中位より上から出土している。

1は土師器甕形土器、2は土師器高坏形土器である。

遺構の性格は、SM15の周溝外縁に沿って位置することからSK27、SK28と共に土壌群を形成しているものとみられる。

遺構の帰属時期は、5期と考えられる。

SK30 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.11・79)

SK30はZ06-54付近に位置する。北側にSD37、南側にSD36が近接する。遺構の重複は無い。

平面形状は、隅丸長方形を呈し、断面形は長軸、短軸方向共に逆台形を呈する。

出土遺物は、底面より高い位置で出土している。

1は土師器壺形土器、2、4は鉄鏃、3、5、6は鉄釘である。

遺構の性格は、木棺を伴う土壙とみられる。北東側に位置するSK34と共にSM16に関連する土壙と考えられる。

遺構の帰属時期は、5期と考えられる。

SK31 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.12・79)

SK31はZ06-58付近に位置する。南側にSM15、北側にSM16が隣接する。周囲にはSK30、SK34など単独の土壙と共にSK32、SK33、SK35、SK36の土坑群が位置する。遺構の重複は無い。

平面形状は不明だが、土層断面を見る限り、直径4m、深さ0.3m程度の掘り込みとして認識されている。平面図ではその掘り込み下位の状況が図化されているのみである。下位には楕円形を呈する土坑状の掘り込みが5箇所検出されている。この内最も規模が大きい土坑は長楕円形を呈し、断面形は確認面からの掘り込みが浅いため不明瞭であるが、レンズ状を呈する。この周囲からの出土遺物は、土坑底面直上を含む数点が出土している。

1は土師器壺形土器、2は土師器台付甕形土器、3は土師器高坏形土器である。

遺構の性格は不明であるが、遺構の帰属時期は、5期と考えられる。

SK32 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.12・80)

SK32はZ06-38付近に位置する。北側にSD37、西側SD36、東側にSI23が隣接する。重複する遺構は無い。

平面形状は円形を呈し、断面形はレンズ状もしくは不整形を呈する。

出土遺物は無い。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK33 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.12・31)

SI23の項を参照。

SK34 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.12・80)

SK34はZ06-16付近に位置する。東側にはSM16、SK35、SD37が隣接する。遺構の重複は無い。

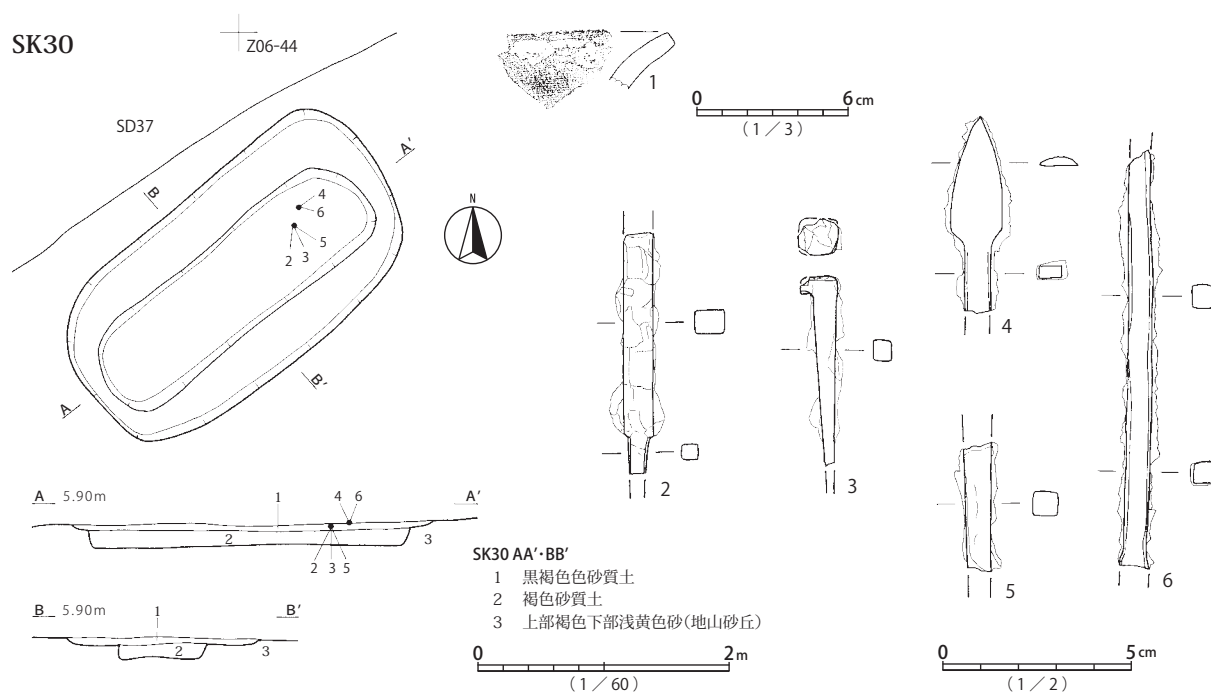
平面形は長楕円形を呈する。断面形はレンズ状を呈する。土壙内部には長方形の木棺痕とみられる痕跡が明瞭で、この痕跡は土層断面図にも現われている。頭位を示す痕跡は確認していない。

出土遺物は、棺内覆土中と、土壙内の棺外から出土している。1、2は土師器壺形土器、3は土師器高坏形土器、4は蛇紋岩製の勾玉である。

本遺構は、周溝を伴わない土壙とみられるが、SM16を改変した古墳の主体部である可能性も否めない。

遺構の帰属時期は、5期と考えられる。

SK30



SK31

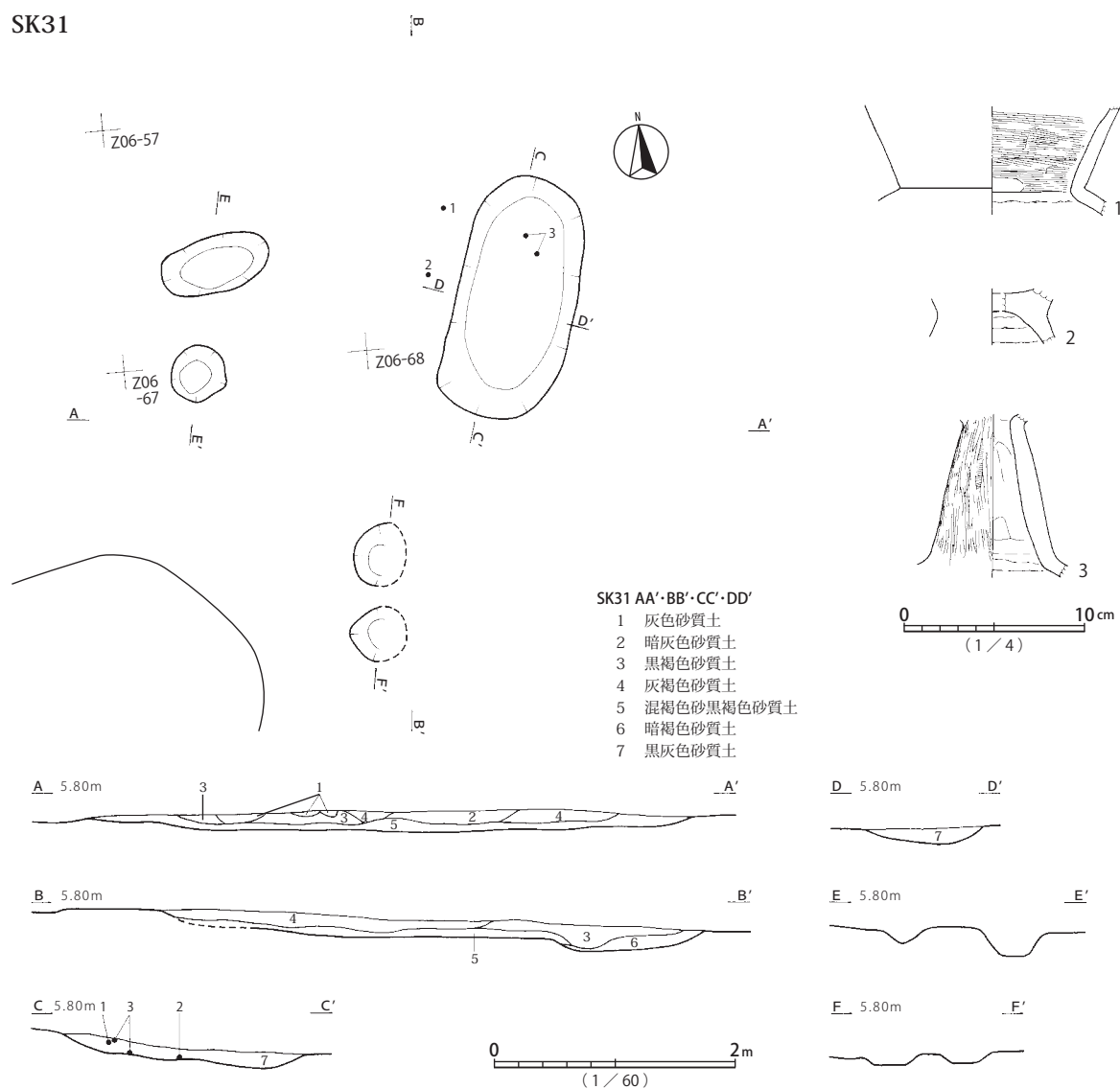
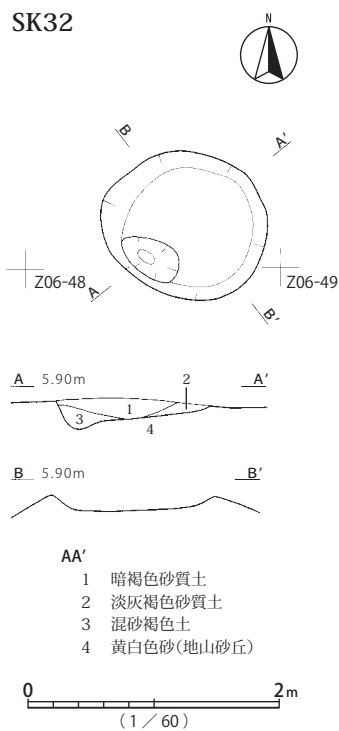
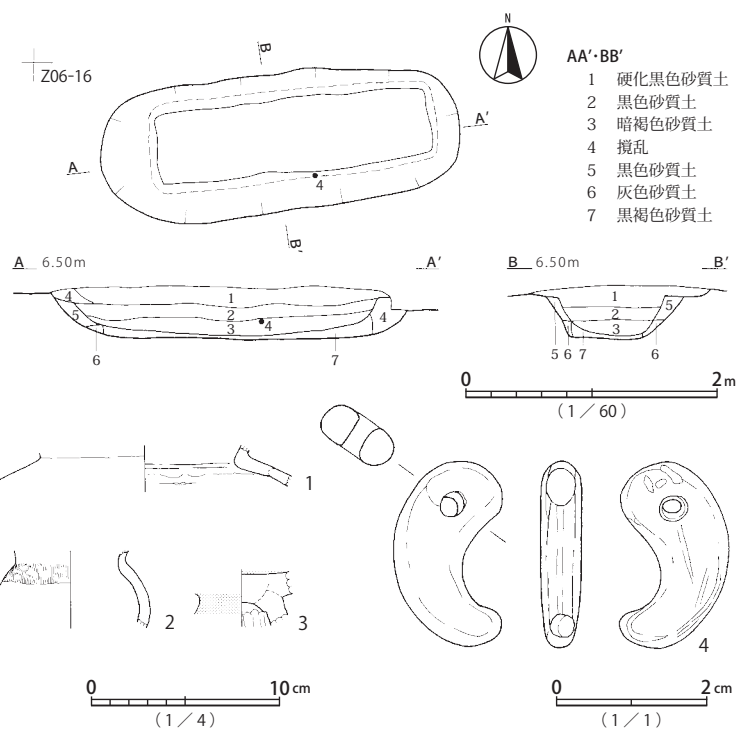


Fig.79 SK30,31 遺構・遺物実測図

SK32



SK34



SK35

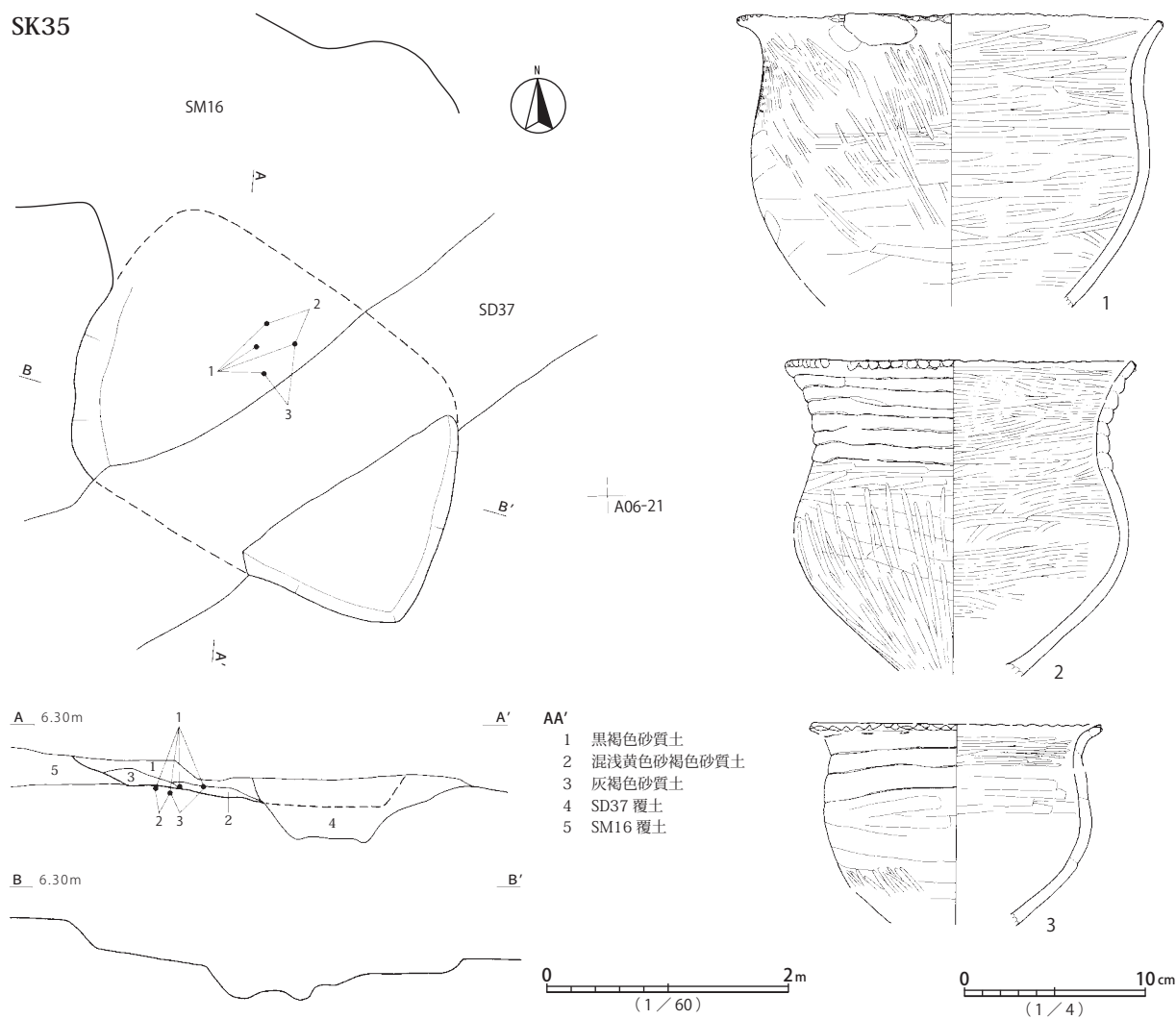


Fig.80 SK32、34、35 遺構・SK34、35 遺物実測図

SK35 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.12・80)

SK35はZ16-19付近に位置する。SM16、SD37と重複し、西側にSK34、南側にSI23が位置する。先後関係は本遺構がSD37に対して先行し、SM16に対しては後出するように見える。

平面形状は不整形で、断面形は逆台形を呈するものとみられる。

出土遺物は、遺構中央より北側の覆土中位より下位に集中して出土している。

遺構の性格は不明だが、1から3は弥生土器の甕形土器である。

重複する遺構の先後関係と遺物の時期では不整合であるため、ここでは出土遺物の時期を優先させ、遺構の帰属時期は、2期としておく。

SK36 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.12・31・34)

SI23の項を参照。

SK37 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.12・31)

SI23の項を参照。

SK38 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.12・81)

SK38はA05-88付近に位置する。周囲にはSD38、SD37が隣接する。遺構の重複は無い。

平面形状は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は無い。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK39 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.12・81)

SK39はA05-45付近、SM16の周溝内に位置する。南側にSD37が隣接する。先後関係はSM16に対し本遺構が後出する。平面形状は楕円形を呈し、遺構確認面からの掘り込みが浅いため明確ではないが、断面形はレンズ状を呈するとみられる。

出土遺物は、底面より高い位置から出土している。

遺構の性格は、人骨が出土していることから、土壇である。

1は土師器器台形土器、2はキセルの雁首、3は刀子である。

遺構の帰属時期は、近世と考えられる。

SK40 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.13・81)

SK40はB04-34付近、SI28竪穴住居内に位置する。遺構の先後関係は判然としない。

平面形状は、不整形楕円形を呈し、断面形は、長軸方向が逆台形、短軸方向がレンズ状を呈する。

出土遺物は、覆土中位より下層から出土している。1は土師器高坏形土器、2は埴輪である。

遺構の性格、遺構の帰属時期は、不明である。

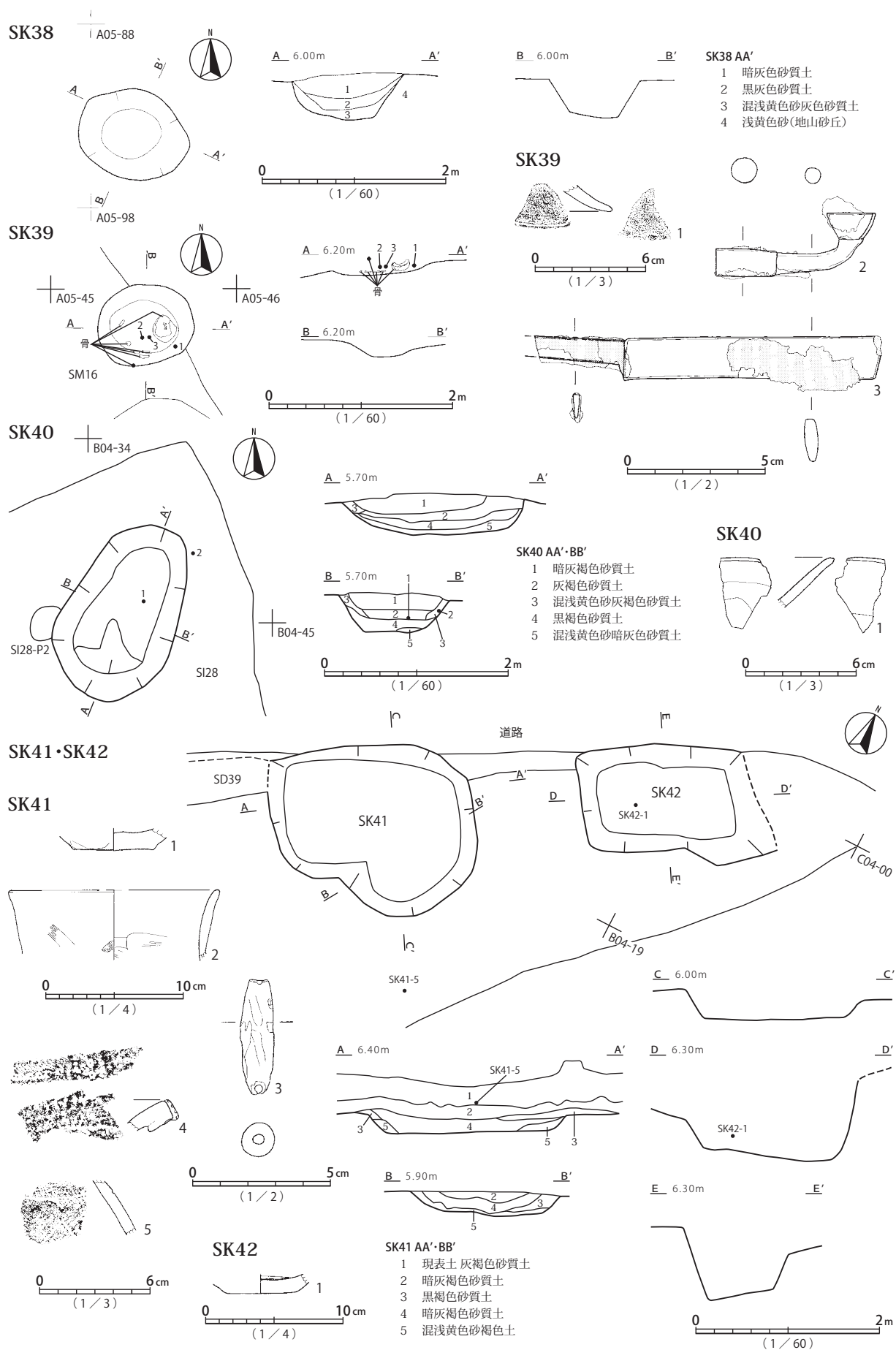


Fig.81 SK38~42 遺構・SK39~42 遺物実測図

SK41 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.13・81)

SK41はB04-17付近に位置する。SD39、SD40、SK42、SK43が隣接する。SD39と重複するが、先後関係は不明である。

平面形状は、不整楕円形を呈し、断面形状は長軸方向で逆台形を呈し、短軸方向でレンズ状を呈する。出土遺物は、覆土中位より上層から出土している。1は土師器甕形土器、2は土師器壺形土器、3は土錘、4、5は弥生土器の壺形土器である。6から10の埴輪片 (Fig.118) が出土している。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK42 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.13・81)

SK42はB04-08付近に位置する。SD39、SD40、SK41、SK43が隣接する。SD39と重複するが、先後関係は不明である。

平面形状は、不整方形を呈し、断面形は逆台形に近い形状を呈する。

出土遺物は、覆土中位より下層から出土している。1は土師器甕形土器である。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK43 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.13・82)

SK43はC03-90付近に位置する。SD39、SD40、SK42が隣接する。遺構の重複はない。

平面形状は不整長楕円形を呈する。断面形は確認面からの掘り込みが浅いため不明瞭だが、レンズ状を呈する。

実測遺物は無い。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK44 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・82・83)

SK44はC03-23付近に位置する。SE1の西側に広がる13基の小土坑で構成される土坑群に対して番号を付与した。南側にSD41が近接し、遺構の重複は無い。

平面形状は、楕円形を呈するものが主体となる。断面形は逆台形、レンズ状を呈する。

13基の土坑の分布は規則性が見出だし難く、各土坑の重複は激しくない。P12以外は1群をなしている。

出土遺物は、P13とその北側及びP12に集中して出土している。1から7、9は土師器甕形土器、8は土師器鉢形土器、10から12は土師器壺形土器、13から18は土師器高坏形土器である。19は須恵器長頸壺、21は鉄製の刀子とみられる。

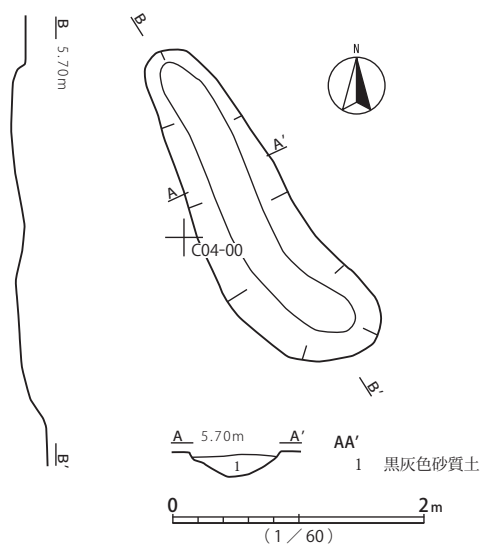
遺構の性格は不明である。

遺構の帰属時期は、出土遺物から、5から6期と考えられる。

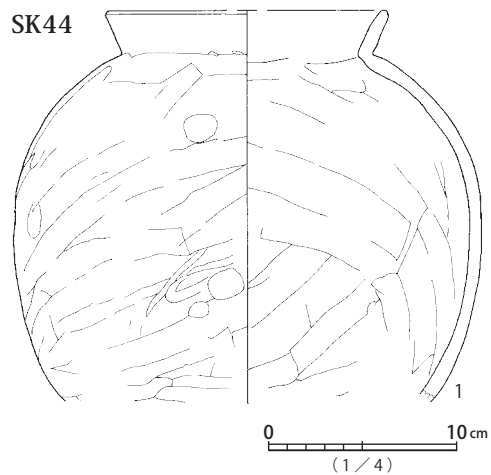
SK45 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・83)

SK45はC03-69付近、SM18の墳丘内に位置する。周囲に遺構は無く単独で位置する。SM18以外重複関係にある遺構は無い。

SK43



SK44



SK44

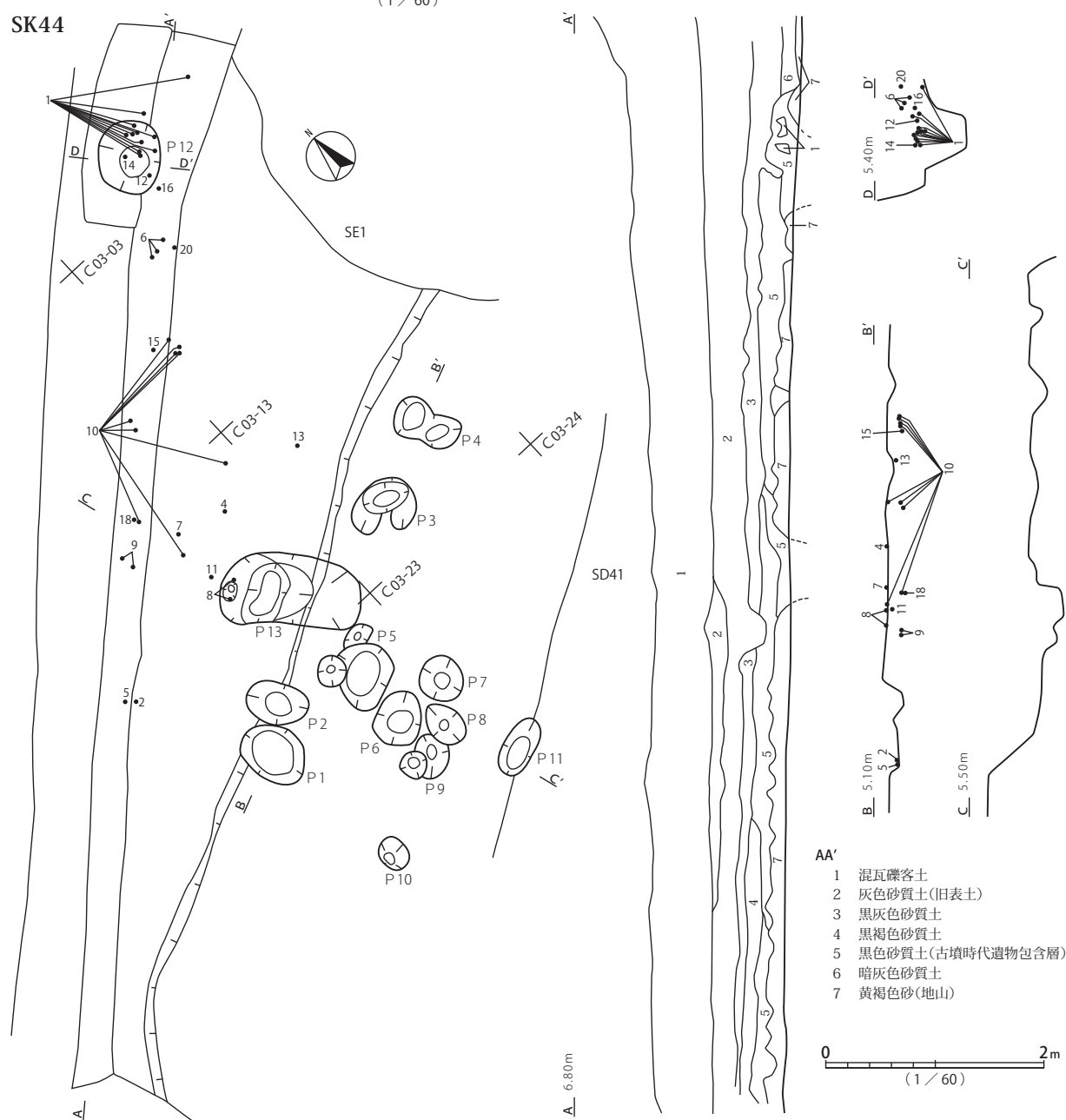


Fig.82 SK43、44 遺構・SK44 遺物実測図

平面形状は、不整隅丸方形を呈する。断面形状は不整形である。北側にピット1基が近接し、重なるように焼土範囲が広がっている。

出土遺物は、遺構内外に散漫に分布し、出土レベルは覆土中位付近に集中している。1、2は土師器甕形土器、3から8は土師器壺形土器、9、10は土師器高坏形土器である。

遺構の性格は明確ではないが、遺物をみると、SM18の出土遺物と大きな時期差が無いように見えるため、墳丘築造直前に存在した可能性がある。

遺構の帰属時期は、5から6期と考えられる。

SK46 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・83)

SK46はD03-34付近に位置する。北側にSK47が隣接するが、遺構の重複は無い。

平面形状は楕円形を呈するが、遺構の南側は調査区外に位置する。断面形は記録が無いため不明である。

出土遺物は、覆土中から出土している。1は土師器高坏形土器である。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK47 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・84)

SK47はD03-03付近に位置する。南側にSK46が隣接する。重複する遺構は無い。

平面形状は円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は、覆土から出土している。1は土師器甕形土器である。

遺構の性格、帰属時期は不明である。

SK48 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・84)

SK48はD02-92付近に位置する。北側にSD43、SD41が隣接する。重複する遺構は無い。

平面形状は方形を呈するが遺構の南側は調査区外に広がるとみられる。断面形は逆台形を呈する。底面は極めて平坦で、竪穴住居跡に似るが硬化面はなく、規模も小さい。

出土遺物は、覆土中から出土している。

1、2は土師器甕形土器である。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK49 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・84)

SK49はD02-74付近に位置する。北側にSD41が隣接する。SK50、SK51、SK52が近接し、土坑群を形成している。遺構の重複は無い。

平面形状は楕円形を呈し、断面形は逆台形もしくは不整形を呈する。

出土遺物は覆土中位より下層から出土している。

1は土師器甕形土器である。

遺構の帰属時期は、4期と考えられる。

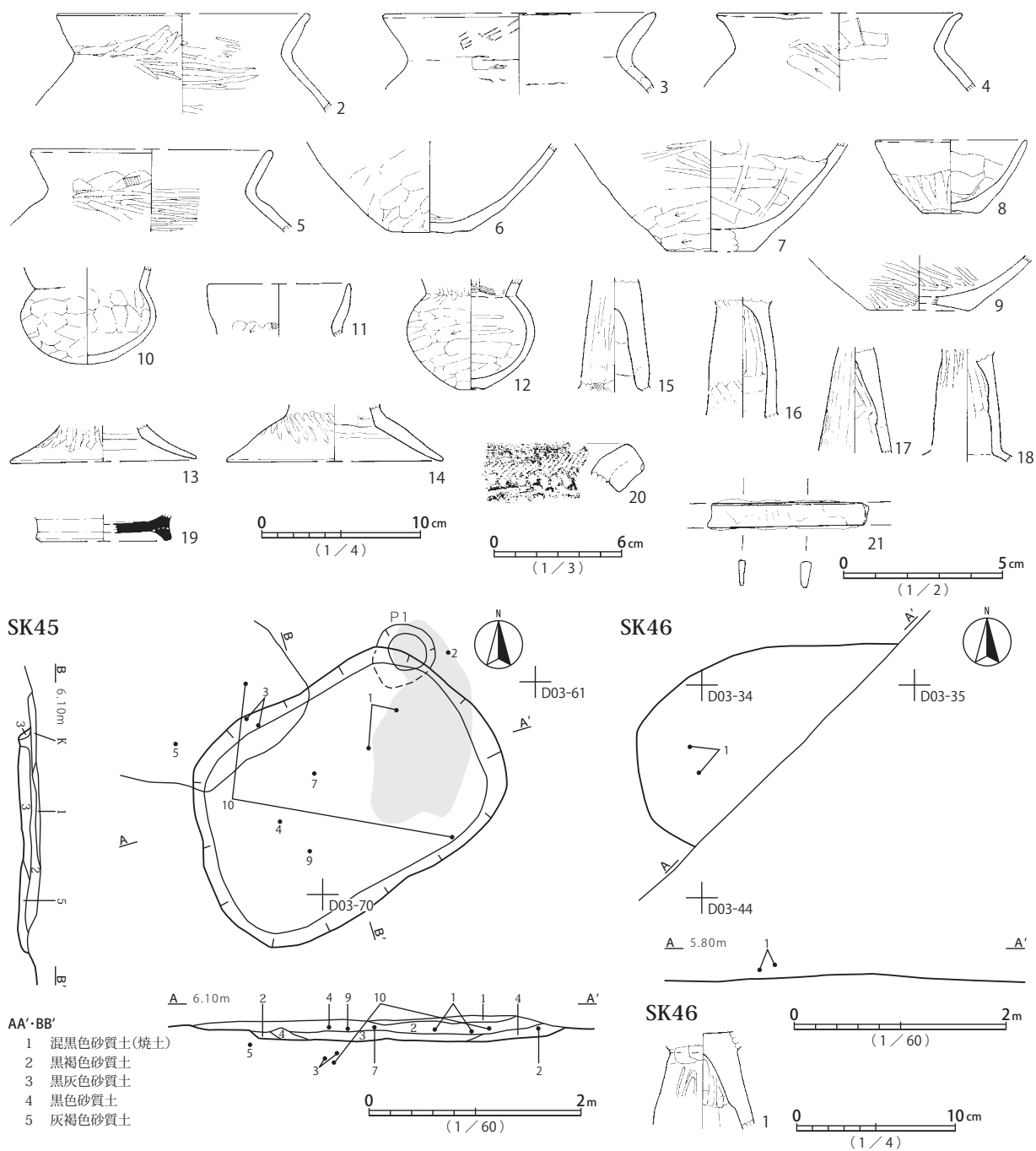


Fig.83 SK45、46 遺構・SK44~46 遺物実測図

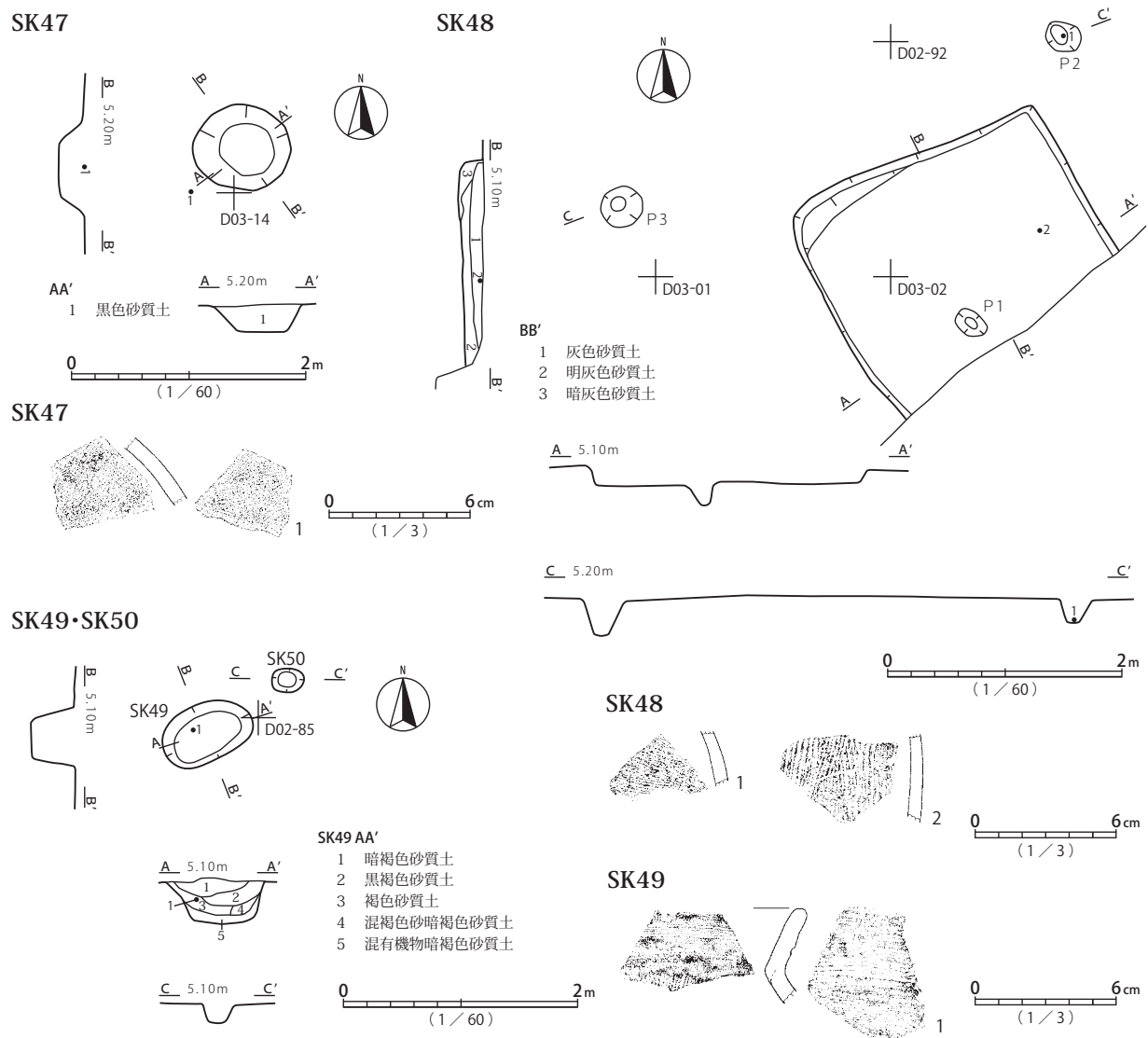


Fig.84 SK47～50 遺構・SK47～49 遺物実測図

SK50 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・84)

SK50はD02-75付近に位置する。北側にSD41が隣接する。SK49、SK51、SK52が近接し、土坑群を形成している。遺構の重複は無い。

平面形状は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK51 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・85)

SK51はD02-73付近に位置する。北側にSD41が隣接する。SK49、SK50、SK52が近接し、土坑群を形成している。遺構の重複は無い。

平面形状は不整楕円形、断面形は、遺構確認面からの掘り込みが浅いため不明瞭だが、不整形を呈する。

出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK52 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・85)

SK52はD02-74付近に位置する。北側にSD41、SB4が隣接する。SK49、SK50、SK51が近接し、土坑群を形成している。遺構の重複は無い。

平面形状は不整楕円形、断面形は遺構確認面からの掘り込みが浅いため不明瞭だが、逆台形を呈すると見られる。

出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SX13はD02-73付近に位置する縄文時代後期加曽利B式期の遺物を出土する包含層範囲、南北7m×東西6mの範囲について遺構番号を付与した。

出土遺物は1から15が縄文時代後期の深鉢、17は軽石製の用途不明品である。

SK53 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・86)

SK53はC03-07付近に位置する。調査段階において本遺構は、南側に位置する平面形長楕円形の掘り込み部分と、そこから北西方向に溝状に伸びる部分とに対して遺構番号を付与している。本報告もこれに従っている。土坑状の掘り込み直上では、SD41とSD42が直交し、南側ではSD43がSD41と並走する。西側にやや離れてSE1が位置する。遺構の先後関係は、土層断面から本遺構がSD42、SD43に対して先行し、SD41に対して後出するため、SD41→SK53→SD42・SD43となる。

平面形は、土坑状の不整楕円形部分と溝状部分で構成されるが、この形状が異なる部分間での時期差を示す資料は確認できない。断面形は土坑状部分が逆台形に近いが、部分的に法面で段を有し、溝状部分は逆台形を呈する。

出土遺物は少ないが、溝状部分の底面直上から古瀬戸後期IV期から大窯期の播鉢片を転用した砥石が出土している。

遺構の性格は明確にできないが、井戸状遺構と関連して機能した可能性がある。

遺構の帰属時期は、出土遺物の時期に帰属させたいが、本遺構より先行するSD41の覆土に宝永火山灰を含んでいることから、近世としておく。

SK54 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・87)

SK54はC02-88付近に位置する。周囲にはSX10、SX11、SX12、SD41、SD42が隣接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状は円形を呈するが、底面では方形となる。断面形状は逆台形を呈する。

出土遺物は、遺構確認面から土師器甕形土器が出土している。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

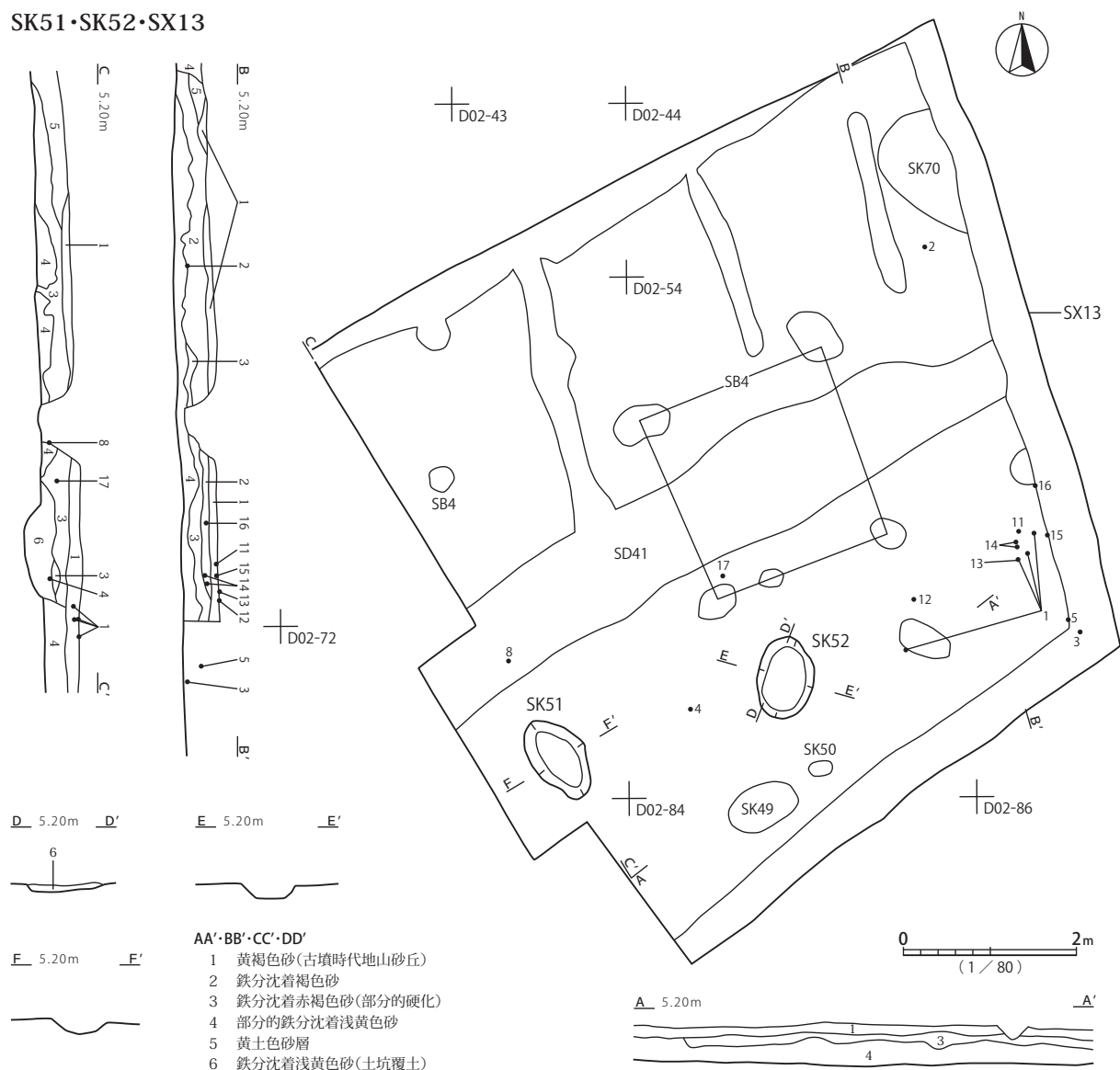
SK55 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・87)

SK55はD02-70付近に位置する。SK54、SK56、SK57が隣接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状は不整楕円形を呈し、断面形は不整形もしくは漏斗状を呈する。

出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK51・SK52・SX13



SX13

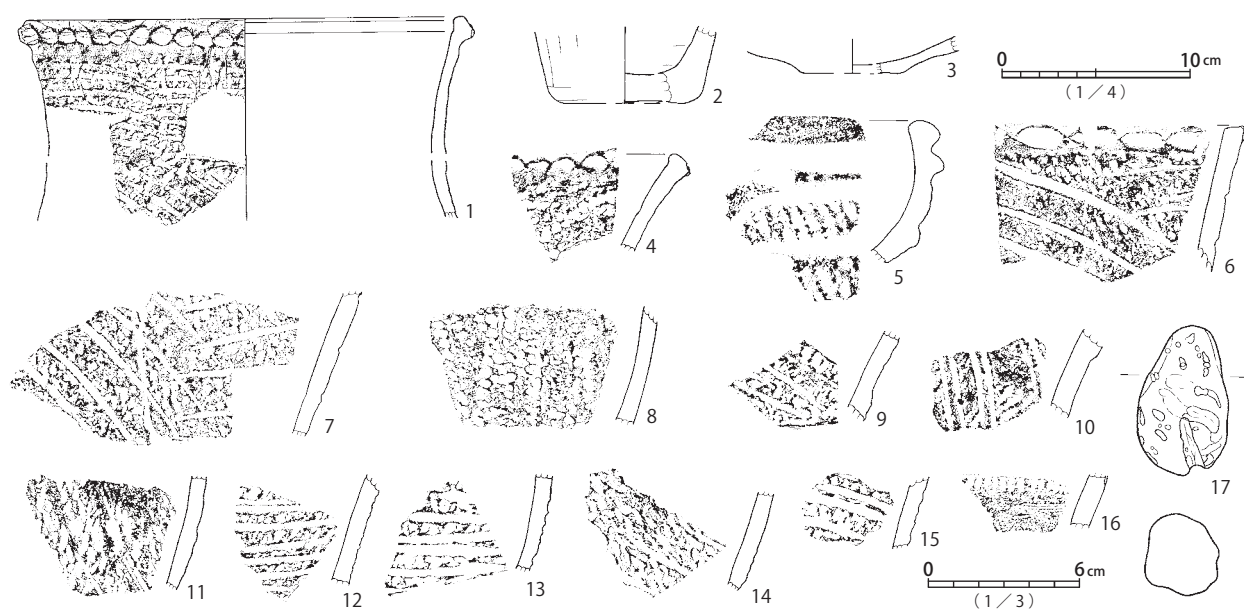


Fig85 SK51、52、SX13遺構・SX13 遺物実測図

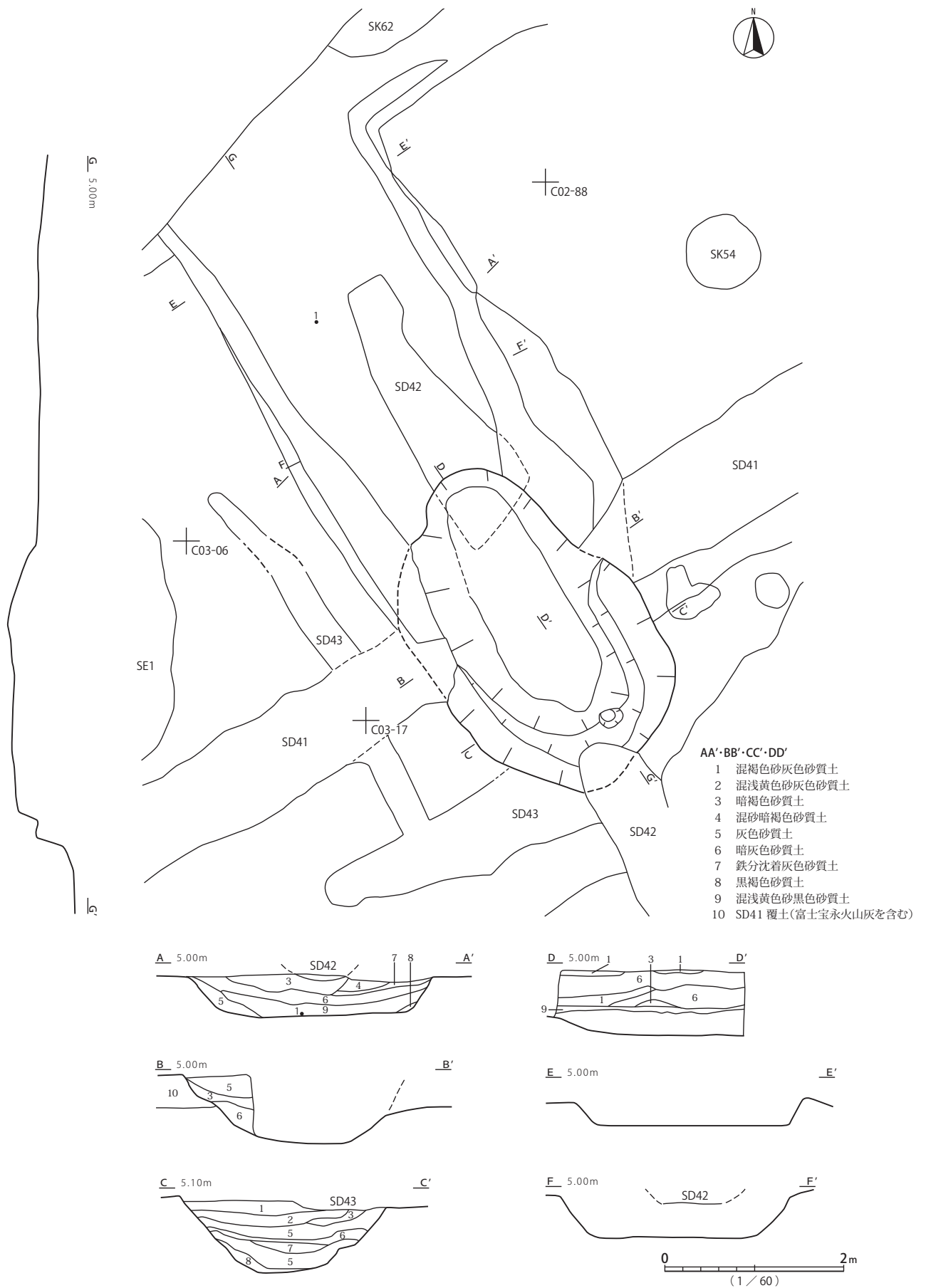
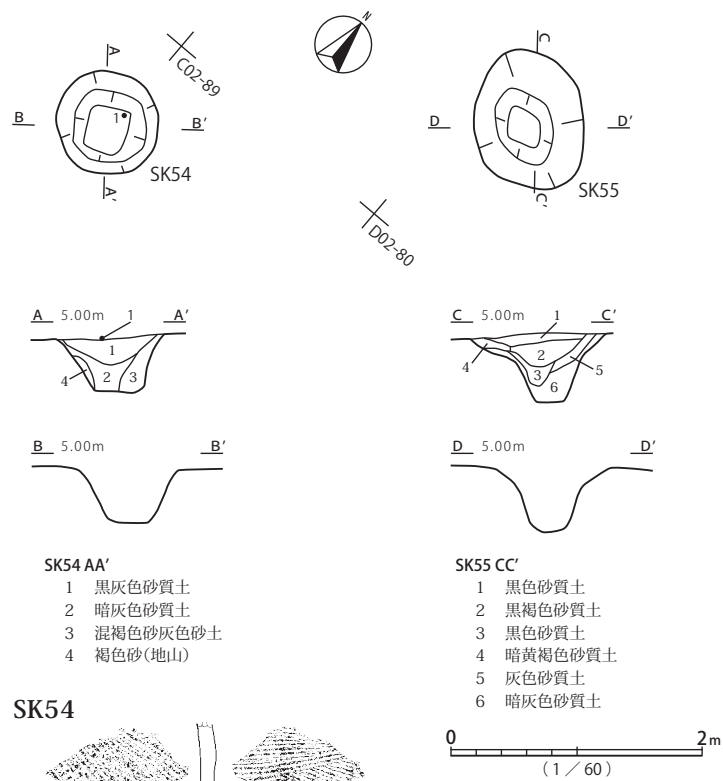
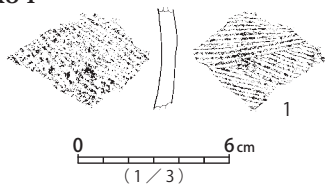


Fig.86 SK53 遺構実測図

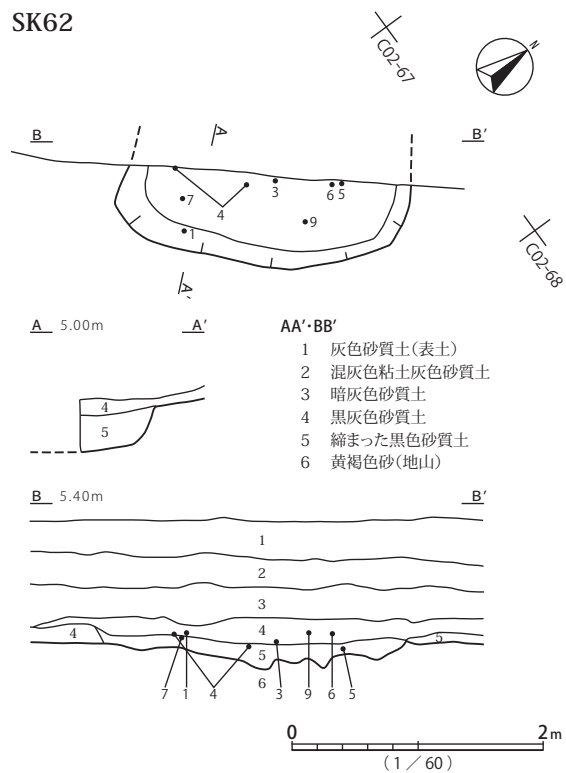
SK54・SK55



SK54



SK62



SK70

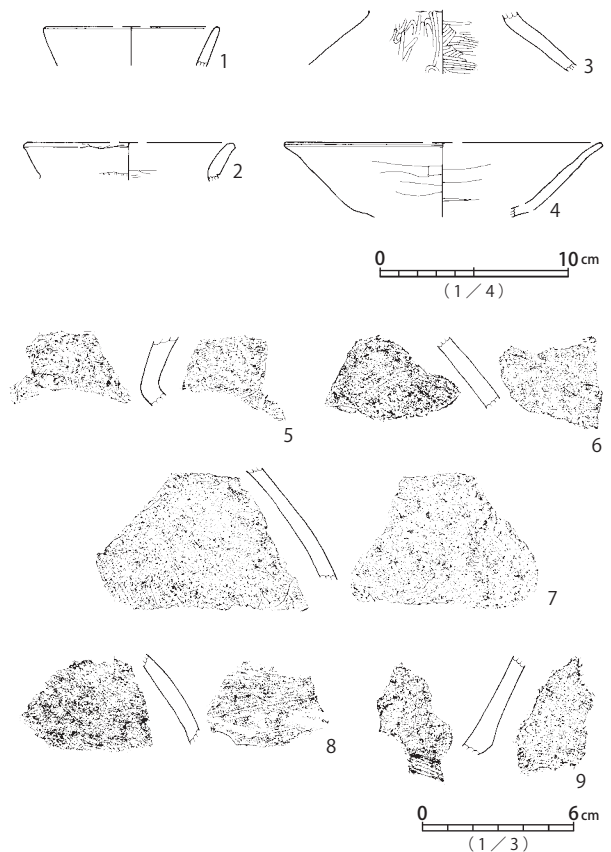
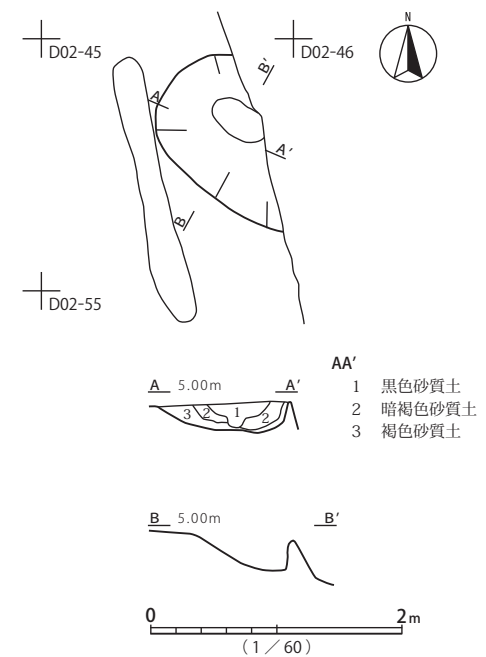


Fig.87 SK54、55、62、70 遺構・SK54、62 遺物実測図

SK56 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・88)

SK56はC02-69付近に位置する小土坑8基とその周辺に対して遺構番号を付与している。周囲は、南側の砂丘平坦面から、北西方向への傾斜変換点に位置している。遺構の重複は無い。

平面形状は楕円形を呈し、断面形は不整形を呈する。

出土遺物は、土坑外の遺構確認面から出土している。1、2は土師器高坏形土器とみられる。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK57 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・88)

SK57はD02-51付近に位置する。SK58が近接する。他の遺構との重複はない。周囲は、南側の砂丘平坦面から、北西方向への傾斜変換点に位置している。

平面形状は楕円形を呈し、断面形はレンズ状もしくは不整形を呈する。

出土遺物は、覆土中から出土している。1は土師器甕形土器、2は土師器壺形土器である。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK58 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・88)

SK58はD02-51付近に位置する。SK57が近接する。不整形の小土坑2基で構成される。他の遺構との重複は無い。周囲は、南側の砂丘平坦面から、北西方向への傾斜変換点に位置している。

平面形状は、P1が不整楕円形、P2が不整形を呈する。

出土遺物は、土坑外の遺構確認面から出土している。1は土師器高坏形土器である。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK59 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・89)

SK59はD02-33付近に位置する。SK60が隣接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状は東西方向に長い不整形を呈する。断面形状は東西方向で逆台形を呈し、南北方向では不整形を呈する。

出土遺物は無い。

遺構の性格は不明である。

遺構の帰属時期は、4から5期の範囲と考えられる。

SK60 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・89)

SK60はD02-33付近に位置する。SK59が隣接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状は東西に長い長楕円形もしくは不整形を呈する。断面形状は遺構確認面からの掘り込みが浅いため不明瞭だが、逆台形を呈するとみられる。

出土遺物は覆土中から出土しており、1、2は土師器甕形土器である。

遺構の性格は不明である。

遺構の帰属時期は、4から5期の範囲と考えられる。

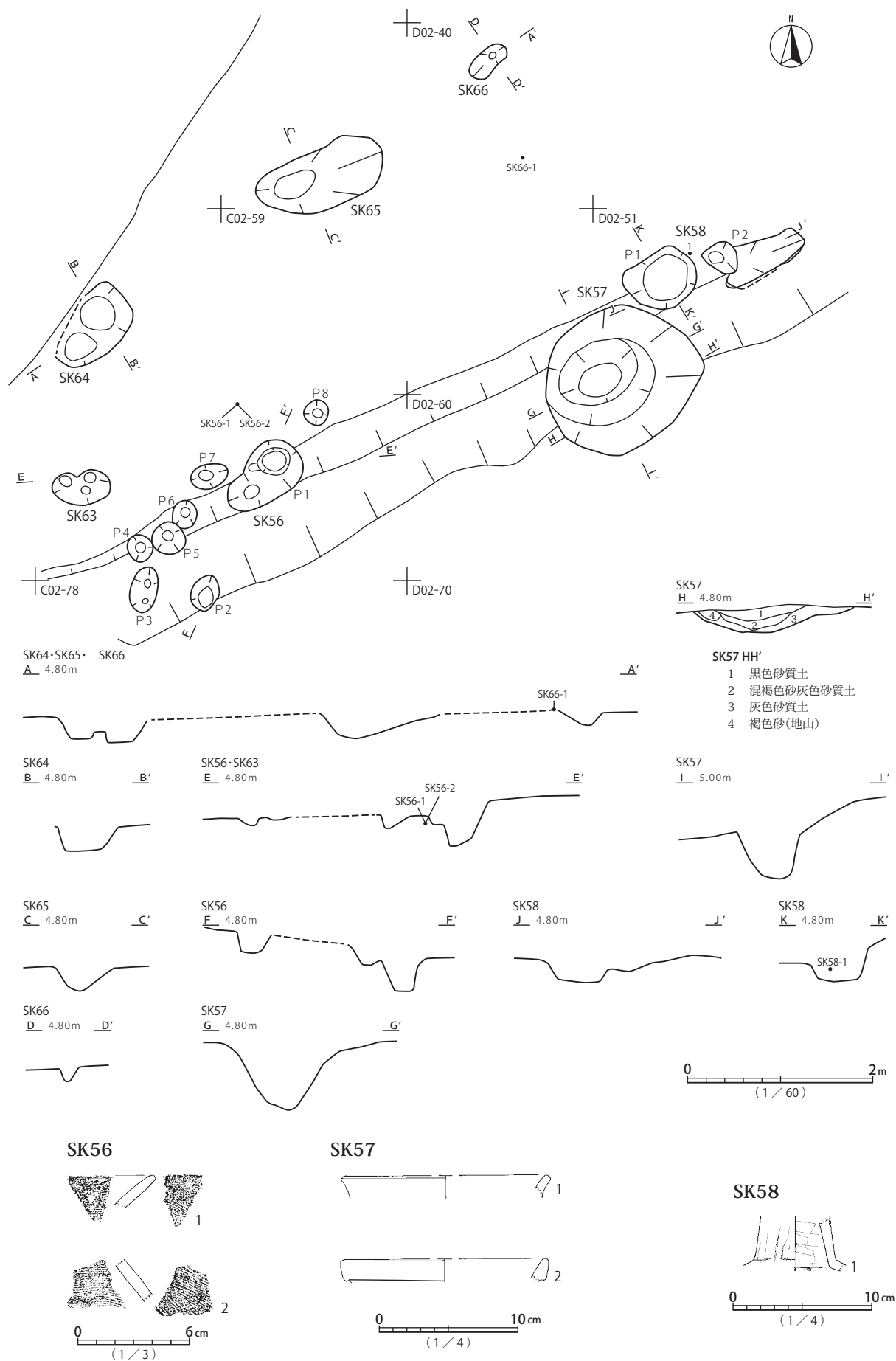


Fig.88 SK56~58, 63~66 遺構・SK56~58 遺物実測図

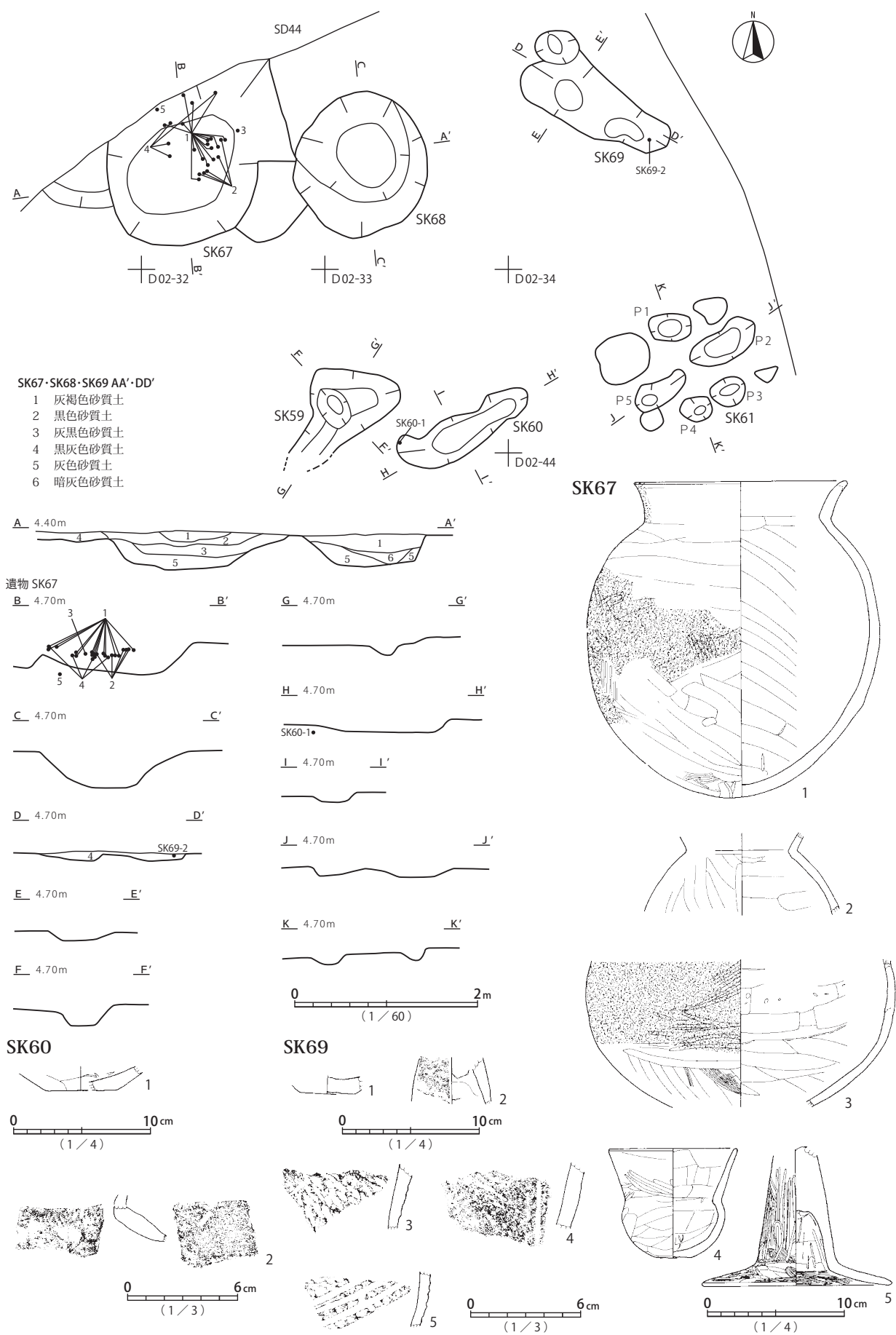


Fig.89 SK59~61, 67~69 遺構・SK60, 67, 69 遺物実測図

SK61 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・89)

SK61はD02-34付近に位置する。SK60、SK69が隣接する範囲の小土坑5基とその周囲に対して遺構番号を付与している。他の遺構との重複は無い。

平面形状は全て不整楕円形を呈し、断面形状は、遺構確認面からの掘り込みが浅いため不明瞭だが、全て不整形を呈するとみられる。

出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK62 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・87)

SK62はC02-67付近に位置する。SD42、SK53、SK63が隣接する。遺構の重複は無い。

平面形状は不整形を呈するとみられるが、遺構の北西側が調査区外に広がるため確定的ではない。断面形は判然としないが、逆台形を呈するとみられる。

出土遺物は覆土中層付近に集中して出土している。1から3は土師器壺形土器、4は土師器高坏形土器、5から8は土師器甕形土器、9は土師器高坏形土器である。

遺構の帰属時期は、4期と考えられる。

SK63 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・88)

SK63はC02-68付近に位置する。SK62、SK64が隣接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状は不整楕円形を呈し、断面形状は遺構確認面からの掘り込みが浅いため不明瞭だが、不整形を呈するとみられる。

出土遺物は無く、遺構の性格、帰属時期は不明である。

SK 64 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・88)

SK64はC02-58付近に位置する。SK63が隣接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状は不整楕円形を呈するとみられるが、北西側は調査区外に広がっているとみられ、確定的ではない。

出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK 65 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・88)

SK65はC02-49付近に位置する。SK64が隣接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状は不整楕円形を呈し、断面形は漏斗状を呈する。

出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK 66 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・88)

SK66はD02-40付近に位置する。SK65が隣接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状、断面形状共に不整形を呈する。

帰属する出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK67 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・89)

SK67はD02-22付近に位置する。SK68、SD44と重複する。先後関係は、土層断面図からでは判然としない。

平面形状は、不整形を呈するが、土坑が複数重複している可能性もあり、元来は隅丸方形に近い楕円形を呈する可能性がある。

出土遺物は、覆土中位より上層に集中して出土している。1から3は土師器甕形土器、4は土師器壺形土器、5は土師器高坏形土器である。

遺構の性格は不明である。

遺構の帰属時期は、4c期とみられる。

SK68 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・89)

SK68はD02-23付近に位置する。北側にSD44が隣接する。SK67と重複するが、遺構の先後関係は、土層断面図では判然としない。

平面形状は楕円形を呈し、断面形状は逆台形を呈する。

出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK69 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・89)

SK69はD02-24付近に位置する。北側にSD44が隣接する。SK68、SK61が近接するが、他の遺構との重複は無い。

平面形状は不整形を呈し、断面形状は遺構確認面からの掘り込みが浅いため不明瞭であるが、不整形を呈するとみられる。

出土遺物は、底面からやや浮いて出土している。2は土師器高坏形土器である。

遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SK70 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・87)

SK70はD02-45付近、SD41の北側のSX13の包含層調査範囲に位置する。他の遺構との重複は無い。遺構番号を付与していないが、道路の滑り止め遺構に似た幅狭の溝3条が近接する。

平面形状は楕円形と見られるが、遺構の東側が調査区外に広がるため、確定的ではない。断面形は不整形を呈する。

出土遺物は無く、遺構の性格、遺構の帰属時期は不明である。

SE1 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・90・120)

SE1はC03-04付近に位置する。南側にSD41、西側にSK44が近接する。東側にSK53が隣接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状は円形を呈するが、北側に溝状の掘り込みが接続する。この溝状の掘り込みと平面形状円形部分との時期差を示す資料は確認できない。隣接するSK53においても、同様に本体に対し北側から接続する溝状の掘り込みが接続しているため、同様な形状を呈する可能性は認められる。ここでは

同時期に機能したものとして捉えておく。

断面形は東西方向では逆台形を呈し、南北方向ではレンズ状に近い丸みを帯びる。法面や遺構確認面付近で本遺構に付属するとみられるピットは検出されていない。

出土遺物は覆土中に偏り無く散漫に出土している。1、2、5は土師器甕形土器、3、4は土師器高坏形土器、8は流紋岩製の砥石、9は黒雲母花崗閃緑岩製の磨石、10は古瀬戸後期の深皿・盤類である。他に動物骨が覆土下層から出土している。

遺構の性格は形状から井戸とみられる。調査時においても湧水が確認されている。

遺構の帰属時期は、古瀬戸深皿・盤類が出土しているが、遺構の形状、出土遺物の時期も幅が認められることから、現場所見も鑑み、古代以降としておく。

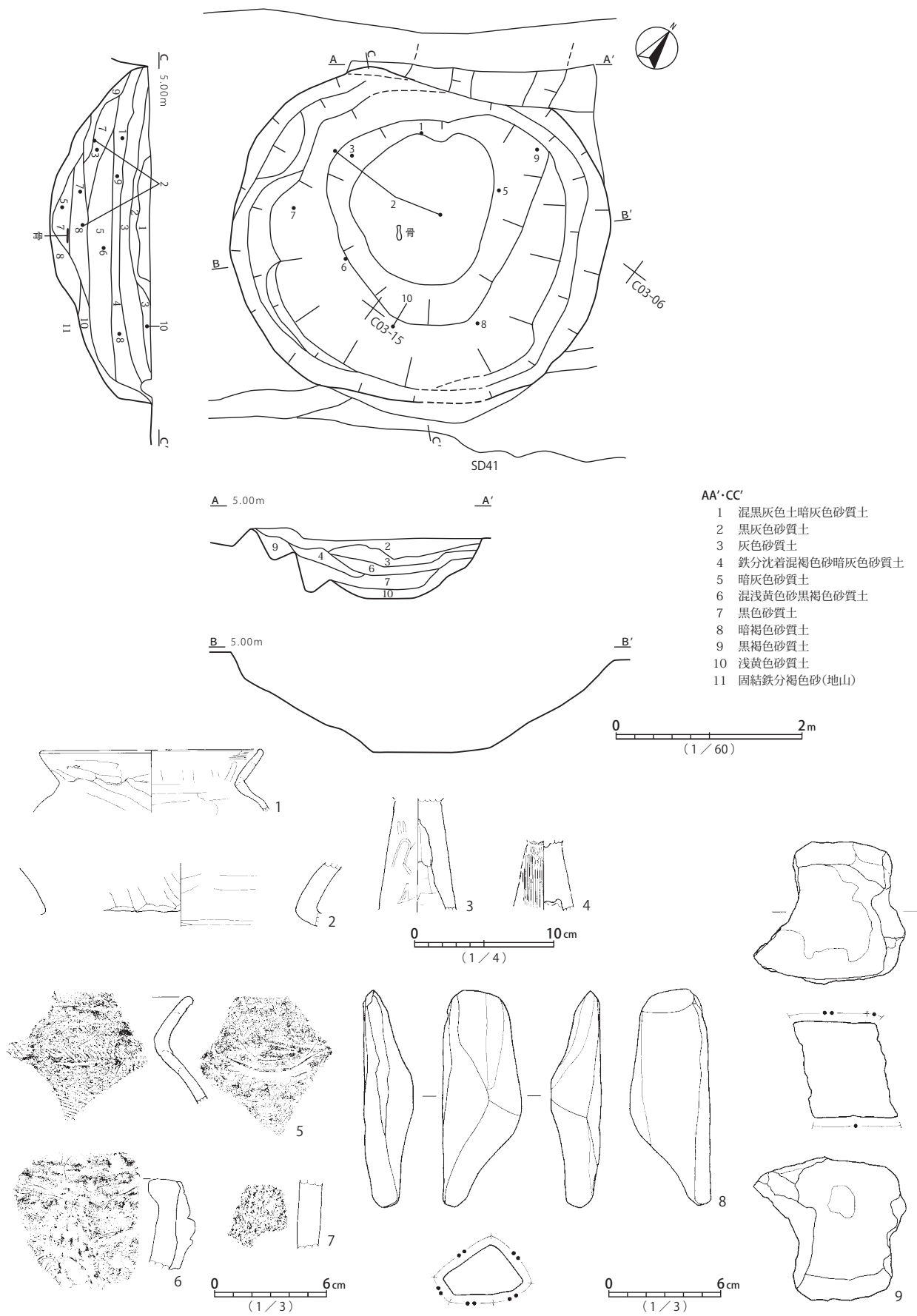


Fig.90 SE1 遺構・遺物実測図

第5節 ピット

SH1 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・91)

SH1はP16-28付近、SD2内に位置する。SD2以外の遺構の重複は無い。SD2との先後関係は土層断面図では判断できない。

平面形状は楕円形を呈すると見られるが、東側を欠損している。断面形はレンズ状を呈すると見られる。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は不明である。

SH2 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・91)

SH2はP16-08付近、SM1の墳丘内に位置する。単独のピット1基に対して遺構番号を付与しているが、東側に近接するSH3と共にSB1に連続した掘立柱建物跡に組み込まれる可能性もある。

平面形状は楕円形を呈すると見られ、断面図上では柱痕跡は確認できない。

出土遺物は無く、遺構の性格や帰属時期は断定できない。

SH3 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・91)

SH3はQ16-00付近、SM1の墳丘内に位置する。SH2に隣接するピット11基に対して遺構番号を付与しているが、周辺に近接するSH2と共にSB1に連続した掘立柱建物跡に組み込まれる可能性もある。

遺構の先後関係は、土層断面図から本遺構がSD3に対して先行する。SM1との先後関係は判然としない。

平面形状は楕円形を呈すると見られ、断面図上ではP7以外では柱痕跡は確認できない。P7でも柱当たりは確認していない。

出土遺物は無く、遺構の性格や帰属時期は断定できない。

SH4 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・92)

SH4はQ16-01付近、SM1の墳丘内に位置する。SD3が近接する。SB1の南西ピット(P5)と重複し、土層断面図から、先後関係は本遺構がSB1に対して後出する。

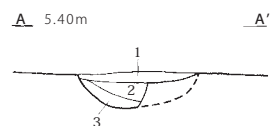
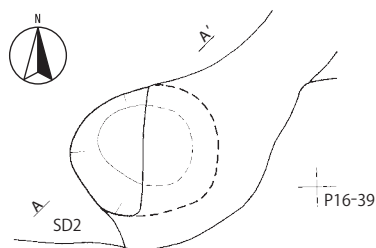
平面形状は楕円形で、断面形は逆台形を呈すると見られる。平面形状と規模から土坑とすべきかもしれないが、周囲のピット群、掘立柱建物跡との関連があるものと判断したため、ここで扱う。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は不明である。

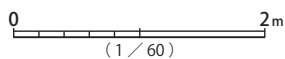
SH5 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・92)

SH5はQ15-67付近、SM3墳丘周辺に位置する。本遺構はP1からP6のピット6基に対して遺構番号を付与している。1間×2間の掘立柱建物跡としても認識可能だが、東西方向の柱間と向きが安定的ではないため、ここではピット群としておく。南側に本遺構に主軸を揃えるようにSD5が位置し、本遺構に伴う溝である可能性がある。遺構の先後関係を示す資料は無い。

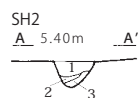
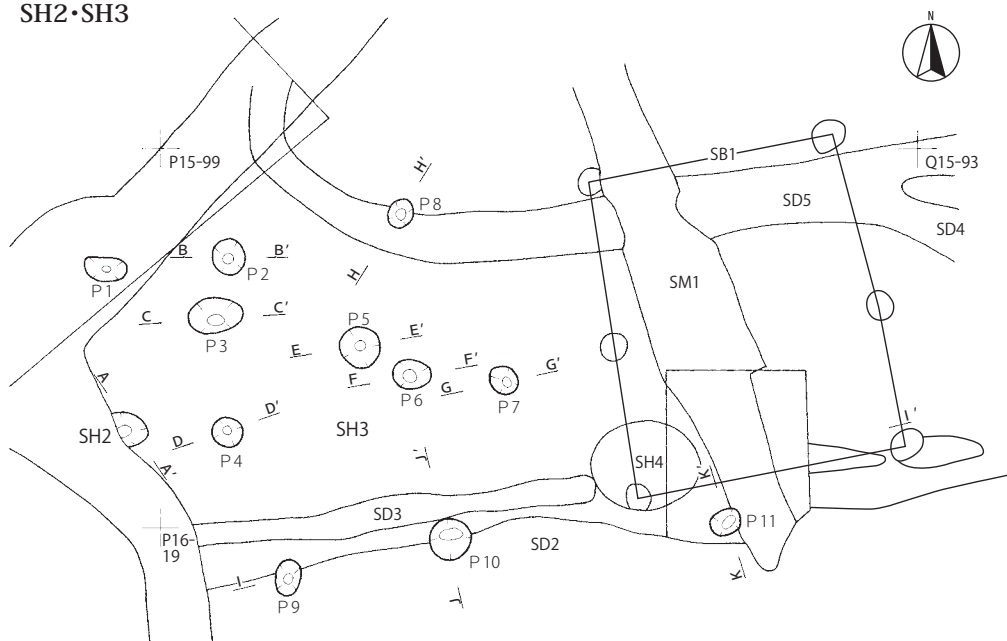
SH1



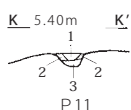
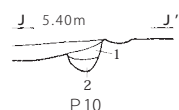
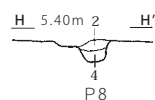
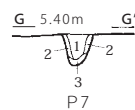
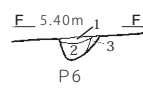
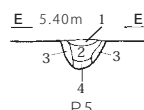
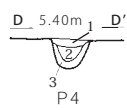
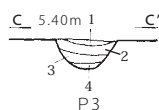
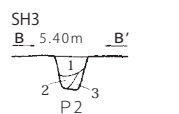
- AA'
- 1 暗褐色 有機質砂土主体。
 - 2 黒色 有機質砂土。極めて黒い。
 - 3 暗灰色 地山崩壊色砂土含む。



SH2・SH3



- SH2 AA'
- 1 黒色 有機質砂土。締まる。
 - 2 暗灰色 暗灰色地山砂土と有機質砂土の混合土。有機質砂土量多い。
 - 3 暗橙色 地山崩壊暗橙色砂土を含む有機質砂土。締まる。



- SH3 BB'・CC'・DD'・EE'・FF'・GG'・HH'・II'・JJ'
- 1 暗灰色 暗灰色砂質土。締まる。
 - 2 黒色 有機質砂土。締まる。
 - 3 暗橙色 地山崩壊暗橙色砂土と有機質砂土の混合土。有機質砂土量多い。
 - 4 暗灰色 地山崩壊青灰色砂土と有機質砂土の混合土。

- SH3 KK'
- 1 黒褐色 有機質砂土。
 - 2 暗褐色 地山砂土を含む有機質砂土。締まる。
 - 3 暗橙色 地山崩壊暗橙色砂土を含む有機質砂土。締まる。

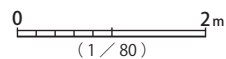
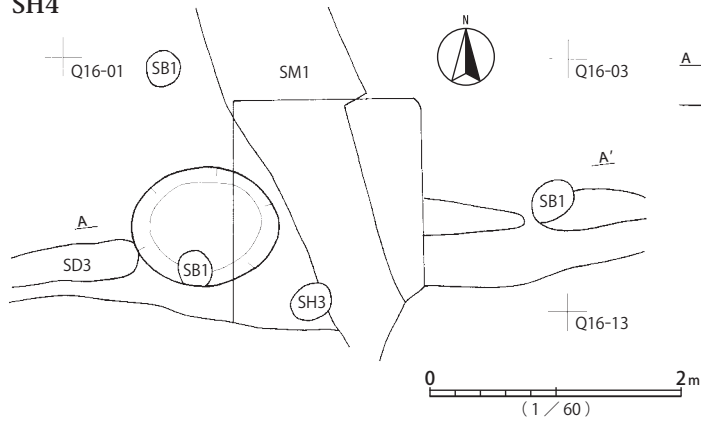


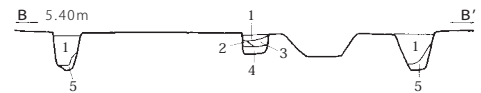
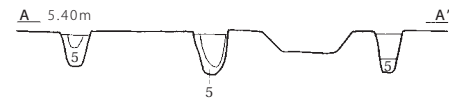
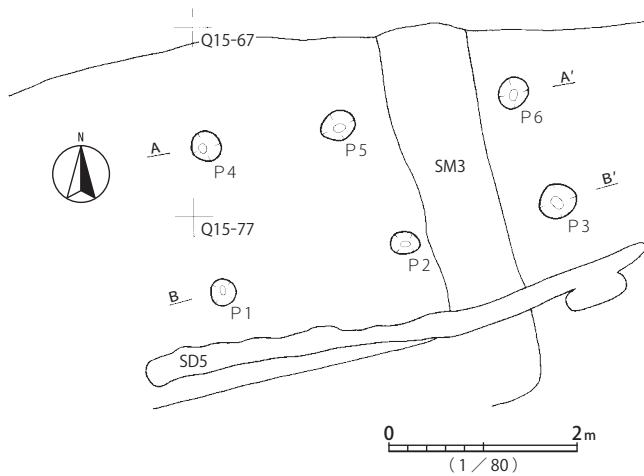
Fig.91 SH1～3 遺構実測図

SH4



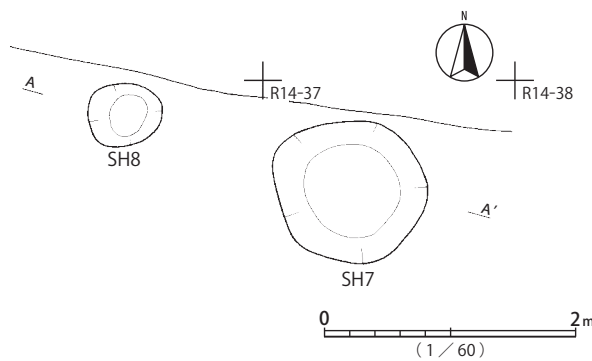
- AA'
- 1 黒色 有機質砂土主体。
 - 2 暗褐色 地山崩壊橙色砂まばらに含む。
 - 3 暗褐色 有機質土中に地山崩壊橙色砂やや多く含む。

SH5



- AA'・BB'
- 1 黒褐色 有機質強い砂土。
 - 2 暗褐色 地山崩壊橙色砂土を多く含む有機質砂土。
 - 3 暗褐色 地山崩壊橙色砂土を部分的に含む有機質砂土。
 - 4 暗褐色 3層より地山崩壊橙色砂土を多く含む。
 - 5 橙色 地山砂土主体。

SH7・SH8



- SH7 AA'
- 1 黒褐色 有機質砂土主体。締まりなし。
 - 2 暗褐色 有機質砂土と地山黄灰色砂土との混合土。締まりなし。

- SH8 AA'
- 1 暗褐色 有機質砂土と地山黄灰色砂土との混合砂土。締まりなし。
 - 2 黄灰色 地山黄灰色砂土主体に有機質砂土若干混入。

Fig.92 SH4、5、7、8 遺構実測図

平面形状はそれぞれ楕円形を呈し、土層断面図からは明瞭な柱痕跡は確認できない。柱当たりも確認されていない。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は不明である。

SH6 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・73)

SK7の項を参照。

SH7 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・92)

SH7はR14-37付近に位置する。南側にSD12、SD13、SD14が隣接し、西側にSH8が近接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状は楕円形で、断面形状はレンズ状を呈する。柱痕跡は認められない。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は不明である。

SH8 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・92)

SH8はR14-36付近に位置する。南側にSD12、SD13、SD14が隣接し、東側にSH7が近接する。他の遺構との重複は無い。

平面形状は楕円形で、断面形状はレンズ状を呈する。柱痕跡は認められない。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は不明である。

SH9 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・93)

SH9はY07-64付近に位置する。西側にSK23、SK24、東側にSK26、北側にSD34に囲まれた範囲に位置する。周囲から掘り込みに伴わずに出土する遺物はSX2として遺構番号を付与している。その他の遺構の重複はない。

平面形状は楕円形で、断面形状は不明である。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は確定的ではないが、SX2に伴う2期のものとしておく。

SH10 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・93)

SH10はY07-64付近に位置する。西側にSK23、SK24、東側にSK26、北側にSD34に囲まれた範囲に位置する。周囲から掘り込みに伴わずに出土する遺物はSX2として遺構番号を付与している。その他の遺構の重複はない。

平面形状は楕円形で、断面形状は不明である。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は確定的ではないが、SX2に伴う2期のものとしておく。

SH11 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・93)

SH11はY07-65付近に位置する。西側にSK23、SK24、東側にSK26、北側にSD34に囲まれた範囲に位置する。周囲から掘り込みに伴わずに出土する遺物はSX2として遺構番号を付与している。その他の遺構の重複はない。

平面形状は楕円形で、断面形状は不明である。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は確定的ではないが、SX2に伴う2期のものとしておく。



Fig.93 SH9~17、SX2 遺構・SH13、SX2 遺物実測図

SH12 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・93)

SH12はY07-65付近に位置する。西側にSK23、SK24、東側にSK26、北側にSD34に囲まれた範囲に位置する。周囲から掘り込みに伴わずに出土する遺物はSX2として遺構番号を付与している。その他の遺構の重複はない。

平面形状は楕円形で、断面形状は不明である。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は確定的ではないが、SX2に伴う2期のものとしておく。

SH13 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・93)

SH13はY07-65付近に位置する。西側にSK23、SK24、東側にSK26、北側にSD34に囲まれた範囲に位置する。周囲から掘り込みに伴わずに出土する遺物はSX2として遺構番号を付与している。その他の遺構の重複はない。

平面形状は楕円形で、断面形状は不明である。

出土遺物は、1は弥生土器壺形土器である。遺構の性格や遺構の帰属時期は確定的ではないが、SX2に伴う2期のものとしておく。

SX2は久ヶ原式期の土器集中地点であるが、遺構プランは不明で、周辺ピット群と一連の可能性が考えられる。帰属時期は2a期としておく。

SH14 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・93)

SH14はY07-55付近に位置する。西側にSK23、SK24、東側にSK26、北側にSD34に囲まれた範囲に位置する。周囲から掘り込みに伴わずに出土する遺物はSX2として遺構番号を付与している。その他の遺構の重複はない。

平面形状は楕円形で、断面形状は不明である。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は確定的ではないが、SX2に伴う2期のものとしておく。

SH15 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・93)

SH15はY07-56付近に位置する。西側にSK23、SK24、東側にSK26、北側にSD34に囲まれた範囲に位置する。周囲から掘り込みに伴わずに出土する遺物はSX2として遺構番号を付与している。その他の遺構の重複はない。

平面形状は楕円形で、断面形状は不明である。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は確定的ではないが、SX2に伴う2期のものとしておく。

SH16 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・29・93)

SH16はY07-43付近に位置する。南西側にSK23、SK24、東側にSK26、北東側にSI22、SK25に囲

まれた範囲に位置する。周囲から掘り込みに伴わずに出土する遺物はSX2として遺構番号を付与している。SI22と重複し、土層断面図からは本遺構がSI22に対し先行する。

平面形状は楕円形で、断面形状はレンズ状を呈する。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は確定的ではないが、SX2に伴う2期のものとしておく。

SH17 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・93)

SH17はY07-26付近に位置する。西側にSI22、SD35が隣接する。周囲は攪乱坑が複数認められる。

平面形状は円形で、断面形状は不明である。

出土遺物は無く、遺構の性格や遺構の帰属時期は明確には判断できない。

第6節 溝

山新遺跡・白塚出途遺跡では、溝または溝状遺構について遺構番号単位で44条を確認している。ただし、その殆どが時期不明もしくは近世以降に帰属するものであるため、ここでは明らかに近世より遡る遺構についてのみ触れることとし、それ以外は位置を示すに留めた。

SD1 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・6・94・122)

SD1はP16-07付近に位置する。SM1の西側周溝と重複する。SM1との先後関係は土層断面図 (Fig.122) によれば本遺構がSM1に対して先行するように見える。現場所見では古代（奈良・平安時代以降）となっており、ここでもそれに従う。

SD2 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・6・94)

SD2はP16-15～Q16-02付近、SM1の南側に位置する溝跡としているが、法面は北側でしか検出していない。南側法面があるとすれば調査区外となる。先後関係は、土層断面図から本遺構がSH3のピットに対して後出する。実測遺物は無い。帰属時期は現場所見では古代（奈良・平安時代以降）となっている。

SD3 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・6・94)

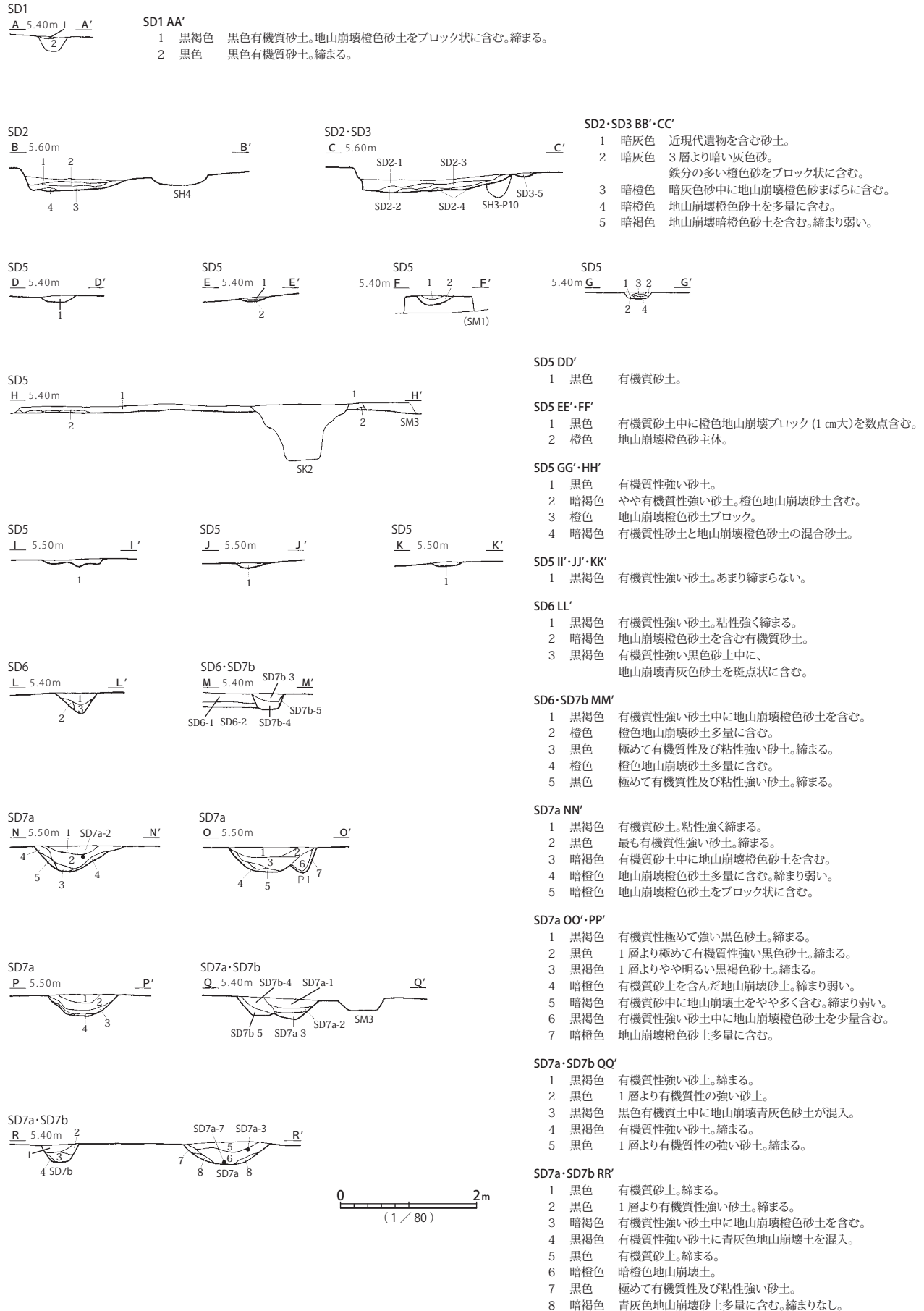
SD3はP16-09～Q16-03付近、SM1墳丘内に位置する。SD2に並行して近接する。SH3と重複するが先後関係は不明。実測遺物は無い。帰属時期は不明である。

SD4 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・6・94)

SD4はQ15-93付近に位置する。SD5と重複もしくは分岐する溝状遺構であるが、SD6に分断されて途切れる。遺構の先後関係は不明。実測遺物は無い。

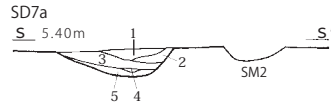
SD5 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・6・94・96・122)

SD5はP15-79～R15-63付近に位置する。砂堆の方向に沿って東西方向に伸び、途中でSD4と重複もしくは分岐するが、西端部で北へ屈曲する。先後関係はSK2に対して先行し、SM1に対して後出する。出土遺物は、1の須恵器甕である。SH5と近い時期である可能性がある。



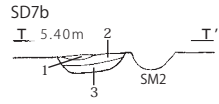
(Fig.5-6 全体図(1) (2)参照)

Fig.94 SD1～3、5、6、7a、7b 遺構実測図



SD7a SS'

- 1 黒色 有機質性強い砂土中に橙色砂ブロック若干含む。
- 2 暗橙色 有機質性強い砂土及び橙色砂土を5cm大のブロック状に含む。
- 3 暗橙色 2層より有機質砂土多く締まる。
- 4 灰色 地山崩壊灰色砂ブロック。
- 5 黒色 有機質性強い砂土中に5cm大の灰色砂ブロック含む。



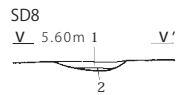
SD7b TT'

- 1 暗灰色 地山崩壊灰色砂ブロック。
- 2 黒色 有機質土中に地山崩壊暗灰色砂土ブロック状に含む。
- 3 暗灰色 有機質性砂土ブロック状に含む。



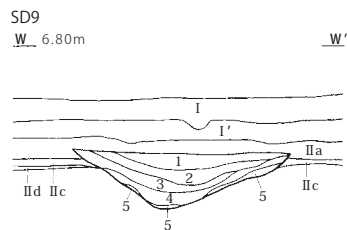
SD7a・SD8 UU'

- 1 黒褐色 有機質砂土。粘性強く締まる。
- 2 黒色 最も有機質性強い砂土。締まる。
- 3 暗褐色 有機質砂土中に地山崩壊橙色砂土を含む。
- 4 暗褐色 地山崩壊橙色砂土多量に含む。締まり弱い。
- 5 黒色 有機質砂土。粘性強く締まる。
- 6 橙色 地山崩壊橙色砂土を多量に含む。



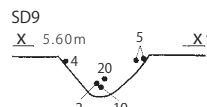
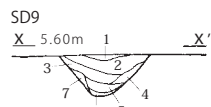
SD8 VV'

- 1 黒色 有機質砂土。締まりなし。
- 2 暗橙色 地山崩壊暗橙色砂土を含むやや有機質のある砂土。



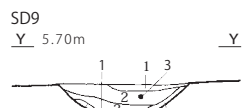
SD9 WW'

- 1 黒褐色 有機質砂土。粘性強く締まる。
- 2 黒色 1層より有機質性強い砂土。締まる。
- 3 黒色 2層より有機質性増す砂土。締まる。
- 4 黒色 最も有機質性強い砂土。締まる。
- 5 暗褐色 黒色有機質砂土と地山崩壊橙色砂土の混交土。締まりなし。
- I 暗褐色 表土上層。植物根多量。暗褐色砂土締まりなし。乾くと白っぽくなる。
- I' 暗褐色 表土下層。I層より植物根少ない。暗褐色砂土締まりなし。乾くと白っぽくなる。
- IIa 黒色 有機質砂土。
- IIc 黒色 有機質砂土。粘性強く締まる。有機質性強い。
- II d 暗褐色 暗褐色砂土。やや締まる。



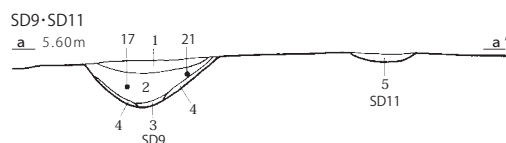
SD9 XX'

- 1 極暗褐色 黒色有機質砂土。
- 2 黒色 黒色有機質砂土。粘る。
- 3 黒色 2層よりやや明るい黒色有機質砂土。締まる。暗褐色地山崩壊土含む。
- 4 暗褐色 有機質砂土中に地山崩壊橙色砂土をブロック状に含む。
- 5 暗褐色 有機質性のやや強い砂土。締まる。粘る。
- 6 暗褐色 地山崩壊橙色砂土多量に含む。
- 7 橙色 地山崩壊橙色砂土主体。



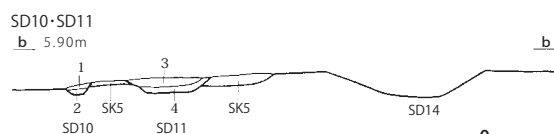
SD9・SD11 YY'・aa'

- 1 黒褐色 有機質砂土。粘性強く締まる。
- 2 黒褐色 有機質砂土中に極微量の橙色砂土含む。締まる。
- 3 黒色 最も有機質性強く粘性あり。水が絞出てくる。
- 4 暗褐色 地山崩壊暗褐色砂土多く含む。
- 5 暗褐色 地山崩壊暗褐色砂土比較的多く含む。締まり弱い。



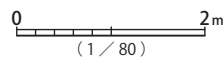
SD9 P1 ZZ'

- 1 黒色 有機質砂土。やや粘性あり。
- 2 暗褐色 地山崩壊暗褐色砂土。締まりなし。



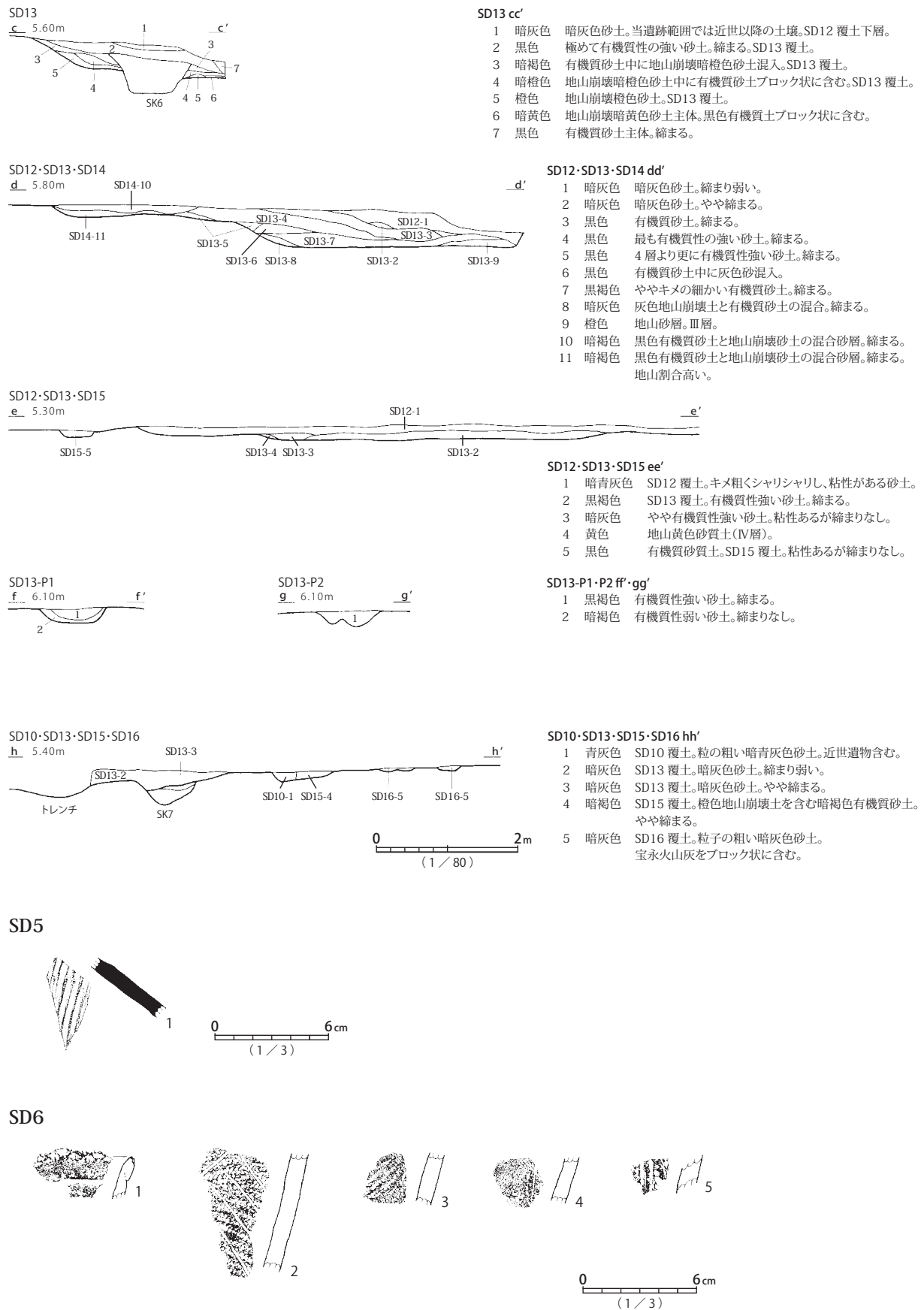
SD10・SD11 bb'

- 1 黒褐色 有機質砂土。締まる。
- 2 暗褐色 有機質性やや弱い砂土。締まりなし。
- 3 暗青灰色 比較的時期の新しい砂土。遺物含む。
- 4 暗褐色 地山崩壊橙色砂土多量に含む。



(Fig.5・6 全体図(1)(2)参照)

Fig.95 SD7a, 7b, 8~11 遺構実測図



(Fig.5・6 全体図(1)(2)参照)

Fig.96 SD10、12～16 遺構・SD5、6 遺物実測図

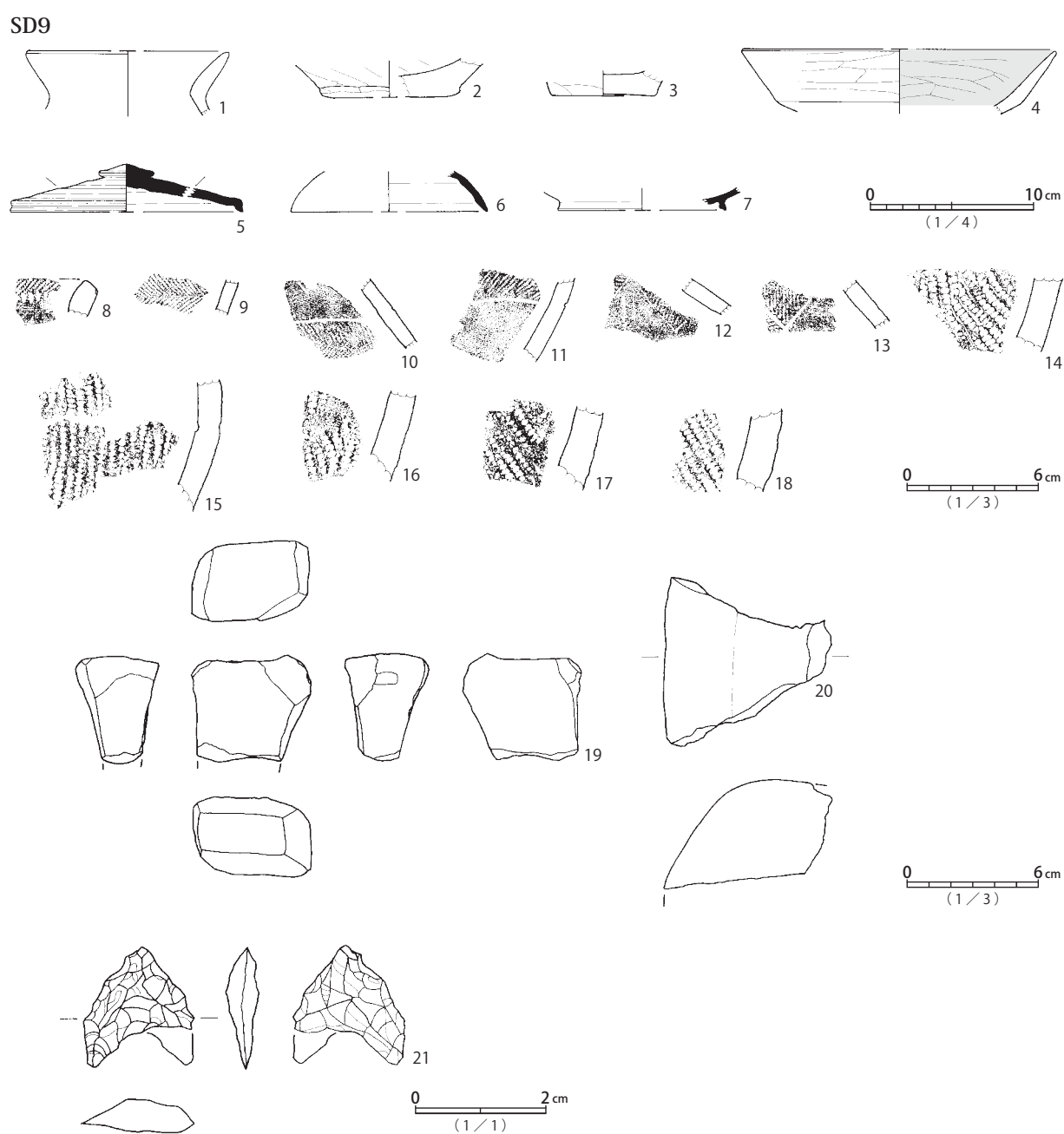
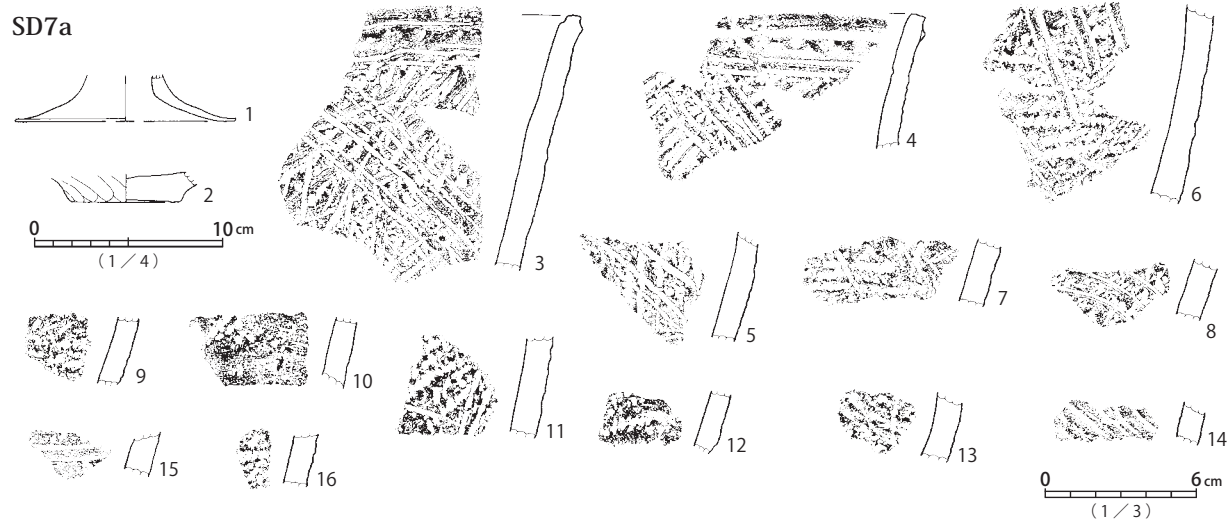
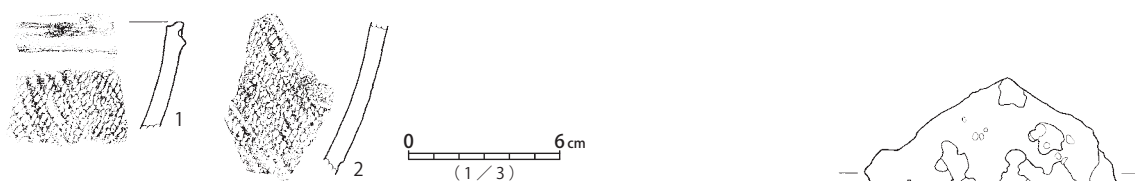
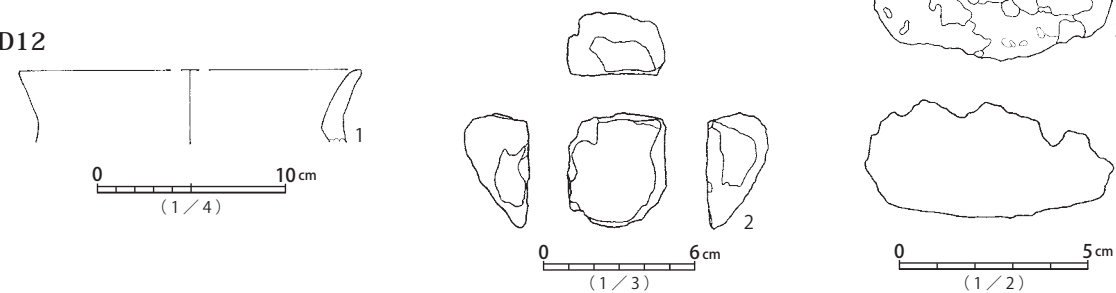


Fig.97 SD7a,9 遺物実測図

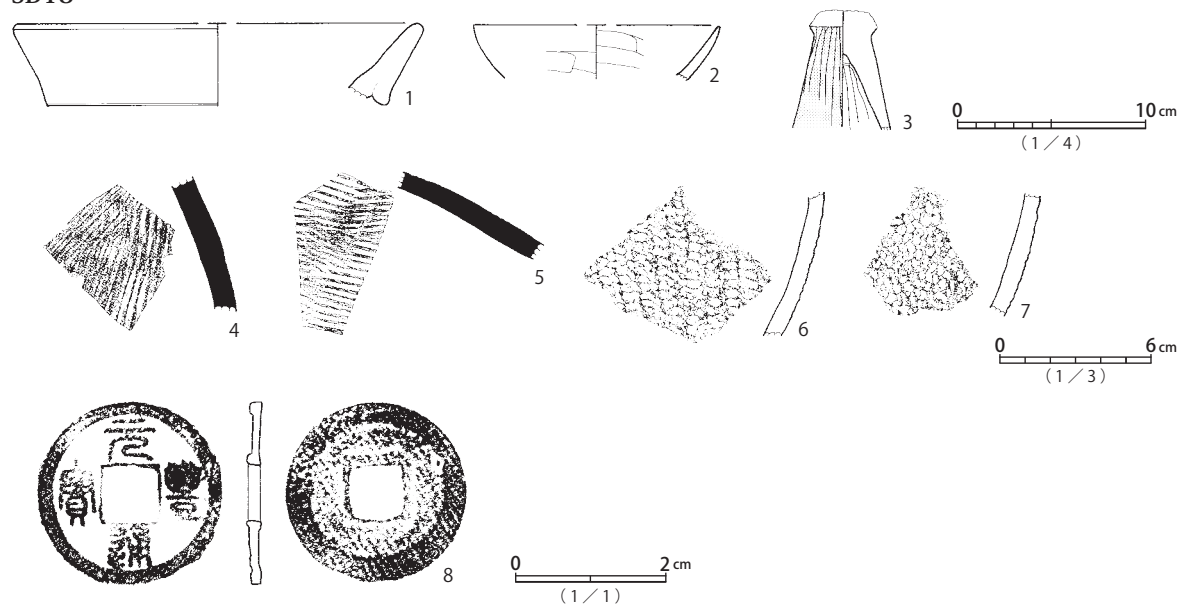
SD11



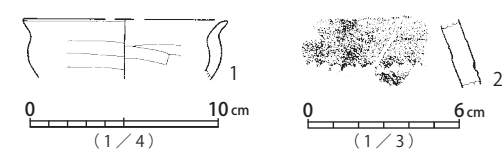
SD12



SD13



SD14



SD15

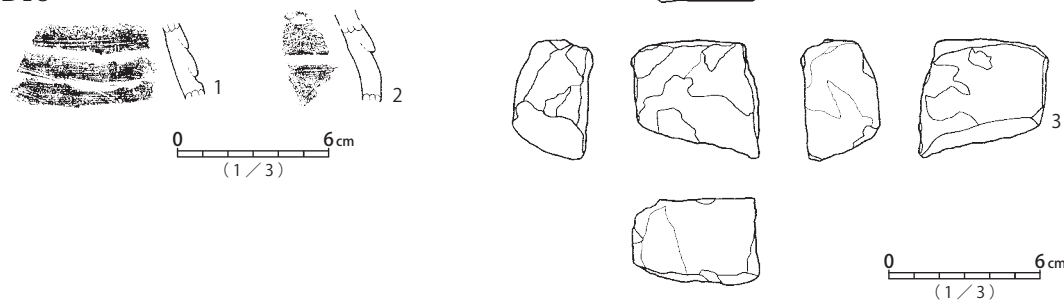


Fig.98 SD11~15 遺物実測図

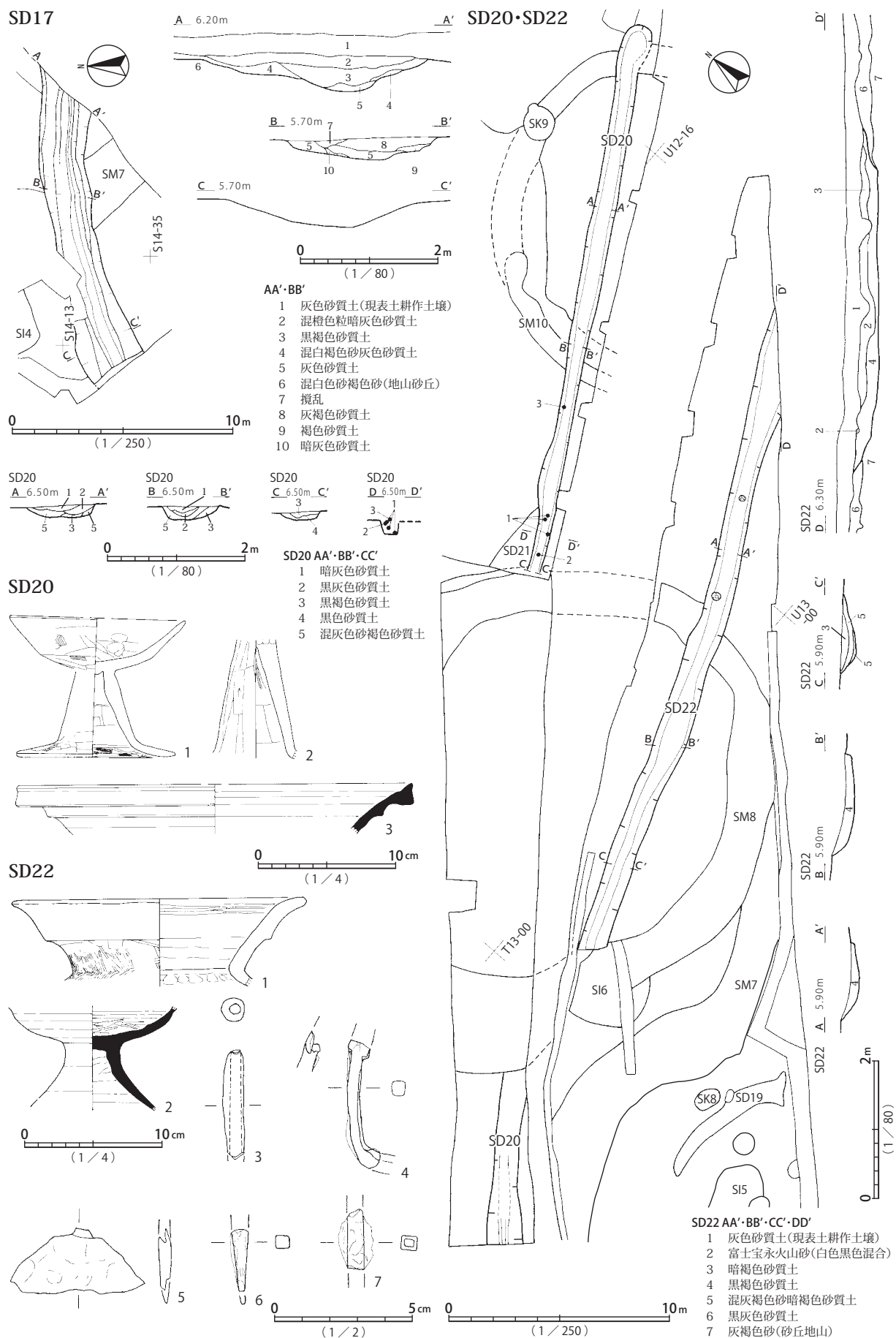


Fig.99 SD17、20、22 遺構・SD20、22 遺物実測図

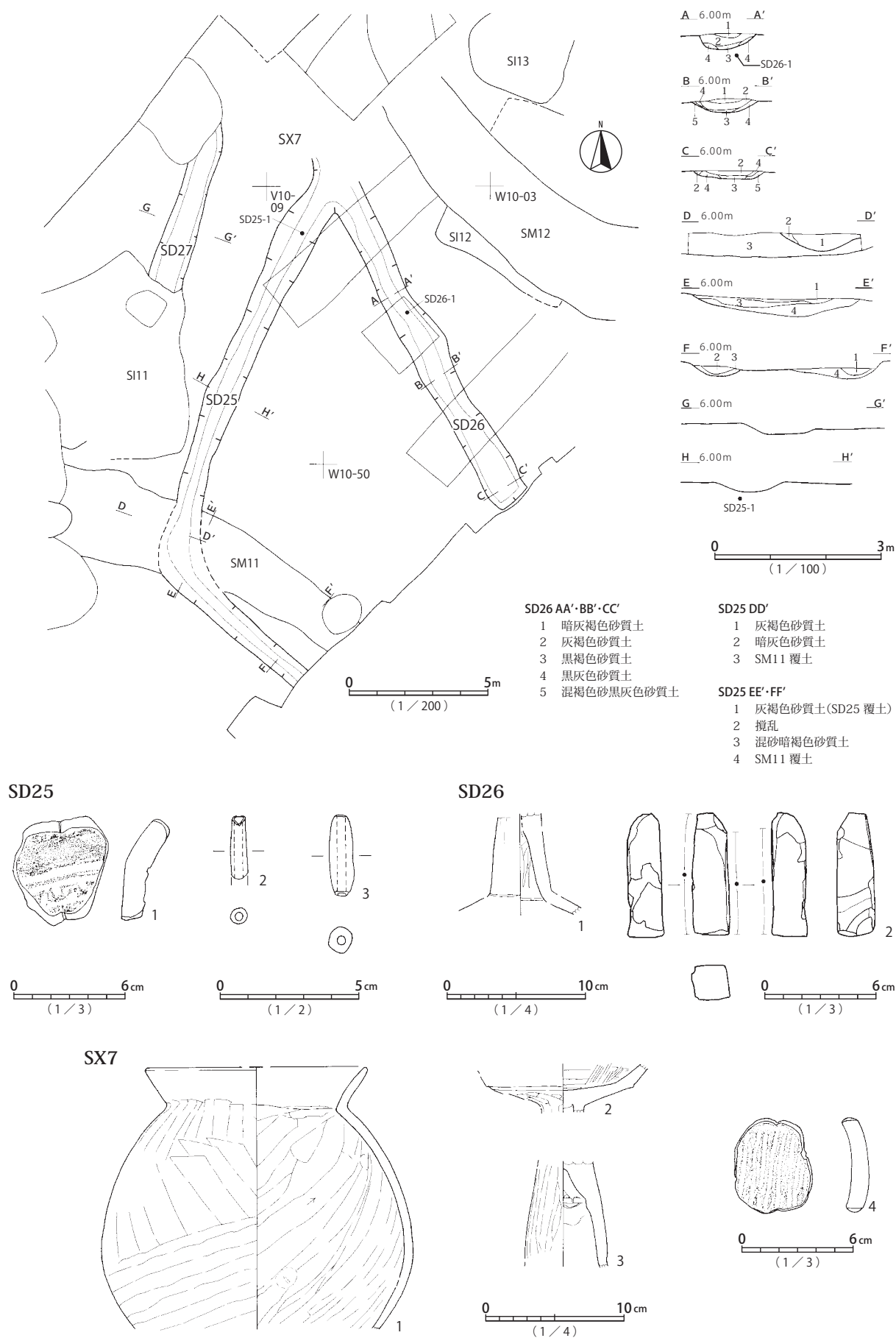


Fig.100 SD25~27, SX7 遺構・SD25、26、SX7 遺物実測図

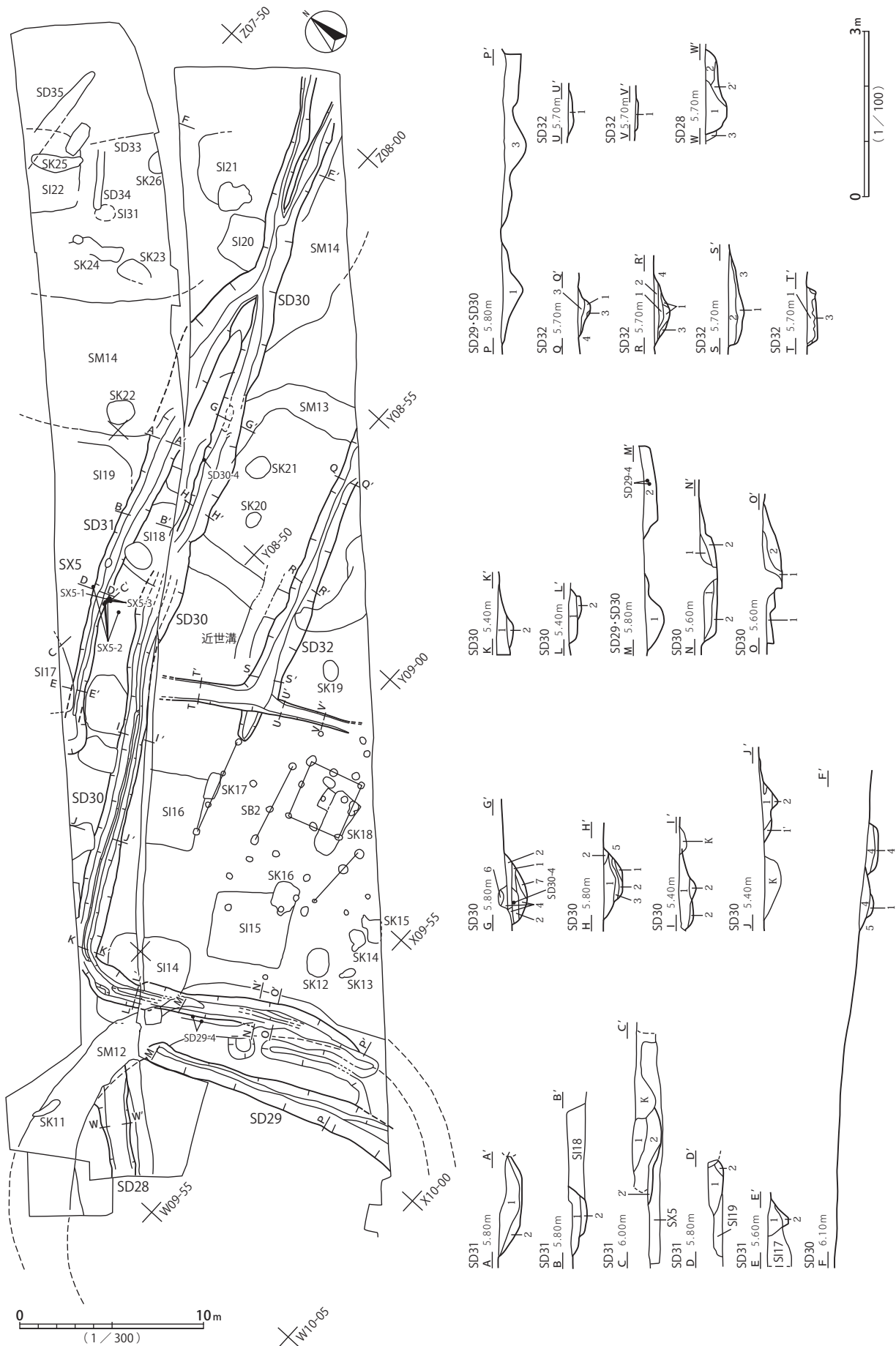


Fig.101 SD28~32, SX5 遺構実測図

SD31 AA'

- 1 黒褐色～黒色 粘質細砂 地山砂ブロック下に少し混じる 締まる
- 2 1層と地山砂層の漸移層

SD31 BB'

- 1 黒褐色 地山砂ブロック(～5cm)混じる やや締まる
- 2 地山砂層(黄灰砂)主体の覆土 ゆるい

SD31 CC'

- 1 黒褐色 細砂 やや粘性あり 鉄分の沈着が少し認められる
ややゆるい 遺物(土師器片)多い
- 2 黒色 細砂 やや粘性あり 鉄分の沈着が少し認められる
やや締まる 遺物(土師器片)多い
- 2' 2とSX5の漸移層 褐色かかった2層

SD31 DD'

- 1 黒色～黒褐色 粘質細砂 やや締まる 下位に地山砂目立つ
- 2 地山砂層土(黄灰細砂)混じりの黒褐色 粘質細砂 ややゆるい

SD31 EE'

- 1 黒色 細砂 やや粘性あり
鉄分の沈着(にぶい赤褐色)が認められる やや締まる
- 2 黒褐色～黒色 粘質細砂 黄灰地山砂ブロックが混じる やや締まる

SD30 FF'・GG'・HH'

- 1 灰色砂質土
- 2 暗灰色砂質土
- 3 細粒暗灰色砂
- 4 黒灰色砂質土
- 5 浅黄色砂(砂丘地山)
- 6 貝殻(アサリ)
- 7 混浅黄色砂灰色砂質土

SD30 II'

- 1 黒色～黒褐色 粘質砂 まばらに地山砂ブロック混じる やや締まる
- 2 黒色 粘質砂 地山砂ブロック多く混じる ややゆるい

SD30 JJ'

- 1 黒色～黒褐色 粘質砂 地山砂がまばらにに混じる やや締まる
- 1' 地山砂層が多く混じる1層
- 2 黒色 粘質砂 締まる 地山砂層のラミナが認められる

SD30 KK'

- 1 黒褐色～黒色 粘質砂 鉄分の沈着が認められる やや締まる
- 2 黒色 粘質砂 下位に地山砂小ブロック混じる やや締まる

SD30 LL'

- 1 黒色 粘質土 地山砂ブロック混じる やや締まる
- 2 黒色(やや灰かかる) 粘質砂 地山砂少し混じる やや締まる

SD29 MM'・PP'

- 1 灰色砂質土
- 2 SM12 覆土
- 3 SD30 覆土

SD30 NN'・OO'

- 1 灰褐色砂質土
- 2 SM12 周溝覆土

SD32 QQ'・RR'

- 1 灰色砂質土
- 2 明灰色砂質土
- 3 黒灰色砂質土
- 4 浅黄色砂(砂丘地山)

SD32 SS'・TT'・UU'・VV'

- 1 灰色砂質土
- 2 暗灰色砂質土
- 3 浅黄色砂(砂丘地山)

SD28 WW'

- 1 黒褐色 やや粘性のある砂 細砂 少し締まる
- 2 黒褐色 やや粘性のある細砂 少し締まる
- 2' 地山砂混じりの2層 ややゆるい
- 3 地山 にぶい黄褐色 やや粘質のある細砂 少し締まる

SD29

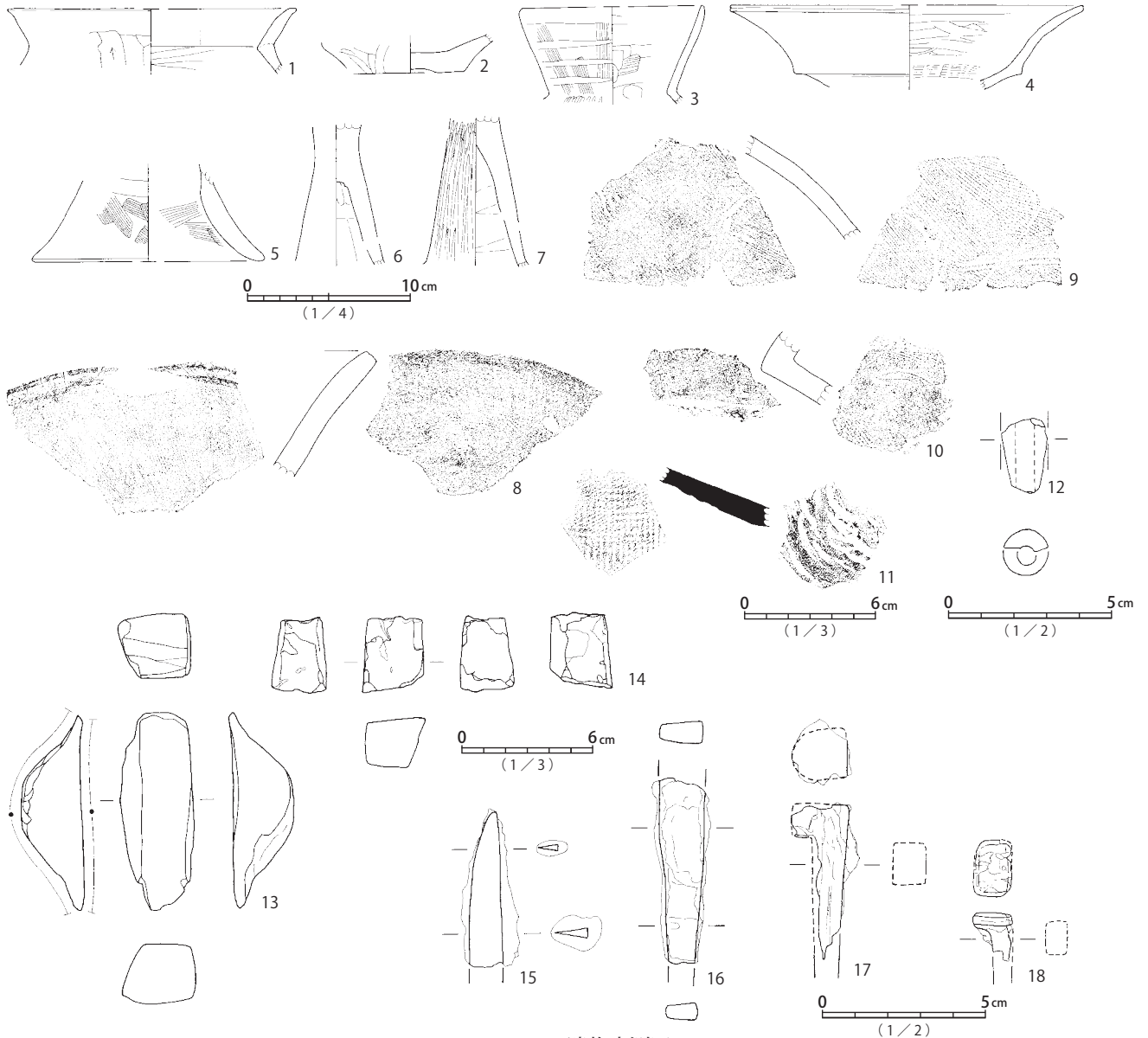


Fig.102 SD29 遺物実測図

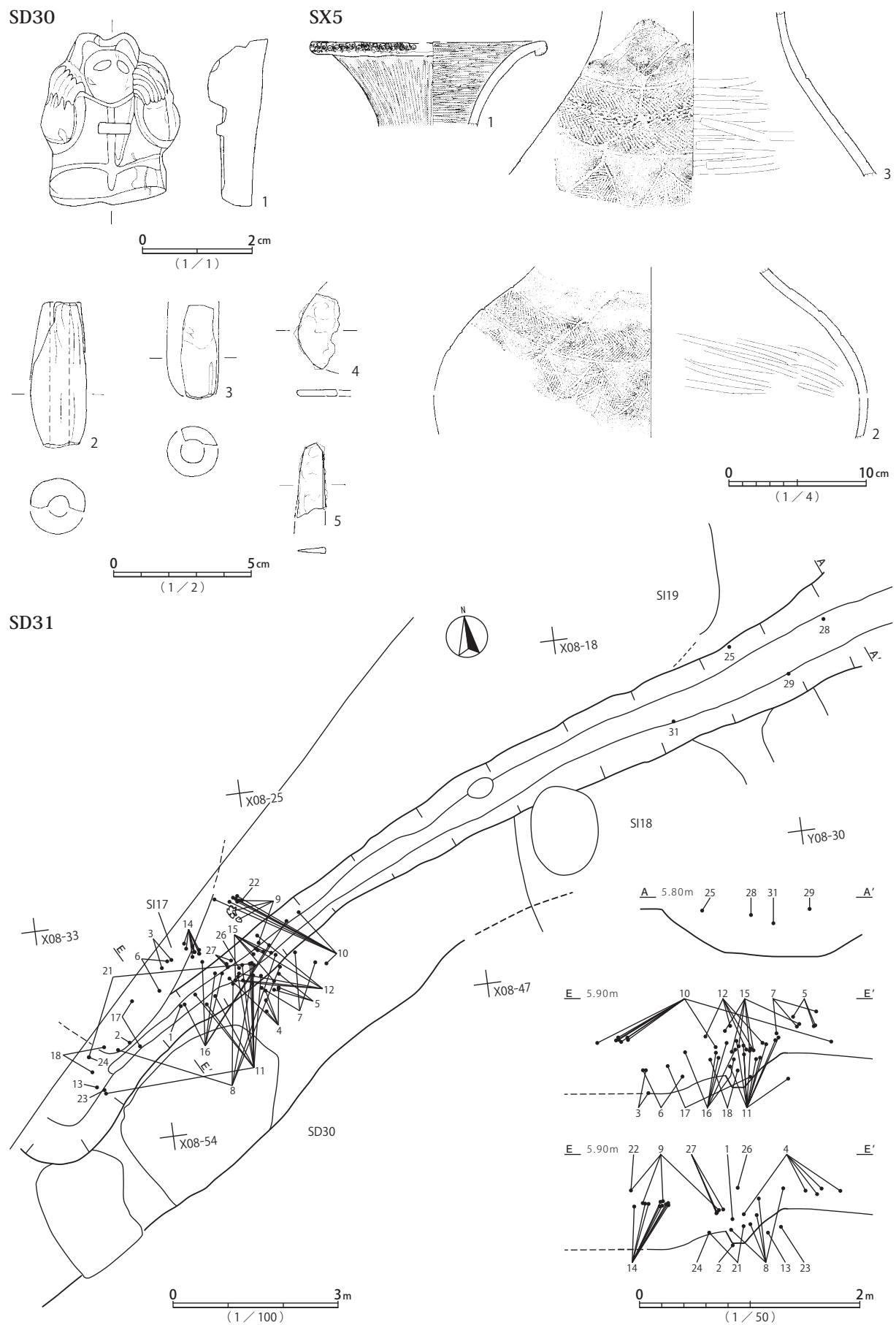


Fig.103 SD31 遺構・SD30、SX5 遺物実測図

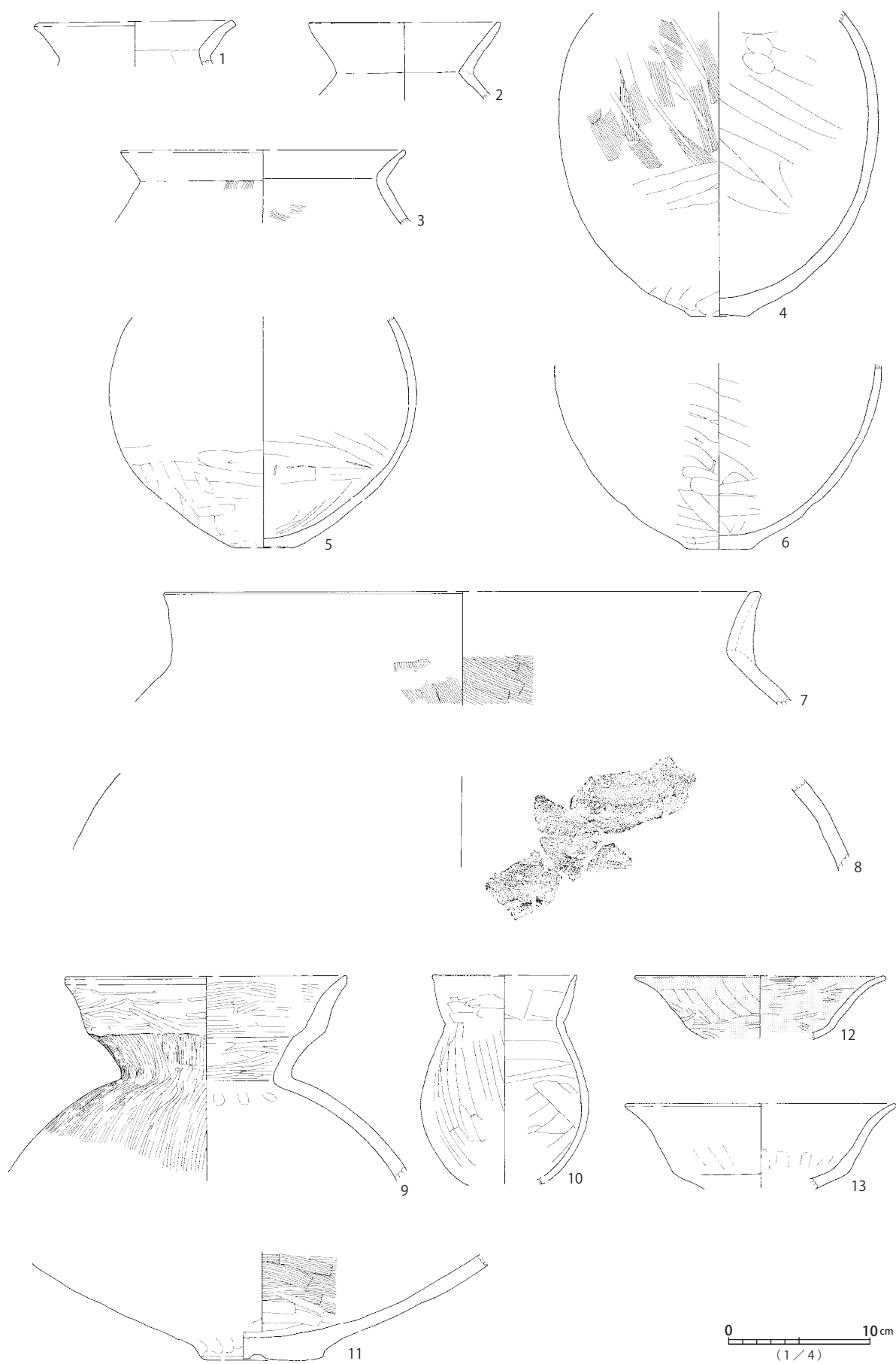


Fig.104 SD31 遺物実測図(1)

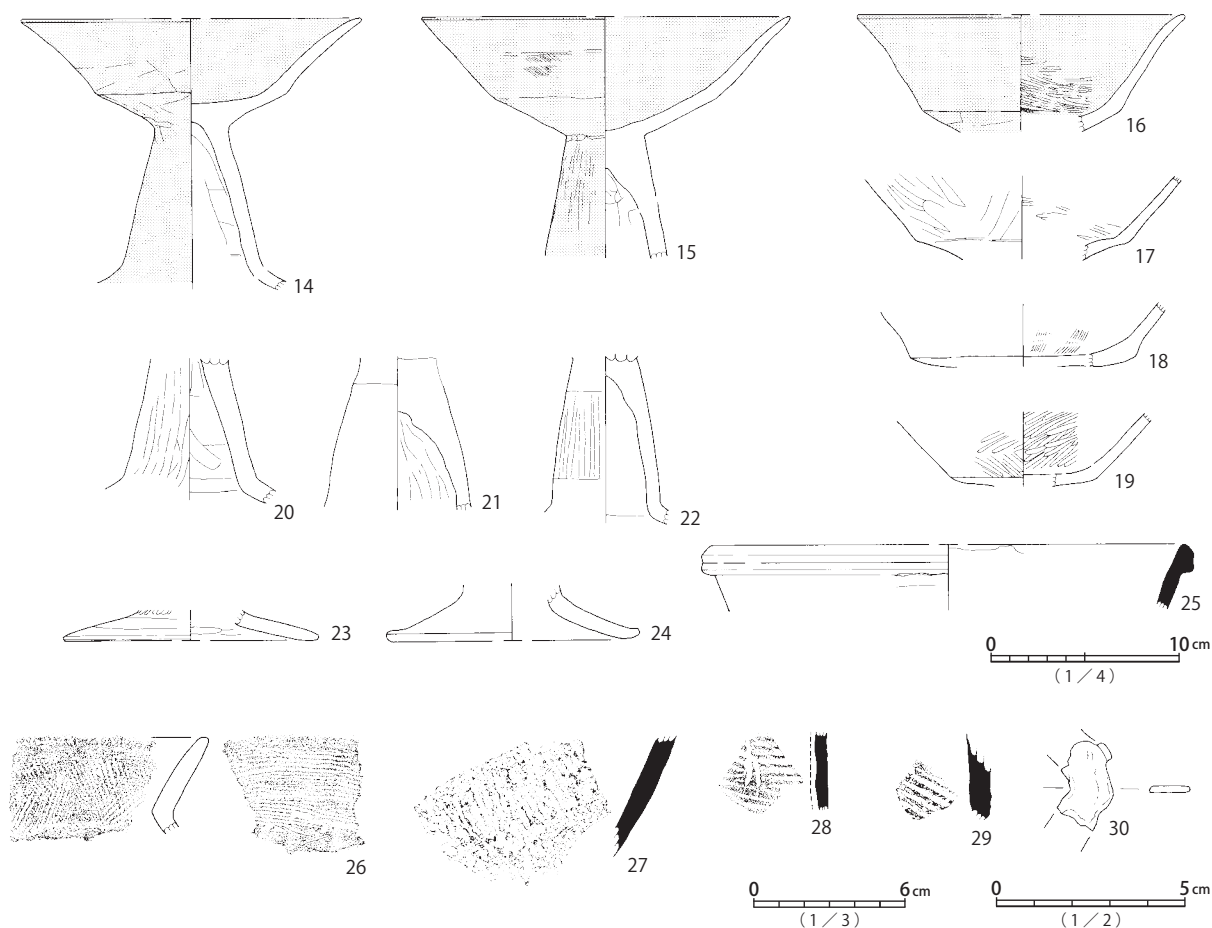


Fig.105 SD31 遺物実測図(2)

SD6 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・6・94・96)

SD6はQ15-73～Q15-93付近に位置する。SD5、SD7bに直交し、SD7bに対して先行する。出土遺物は遺構の時期を示しているとは考えにくい。

SD7a セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・6・94・95・97・122)

SD7aはQ15-51～R15-54付近に位置する。砂堆に沿って東西方向に伸びる。東西端は調査区外となる。SM2、SM3、SM5、SD6、SD7bと重複し、SD7bに対し後出する。また、P1としたピットはSH5の一部である可能性が高く、本遺構はP1に対しても後出する。

SD7b セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・6・94・95・122)

SD7bはQ15-66～Q15-70付近、SM1、SM2の間を東西方向に位置する。東側ではSD7aと重複し、西側では調査区外に伸びる。SM2、SD5、SD6、SM3、SD7aと重複するが、図面上で先後関係が明白であるのはSD6に対して後出するのみである。

SD8 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.5・95)

SD8はQ15-36～R15-33付近に位置する。SM4、SM5の間を東西方向に伸びるが、調査区内で完結している。重複する遺構は無いが、SD7aと並行して位置する。

SD9 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・95・97・122)

SD9はQ15-07～R14-96付近、SM4、SD11の間を東西方向に位置する。西端は調査区外に伸び、

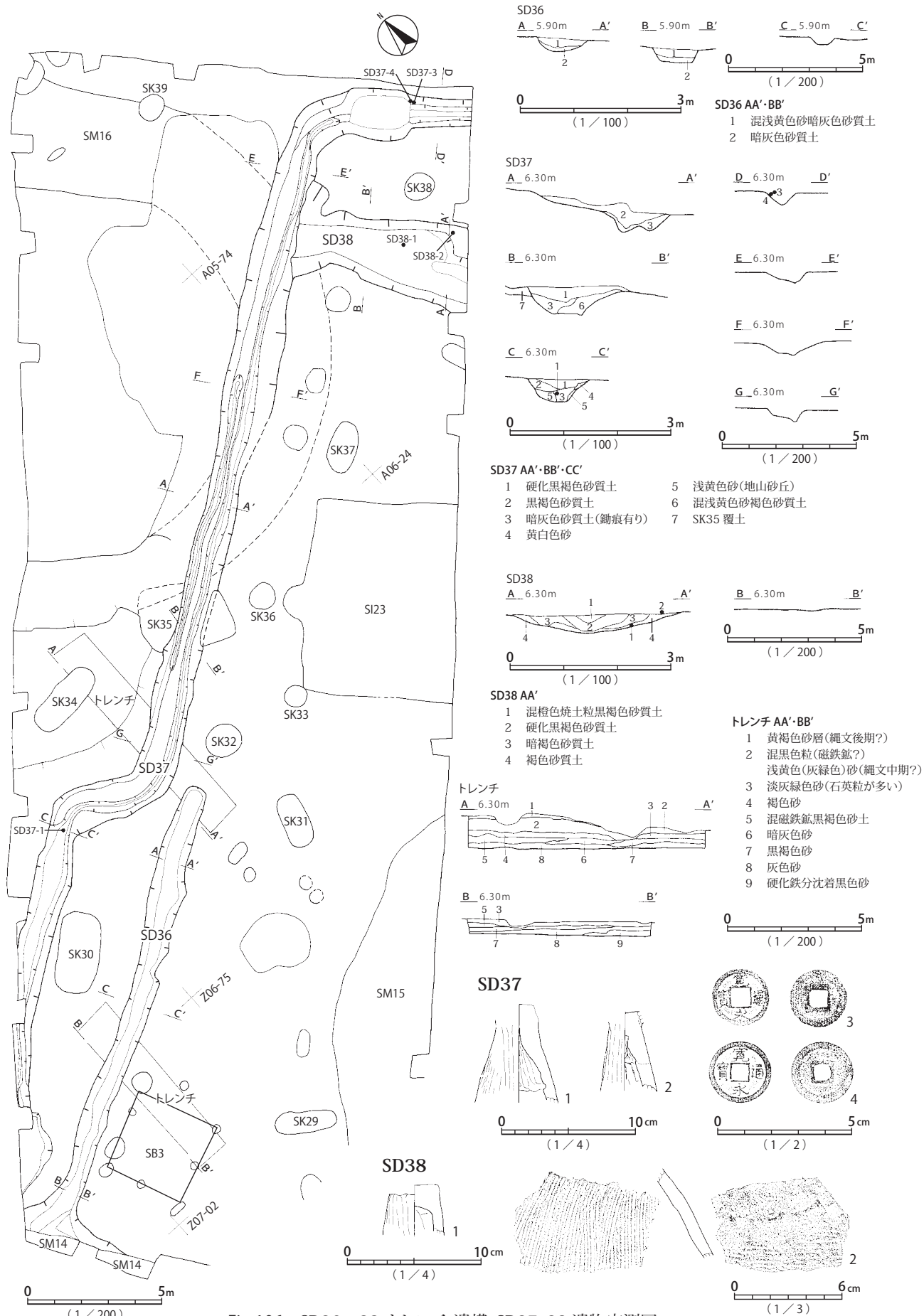
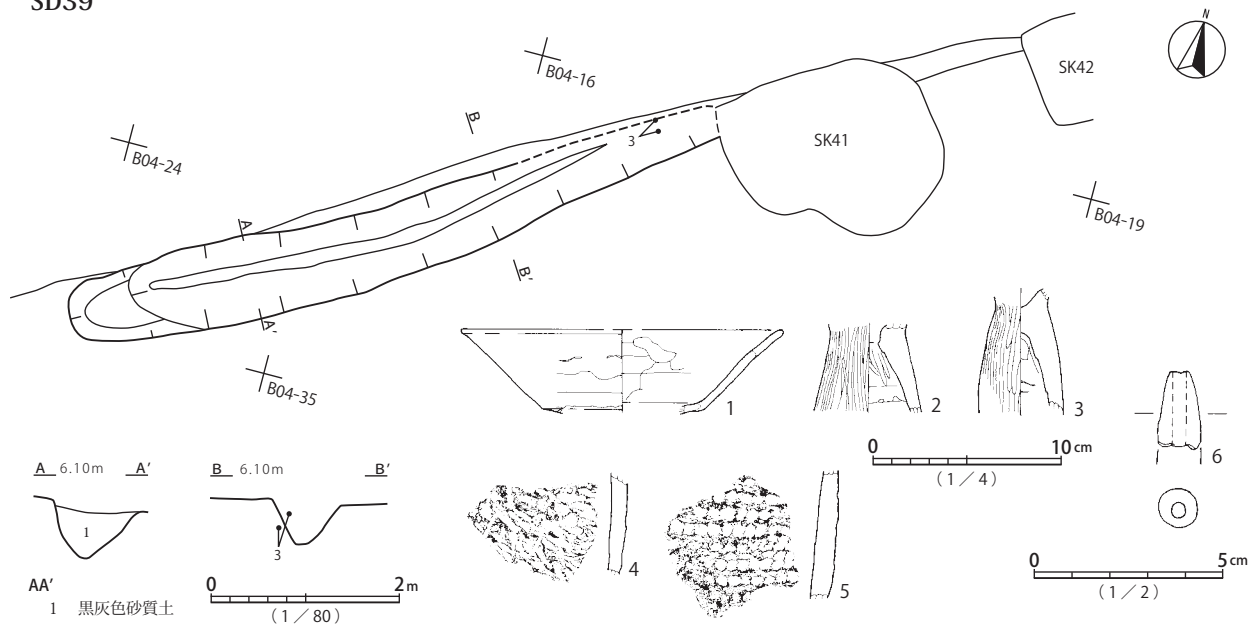


Fig.106 SD36~38、トレンチ 遺構・SD37、38 遺物実測図

SD39



SD40•SX8•SX9

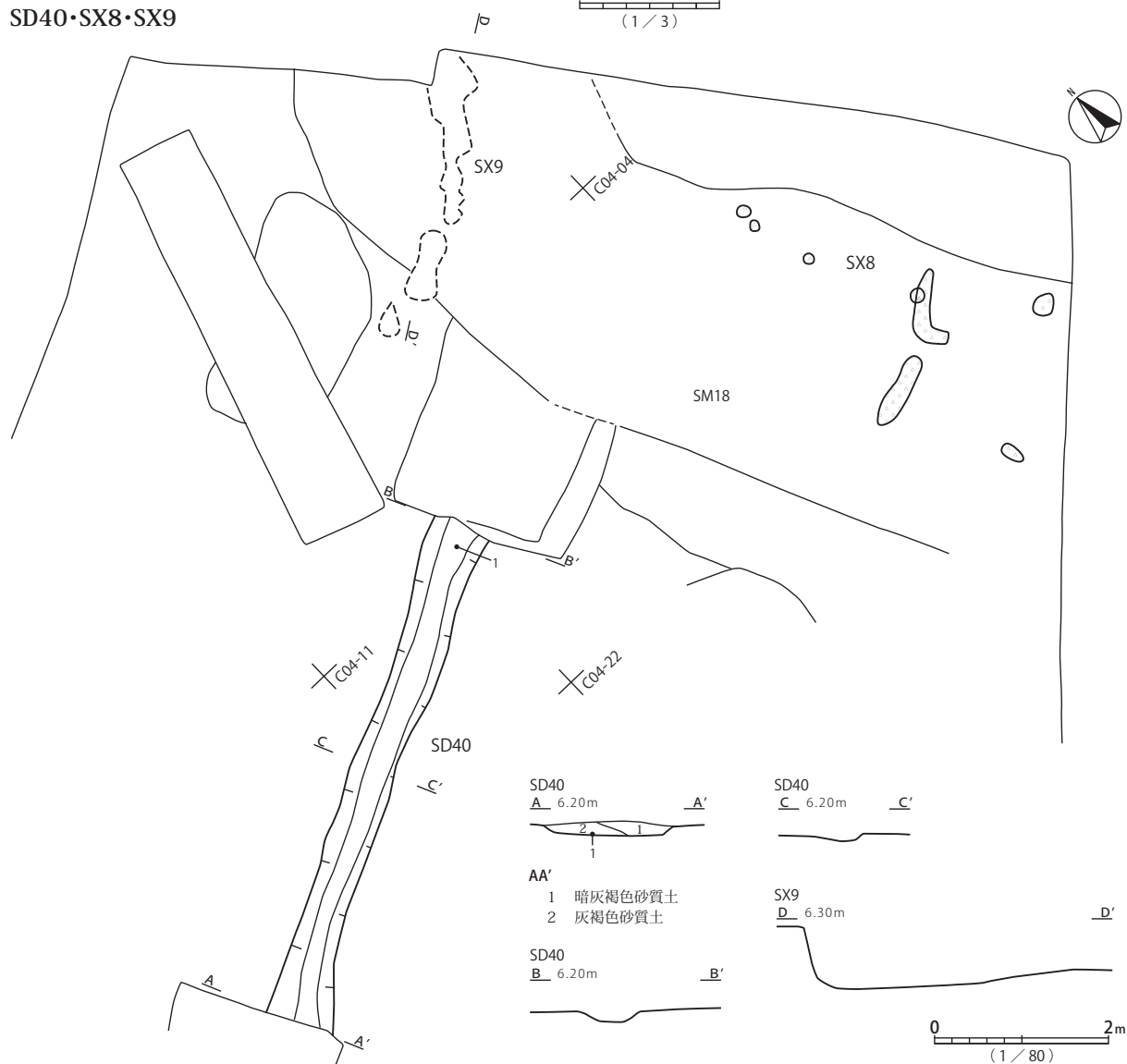


Fig.107 SD39、40、SX8、9 遺構・SD39 遺物実測図

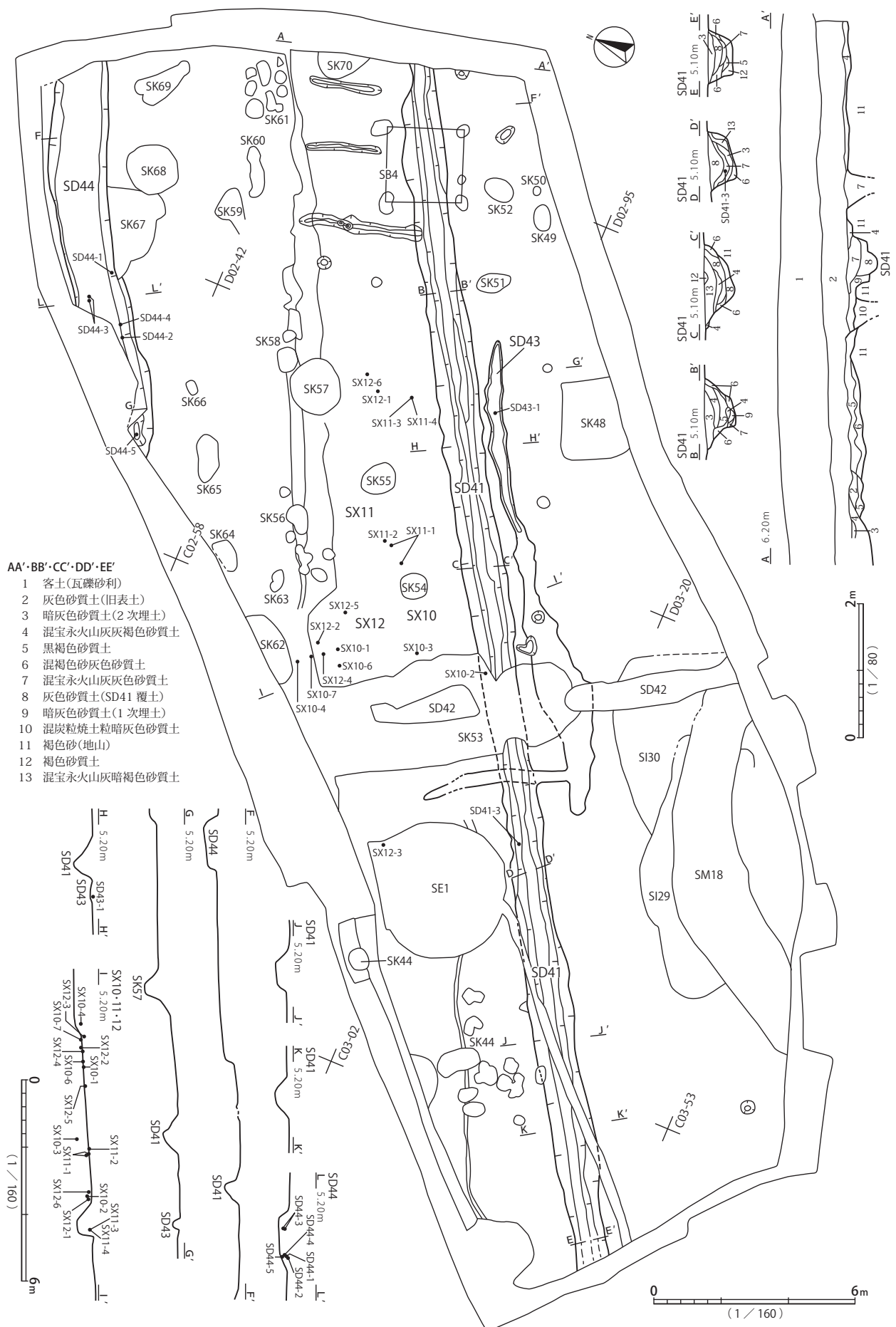


Fig.108 SD41、43、44、SX10~12 遺構実測図

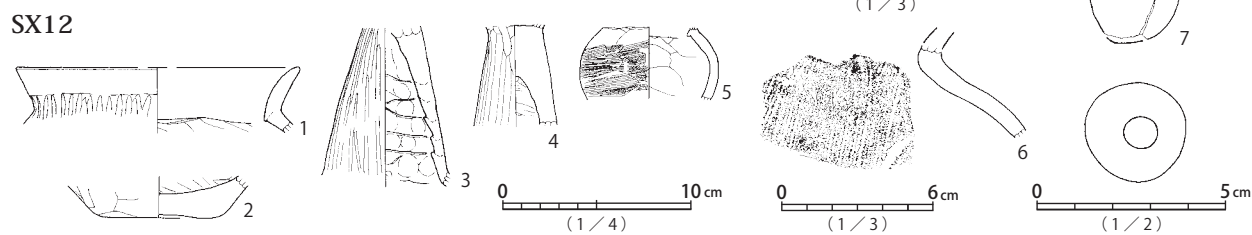
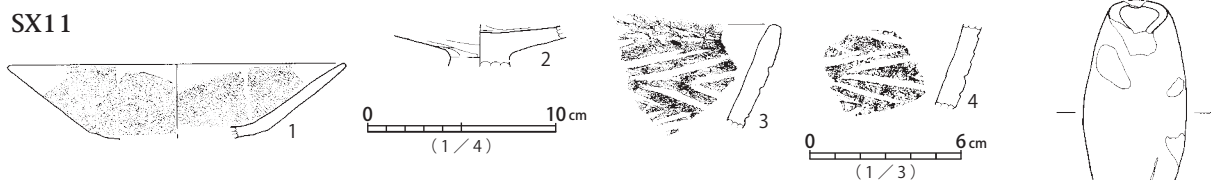
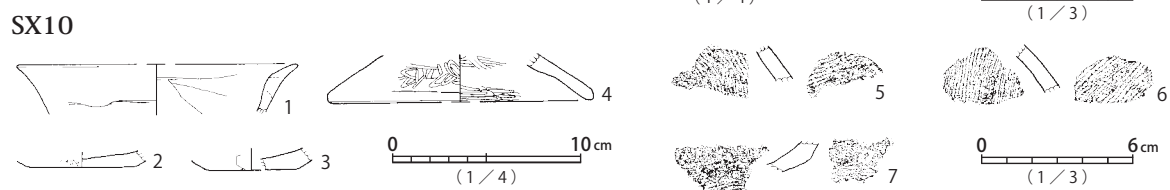
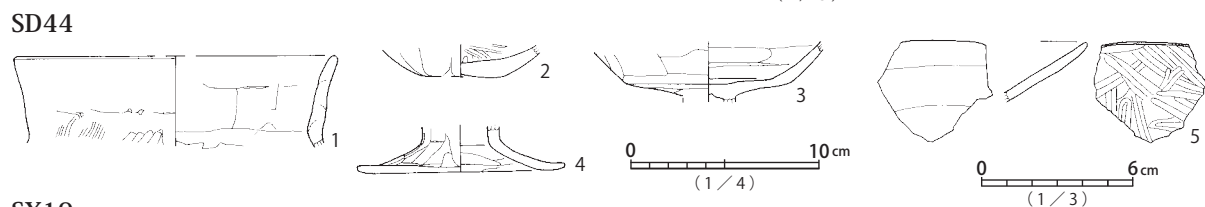
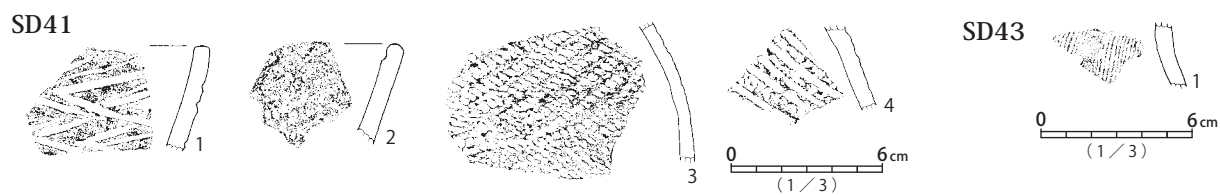
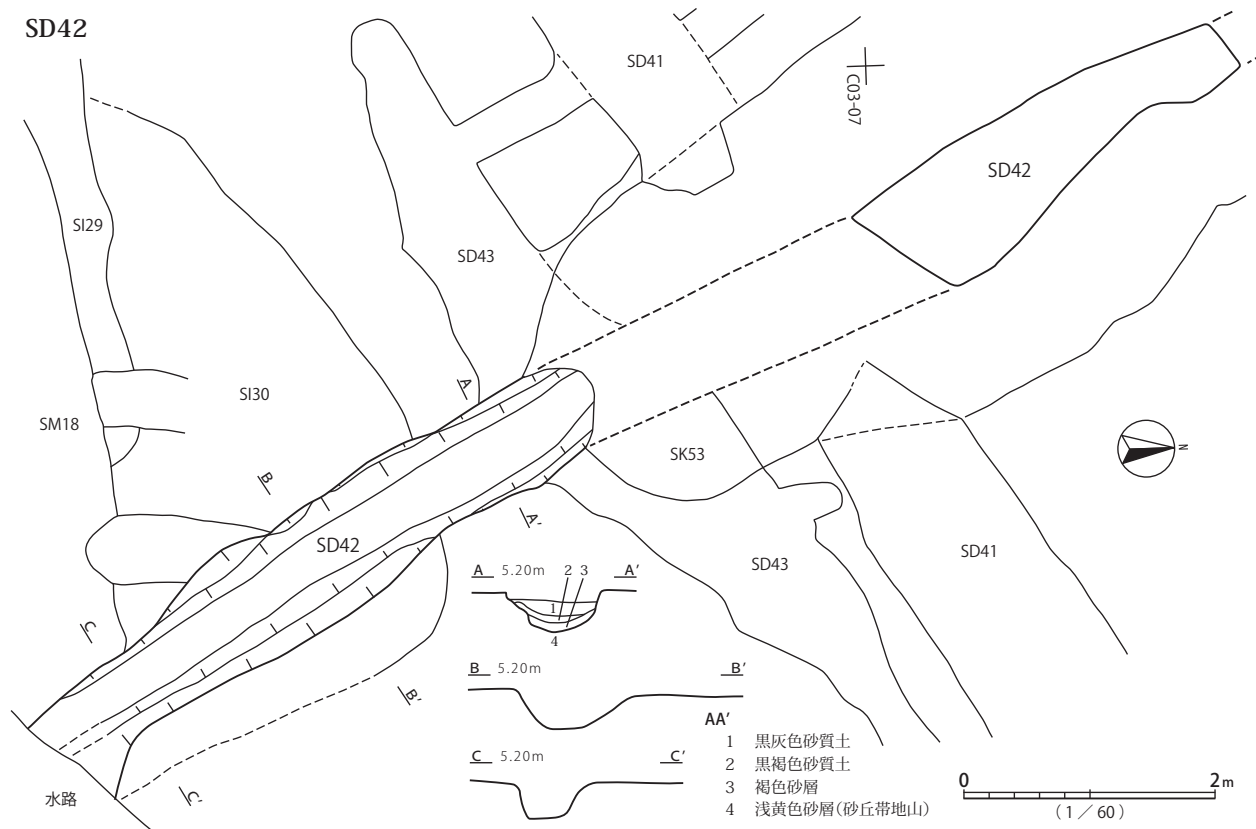


Fig.109 SD42 遺構・SD41、43、44、SX10~12 遺物実測図

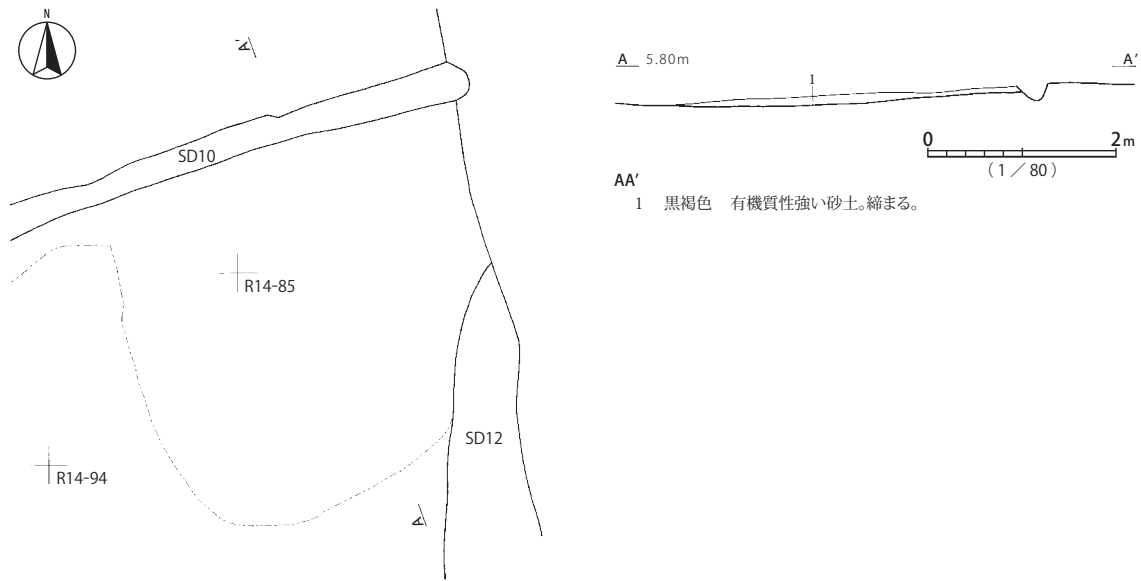


Fig.110 SX1 遺構実測図

東端はSD12との重複で途切れる。平面的には直前部分は無く北側に膨らむ円弧状を呈する。SM4、SK4、SX1、SD12と重複するが、図面上では先後関係は明確ではない。出土遺物は、5の須恵器蓋が遺構の帰属時期を示す可能性がある。

SD10 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・95・96)

SD10はR14-75～82付近、SD9、SD14間に位置する。西端はSD11と重複部分で途切れ、東端はSD15付近で屈曲し南走する。SD11、SK5、SD12、SD15と重複し、SK5、SD15に対して後出する。

SD11 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・95・96・98)

SD11はR14-65～R14-80付近、SD9、SD14間に位置する。SD10、SK5、SI2と重複し、SK5、SI2に対して後出する。

SD12 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・96・98)

SD12はR14-56～R14-98付近、南北方向に位置する。SD9、SD10、SD13、SD14と重複し、SD13に対して後出する。

SD13 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・96・98・122)

SD13はR14-56～R14-98付近、南北方向に位置する。SD12、SD14、SK3と重複し、SD12、SD14に対して先行、SK3に対して後出する。

SD14 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・96・98)

SD14はR14-47～R14-61付近、東西方向に位置する。西端は調査区外に伸び、東端はSD12、SD13重複付近で途切れる。SI2、SD12、SD13と重複し、SD12、SD13に対して先行し、SI2に対して後出する。

SD15 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・96・98・122)

SD15はR14-39～R14-99付近、南北方向に位置する。SD10、SD16と重複し、本遺構が先行する。

SD16 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.6・96・122)

SD16はS14-30～S14-80付近、南北方向に位置する。SD15と重複し、本遺構が後出する。

SD17 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.6・99)

SD17はS14-12～S14-18付近、東西方向に位置する。SM7と重複し、本遺構が後出する。

SD18 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.6・16)

SI4の項を参照。

SD19 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.7・17)

SI5の項を参照。

SD20 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.7・99)

SD20はS13-45～U11-97付近、東西方向に位置する。SM8、SM10、SD21と重複し、これらの遺構に対して後出する。

SD21 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.53・54)

SM8の項を参照。

SD22 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.7・99)

SD22はT13-11～U12-63付近、東西方向に位置する。SI6、SM8と重複するが、図面上では先後関係は不明瞭である。

SD23 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.8・58)

SD23はU11-27～U11-36付近に位置する。西端はSM9、SK10と重複し、東端はSD24と重複する。図面上では先後関係は不明瞭である。

SD24 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.8・58)

SD24はU10-97～U11-88付近、南北方向に位置する。SM11周溝外縁に沿っており、土層断面図上では併存する。

SD25 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.9・100)

SD25はV10-09～V10-89付近に位置する。SM11周溝との重複部分で屈曲し、東端でSD26と重複する。SM11に対して先行する。

SD26 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.9・100)

SD26はV10-00～V10-53付近に位置する。SD25と重複するが、先後関係は不明である。

SX7はSD25、SD26、SD27に隣接した遺物出土地点である。遺構プランは不明である。1の土師器甕形土器、2、3の土師器高坏形土器の時期から、帰属時期は5a期から5b期を想定する。

SD27 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.9・100)

SD27はV09-98～V10-17付近に位置する。SI11と重複するが、先後関係は不明である。

SD28 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.10・101)

SD28はW09-26付近に位置する。近世以降の溝である。

SD29 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.10・101・102)

SD29はW09-28～W09-80付近に位置する。SM12と重複し、本遺構が後出する。

SD30 セ489山新遺跡第8地点、セ502山新遺跡第9地点 (Fig.10・101・103)

SD30はW08-98～Y07-89付近に位置する。近世以降の溝である。現場所見では、墓地改葬にともなう掘削坑が本遺構を境界にその分布が分かれることから、墓地造成時の区画溝との指摘がある。

SX5はSI17とSI19に挟まれた範囲で、SD30北側に近接する久ヶ原式の土器集中地点である。遺構プランは不明だが、出土遺物は1から3が久ヶ原式の壺形土器である。帰属時期は2a期としておく。

SD31 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.10・101・103～105)

SD31はX08-34～Y07-98付近、東西方向に位置する。SI17、SI18、SM14、SD30と重複する。SI18に対して後出する。現場所見ではSM14に対しても後出する可能性を指摘しているが、出土遺物をみると、SM14とは同時期もしくは先行するよう見える。ただし、出土レベルが覆土上層に偏ること、出土範囲が2箇所集中し、その時期が異なることから、新相の遺物(25、27、28、29)が本遺構に伴うと判断し、6期以降のものとしておく。

SD32 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.10・101)

SD32はX08-66～Y08-53付近、東西方向に位置する。SM13と重複し、本遺構が後出する。北側の近世溝と並行するため、近世以降と考えられる。

SD33 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・29・30)

SI22の項を参照。

SD34 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.11・29・30)

SI22の項を参照。

SD35 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.6・29・30)

SI22の項を参照。

SD36 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.11・12・106)

SD36はZ06-47～Z06-80付近、東西方向に位置する。西側はSM14と重複し、東端はSD37クランク地点で途切れる。帰属時期は不明。

SD37 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig. 11・12・106)

SD37はZ06-42～A05-89付近、東西方向に位置する。直線的だが、SM16を避けるようにクランクし、調査区東端で南に屈曲する。屈曲部付近で土坑状の掘り込みを伴う。SM16周溝、SD38、SK35と重複し、SM16、SK35に対して後出する。

SD38 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.12・106)

SD38はA05-86～A05-97付近、南北方向に位置する。SD37と重複するが、先後関係は不明である。

SD39 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.13・107)

SD39はB04-08～B04-24付近、東西方向に位置する。SK41と重複するが、先後関係は不明である。

SD40 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.13・107・120)

SD40はC04-10・11付近、東西方向に位置する。中世陶器が出土している。

SX8はSM18南西側周溝内覆土上層に位置する貝層もしくは貝ブロックである。出土レベルから古墳周溝が埋没してからの掘りこみに伴う可能性が高い。中世段階を想定できるため、貝の組成等詳細は塚遺跡で合わせて報告する。

SX9はSM18南西側周溝内覆土上層に位置する焼土を伴う硬化面である。西側にSD40が位置し、主軸方向はやや異なるものの、同様な方向の路として使用された溝状遺構の可能性が高い。帰属時期は中世段階を想定する。

SD41 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.14・108・109)

SD41はC03-41～D02-55付近、東西方向に位置する。SD42、SK53と重複し、土層断面図 (Fig.86) によると本遺構が両遺構に先行する。覆土中に宝永火山灰を含むため、近世に帰属する。

SD42 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig. 14・108・109)

SD42はC02-87～C03-29付近、南北方向に位置する。SI30、SM18、SD41、SD43、SK53と重複し、SD41、SK53に対して後出する。近世以降に帰属する。

SD43 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig. 14・108)

SD43はC03-17～D02-82付近、東西方向に位置する。SD42、SK53と重複し、SK53に対して後出する。近世以降に帰属する。

SD44 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig. 14・108・109)

SD44はD02-13～D02-30付近、東西方向に位置する。SK67と重複するが、先後関係は不明である。出土遺物はSK67の時期と近く、埋没段階で遺物が本遺構に混入した可能性がある。

SX10はC02-88付近に位置する古墳時代前期の土器集中地点である。

SX11はC02-79付近に位置する古墳時代前期、縄文時代後期の土器集中地点である。

SX12はC02-77付近に位置する古墳時代前期の土器集中地点である。

第7節 その他の遺構

山新遺跡・白塚出途遺跡において、不明遺構としたものが13箇所検出されている。内訳をみると、不明瞭な掘り込みもしくは窪みに遺物を伴っている地点が1箇所 (SX1)、古墳周溝覆土中の貝ブロック1箇所 (SX8)、道に伴う硬化面が1箇所 (SX9)、遺構プランを伴わない土器集中地点が9箇所、縄文時代後期加曽利B式期の遺物包含層が1箇所となっている。遺構図が伴わないものが多いため、周辺遺構に位置する遺構の実測図にその位置及び範囲が判るものは示し、事実記載もそこで行っている。

SX1 セ548山新遺跡第10地点 (Fig.110)

SX1はR14-85付近に位置する。平面形は不整楕円形で、断面形は薄いレンズ状を呈する。明瞭な掘り込みはなく、窪地に有機質の土壌が堆積したような状態である。

実測遺物は無く、帰属時期は不明である。

SX2 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.93)

SH13の項参照。

SX3 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.63、66)

SM14の項参照。

SX4 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.29、30)

SI22の項参照。

SX5 セ502山新遺跡第9地点 (Fig.101)

SD30の項参照。

SX6 セ489山新遺跡第8地点 (Fig.62)

SM13の項参照。

SX7 セ377山新遺跡第3地点2次 (Fig.100)

SD27の項参照。

SX8 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.107)

SD40の項参照。

SX9 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.107)

SD40の項参照。

SX10 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.109)

SD44の項参照。

SX11 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.109)

SD44の項参照。

SX12 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.109)

SD44の項参照。

SX13 セ363山新遺跡第3地点1次 (Fig.85)

SK52の項参照。

第8節 遺構外の遺物

山新遺跡・白塚出途遺跡の、遺構に伴わない遺物については、帰属時期や遺物の特徴から、遺跡の変遷過程を復元するために必要と思われるものを対象に図化を行った。

それ以外に、遺構出土資料で、全体を一括して掲載したほうが良いと判断した遺物（埴輪・中世陶器）についてもここで掲載している。掲載順序としては遺構に帰属するものの後に遺構外遺物を並べている。

遺構外出土遺物 (Fig.111～113)

遺構外遺物として59点を実測している。

埴輪 (Fig.114～119)

埴輪は破片資料が大半を占めるため、種別は断定的ではないが、普通円筒埴輪、朝顔形埴輪が認められるが、形象埴輪は確認していない。特徴的なものとして有黒斑埴輪とされる埴輪が7点、櫛描文を伴うものが24点出土している。

中世陶器 (Fig.120・121)

中世陶器の内訳は集計表 (Tab.4 DVD収録) のとおりである。明確に当該期とされる遺構は無いが、近隣には集落・墓域である棗塚遺跡が位置するため、詳細は棗塚遺跡報告の中で合わせて評価すべきかもしれない。

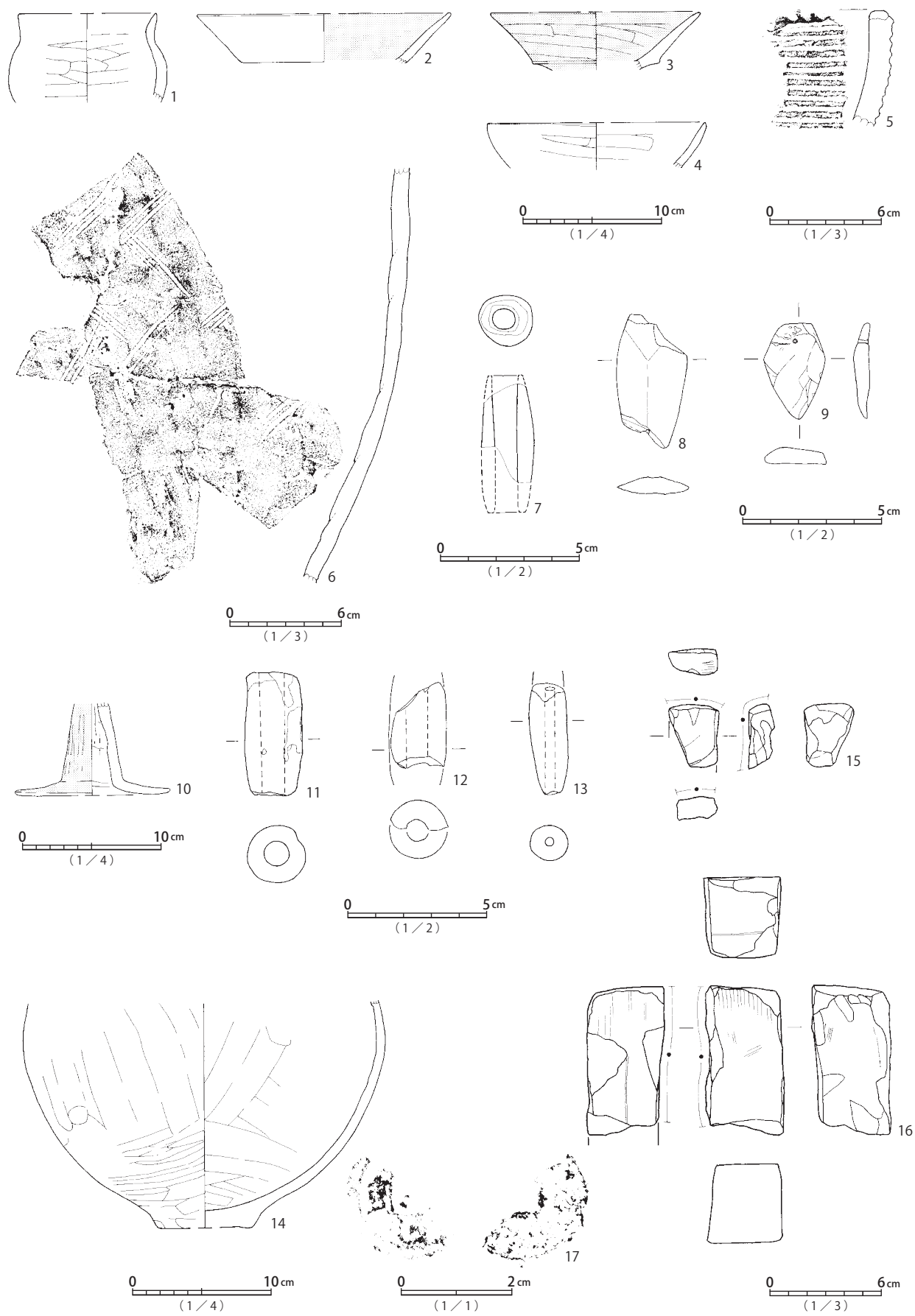


Fig.111 遺構外遺物実測図(1)

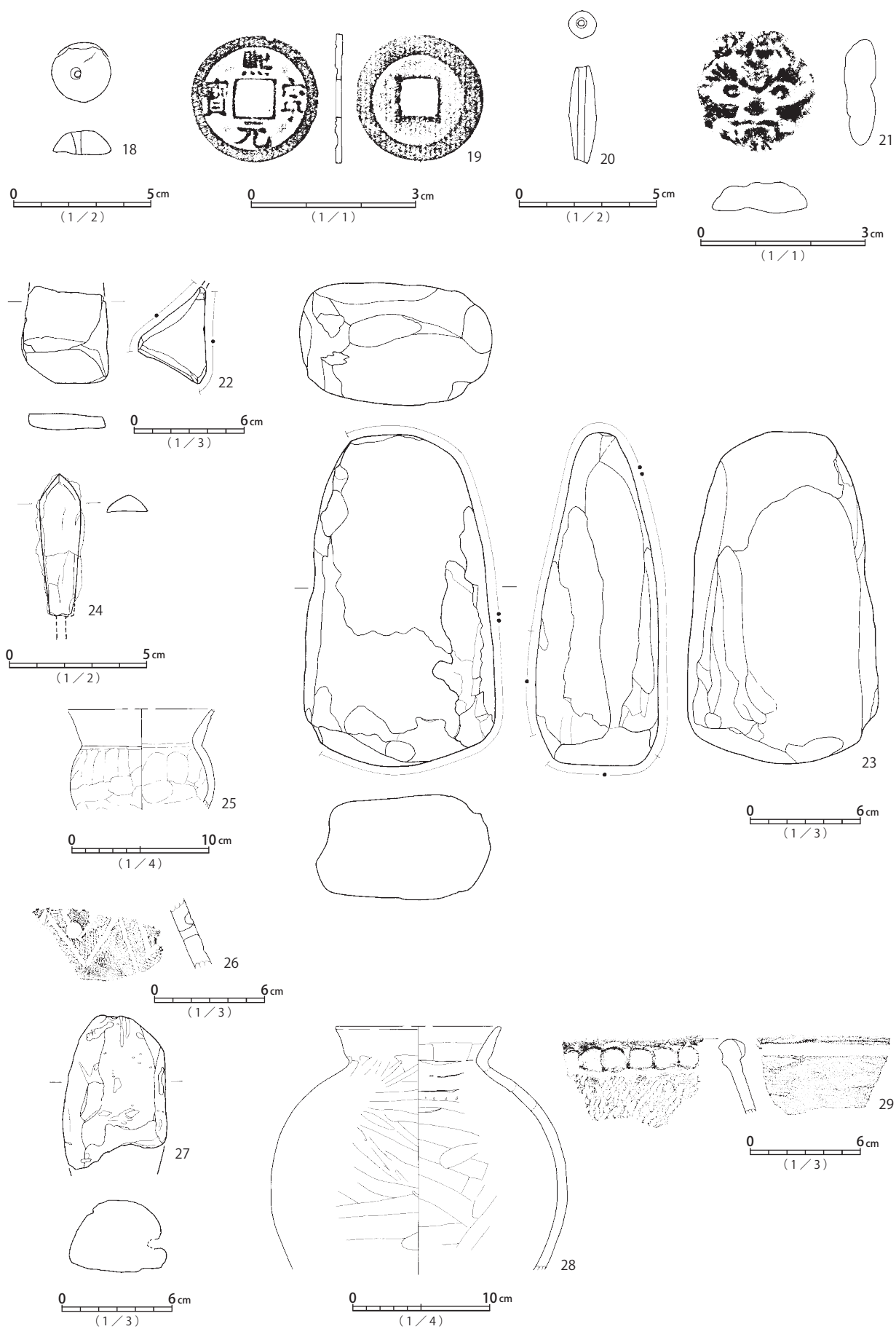


Fig.112 遺構外遺物実測図(2)

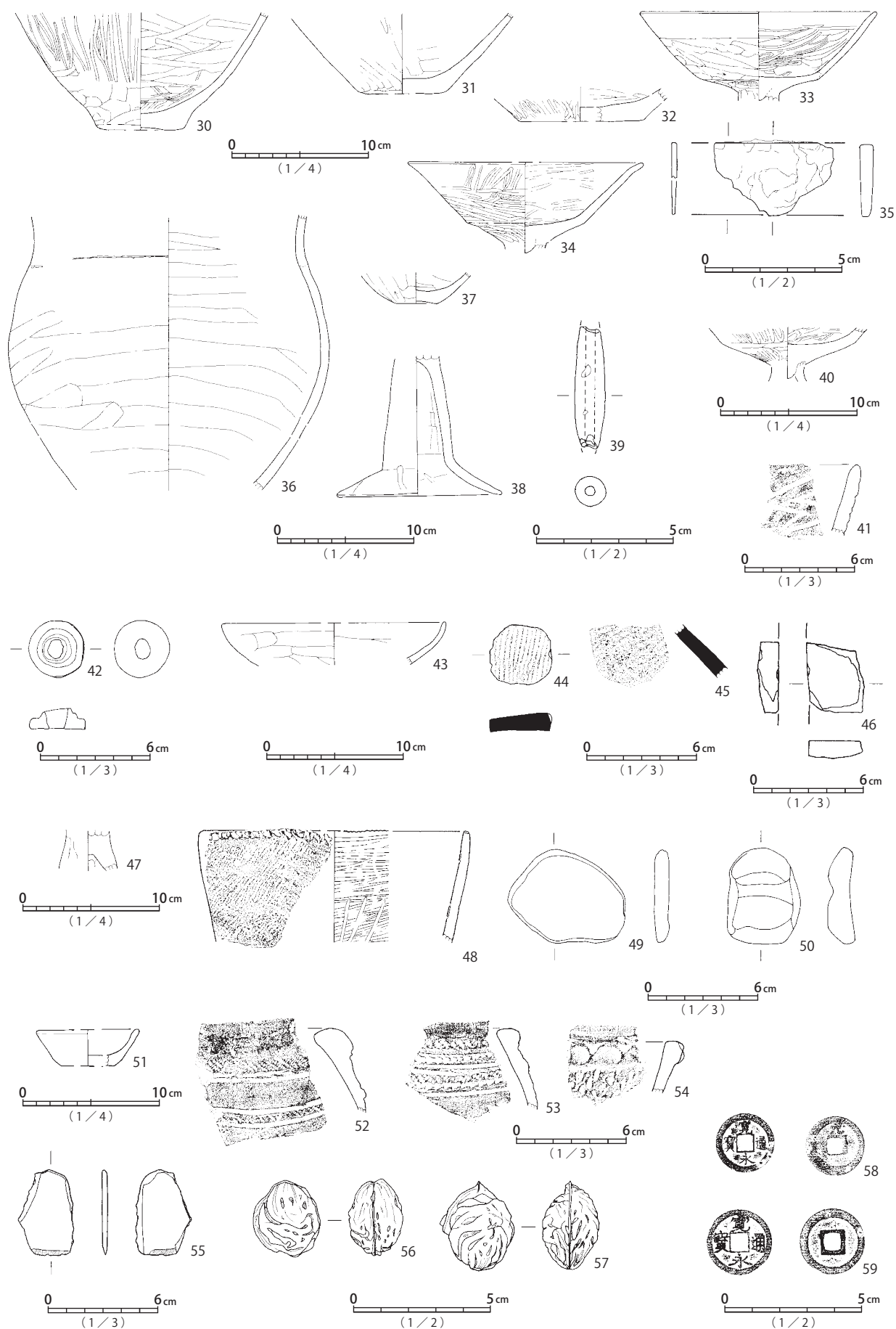


Fig.113 遺構外遺物実測図(3)

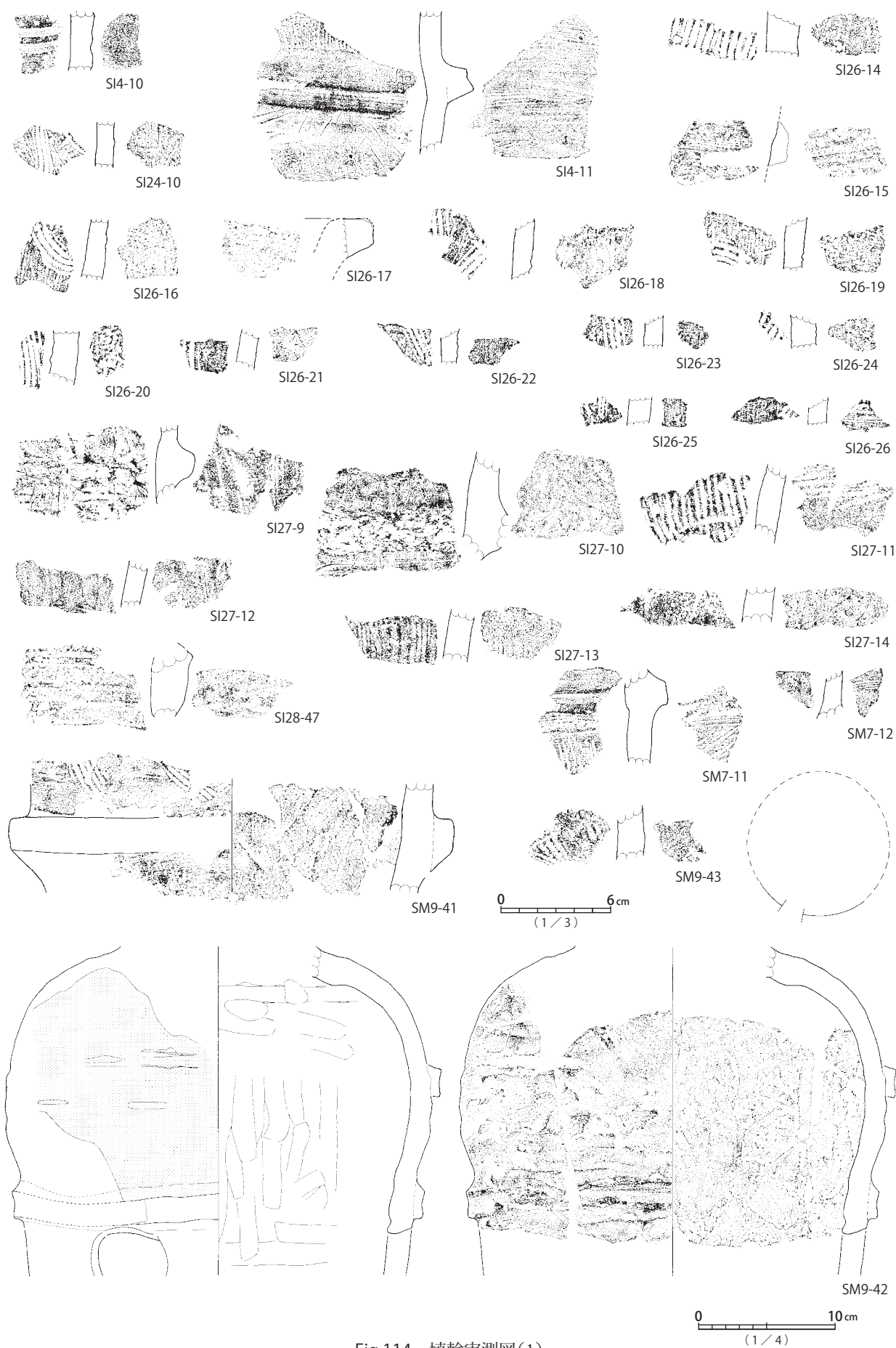


Fig.114 埴輪実測図(1)



Fig.115 埴輪実測図(2)

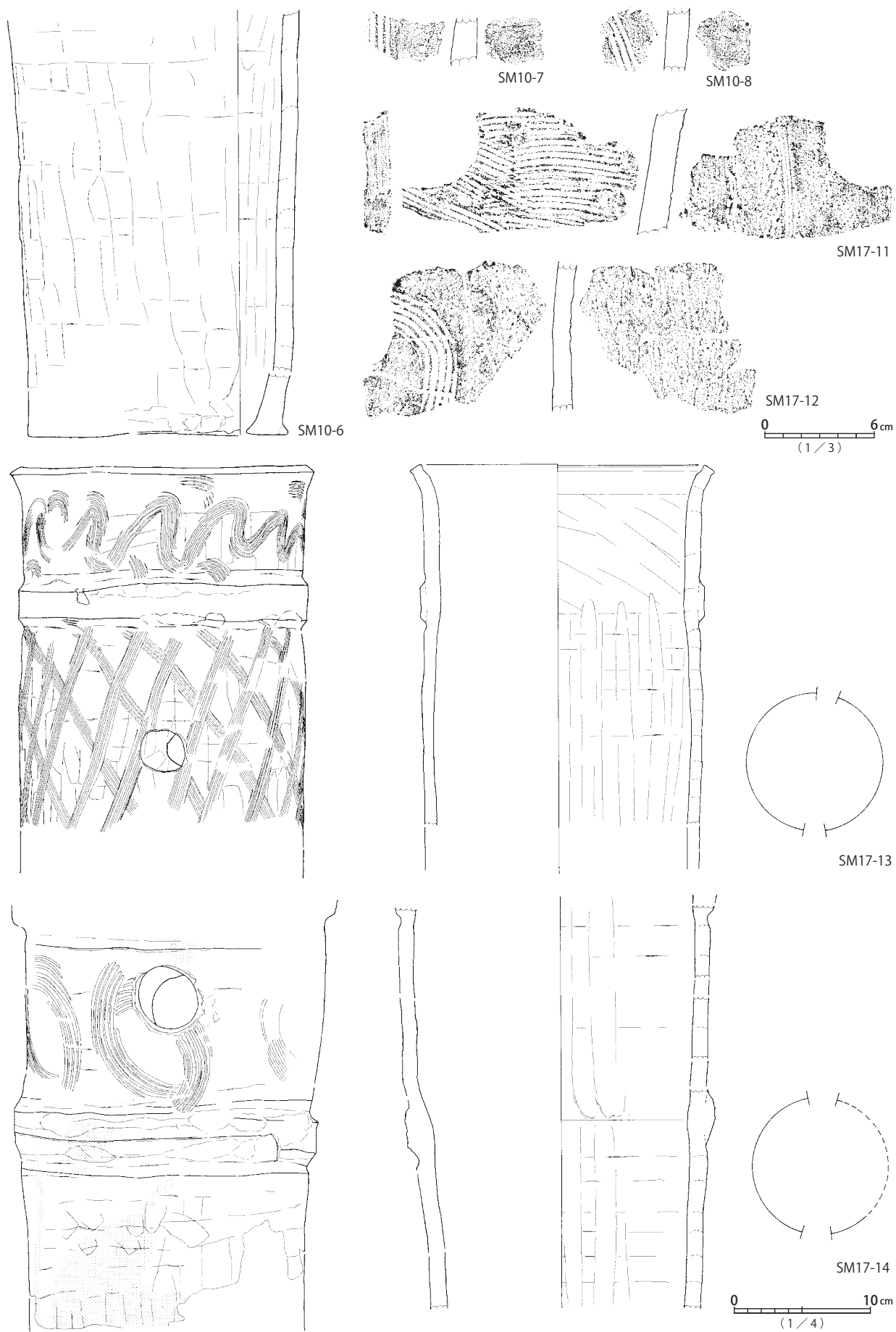


Fig.116 埴輪実測図(3)

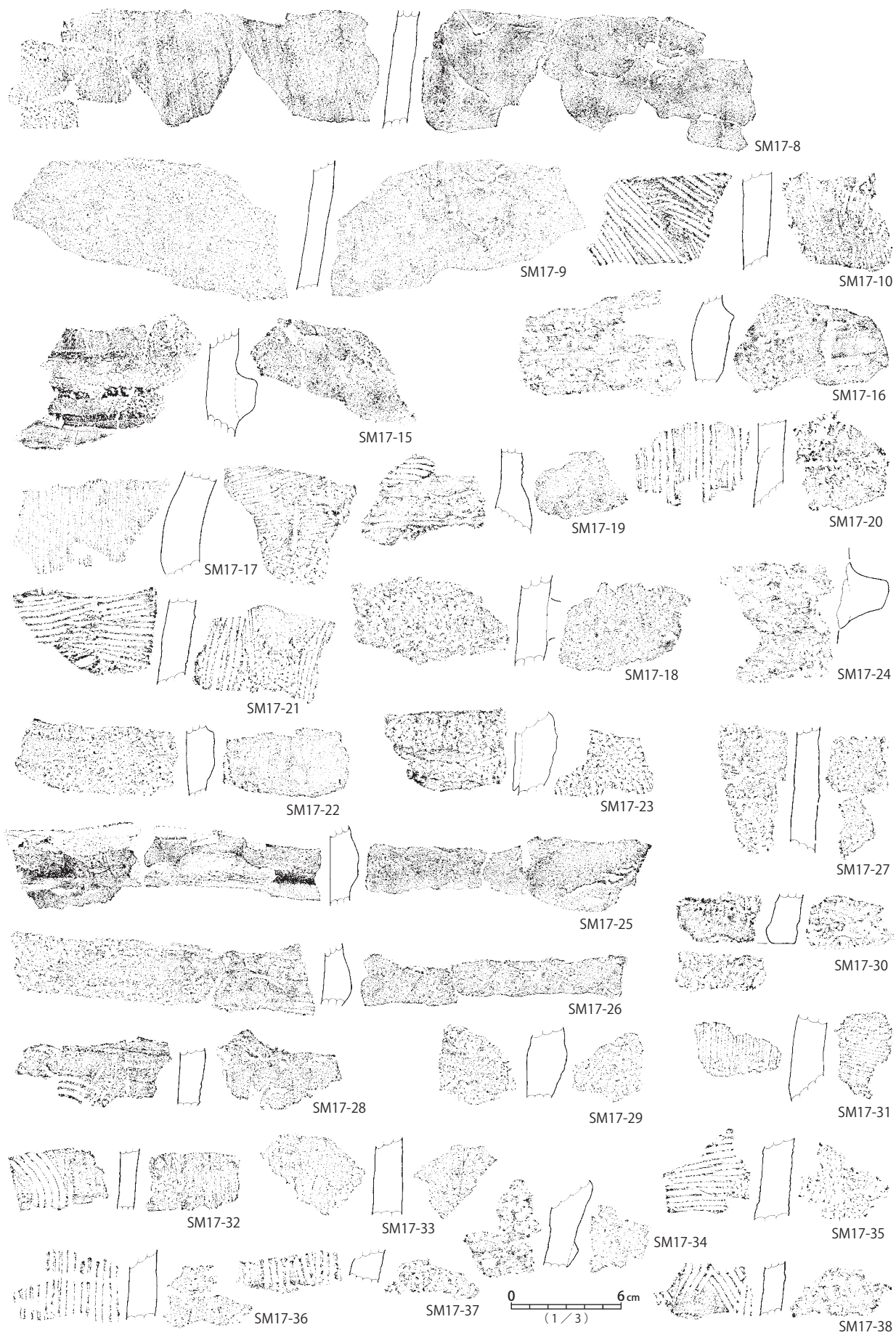


Fig.117 埴輪実測図(4)

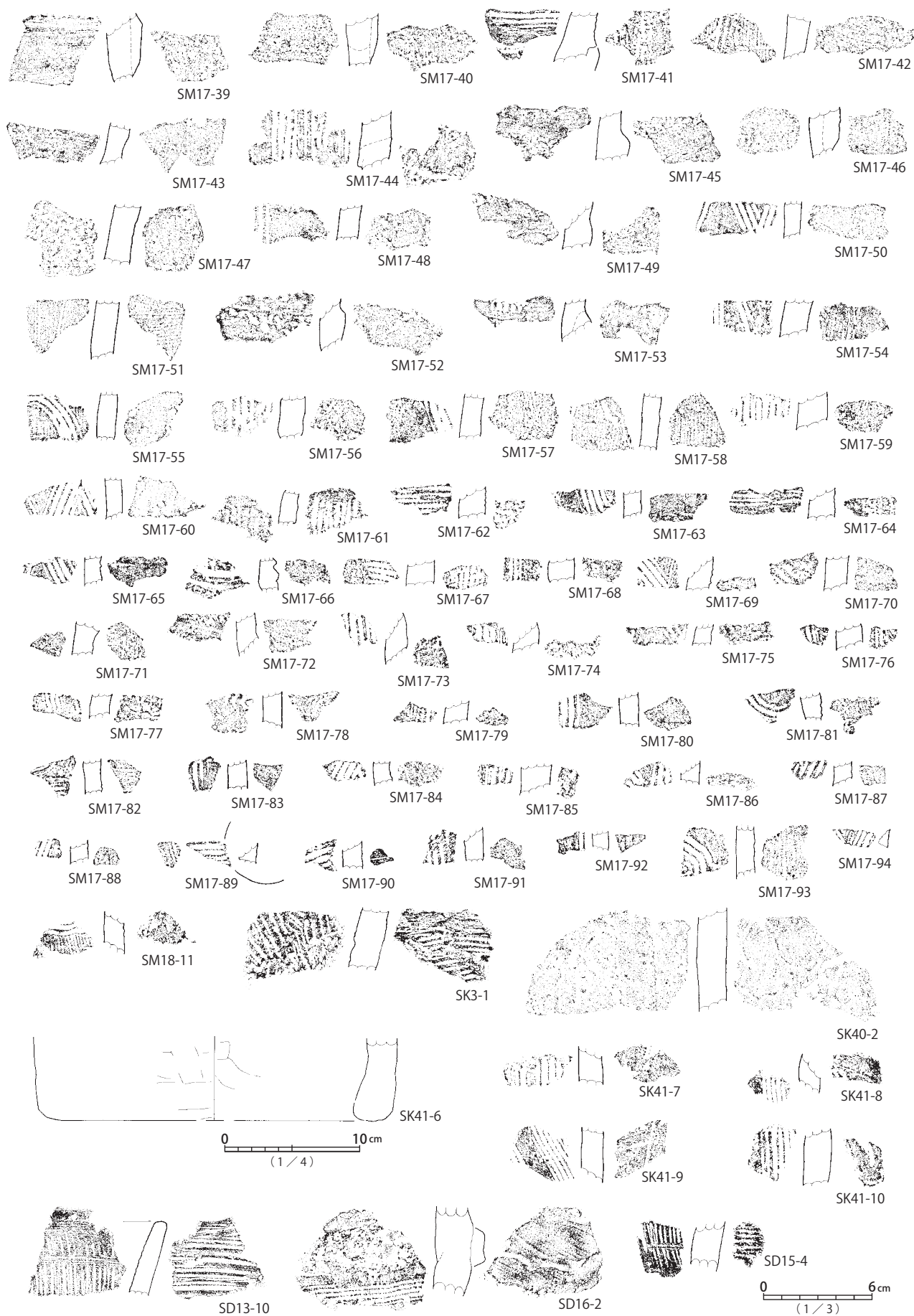


Fig.118 埴輪実測図(5)

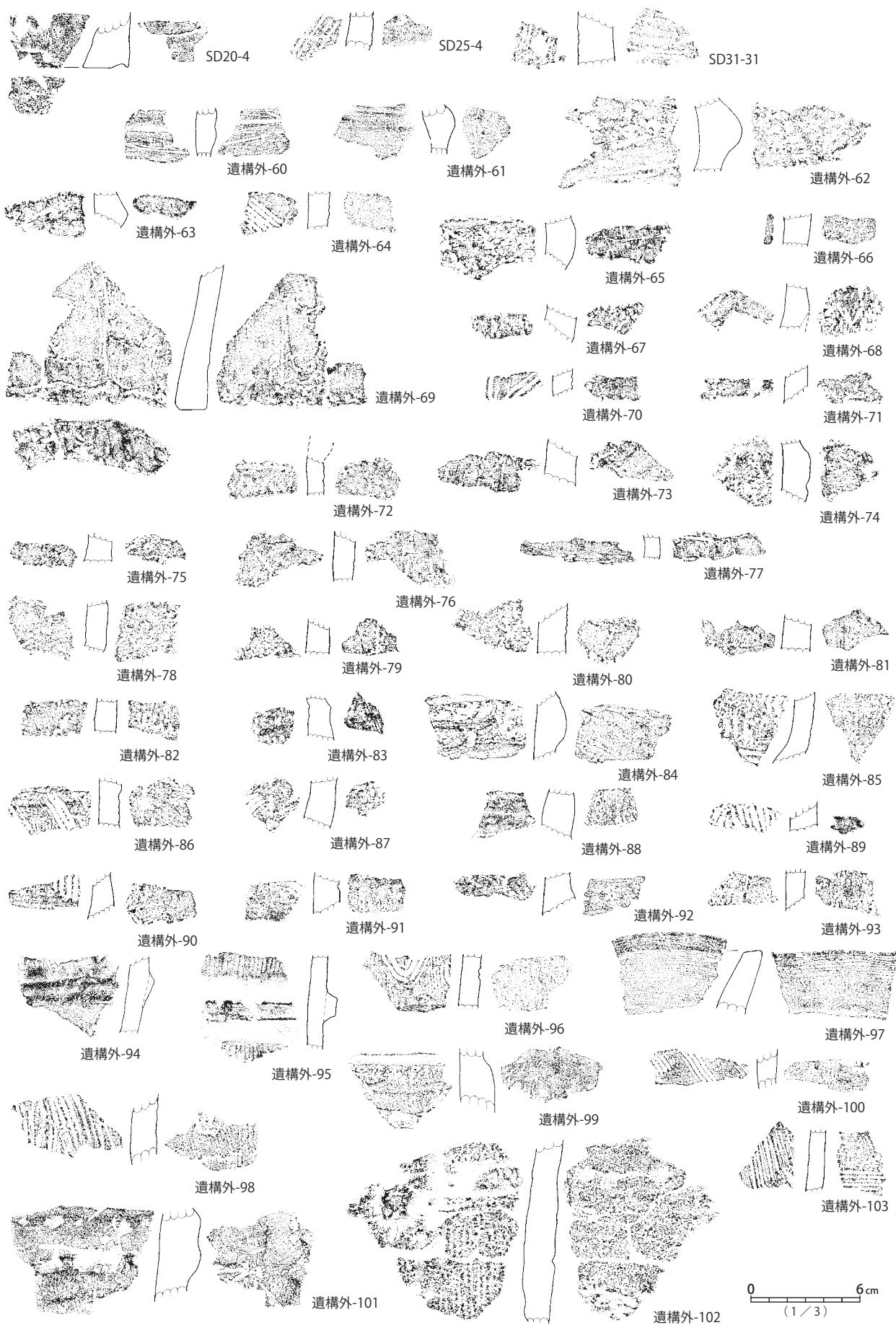


Fig.119 埴輪実測図(6)

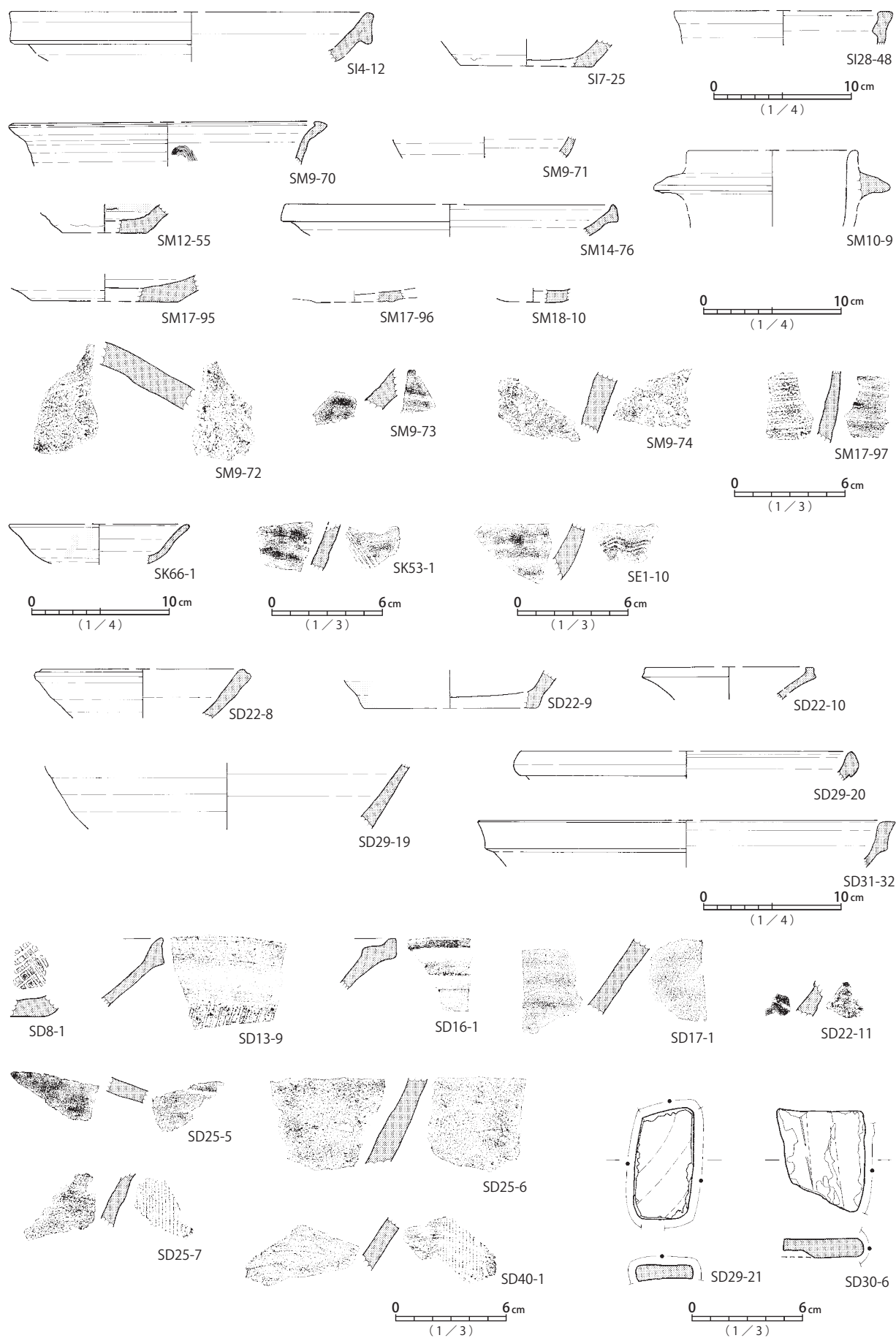


Fig.120 中世遺物実測図(1)

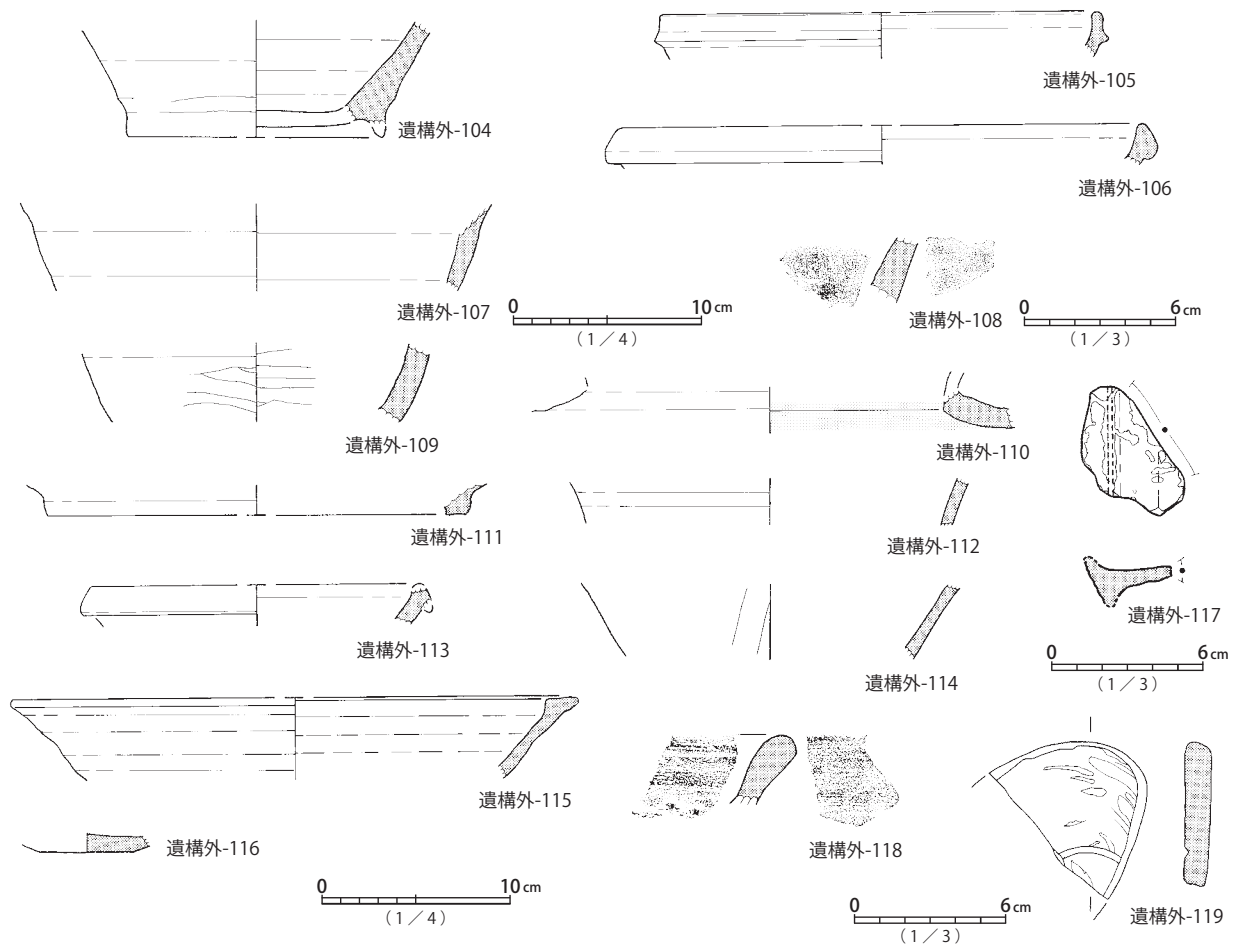


Fig.121 中世遺物実測図(2)

山新遺跡第 10 地点 壁セクション図

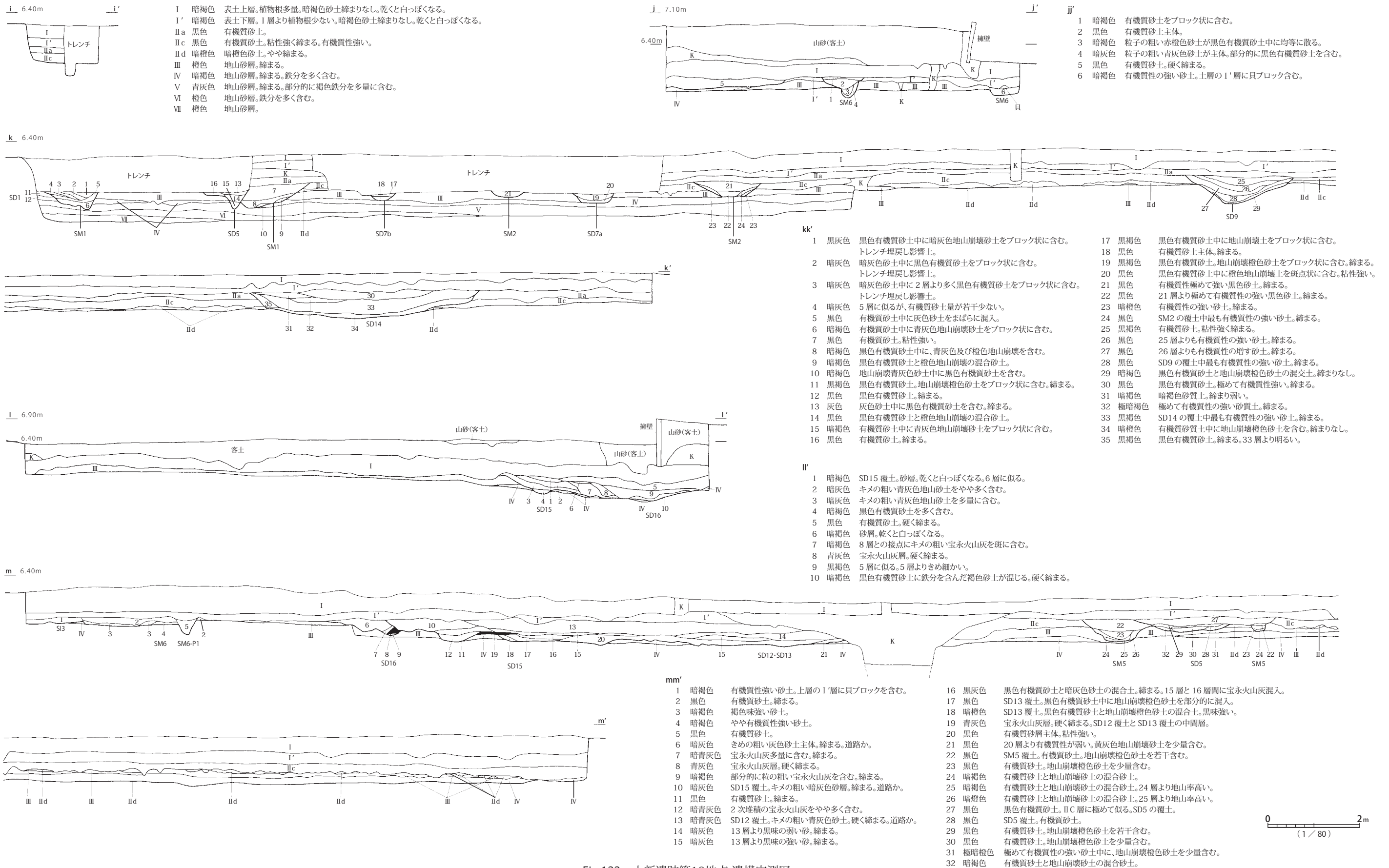


Fig.122 山新遺跡第10地点 遺構実測図

第9節 山新遺跡出土石材の岩石肉眼鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

坂元 秀平

はじめに

千葉県市原市に所在する山新遺跡では、縄文時代晩期の土器を中心とした遺物が大量に出土している。本分析調査では、出土した石製品について岩石肉眼鑑定を実施し、石材の産地について検討した。以下にその結果を報告する。

1. 試料

鑑定の対象とした試料は、石鏃1点、磨石5点、凹石1点、敲石5点、砥石15点、有孔円盤2点、軽石3点、勾玉1点、小玉1点、石製模造品2点、剣形石製模造品2点、不明利器1点、不明石製品2点、不明2点である。

2. 分析方法

平成29年11月8日に当社技師一名が市原市埋蔵文化財調査センターに赴き、岩石肉眼鑑定を実施した。岩石肉眼鑑定は、野外用ルーペを用いて行い、石製品表面の鉱物や組織を観察し、五十嵐（2006）の分類基準に基づき、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。なお、正確な岩石名の決定には、岩石薄片作成観察や、蛍光X線分析、X線回折分析などを併用するが、今回は実施していないため、鑑定された岩石名は概查的な岩石名である点に留意されたい。

3. 結果

表1に鑑定結果を、表2に器種別の石質組成を示した。深成岩類として、黒雲母花崗閃緑岩1点、半深成岩類として、石英斑岩（奥日光）1点、火山岩類として、黒雲母流紋岩1点、流紋岩10点、輝石デイサイト（第四紀）1点、安山岩（新第三紀）1点、安山岩（第四紀）1点、火山砕屑岩類として、玄武岩質凝灰岩1点、軽石（輝石）4点、堆積岩類として、凝灰質砂岩（第四紀）1点、細粒砂岩2点、中粒砂岩2点、砂質泥岩1点、頁岩2点、泥質チャート1点、変成岩類として、粘板岩3点、蛇紋岩4点、白雲母片岩3点、緑色片岩1点、その他として土器片2点に鑑定された。

4. 考察

山新遺跡周辺において、石材の入手元となるのは、市原市に広く分布する新第三紀～第四紀の砂礫層中の礫が考えられる。山新遺跡周辺の地質については、地域地質研究報告5万分の1地質図幅「姉崎地域の地質」（徳橋・遠藤，1984）に詳細が記されており、後期更新世の泥・砂・礫からなる木下層や姉崎層、完新世の浜堤堆積物、現河床堆積物が分布する。木下層は、市原市西部では泥質堆積物から、姉崎層はシルト岩の円礫が多い中礫（4-64mm）混じりの砂層と泥層を挟む細粒砂層の互層からなる。

深成岩類の黒雲母花崗閃緑岩は、山新遺跡周辺では産出が知られていない石材で、茨城県の稲田山

や加波山に分布する前期白亜紀－後期新第三紀の花崗岩類、同時期の年代を示す足尾山地に分布する花崗岩・花崗閃緑岩類に由来すると考えられる。

半深成岩類の石英斑岩（奥日光）は、ソロバン玉状を示す石英の鉱物片が散含し、脱ガラス化した石基を有し、堅硬な岩相を示す。鬼怒川流域の上流に分布する奥日光流紋岩類に由来すると考えられる。奥日光流紋岩類は、後期白亜紀－前期古第三紀に噴出した流紋岩－デイサイト質火山碎屑岩類に由来すると考えられる（山元ほか，2000）。

火山岩類の流紋岩類は、砥石に使用されており、斑晶鉱物として黒雲母を散含するものも認められる。鬼怒川の上～中流域に分布する流紋岩に由来すると考えられる。輝石デイサイトおよび安山岩は、北関東の高原山、赤城山などの第四紀火山の噴出物に由来すると考えられる。新第三紀の安山岩は、鬼怒川の上～中流域に分布する前期－中期中新世の安山岩－デイサイト質溶岩・凝灰岩に由来すると考えられる。

火山碎屑岩類の玄武岩質凝灰岩は、鬼怒川流域の上～中流域に分布する前期－中期中新世の玄武岩質溶岩・凝灰岩に由来すると考えられる。軽石には斑晶鉱物として輝石が観察されることから、北関東の第四紀火山を給源とするものとみられる。

堆積岩類の砂岩、砂質泥岩、頁岩、チャートは、堅硬緻密質の岩相を示し、遺跡近傍の砂礫層において採取可能と考えられる。凝灰質砂岩（第四紀）は軟質のため、砂礫層からの採取は困難であり、房総半島に分布する新第三系に由来する可能性が指摘される。

変成岩類の粘板岩は頁岩を原岩とする変成岩で、頁岩と同様の地質が推定されるが、セ357 42トレ18の剣形石製模造品に使用される石材は良質であり、遠方の産地からの持ち込みが推定される。

蛇紋岩は軟質岩のため、下流域では礫として採取することは困難である。そのため、原産地の付近で採取され、持ち込まれた可能性が考えられる。蛇紋岩の分布は、房総半島峯岡山地、茨城県日立市、埼玉県越生町などが知られており、搬入されたと考えられる。

白雲母片岩および緑色片岩は、埼玉県下の荒川上流域に分布するジュラ紀の三波川帯の結晶片岩類、もしくは茨城県日立市に分布する石炭紀－ペルム紀の日立古生層を構成する結晶片岩類に由来すると考えられる。

【引用文献】

五十嵐俊雄，2006，考古資料の岩石学．パリノ・サーヴェイ株式会社，194p.

徳橋秀一・遠藤秀典，1984，地域地質研究報告 5万分の1地質図幅「姉崎地域の地質」．地質調査所．136p.

山元孝広・滝沢文教・高橋 浩・久保和也・駒澤正夫・広島俊男・須藤定久，2000，20万分の1地質図幅「日光」．地質調査所．

表 1. 岩石肉眼鑑定結果

調査 地区	遺構 番号	調査時 遺構番号	調査時 遺物番号	注記	種別	石質	長・径 (cm)	幅 (cm)	高・厚 (cm)	重量 (g)	備考
セ 377	SD21	001	067	14	砥石	砂岩	11	5	3.7	250	中粒
セ 377	SD26	002	073	14一拵	砥石	流紋岩	6.7	2	1.8	46	
セ 377	SD29	013	078	1一拵	砥石	黒雲母流紋岩	10	3.4	2.9	85.3	
セ 377	SD29	014	078	1一拵	砥石	流紋岩	3.1	2.9	2.3	29.5	
セ 502	SD34	003	018	48	砥石	流紋岩	3.8	2.1	1	8.9	
セ 377	SI12	005	082	9	磨石	輝石アサイト (第四紀)	14.8	10.5	6.4	1170	
セ 489	SI20	004	006	003	砥石	頁岩	9.7	5.5	4.3	357.8	
セ 377	SI23	072	097	316	不明石製品	砂岩	17.5	14.5	7.5	2030	細粒
セ 377	SI23	071	097	317	磨石	凝灰質砂岩 (新第三紀)	20.3	8.5	8.3	1320	
セ 377	SI08	014	068	29	砥石	輝石 (輝石)	5.3	5.2	3.5	14.4	
セ 377	SK34	004	085	2 (主体部)	勾玉	蛇紋岩	2.5	1.5	0.5	2.5	
セ 363	SE01	008	008	セ 363 8-56	砥石	流紋岩	11.3	4.2	2.65	118	
セ 363	SE01	009	008	セ 363 8-35	磨石	黒雲母花崗閃緑岩	7.6	7.7	5.2	44.5	
セ 377	SM10	005	069	セ 377 71-15一拵	石製模造品	緑色片岩	2.1	2.8	0.4	5	剣形か。有孔円盤の可能性あり。
セ 377	SM11	042	072	セ 377 72-443	磨石	砂質泥岩	8.4	5.5	3.1	210	
セ 377	SM11	041	072	セ 377 72-393	剣形石製模造品	粘板岩	3.8	1.55	0.4	3.2	
セ 502	SM14	072	019	セ 377 89-28	砥石	流紋岩	6.3	4.8	32	175	
セ 377	SM15	006	084	セ 377 84-16	磨石	砂岩	9.3	6	4.8	382	中粒
セ 377	SM16	008	086	セ 377 86-10	砥石	玄武岩質凝灰岩	7.1	9.1	5.3	350	
セ 363	SI26	013	052	37	不明石製品	白雲母片岩	18.3	6.5	2.5	486	一部に磨耗あり
セ 363	SI28	045	035	418	砥石	輝石 (輝石)	12.6	8.9	6.2	219	使用痕あり。割れは新しい (3ヶに分かれる)
セ 363	SI28	046	035	セ 357 42 トレ 18	剣形石製模造品	粘板岩	7.18	1.8	0.5	11.1	良質
セ 363	SI29	017	031	213一拵	砥石	石炭炭岩 (奥日光)	9.8	4.7	2.8	209	磨耗痕 (やや弱い)
セ 377	SM07	006	061	セ 377 61-293一拵	砥石	流紋岩	3.95	3.7	1.65	39.3	
セ 377	SM07	007	061	セ 377 61-61	石製模造品	蛇紋岩	6.15	2.15	0.85	9.7	
セ 502	SI02	014	015	58	砥石	安山岩 (第四紀)	10.8	6.7	4.2	481	
セ 363	SM18	009	041	セ 357 46 トレ 1一拵	砥石	流紋岩	8.4	3.75	3.35	187.7	
セ 363	SM18	008	041	セ 363	41-23	有孔円盤蛇紋岩	2.2	2.2	0.27	2.9	
セ 363	SI13	017	006	セ 363 6-13	砥石	輝石 (輝石)	5.9	3.6	3.2	9.3	
セ 363		016	一拵	B4-3一拵	砥石	流紋岩	8	4.2	4.2	241.4	
セ 363		015	一拵	フクレ一拵	砥石	流紋岩	3.3	2.7	1.1	14.3	
セ 377	SI07	021	065	178	有孔円盤	白雲母片岩	2.81	2.96	0.4	5.6	孔 0.35 cm
セ 377	SM09	038	065	セ 377 65-78	小玉	蛇紋岩	0.35	0.38	0.33	0.08	
セ 377	SI07	022	065	271	凹石	安山岩 (新第三紀)	10.2	7.4	5.3	407	
セ 377	SI07	023	065	275	砥石	頁岩	3.1	2.3	2.6	36.7	用途不明石器の転用砥石
セ 377	SI07	024	065	193	砥石	白雲母片岩	5.2	2.8	2.2	26.7	
セ 377	SM09	039	065	セ 377 65-120	石鏃	泥質チャート	1.8	1.3	0.3	0.5	
セ 357		023	09 トレ	9 トレ 5 フクレ	砥石	砂岩	17.8	10.4	6.7	2100	細粒
セ 357		027	11 トレ	11 トレ 2一拵	砥石	輝石 (輝石)	8.35	5.65	3.9	35.4	
セ 281		049		台帳に記載なし。	不明	土器片	5	6.4	0.8	32	黒雲母、角閃石まじる
セ 281		050		台帳に記載なし。	不明	土器片	5.3	3.9	1.5	33.8	
セ 434		055		セ 434 1 トレ 1一拵	不明利器	粘板岩	3.2	4.7	0.3	7.2	
セ 357	4 トレ	022	4 トレ	4 トレ 1一拵	砥石	流紋岩	5.3	4.7	3.7	92.6	

表2. 器種別石質組成

石 質 \ 器 種	石 鏃	磨 石	凹 石	敲 石	砥 石	有孔 凹盤	輕 石	勾 玉	小 玉	石製 模造品	劍形 石製模造品	不明 利器	不明 石製品	不 明	合 計
深成岩類															
黒雲母花崗閃緑岩		1													1
半深成岩類															
石英斑岩 (奥日光)				1											1
火山岩類															
黒雲母流紋岩					1										1
流紋岩					10										10
輝石ダイサイト (第四紀)		1													1
安山岩 (第四紀)			1	1											1
安山岩 (新第三紀)															1
火山砕屑岩類															
玄武岩質凝灰岩				1											1
輕石 (輝石)					1		3								4
堆積岩類															
凝灰質砂岩 (新第三紀)		1													1
砂岩		1		1	1								1		4
砂質泥岩		1													1
頁岩				1	1										2
泥質チャート	1														1
変成岩類															
粘板岩											2	1			3
蛇紋岩						1		1	1	1					4
白雲母片岩					1	1							1		3
緑色片岩										1					1
その他															
土器片														2	2
合計	1	5	1	5	15	2	3	1	1	2	2	1	2	2	43

第3章 総括

山新遺跡・白塚出途遺跡の変遷

山新遺跡・白塚出途遺跡では、竪穴住居（建物）跡 31 軒、掘立柱建物跡 4 棟、古墳 18 基¹、土坑・土壇 70 基、井戸 1 基、ピット群 17 箇所、溝状遺構 44 条、その他の遺構 13 基を検出した。検出された遺構・遺物の時期は縄文時代後期から近世に至るが、中心となるのは古墳時代前期末から古墳時代中期の集落と古墳群となる。ここではこれらの検出された竪穴住居跡、古墳を中心に遺構の変遷を整理し、まとめとしたい。

なお、本報告で SM の略号を付与した古墳群は、発掘調査で新たにその存在が判明したものであるため、分布地図では未登録である。しかし、これらの古墳の位置と築造時期は、砂堆列端部に築かれたこの地の首長墓である姉崎二子塚古墳と無関係に存在することはありえない状況を示している。その文脈で考えれば、これらの古墳は姉崎古墳群中に位置付けることが望ましいと考えられる。また、姉崎上野合遺跡検出古墳（木對 1990）や伝承²から、このような古墳群が周辺砂堆列状に別に存在する可能性が高いことを鑑みて、呼称として既に指摘があるように姉崎古墳群山新支群³とすることが妥当であろう。

遺跡の変遷

これまでに、市原市域では弥生時代後期から古墳時代中期までの土器編年が示されており（大村 2004、2006、2009）、今回報告する山新遺跡・白塚出途遺跡の変遷を検討するにあたっては、これを基準とし、時期区分についても基本的にはこれに準じており、以下のとおりとした。

1 期	弥生時代中期後半 宮ノ台式期
2 期 a・b 期	弥生時代後期 久ヶ原式期・山田橋式期
3 期	弥生時代終末期（弥生時代終末から古墳時代移行期） 中台式期
4 期 a・b・c 新古期	古墳時代前期 草刈式期
5 期 a・b 新古期	古墳時代中期前半 和泉式期
6 期	古墳時代中期後半から後期前半 鬼高式期
7 期	古墳時代後期後半から古墳時代終末期

1 期 1 期は宮ノ台式期とした。今回の報告では対象とする遺構は無いが、山新遺跡内の隣接調査区からは当該期の竪穴住居跡が検出されているため（小橋 2002）、遺跡が立地する砂堆列における居住域としての土地利用開始段階として区分しておく。

2 期 2 期は弥生時代後期にあたり、2a 期を久ヶ原式期、2b 期を山田橋式期の段階とした。

2a 期の遺構は、竪穴住居跡 4 軒（SI7a、SI18、SI21、SI22）があげられる。竪穴住居跡は SI7a がやや離れて位置するが、標高 6 m ほどの砂堆列の中央付近にまとまりがみられる。前段階である宮ノ台式期の動態や、生業の内容を検討する必要があるが、砂堆列中でもより安定した場所を選定した結

果と考えておく。この段階の墓域は認められない。

3期 3期は中台式期とした。弥生時代から古墳時代への移行期とされる。本期の遺構は竪穴住居跡1軒(SI19)があげられる。他に当該期の遺構は無く、本遺構の遺存状態も良好では無いことから、帰属時期が異なる可能性も否めない。

4期 4期は草刈式期に対応させている。a期、b期を草刈1式期、草刈2式期にあて、草刈3-1式期をc古期、草刈3-2式をc新时期とした。4a期、4b期に該当する遺構は認められない。

4c古期の遺構は竪穴住居跡1軒(SI14)である。SI14-4を小型丸底系の胴部半球状壺形土器の系譜と考え、判断基準としたが、ミガキが認められず胴部では横方向のナデ調整であること、共伴土器などから、次段階に下る可能性もある。

4c新时期の遺構は、竪穴住居跡13軒(SI6、SI7b・c、SI9、SI11、SI15、SI17、SI23、SI24、SI25、SI26、SI27、SI28)、古墳1基(SM16)である。ほかにSM13がこの段階に含まれる可能性があるが確定的ではない。なお、SI7b・c範囲出土の遺物相は本段階のものを含むが、いずれに帰属するかは分離不可能であるため、ここでは1軒として扱う。本段階の基準となる遺構はSI9、SI23、SI24、SI26である。

SM16は残存している周溝の形状から円墳として復元しているが、方墳である可能性も否めない。

この段階の遺物の特徴としては、SI7b-21の有孔円盤及びSI28-46の茎部の作り出しと両面に鎬を持つ剣形石製模造品が、竪穴住居跡に伴うことが挙げられる。ただし厳密に言えば、SI7bについては竪穴住居埋没後の掘り込みによって遺物の2次的な移動の可能性も考えられる。

和泉式前段階の土器様相としては、南岩崎遺跡では高坏形土器について、①脚部屈曲による脚裾部の形成、②脚柱状部の筒状化、③坏口縁部の外反化、④坏部の大型化をあげ、特に③、④については和泉式の特徴としながらも、共伴遺物から五領式の段階としている(大村2006)。これに加え、小型器台形土器、半球形胴部の小形丸底壺形土器については、その消滅期としている。

山新遺跡・白塚出途遺跡でもこの段階における遺物の指標は、小型丸底壺形土器及び小型鉢形土器、高坏形土器としているが、前後段階との峻別については、前段階からは胴部半球形の小型丸底壺形土器、大型化した脚部屈曲の坏部有稜高坏形土器、次段階とは長胴化傾向がみられる甕形土器の共伴の有無で判断している。特徴として、山新遺跡・白塚出途遺跡の当該期の遺構から出土した土器群には小型器台形土器が含まれておらず、器種組成からは消滅した段階にあるものと考えられる。

この他、4期としてみれば古墳時代前期段階に含まれる可能性があるものとして、竪穴住居跡3軒(SI2、SI16、SI29)があげられる。

4c新时期は、竪穴住居跡が突如として急増し、少数ではあるが墓域化が始まる本遺跡では大きな画期となる段階である。

5期 5期は和泉式期であり、a期、b古期、b新时期とした。5a期では大型化した高坏形土器、頸部

径の収縮した小型壺形土器、5b 古期では高坏形土器は小型化に転じ、平底もしくは底部が凹む坏形土器が組成に新たに加わる。5b 新期では大型の底部丸底坏形土器を指標とした。

5a 期の遺構は、竪穴住居跡 2 軒 (SI8、SI30)、円墳 1 基 (SM14) である。SI8-1、SI30-1、SM14-1 の甕形土器は胴部が丸く前段階の様相を残すとみるが、調整にハケメを含まずナデ仕上げであることを優先し、SI8-6、SI8-7 の小型壺形土器が共伴することを判断基準とした。SI30-16、SM14-38 の高坏形土器は、胴張りの筒状脚部を持ち、本段階に特徴的な形態と捉えたが、SI30-10 から SI30-12 の無稜もしくは曖昧な稜の坏部を持つ高坏形土器の位置付けは難しい。SM14-57 の甕形土器は、本地域では前段階から認められる在地系譜上にあるものとした。

この段階は前段階の竪穴住居跡急増に対し減少し、以降の流れになる起点的な段階ととらえられる。

5b 古期の遺構は、竪穴住居跡 3 軒 (SI10、SI12、SI13)、円墳 2 基 (SM10、SM11) である。

SI10-4 の平底坏形土器は口径が大きく、次段階の傾向とみるが、SI10-3 の小型壺形土器が共伴することを重視した。SI12-2 の坏形土器は本段階の様相として特徴的な器種と捉えている。SI13-3 は短脚化段階の高坏形土器から本段階とみるが、遺物が少なく確実ではない。

この段階の状況は、遺構数だけ見れば前段階の流れを逸脱するものではないと考えられる。

5b 新期の遺構は、竪穴住居跡 1 軒 (SI4)、円墳 3 基 (SM8、SM9、SM12) があげられる。SI4-3 は口縁の内傾が緩く、器高が高いなどの特徴からおそらく丸底であり、やや口径が小ぶりであるが、本段階の特徴的な要素を具備する。高坏形土器は短脚化が明瞭で、甕形土器は、ハケメは完全に消滅しており、頸部径の縮小、口縁外反化が明瞭である。

5 期の古墳時代中期の遺構としては、他に SM1 から SM6 の小規模方墳群がある。ただし、遺物の出土状況から、帰属を示す良好な遺物は認められず、その位置付けは確定的ではない。特に SM6 は、重複している竪穴住居跡との切り合いでは先後関係が判然とせず、この段階よりも後の遺構である可能性も残している。

ほかに SM15、SM18 は本期に帰属する可能性が高い。SM15 については周溝外周に沿うように位置する土壌 4 基 (SK27、SK28、SK29、SK31) は、SM15 に近い時期が想定される。また同様に、SK30、SK34 についても SM16 との関連が考えられるが、古墳の時期を考慮すれば、古墳本体よりは時期が新しく、直接的な関連は想定し難い。

この段階の特徴は、集落が終焉を迎え墓域化が進む状況と捉えられる。

6 期 6 期は鬼高式期前半をあてている。

6 期の遺構は、円墳 1 基 (SM17) のみである。SM17-7 の須恵器坏が TK47 型式相当期であり、古墳の時期としている。その他の周溝覆土中出土の土器群は、4c 期から 5a 期に収まるとみられ差異が認められるが、重複する竪穴住居跡の影響が否定できないためこの段階と捉えておきたい。しかし櫛描格子文や、櫛描巴文を施文した有黒斑埴輪を共伴しており、埴輪の製作時期が問題となる。先行研究からは有黒斑の櫛描文埴輪については、椎津川左岸台地上に所在する外郭古墳を起点としてその周

圀に破片資料の出土例が認められることが明らかにされている（小橋 2008）。また、姉崎二子塚古墳、富津市の内裏塚古墳には共通して斜格子文・波状文施文の埴輪を伴っており、工具や施文形態の技術的な系譜を想定し、外郭古墳→姉崎二子塚古墳→内裏塚古墳の順序が認められるとしている（小橋 2011）。本古墳の有黒斑櫛描文埴輪は、外郭古墳例に近いとされることから、想定時期の TK47 型式相当期とは整合しない。外郭古墳からの埴輪抜き取り利用の可能性⁴も検討に値するが、むしろ須恵器坏を除く本古墳の出土土器群の示す段階は、有黒斑櫛描文埴輪の時期に近いとも見える。いずれにせよ外郭古墳の位置付けが明確とは言えない現状においては、報告では本古墳出土遺物の時期的不整合の存在を確認するに留める。

山新遺跡・白塚出途遺跡においてこの段階は、円墳群の最後段階である。ただし、古墳群としての終焉であるのかは言及できない。

7 期 7 期は鬼高式期後半から古墳時代終末期までとするが、本期に含まれる遺構は認められない。ただし、先述の通り古墳時代中期の小規模方墳とした SM1 から SM6 のうちには、本期となる可能性のある遺構が含まれている。

山新遺跡・白塚出途遺跡で検出された竪穴住居跡、古墳以外の遺構について見てみると、6 期以降、砂堆を縦横断する形で溝状遺構が多く造られるが、そのほとんどは重複関係において竪穴住居跡、古墳より後出する。この溝状遺構が造られるまで、古墳時代の墓域化以降、この土地ではしばらくの間土地利用が無かったとみられる。そして平安時代の単発的なものを経て、中世中・後期段階から近世に至り再び活発化する。おそらく掘立柱建物跡 SB1 から SB4、井戸跡 SE1、一部を除く土坑、土壇、ピット群もこれらに伴うとみられる。こうした現象は隣接する 15 世紀後半代を主体とする橿塚遺跡の消長と強く連動した動きであることが予想されるため、その評価は、橿塚遺跡の整理・報告で検討する。

整理の結果、集落跡は、弥生時代後期前半に認められ、断定的ではないが断絶期があった後、古墳時代前期末から中期への変遷期にピークを迎え、中期前半で終焉を迎える。古墳は集落のピークに重なるように方墳が造られ、連続的に円墳の築造が開始され、中期後半前葉段階まで継続することが確認できた。

このような変遷の中で、山新遺跡・白塚出途遺跡にみられる中小規模古墳の方墳から円墳への墳丘平面形態の急激な変換については、首長層より下位にある被葬者層において、社会的に多大な内的・外的インパクトが伴っていたことが予想され、その時期については山新遺跡の内容を見る限り 4c 新期から次段階に発現した現象の可能性が考えられる。

これに関連して、山新遺跡・白塚出途遺跡の立地する砂堆列の南方に広がる台地先端部に位置する姉崎古墳群の首長系古墳中で、そのひとつとされる海保大塚については、平成 28 年度に下層にあると想定されている古墳の規模と時期を調べるための確認調査を実施している。海保大塚については、これまでに測量調査（杉山ほか 1990）が行われているのみで、その内容については具体的な資料が少なく、埴輪が見られないこと、特異な形状であることから古墳時代終末期古墳の可能性をみる向きが強かった。しかし確認調査の結果、周溝から出土した遺物と、周辺古墳との重複関係から、古墳時

代前期末から中期初頭の大型円墳である可能性が出てきている（小橋・近藤 2018）。

海保大塚下層古墳について、資料が限られた中で古墳時代終末期古墳であることを否定するものではないが、古墳時代前期末から中期初頭の大型円墳を市内の河川単位で考えると、村田川左岸台地上の大厩浅間様古墳（浅利ほか 1999）があり、養老川左岸台地上の海保大塚下層古墳が当該期であるとするれば、養老川右岸台地上の諏訪台 10 号墳の存在も現象面では理解しやすい（北見 2015）⁵。椎津川左岸台地上では椎津城跡の東側台地先端部の通称正坊山（しょうぼうざん）に分布地図未登録の高まりが確認でき、台地付け根に位置する椎津稲荷山古墳（木對 1992）と合わせて注視される。

椎津川左岸台地上では台地先端に位置する外郭古墳を中期前方後円墳と理解すると、隣接する五霊台遺跡の成果から、台地奥に向けて中期から後期の円墳が展開されるという指摘（高橋 1998）もあり、これに近い現象が、近年海保大塚周辺で実施された発掘調査成果（大山 2014）から確認できる。

更に椎津川右岸の海岸砂丘上には中期円墳群が検出されており（小出 2000 ほか）、未報告ではあるが、山新遺跡の近似した展開が想定される。

こうしてみると、仮定として 4c 期から 5a 期段階に海保大塚下層古墳が築造されたことを契機として、周辺地域の円墳造墓活動が展開されたことが想定できる。ただし、近接地域では中期中頃の方墳検出事例⁶もあることから、墳形のみにとらわれず、本地域の特色を抽出するため更に事例を重ねる必要がある。

石製模造品

9 点が出土している。内訳は剣形 5 点、有孔円盤 3 点、白玉 1 点である。出土遺構は、剣形石製模造品が SI28、SM7、SM10、SM11、遺構外、有孔円盤が SI7、SM18、白玉が SM9 となっている。ただし、SM10 出土例については、2 孔間が離れて穿たれている点や、側面に直線的な面取りがなされるように見える部位がある点など、典型的な有孔円盤とするには疑問があったことなどから、外形的特徴を優先して剣形としたが、器種の検討が必要な個体である。

山新遺跡の石製模造品は、1 遺構 1 器種、単独の出土であることが特徴である。調査区が路線内での調査であるため、完掘している遺構が少ないことも関連しているのかもしれないが、また、出土遺構に対し特定の関係がみられない。時期としては、竪穴住居跡出土例が 4c 新段階に限られ、古墳出土例は確実に 5b 古期段階以降となっており、竪穴住居例に対して明らかに後出する結果となっている。

特徴的な個体として SI28 出土の剣形石製模造品がある。剣形石製模造品は、表裏面に鐫が表現されるものから、片面のみ、そして扁平なものに簡略化され、これに茎部、関部表現の退化という要素が絡むという、断面形と平面形の変遷からその系譜が整理されている（篠原 1997）。SI28 出土の剣形石製模造品は、粘板岩製で、やや短い茎部と、関部を作り出し、両面に鐫を持つというモデルに忠実な形状を示している。加えて表面が平滑であり、丁寧な仕上げとなっていることも特徴である。こうした事例は、村田川右岸となる千葉市七廻塚古墳出土例に近い形態が認められるが、山新遺跡事例は七廻塚事例に比べ小型である。個体の大小が時期差、系譜の違いのいずれを示すのかは判断できないが、山新遺跡事例はこの地域で一般的に見られる、平面形三角形・菱形を基調とし、断面形扁平である剣形石製模造品に対して古相を示す事例として捉えておく。

台遺跡 E 地点では竪穴住居跡から未成品を含む石製模造品の出土から、工房として機能したとみられる事例も報告されている（小川 2017）。

埴輪（Fig.114 ～ 119）

出土遺物のうち、実測可能である個体は極力実測している。実測遺物は 202 点である。出土した埴輪はそのほとんどが小片であり、器種の復元可能な個体も含め、朝顔形が 1 点認められる以外はその大半が普通円筒埴輪である可能性が高く、形象埴輪は含まれない。出土遺構は、竪穴住居跡 5 軒（SI4、SI24、SI26、SI27、SI28）の 23 点、古墳 5 基（SM7、SM9、SM10、SM17、SM18）の 122 点、土坑 3 基（SK3、SK40、SK41）の 7 点、溝 6 条（SD13、SD15、SD16、SD20、SD25、SD31）の 6 点、遺構外 44 点である。そのうち、古墳出土以外は点数が少数であることから、混入品と判断し、古墳出土のものについて概観する。

埴輪の出土した古墳は、5 基全てが円墳で、出土部位は周溝覆土中に中心が認められる。出土点数の内訳は SM7 が 2 点、SM9 が 29 点、SM10 が 3 点、SM17 が 87 点、SM18 が 1 点となっている。カウントが接合後の点数であること、検出した古墳はいずれも全体の一部の調査であることなど、条件が均一では無いことから単純には並べられないが、接合個体を加味すると SM9、SM10、SM17 への偏在が明瞭に認められ、SM7、SM18 は混入と判断可能である。

出土状況をみると、3 基の古墳のうち SM10-6 以外は墳丘上への樹立、圍繞は確認できず周溝の覆土中から集中して出土している。いずれの古墳も墳丘を失っている状態での検出であることから、墳丘部における埴輪の設置状態を復元するには限界があり、可能性として SM17 は墳丘部樹立後の周溝への転落を、SM9 については、それに加えて周溝内の埴輪棺としての使用の可能性を挙げておく。埴輪棺の周辺出土事例としては椎津川左岸の砂堆上に位置する妙経寺遺跡で 1 例が認められ（小橋 2004）、当地での埴輪工人の存在も考えられる事例として興味深い。

SM9 出土埴輪は、44、45 が櫛描格子文を有し、41 もその可能性が認められる。43、46 の櫛描き施文具は 3 条 1 単位で、SM17 例とは異なる個体に見える。黒斑は認められない。41 は天地が逆である可能性がある。42 は唯一朝顔形埴輪と判断可能な個体で、頸部より下段の 3 段分が遺存し、全周しない。器表面の剥離が著しいが、ハケメによる調整は認められず、縦横を基調に斜方向を含むナデ調整である。内面に粘土紐積み上げ痕が残る。突帯は 2 条のうち上位は剥離痕のみが認められ、下位が遺存しており、断面形 M 字の突帯がやや波打って巡る。3 段目の突帯に接する位置に円形とみられる透かし孔が穿たれるが、対向するかは不明である。1 段目から 2 段目にかけて黒斑が明瞭に残る。

SM10-6、SM17-13、SM17-14 については既に資料紹介されている（小橋 2008）。SM10-6 円筒埴輪は 69 号遺構出土埴輪として、SM17-13 円筒埴輪は 48 号遺構出土埴輪として、SM17-14 円筒埴輪は 48 号遺構出土埴輪として紹介されているので参照されたい。

成田山霊光館収蔵資料に姉崎二子塚古墳出土とされる櫛描格子文が施文された円筒埴輪があり、山新遺跡出土の櫛描文埴輪との比較検討によって、山新事例が二子塚事例に対して先行する可能性が指摘されている（小橋 2010）。ここでは先後関係には言及できないが、本地域における櫛描文埴輪の動態は、山新遺跡の円墳群が展開する時期と、姉崎二子塚古墳の築造時期の位置づけを検討する上で欠かせない資料的価値を有するものであることを確認しておく。

中世遺物 (Fig.120・121)

検出する遺構の大半が土坑、溝であることから、その性格については判断が難しい。特徴的な遺物の一例として、陶器片の破面が研磨された用途不明の転用品が4点出土しているが、同様な遺物が近接する棗塚遺跡で出土している（蜂屋 2000）。棗塚遺跡は、山新遺跡・白塚出途遺跡と同じ都市計画道路八幡椎津線（姉崎工区）で発掘調査が実施され、15世紀後半代を主体とした陶磁器類や鍛冶関連遺物を伴う大規模な貝層と土壌群、道路跡などが検出されている。現在、平成31年報告書刊行予定で整理作業を行っており、遺物量のみから見ても中世段階の中心は棗塚遺跡にあることが明らかであることから、山新遺跡・白塚出途遺跡の中世遺物・遺構の性格についてはそこでの評価に譲ることとする。遺構覆土中に認められた貝ブロックや動物骨についても同様としたい。

神明塚出土鏡 (Fig.123・124)

平成28年度の山新遺跡第10地点調査中に周辺住民より現場担当者に寄贈の申し出があった銅鏡について触れる。

資料は市原市姉崎にお住まいの佐久間重夫氏の父である佐久間重平氏によって採集され、重平氏の逝去後、重夫氏が自宅にて大切に保管されていたものである。以下重夫氏への聞き取りを行った内容を中心に資料紹介とする。銅鏡が採集された時期は明確ではないが、採集地は重平氏が所有していた畑（市原市姉崎字棗塚（なつめづか）1889番地）で、その耕作中に発見された。鏡以外のものについて話題にのぼらなかったとのことから、鏡の周囲には他に遺物や構造物は無かったとみられる。畑の西側には隣接して小高い砂山があり、神明塚（しんめいづか）と呼んでいた。発見当時この神明塚は、西から伸びる小道に接道しており、周囲は水田であつたらしい。この小道から神明塚を超えて東側に採集地の畑があり、この畑の更に東側に南北方向の道があつて畑に接していたとのことである。つまり、鏡発見当時の畑は、水田の中にある島畑であり、この島畑が南北方向に伸びる道と神明塚を陸続きにしていたことが判る。よって、この畑はもともと神明塚と呼ばれた砂山の一角をなして、削平された結果畑となったのか、または、水田であつた場所に周囲から持ち込まれた砂で埋め立てられたのか、いずれかである可能性が考えられる。ただし、神明塚が接道していた当時、この場所を畑として使用するためだけに相当量の砂を運んで水田を埋め立てるという行為の動機を想定し難い。鏡発見地である畑は神明塚と呼ばれた古墳の一部を形成しており、永年の経年劣化と削平により副葬されていた鏡が露出したと考えたほうが自然である。

現在、採集地は宅地内となっているが、小規模な畑が残る。神明塚は高さ1.5m、直径4mから5m程の規模で遺存する。周囲や頂きには特に祀られている石造物などは確認できない。神明塚は棗塚古墳（なつめづかこふん）としてNo.326で分布地図に記載されている。所在地は字棗塚であるが、道を隔てて南側は字向神明となっている。

鏡は保存状態が極めて良好で、直径は12.8cmを測り、欠損・ひび割れの無い完形品である。重量感があり、426gを量り表面の摩滅は認められない。倭鏡である⁷。縁はやや傾斜を持った方形で、外区は外側から鋸歯文、複波文、鋸歯文で構成される。内区副文帯は三本一組の複合鋸歯文で内側に擬銘帯が巡る。内区主文帯は4個の乳により区画された中に2つの神像と2つの獣文が配されている。紐座はパターンを含む円座で、紐孔は縦長の楕円形を呈する。

銅鏡は重夫氏から、本資料を広く市民に見ていただくべきとの意向で市原市に寄贈されたもので、市原市埋蔵文化財調査センターで保管している。

その他

山新遺跡・白塚出途遺跡の出土土器には、キズ跡が付いた破片が少なからず認められた（PL.35 SI6-3 ほか）。キズ跡は幅 3 mm 程度、長さは 2～4 mm 程度で、2 本程の条線のような見え方をするが、ピッチは短く、1 破片で複数箇所にあふることが多く、重複も認められる。キズ跡が認められる部位に規則性は見出だせず、器表のみ、内面のみ、両面に加え断面、全ての面など様々である。破片の場合、破面に近い部位に集中する傾向が認められる。上記の特徴からヤブネズミなどの小型ネズミによる噛み痕が考えられる。キズ跡が付いたタイミングだが、接合した破面にも及ぶ個体があることから、土器が廃棄・設置された後、破損してから埋没するまでの間である可能性が高い。埋没後に土中であっても土中に穴を掘る小動物であればキズ跡がつく可能性はあるが、地山が砂であるため、穴の壁が崩壊し易い環境を考えると可能性は低いのではないかと考えられる。一定期間地上に露出した環境にあった個体にキズ跡が付いている可能性が考えられる。

【参考文献】

- 浅利幸一・田所 真 1999 『市原市大厩浅間様古墳調査報告書』財団法人市原市文化財センター
伊禮正雄 1973 『椎津城の歴史＜本丸跡と内濠の試掘について＞』市原市教育委員会
大場磐雄・亀井正道 1951 「上総国姉ヶ崎二子塚古墳発掘調査概報」『考古学雑誌』第 37 号第 3 号 日本考古学会
大村 直 1992 『市原市叶台遺跡』財団法人市原市文化財センター
大村 直 2004 『市原市山田橋大山台遺跡』財団法人市原市文化財センター
大村 直 2006 『市原市南岩崎遺跡』市原市教育委員会
大村 直 2009 『市原市南中台・荒久遺跡 A 地点』市原市教育委員会
大村 直・鶴岡英一 2005 『平成 16 年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
大山祐喜 他 2014 『市原市海保地区遺跡群 I』国際文化財株式会社
小川浩一 2013 『市原市山新遺跡永津前地区』市原市教育委員会
小川浩一 2017 『市原市台遺跡 E 地点』市原市教育委員会
忍澤成視 2015 『市原市海保地区遺跡群 II』市原市教育委員会
北見一弘 1999 「畑木小谷遺跡」『平成 10 年度市原市内遺跡発掘調査報告』財団法人市原市文化財センター
北見一弘・鶴岡英一 2000 「畑木小谷遺跡」『市原市畑木小谷遺跡・椎津茶ノ木（第 2 次）一不特定遺跡発掘調査報告書（3）-』財団法人市原市文化財センター
北見一弘 2002 『市原市畑木小谷遺跡 II』財団法人市原市文化財センター
北見一弘 2015 『市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡 II』市原市教育委員会
木對和紀 1990 『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会
木對和紀・近藤 敏 2017 『平成 28 年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
木對和紀 1992 『市原市椎津茶ノ木遺跡』財団法人市原市文化財センター
小出紳夫 2000 『平成 8 年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会
小橋健司 2002 「姉崎山新遺跡（第 2 地点）」『市原市文化財センター年報 平成 11 年度』（財）市原市文化財センター
小橋健司 2004 「4. 姉崎妙経寺遺跡（第 7 次）」『市原市文化財センター年報 平成 13・14 年度』（財）市原市文化財センター
小橋健司 2008 「千葉県市原市山新遺跡の櫛描文埴輪」『埴輪研究会誌』第 12 号 埴輪研究会
小橋健司 2010 「千葉県市原市姉崎二子塚古墳の櫛描文埴輪」『埴輪研究会誌』第 14 号 埴輪研究会
小橋健司 2011 「内裏塚古墳と畑沢埴輪生産遺跡」『埴輪研究会誌』第 15 号 埴輪研究会
小橋健司・近藤 敏 2018 『市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会



Fig.123 神明塚位置図

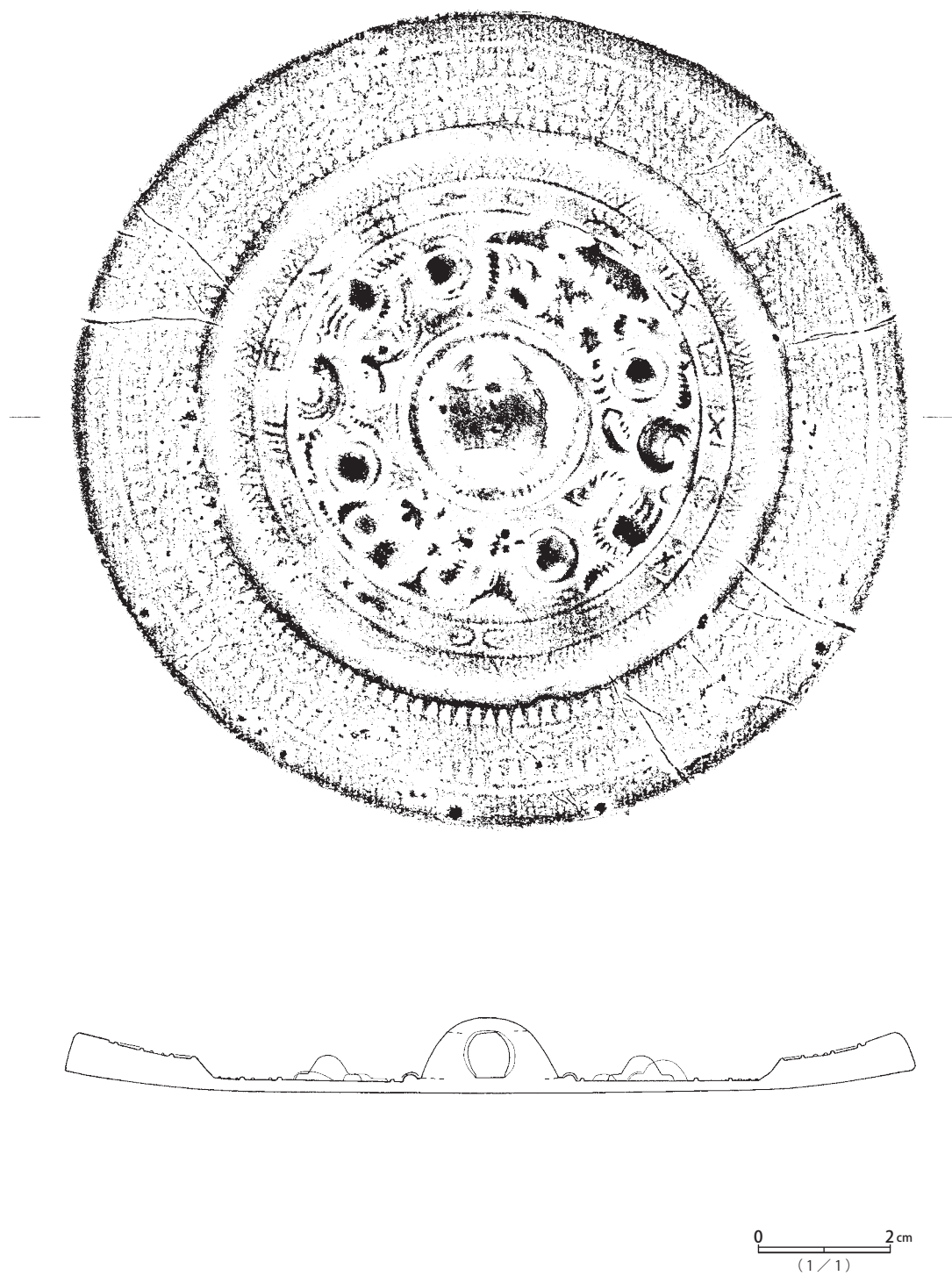


Fig.124 神明塚採集神獸鏡拓影・実測図

近藤 敏 2004「姉崎山新遺跡（第3地点）」『市原市文化財センター年報 平成13・14年度』（財）市原市文化財センター

近藤 敏 2005「姉崎山新遺跡（第3地点）」『市原市文化財センター年報 平成15・16年度』（財）市原市文化財センター

篠原祐一 1997「石製模造品剣形の研究」『祭祀考古学』創刊号

杉山晋作ほか 1990「海保大塚の測量調査」『関東地方における終末期古墳の研究』白石太郎

高橋康男 1998『市原市五霊台遺跡』（財）市原市文化財センター

蜂屋孝之 2000「6. 棗塚遺跡」『市原市文化財センター年報 平成12年度』（財）市原市文化財センター

【注釈】

¹ 平成16年度市原市内遺跡発掘調査では、都市計画道路八幡椎津線に隣接した調査区において同じ古墳群を形成する古墳時代前期末とされる円墳の周溝1基を検出しており、古墳群では本報告とあわせた全19基を確認していることになる。

² 明治45（1912）年の鉄道敷設（現在のJR内房線）工事に伴う土砂採取により10数基の古墳が破壊されたとの記録がある（大場・亀井1951）。この中で「居合塚」や「行伝塚」など、古墳とみられる名称が挙げられている。「居合塚」については小字名としても残り、現在でも塚の存在を伝え聞いている地元住民が存在するものの、既に具体的な位置や基数については明確ではなくなっている。

³ 2005「21. 山新遺跡」『市原市文化財センター年報 平成15・16年度』P.28、1.5による。

⁴ 小橋健司氏教示。

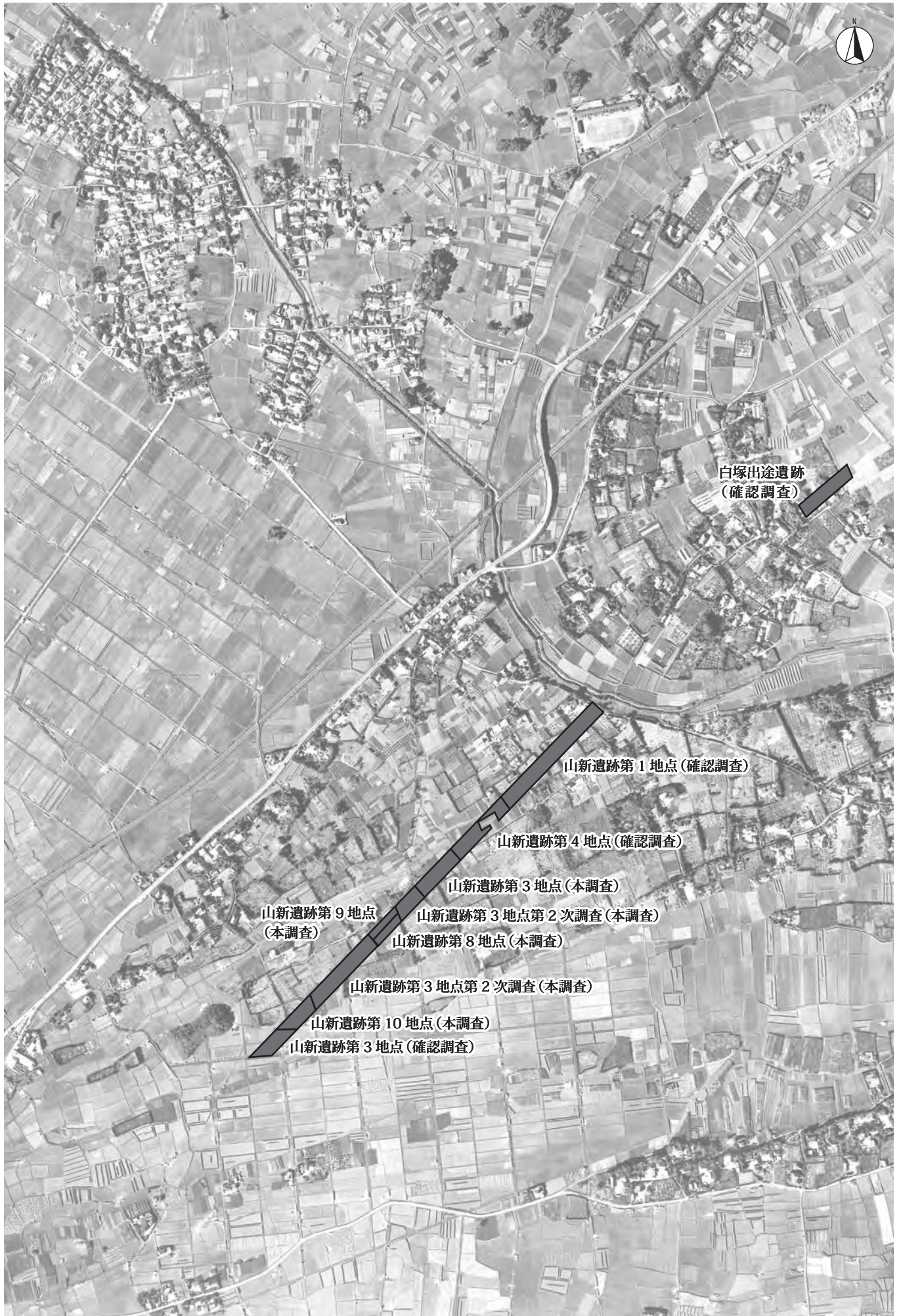
⁵ 諏訪台10号墳はトレンチ調査を実施しているが、その築造時期について定説は無い。報告書では整理作業段階で古墳群の変遷を協議した結果として古墳時代前期初頭としているが、確定的なものではない。

⁶ 中期の小型方墳については酒巻忠史氏から類例について教示があった。木更津市本郷一丁目遺跡2号墳で、周溝外側の径が7.3m×6.6m、周溝内側の径が6m×5.2mの規模をもつ。埋葬施設は検出していない。周溝内から土師器甕形土器に共伴して赤彩した土師器坏形土器が複数出土している。詳細は本報告を待つが、坏形土器の実測図を見る限り口径16cm、器高5cmを超えており、和泉式期後半から鬼高式期にかけての坏形土器大型化の段階、古墳時代中期中頃という印象を得た。

⁷ 加藤一郎氏（宮内庁書陵部主任研究官）から提供いただいた実測図をトレースして掲載した。銅鏡は斜縁二神二獣鏡模倣の前期倭鏡との所見を得ている。

写真図版





姉崎周辺空中写真 (昭和 36 年撮影)



八幡椎津線(姉崎工区)遠景 南南西から



八幡椎津線(姉崎工区)と姉崎二子塚古墳 写真上が北西



埴輪 SM17出土



石製品



八幡椎津線(姉崎工区)と姉崎二子塚古墳 南西から



姉崎二子塚古墳



第3地点 調査区遠景(北東から)



第3地点 調査区遠景(南西から)



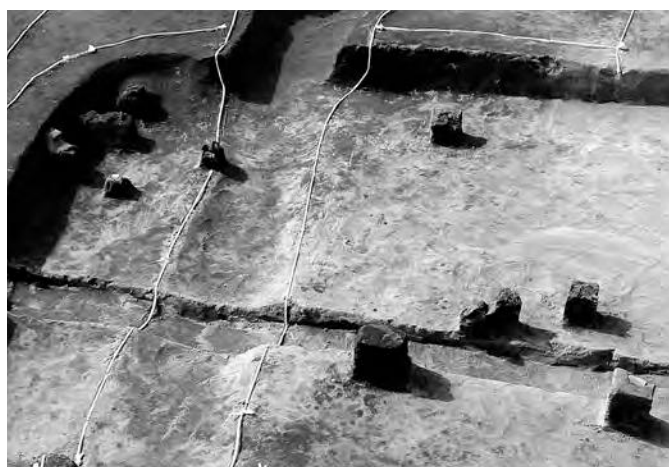
S11 遺構検出



S11 遺構完掘



S12 遺構完掘



S12 遺物出土



S13 遺構完掘



S14 遺物出土



S14 遺物出土



S15 遺構遠景



SI7abc 遺構完掘



SI7abc 遺物出土



SI7abc 遺物出土



SI8 遺構遠景



SI8 遺物出土



SI8 遺物出土



SI8 遺物出土



SI9 遺物出土



S110 遺構完掘



S110 遺物出土



S111 遺構完掘



S112 遺構完掘



S113 遺構完掘



S113 土層断面



第8地点 遠景



第8地点 遠景



第8地点東側 近景



第8地点 遠景



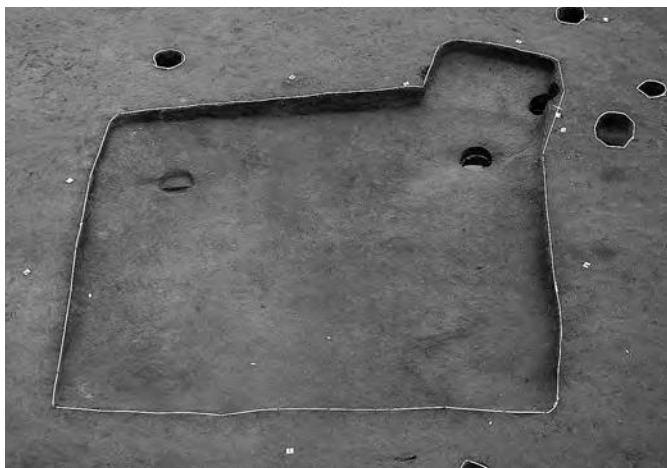
SI14 遺構完掘



SI14 遺物出土



SI14 遺物出土



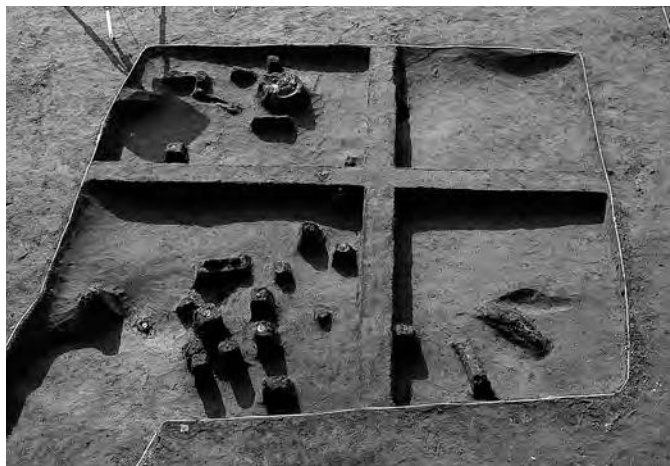
SI15 遺構完掘



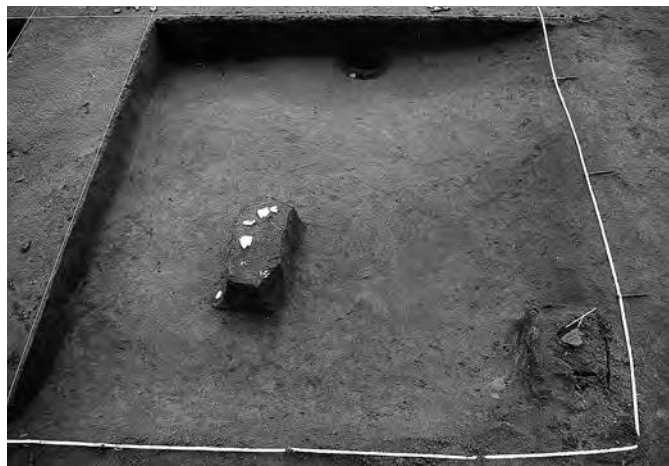
SI15 遺構検出



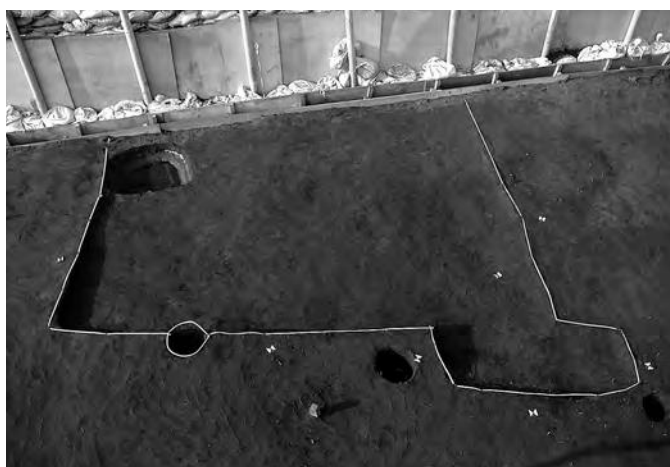
SI15 遺構検出



SI15 土層断面



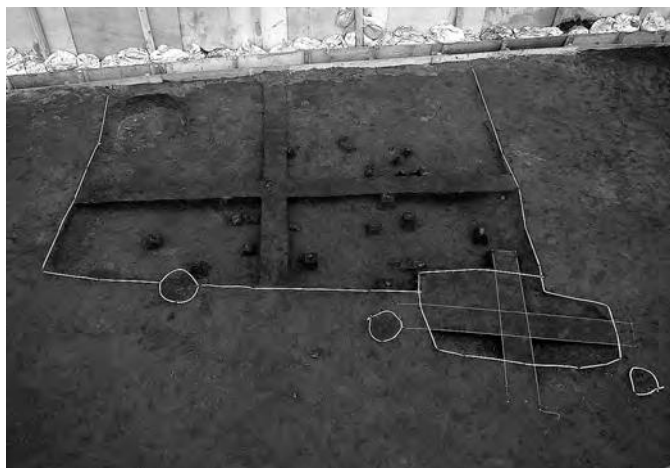
SI15 遺物出土



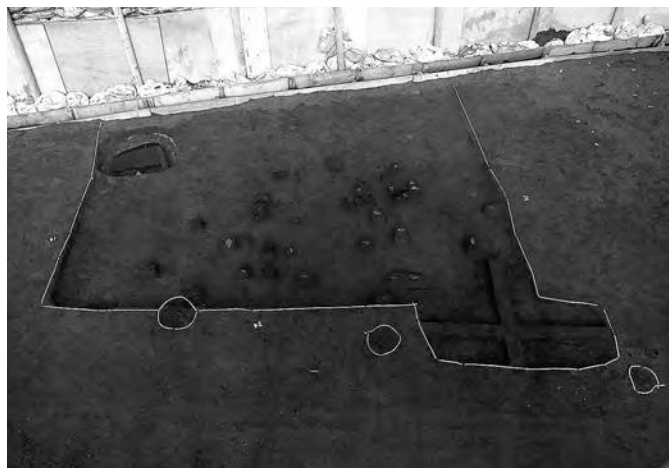
SI16 遺構完掘



SI16 遺構検出



SI16 土層断面



SI16 遺物出土



SI17 遺物出土



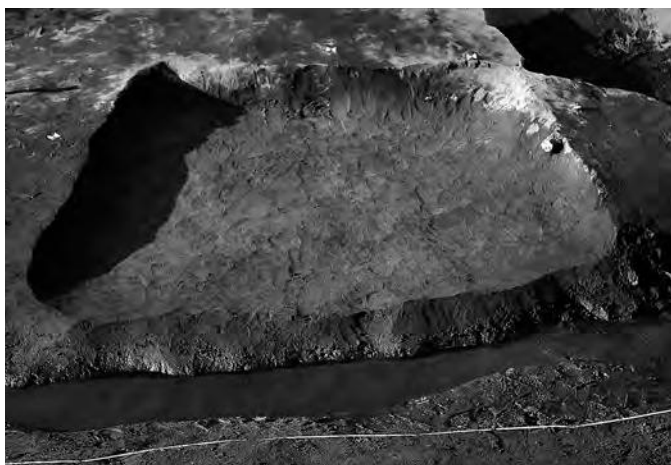
第9地点遠景



SI18・19 遺構完掘



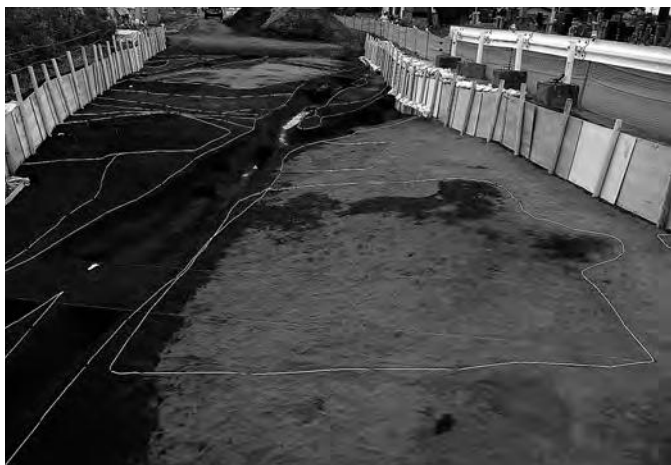
SI19 遺物出土



SI20 遺構完掘



SI20 遺物出土



SI21 遺構完掘



SI21 土層断面



SI21 遺物出土



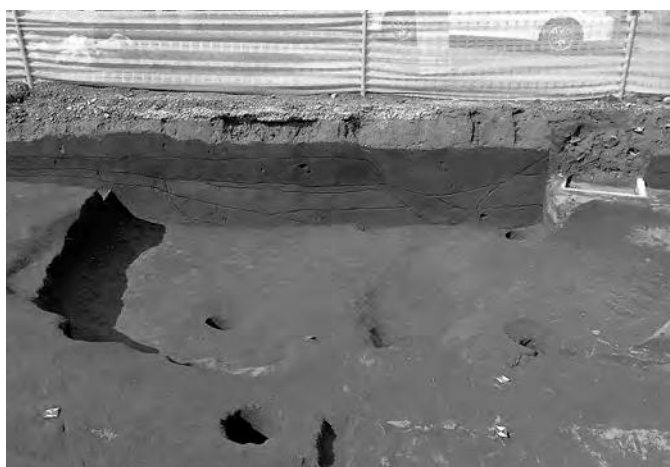
SI21 遺物出土



SI21 調査風景



SI21 遠景



SI22 遺構完掘



SI23 遺構完掘



SI23 遺物出土



SI23 遺物出土



第3地点 遠景



第3地点 調査風景



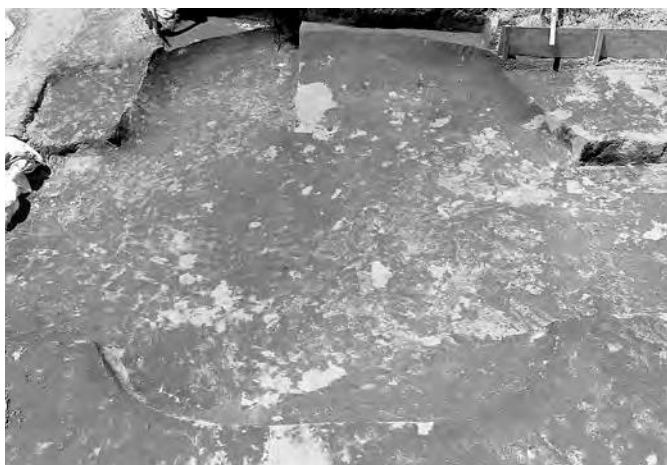
SI24 遺構完掘



SI24 遺物出土



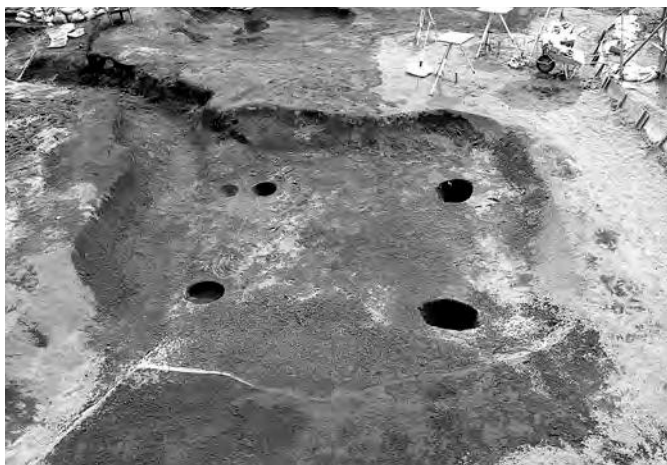
SI24 遺物出土



SI25 遺構完掘



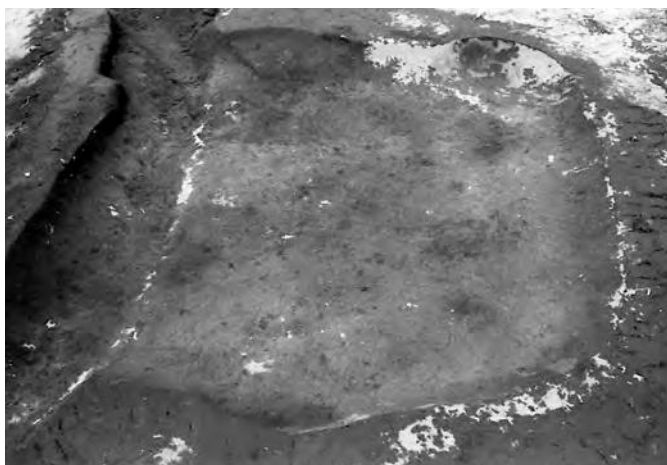
SI25 遺物出土



SI26 遺構完掘



SI26 土層断面



SI26 床検出



S127 遺構完掘



S127 床検出



S127 遺物出土



S128 土層断面



S128 遺物出土



S128 遺物出土



S128 遺物出土



S128 遺物出土



SI28 遺物出土



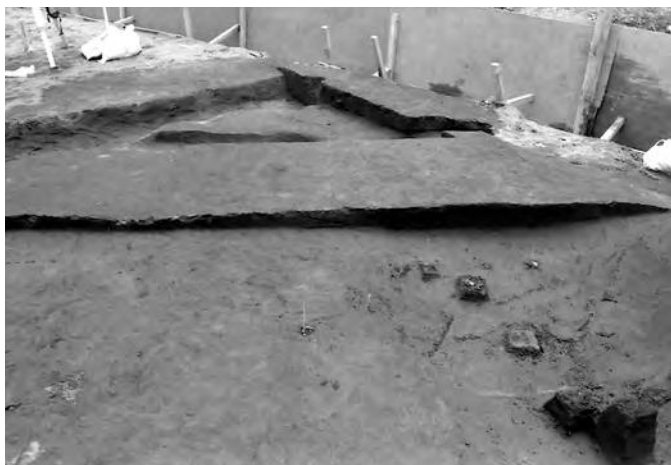
SI29 遺物出土



SI30 遺物出土



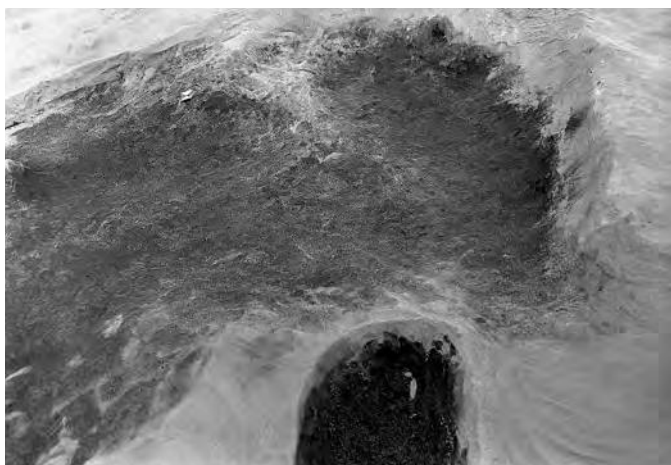
SI30・SM18 土層断面



SI30 土層断面



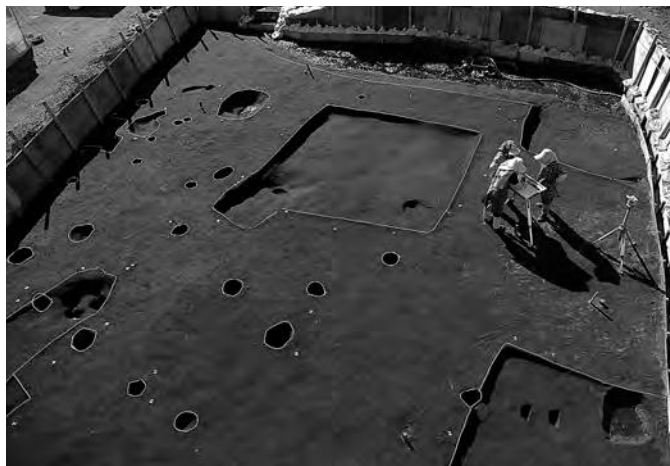
SI30 遺物出土



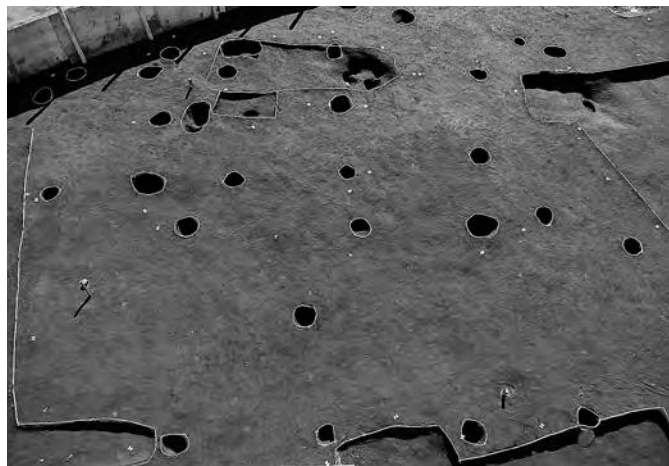
SI31 炉



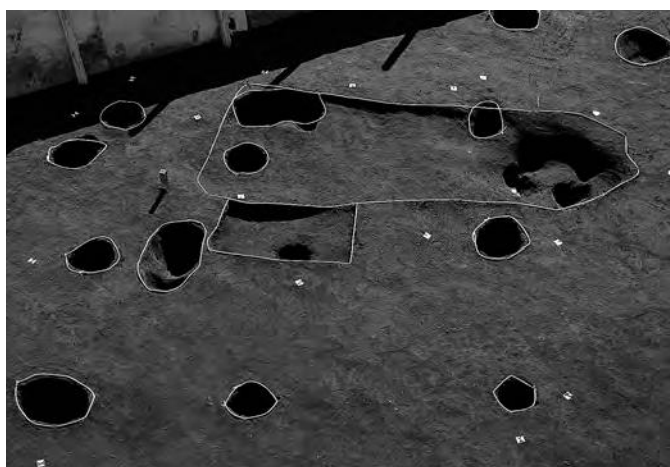
SB1 遺構完掘



SB2 遺構完掘



SB2 遺構完掘



SB2 遺構完掘



SB3 遺構完掘



SM1 遺構完掘



SM2 遺構完掘



SM2 土層断面



SM3 遺構完掘



SM3 遺構完掘



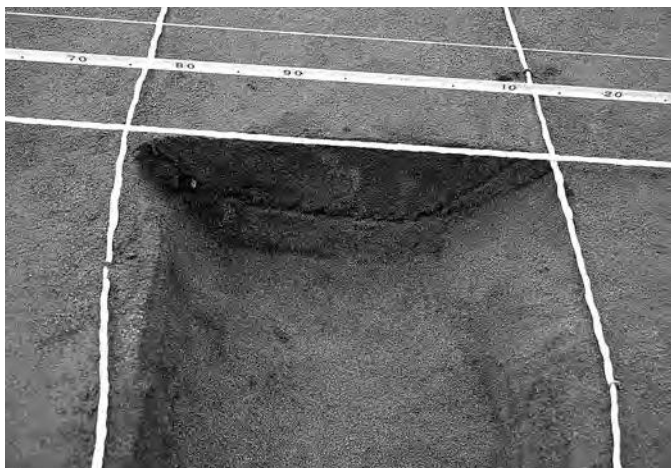
SM3 土層断面



SM4 遺構完掘



SM5 遺構完掘



SM5 土層断面



SM6 遺構完掘



SM7 遺構完掘



SM7 遺構完掘



SM7 調査風景



SM8 遺構完掘



SM7・8遺構遠景



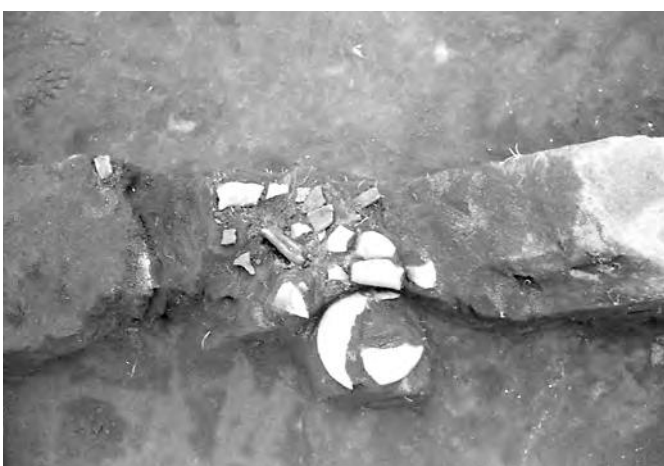
SM8 遺物出土



SM9 遺構完掘



SM9 遺物出土



SM9 遺物出土



SM9 周溝内土坑土層断面



SM9 周溝内土坑



SM9 周溝内焼土



SM9・10 遠景



SM9・10 遠景



SM10 遺構完掘



SM10 遺構完掘



SM10 遺物出土(埴輪)



SM10 遺物出土(埴輪)



SM10 遺物出土(埴輪)



SM10 遺物出土(埴輪)



SM10 土層断面



SM11 遺構完掘



SM11 遺物出土



SM11 土層断面



SM11 土層断面



SM11 マウンド土層



SM11 マウンド土層断面



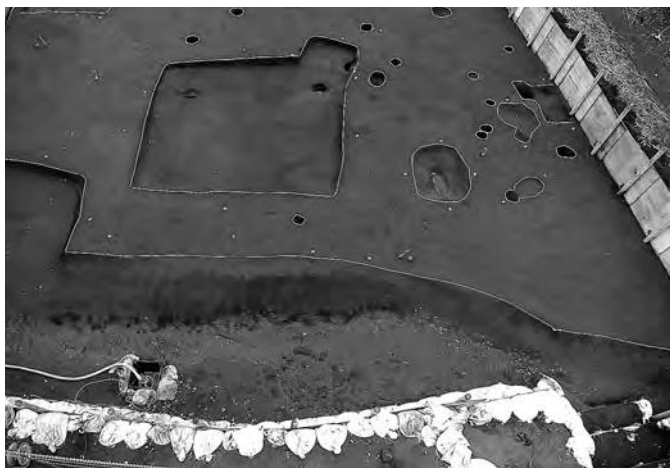
SM12 遺構完掘



SM12 遺構完掘



SM12 土層断面



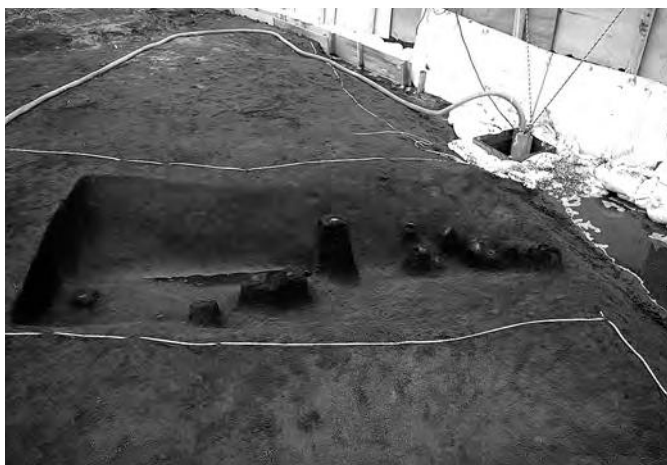
SM12 遺構完掘(東側)



SM13 遺構完掘



SM13 遺構検出



SM13 遺物出土



SM13 土層断面



SM13 遺物出土(東側)



SM13 遺物出土(南西隅)



SM14 土層断面(南側)



SM14 遺物出土(南側)



SM14 土層断面(南側)



SM14・SD30 土層断面



SM14 遺物出土(西側)



SM14 遺物出土(西側)



SM14 遺物出土(西側)



SM14 遺物出土(西側)



SM14 遺物出土(西側)



SM14 遺物出土(西側)



SM14 遺物出土(西側)



SM14 遺物出土(西側)



SM14 遺構完掘(南側)



SM15 遺構完掘



SM16 遺物出土(北側)



SM16 遺物出土(南側)



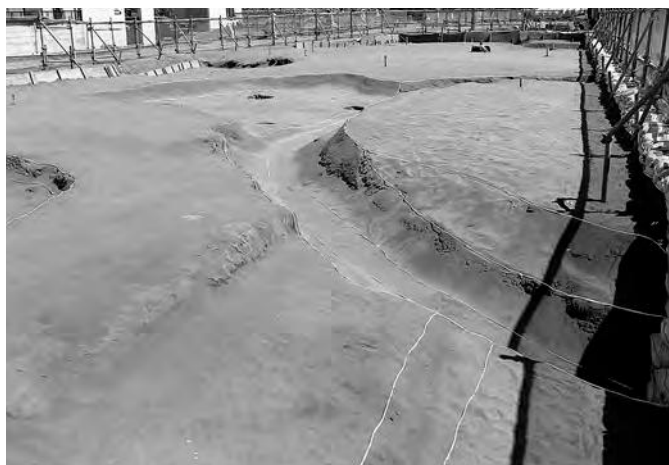
SM16 遺物出土(南側)



SM16 遺物出土(東側)



SM16 遺物出土(北側)



SM17 遺構完掘



SM17 遺物出土(西側)



SM18 遺構完掘(北側)



SM18 遺物出土(北側)



SM18 遺構完掘(北側)



SK1 遺構完掘



SK1 土層断面



SK2 遺構完掘



SK2 土層断面



SK3 遺構完掘



SK3 土層断面



SK4 遺構完掘



SK4 土層断面



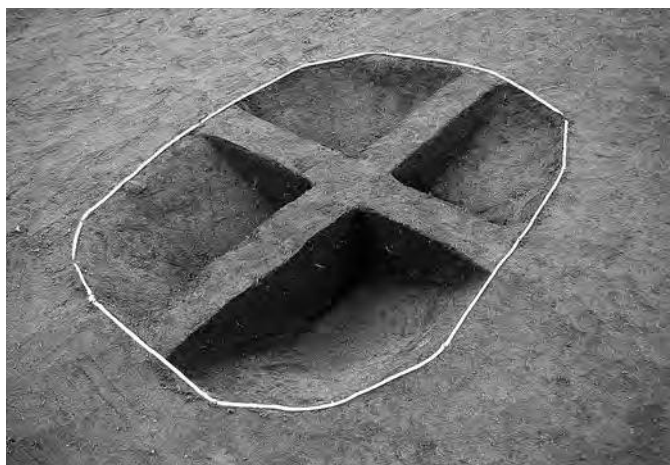
SK5 遺構完掘



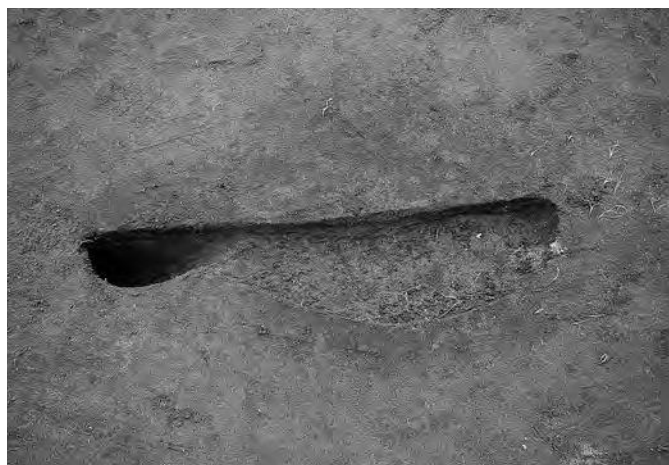
SK7 遺構完掘



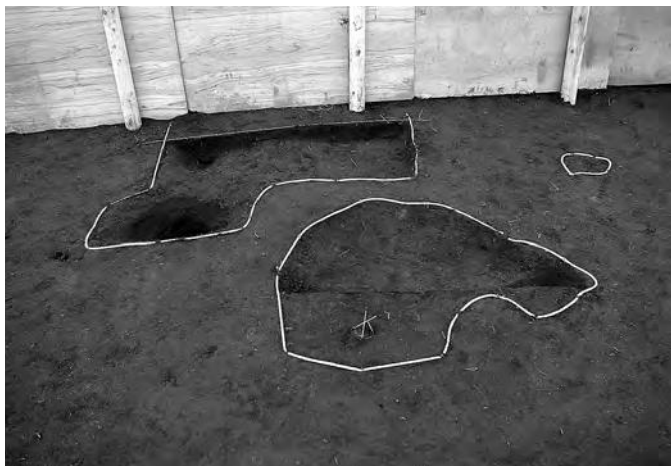
SK10 遺構完掘



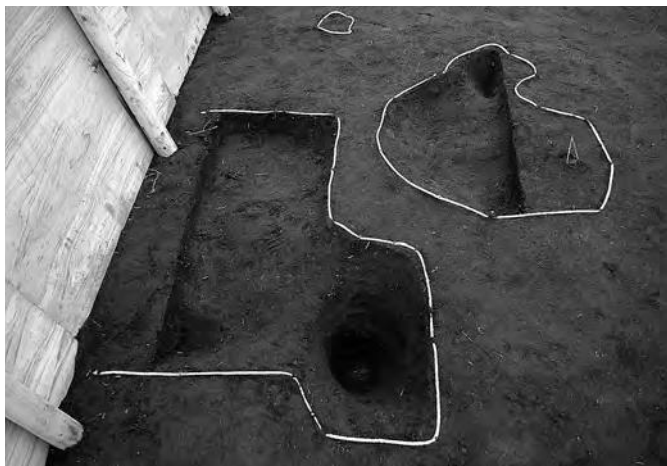
SK12 土層断面



SK13 土層断面



SK14 遺構完掘



SK15 遺構完掘



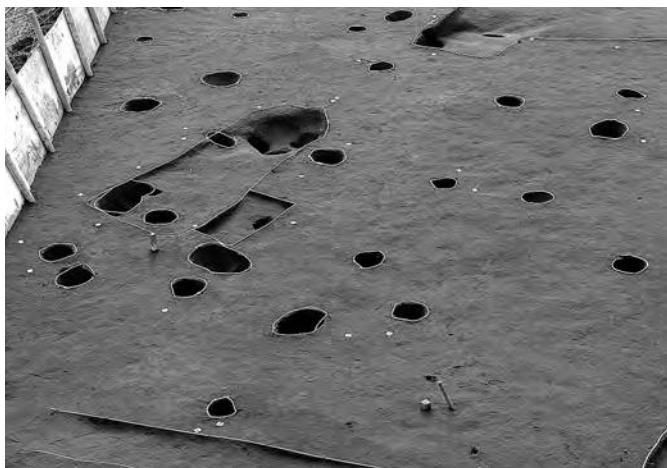
SK16 遺構完掘



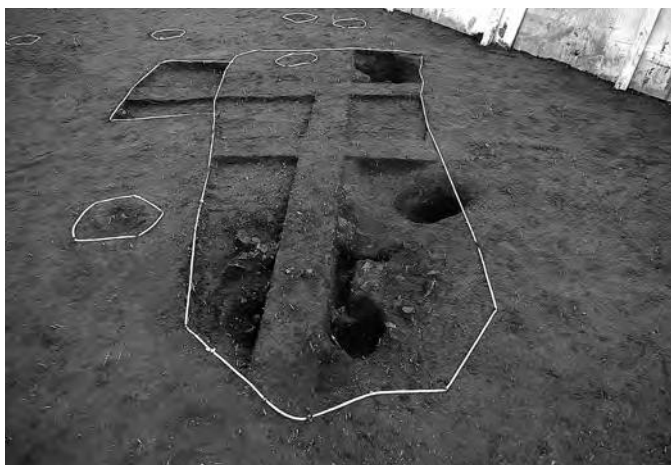
SK16 土層断面



SK18 遺構完掘



SK18 遠景



SK18 土層断面



SK18 調査風景



SK18 遺物出土



SK18 遺物出土



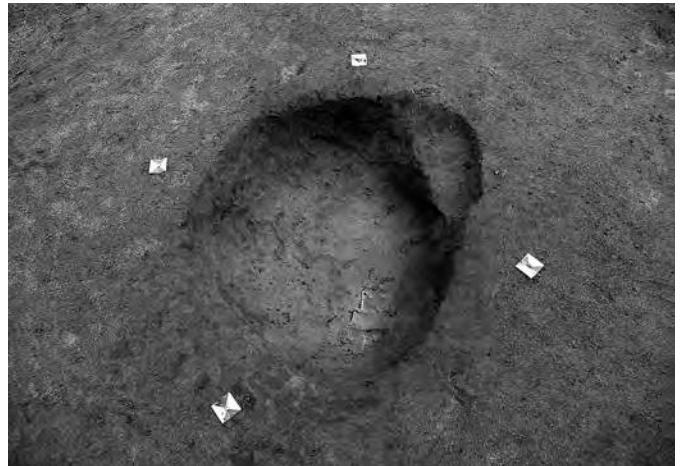
SK18 遺物出土



SK19 遺構完掘



SK19 土層断面



SK20 遺構完掘



SK20 土層断面



SK21 遺構完掘



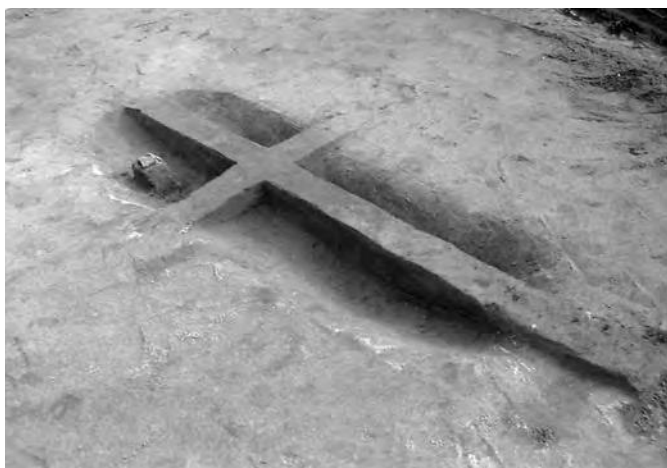
SK21 土層断面



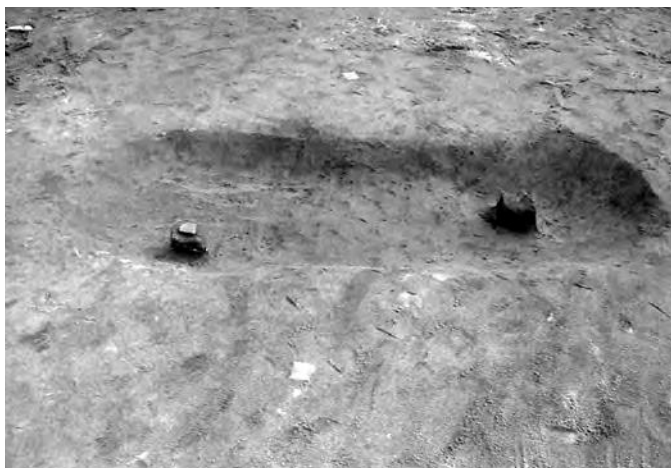
SK27 遺物出土



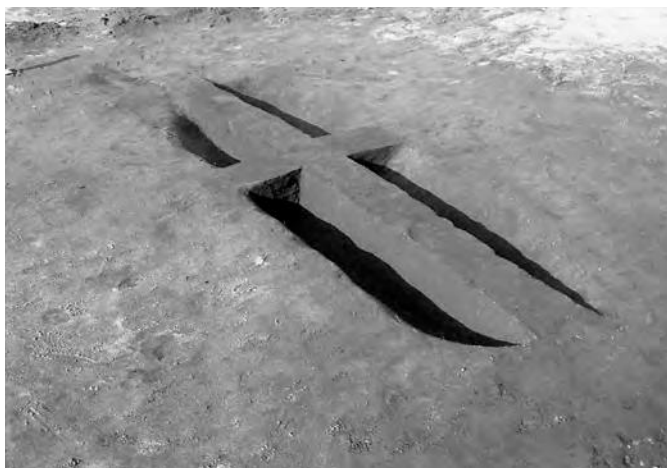
SK28(写真右)・29(同左) 遺構完掘



SK28 土層断面



SK28 遺物出土



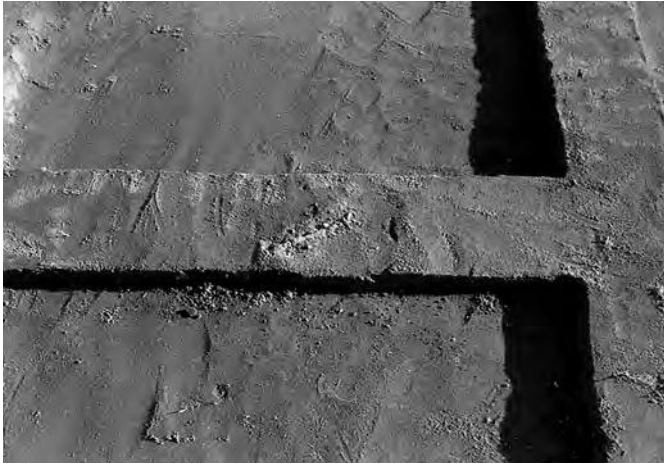
SK29 土層断面



SK30 棺跡検出



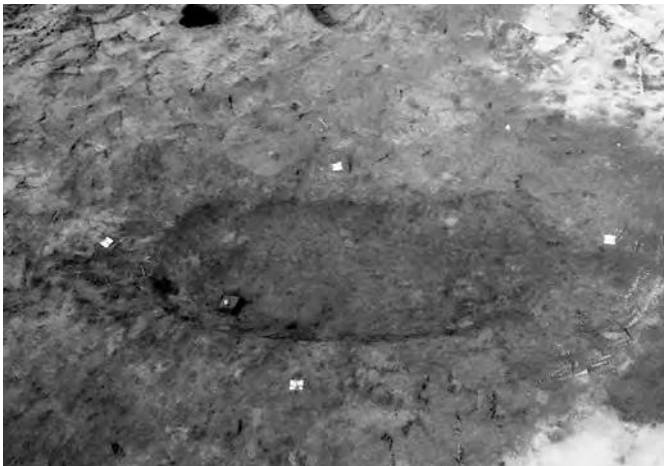
SK30 土層断面



SK30 遺物出土



SK30 遠景



SK31 全景



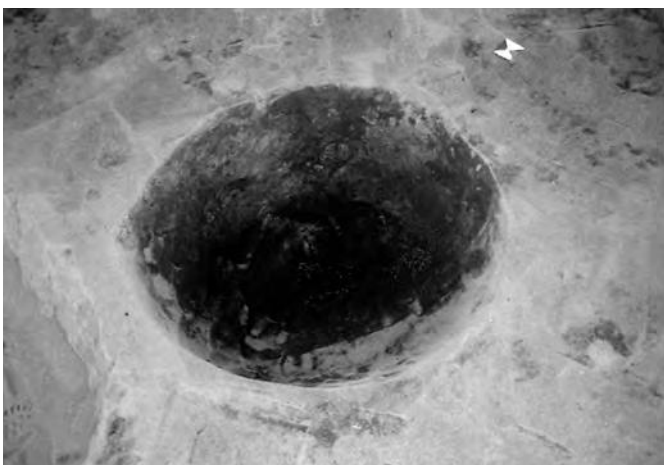
SK31 土層断面



SK31 馬齒出土



SK32 遺構完掘



SK33 遺構完掘



SK34 棺底検出



SK34 土層断面



SK35 遺構完掘



SK38 遺構完掘



SK40 土層断面



SK43 土層断面



SK44 遺物出土



SK44 土層断面



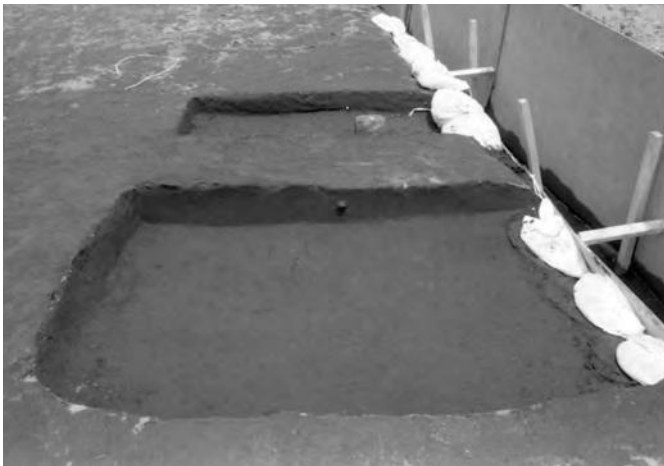
SK45 遺構完掘



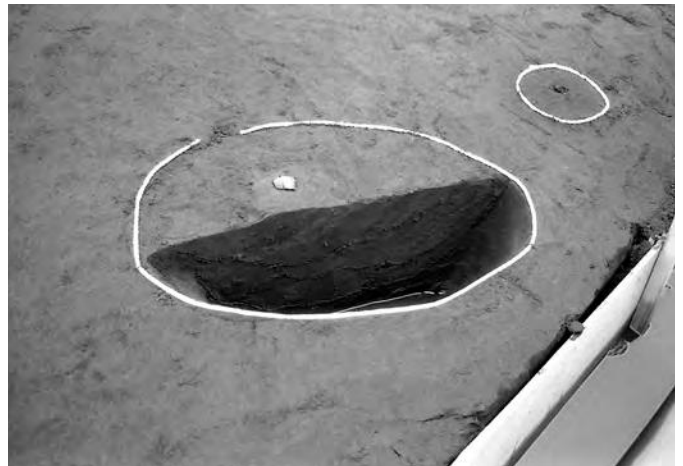
SK45 土層断面



SK48 遺構完掘



SK48 土層断面



SK49 土層断面



SK53 遺構完掘



SK53 土層断面



SK54 遺構完掘



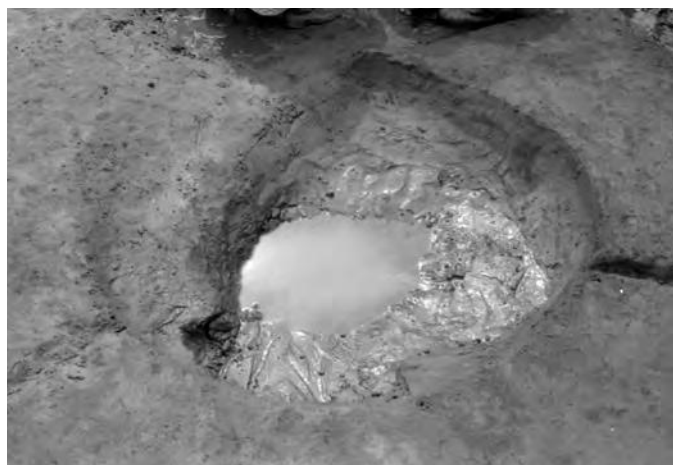
SK56 遺構完掘



SK57 土層断面



SK67



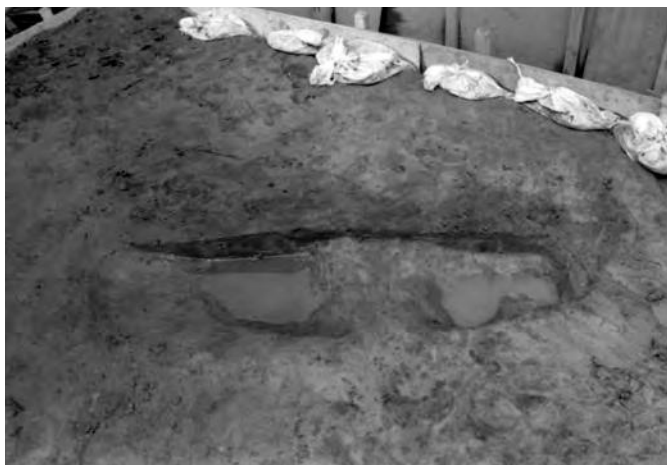
SK68 遺構完掘



SK67・68 土層断面



SK69 遺構完掘



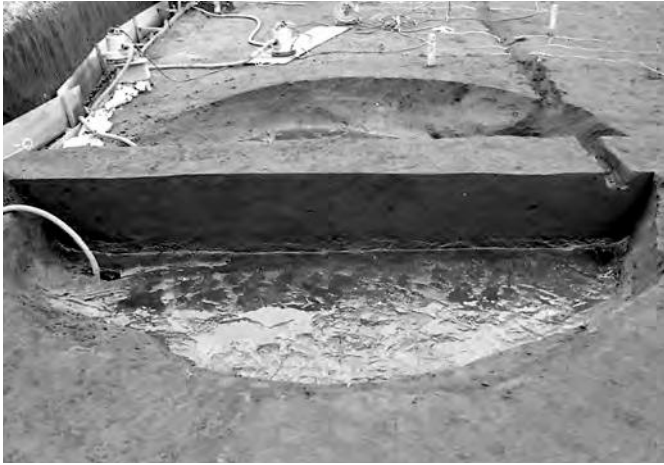
SK69 土層断面



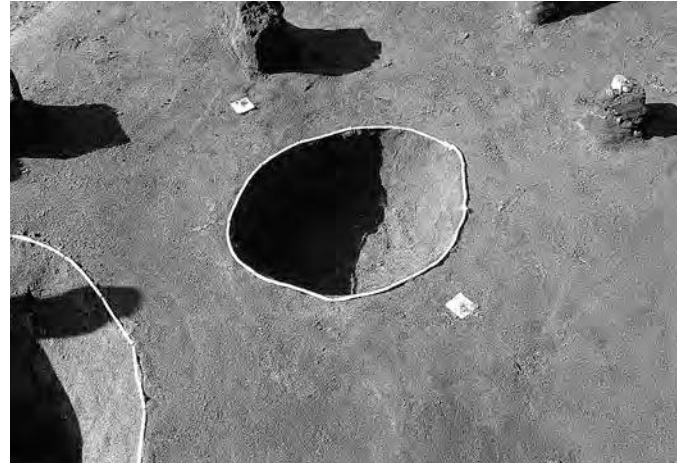
SK70 土層断面



SE1 遺構完掘



SE1 土層断面



SH6 遺構完掘



SH6 土層断面



SH7 遺構完掘



SH7 土層断面



SH8 遺構完掘



第10地点拡張区



第10地点拡張区



SD2 遺構完掘(写真左)



SD4・5・6 遺構完掘



SD5(写真左)・7a(同右) 遺構完掘



SD6(写真左)・7a(同奥)・7b(同奥手前) 遺構完掘



SD8 遺構完掘



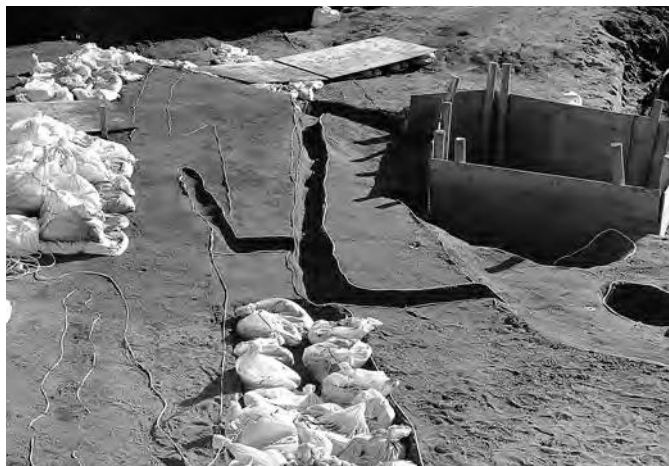
SD9 全景



SD9 土層断面



SD9 土層断面



第10地点北側 遺構検出



SD11 全景



SD12・13 全景



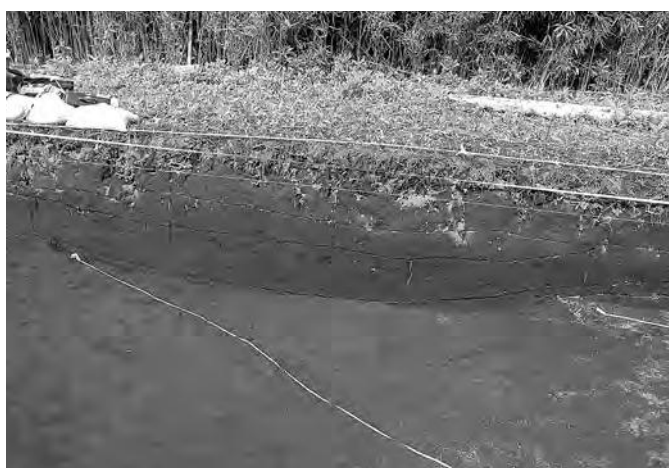
SD12・13 土層断面



SD12-P1 完掘



SD14 遺構完掘



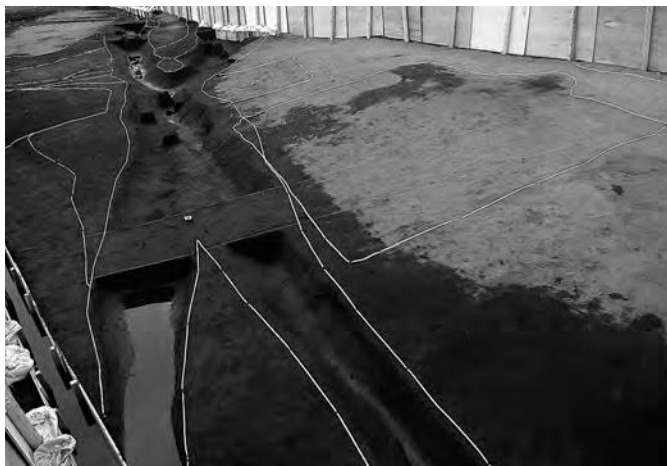
SD14 土層断面



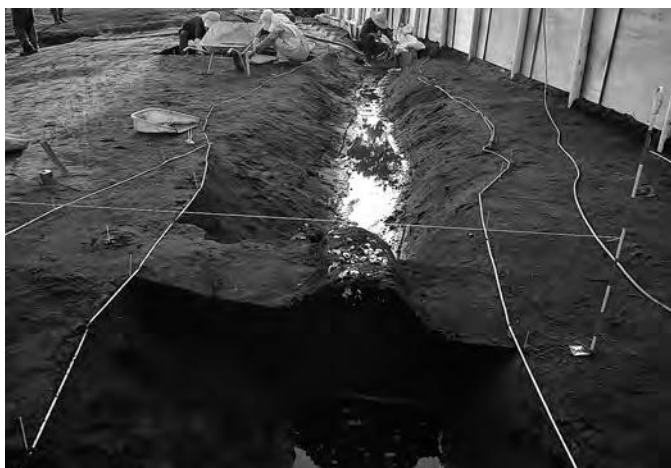
SD15(写真右)・SD16(写真左) 遺構完掘



SD15(写真右)・SD16(写真左) 遺構検出



SD30 近景



SD30 近景



SD30 土層断面



SD30 土層断面



SD30 土層断面



SD31 遺物出土



SD32 遺構完掘



SD32 全景



SD32 遺構検出



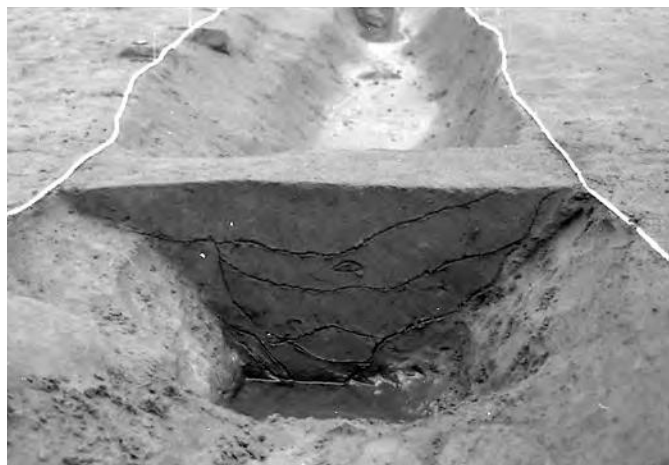
SD32 土層断面



SD34 土層断面



SD41 土層断面



SD41 土層断面



SD42 土層断面



SX1 遺構完掘



SX3 遺物出土



SX4 遺物出土



SX7 遺物出土



第3地点 姉崎二子塚脇確認調査風景



第1地点 確認調査風景



第4地点 確認調査風景



白塚出途遺跡 確認調査風景



白塚出途遺跡 確認調査風景



SI3-1



SI4-1



SI4-2



SI4-3



SI4-4



SI4-5



SI4-6



SI4-7



SI4-8



SI6-1



SI6-2



SI6-3



SI6-3



SI7-1



SI7-1



SI7-6



SI7-8



SI7-9



SI7-10



SI7-12



SI7-16



SI7-16



SI7-17



SI7-17



SI7-18



SI7-18



SI8-1



SI8-6



SI8-8



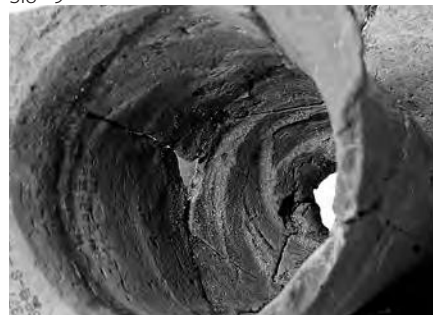
SI8-8



SI8-9



SI8-9



SI8-9



SI8-10



SI8-10



SI9-1



SI9-2



SI9-5



SI9-9



SI9-17



SI9-6



SI9-11



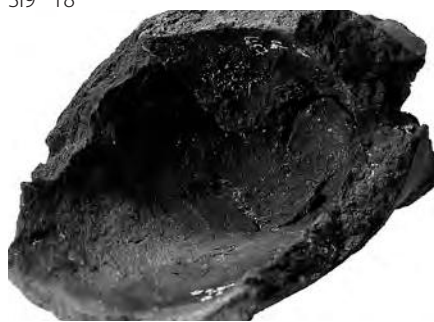
SI9-18



SI9-7



SI9-12



SI9-18



SI9-8



SI9-13



SI9-19



SI9-10



SI9-15



SI9-19



SI9-9



SI9-16



SI10-2



SI9-17



SI10-1



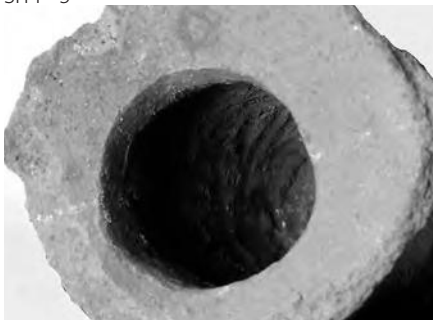
SI11-5



SI14-2



SI10-3



SI11-5



SI14-3



SI10-4



SI12-2



SI14-4



SI11-2



SI13-1



SI14-5



SI11-4



SI13-3



SI14-6



SI11-4



SI14-1



SI14-7



SI14-8



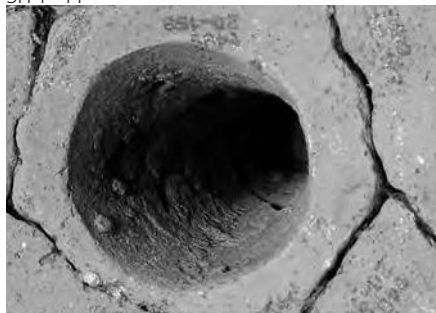
SI14-9



SI14-10



SI14-11



SI14-11



SI14-12



SI14-12



SI14-13



SI14-14



SI14-14



SI14-15



SI14-16



SI14-16



SI14-18



SI14-18



SI14-19



SI14-20



SI14-21



SI15-1



SI15-2



SI15-3



SI15-4



SI17-4



SI19-1



SI19-2



SI19-3



SI19-4



SI21-1



SI21-4



SI23-1



SI23-2



SI23-5



SI23-4



SI23-6



SI23-7



SI23-8



SI23-9



SI23-10



SI23-14



SI23-17



SI23-18



SI23-19



SI23-20



SI23-21



SI23-22



SI23-23



SI23-24



SI23-25



SI23-26



SI23-27



SI23-29



SI23-29



SI23-31



SI23-32



SI23-33



SI23-36



SI23-36



SI23-37



SI23-38



SI23-39



SI23-40



SI23-40



SI23-41



SI23-42



SI23-43



SI23-44



SI23-45



SI23-46



SI23-46



SI23-47



SI23-48



SI23-48



SI23-49



SI23-49



SI23-50



SI23-51



SI23-52



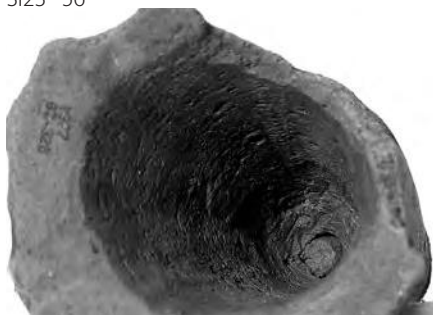
SI23-56



SI23-59



SI23-53



SI23-56



SI23-60



SI23-54



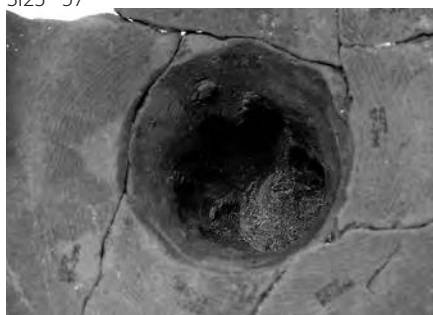
SI23-57



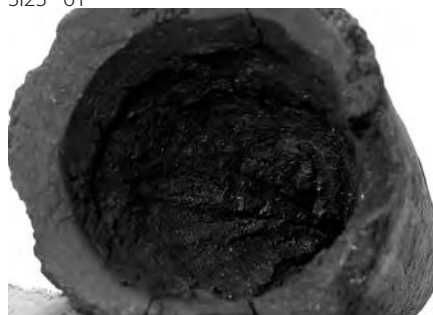
SI23-61



SI23-54



SI23-57



SI23-61



SI23-55



SI23-58



SI23-62



SI23-55



SI23-63



SI23-64



SI23-67



SI23-67



SI24-1



SI24-2



SI24-3



SI24-4



SI24-5



SI24-6



SI24-6



SI24-8



SI24-9



SI25-1



SI25-2



SI25-3



SI25-4



SI25-4



SI25-14



SI25-18



SI25-6



SI25-14



SI26-2



SI25-7



SI25-15



SI26-4



SI25-8



SI25-15



SI26-5



SI25-9



SI25-16



SI26-6



SI25-11



SI25-17



SI26-7



SI25-12



SI26-8



SI26-9



SI26-10



SI26-10



SI26-11



SI26-11



SI26-12



SI27-4



SI27-5



SI27-5



SI27-5



SI27-7



SI28-1



SI28-2



SI28-3



SI28-4



SI28-5



SI28-6



SI28-7



SI28-17



SI28-23



SI28-8



SI28-18



SI28-24



SI28-11



SI28-19



SI28-28



SI28-13



SI28-20



SI28-29



SI28-14



SI28-21



SI28-33



SI28-15



SI28-23



SI28-34



SI28-16



SI28-35



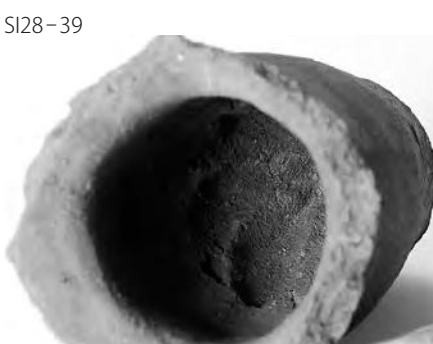
SI28-39



SI28-42



SI28-36



SI28-39



SI28-43



SI28-36



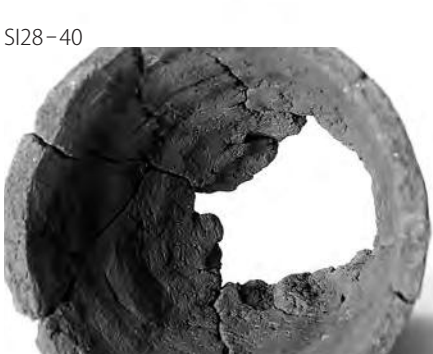
SI28-40



SI28-43



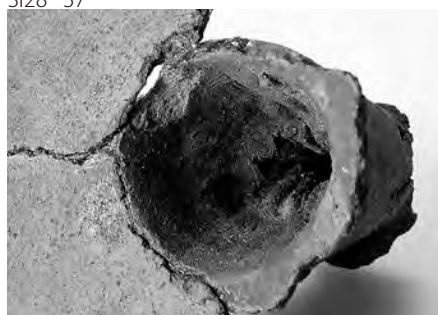
SI28-37



SI28-40



SI28-44



SI28-37



SI28-41



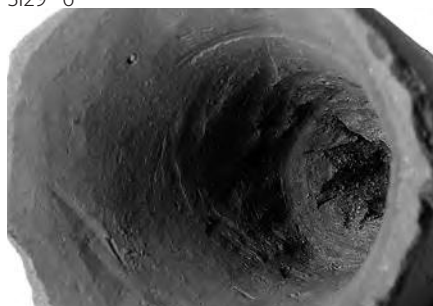
SI29-6



SI28-38



SI28-41



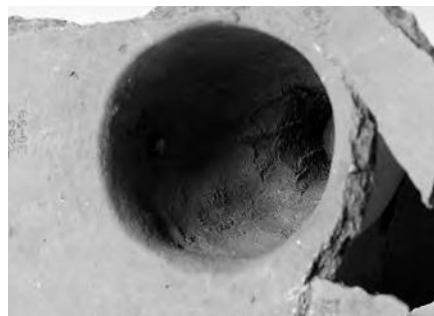
SI29-6



SI29-10



SI30-11



SI30-16



SI30-1



SI30-12



SI30-17



SI30-8



SI30-13



SI30-17



SI30-9



SI30-14



SI30-18



SI30-9



SI30-15



SI30-18



SI30-11



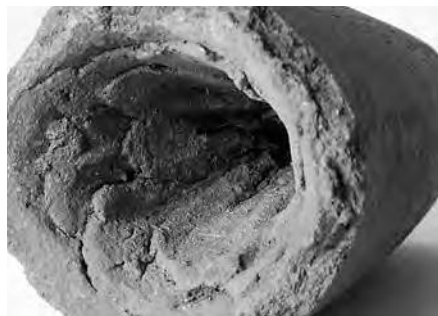
SI30-15



SI30-19



SI30-16



SI30-19



SM3-7



SM7-4



SB4-1



SM3-7



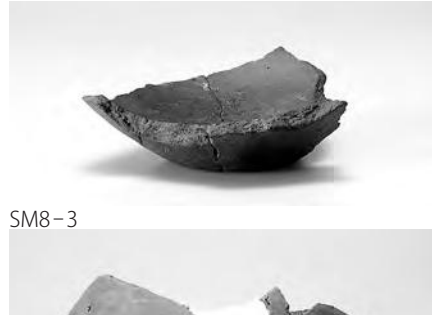
SM8-2



SM2-3



SM7-1



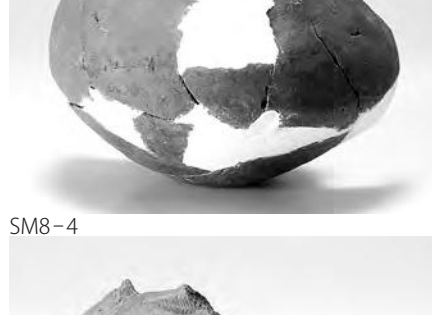
SM8-3



SM2-4



SM7-3



SM8-4



SM3-1



SM7-3



SM8-5



SM3-6



SM8-1



SM8-6



SM3-7



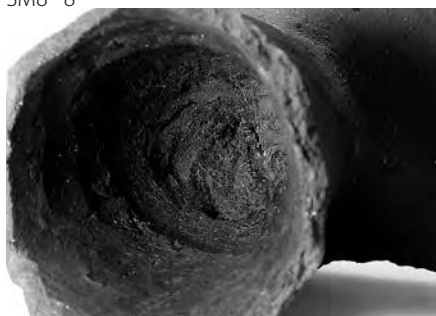
SM8-6



SM8-7



SM8-8



SM8-8



SM9-2



SM9-3



SM9-4



SM9-5



SM9-6



SM9-6



SM9-7



SM9-8



SM9-8



SM9-10



SM9-10



SM9-11



SM9-12



SM9-12



SM9-13



SM9-13



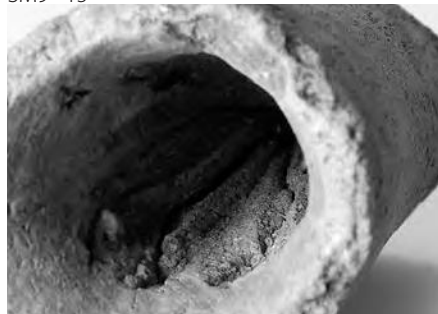
SM9-14



SM9-14



SM9-15



SM9-15



SM9-16



SM9-16



SM9-17



SM9-17



SM9-18



SM9-18



SM9-19



SM9-19



SM9-20



SM9-20



SM9-21



SM9-22



SM9-22



SM9-22



SM9-22



SM10-6



SM11-15



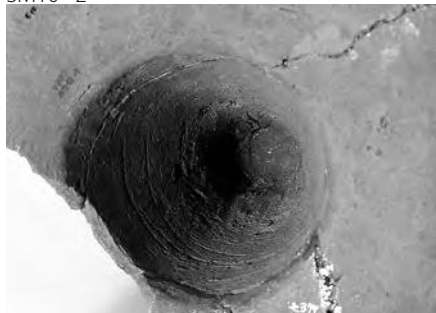
SM10-2



SM10-6



SM11-17



SM10-2



SM11-2



SM11-20



SM10-3



SM11-6



SM11-22



SM10-4



SM11-10



SM11-23



SM10-6



SM11-12



SM11-25



SM11-13



SM11-25



SM11-14



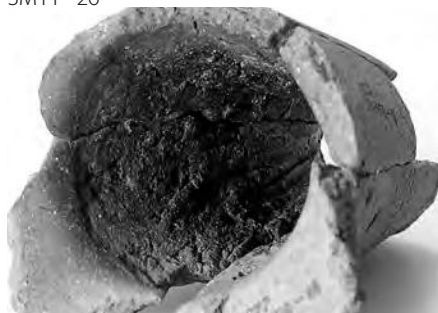
SM11-26



SM11-29



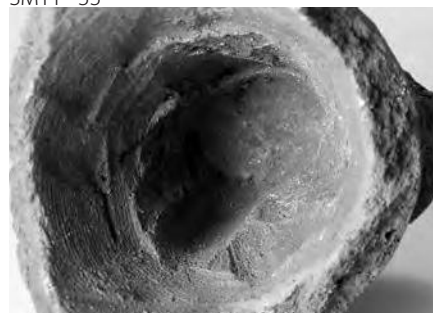
SM11-33



SM11-26



SM11-29



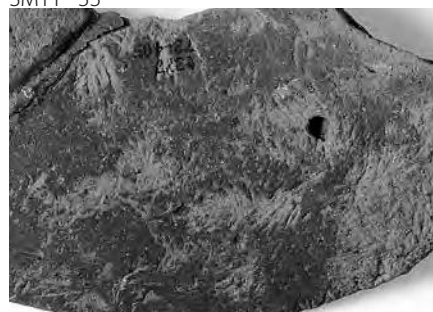
SM11-33



SM11-27



SM11-31



SM11-34



SM11-27



SM11-31



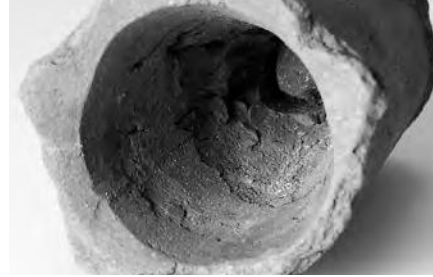
SM11-35



SM11-28



SM11-32



SM11-35



SM11-28



SM11-32



SM12-1



SM12-2



SM12-16



SM12-25



SM12-8



SM12-18



SM12-26



SM12-10



SM12-21



SM12-11



SM12-24



SM12-27



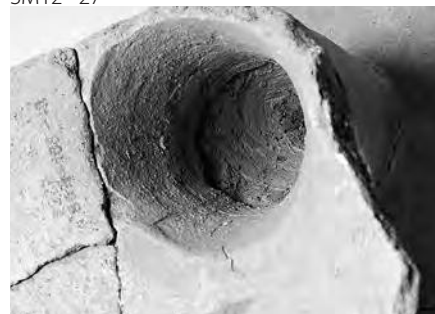
SM12-12



SM12-13



SM12-24



SM12-27



SM12-14



SM12-15



SM12-25



SM12-28



SM12-29



SM12-29



SM12-30



SM12-31



SM12-31



SM12-32



SM12-32



SM12-33



SM12-34



SM12-34



SM12-35



SM12-36



SM12-39



SM12-40



SM12-51



SM13-2



SM13-3



SM13-4



SM13-5



SM14-1



SM14-2



SM14-3



SM14-5



SM14-7



SM14-10



SM14-11



SM14-13



SM14-18



SM14-24



SM14-25



SM14-25



SM14-26



SM14-30



SM14-31



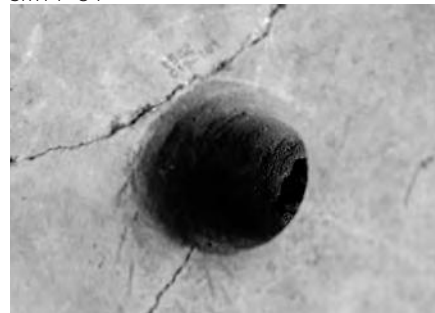
SM14-32



SM14-33



SM14-34



SM14-34



SM14-35



SM14-37



SM14-37



SM14-38



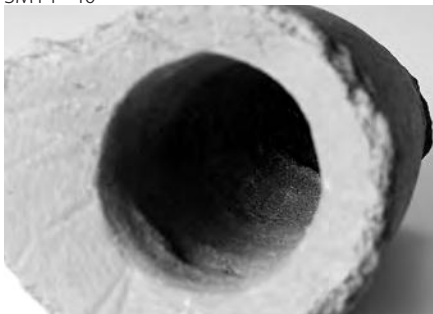
SM14-39



SM14-39



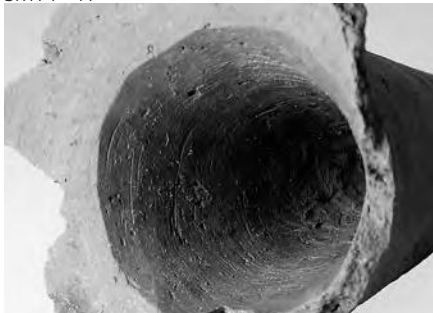
SM14-40



SM14-40



SM14-41



SM14-41



SM14-42



SM14-43



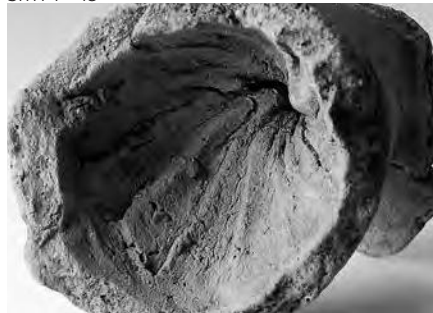
SM14-44



SM14-44



SM14-45



SM14-45



SM14-46



SM14-46



SM14-47



SM14-48



SM14-48



SM14-49



SM14-50



SM14-50



SM14-51



SM14-52



SM14-53



SM14-54



SM14-55



SM14-57



SM14-57



SM15-4



SM15-5



SM16-1



SM16-2



SM16-3



SM16-4



SM16-5



SM16-5



SM17-1



SM17-2



SM17-3



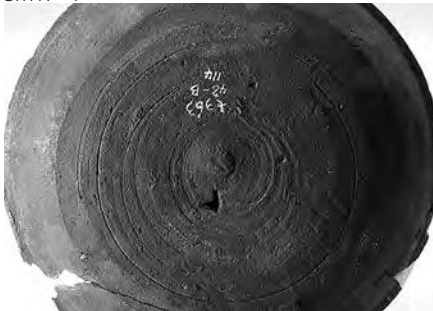
SM17-5



SM17-6



SM17-7



SM17-7



SM17-13



SM17-13



SM17-13



SM17-14



SM17-14



SM17-14



SK18-3



SK22-1



SM18-2



SK18-4



SK27-3



SK4-1



SK18-5



SK31-1



SK18-1



SK18-6



SK31-3



SK18-2



SK24-1



SK35-1



SK35-2



SK45-8



SK67-5



SK35-3



SK67-1



SD9-5



SK44-1



SK67-1



SD20-1



SK44-10



SK67-2



SD22-1



SK44-12



SK67-4



SD22-2



SD31-4



SD31-5



SD31-9



SD31-10



SD31-14



SX3-2



SX3-4



SX3-5



SX3-5



SX4-1



SX5-2



SX7-1



SX11-1



SX12-3



SX12-3



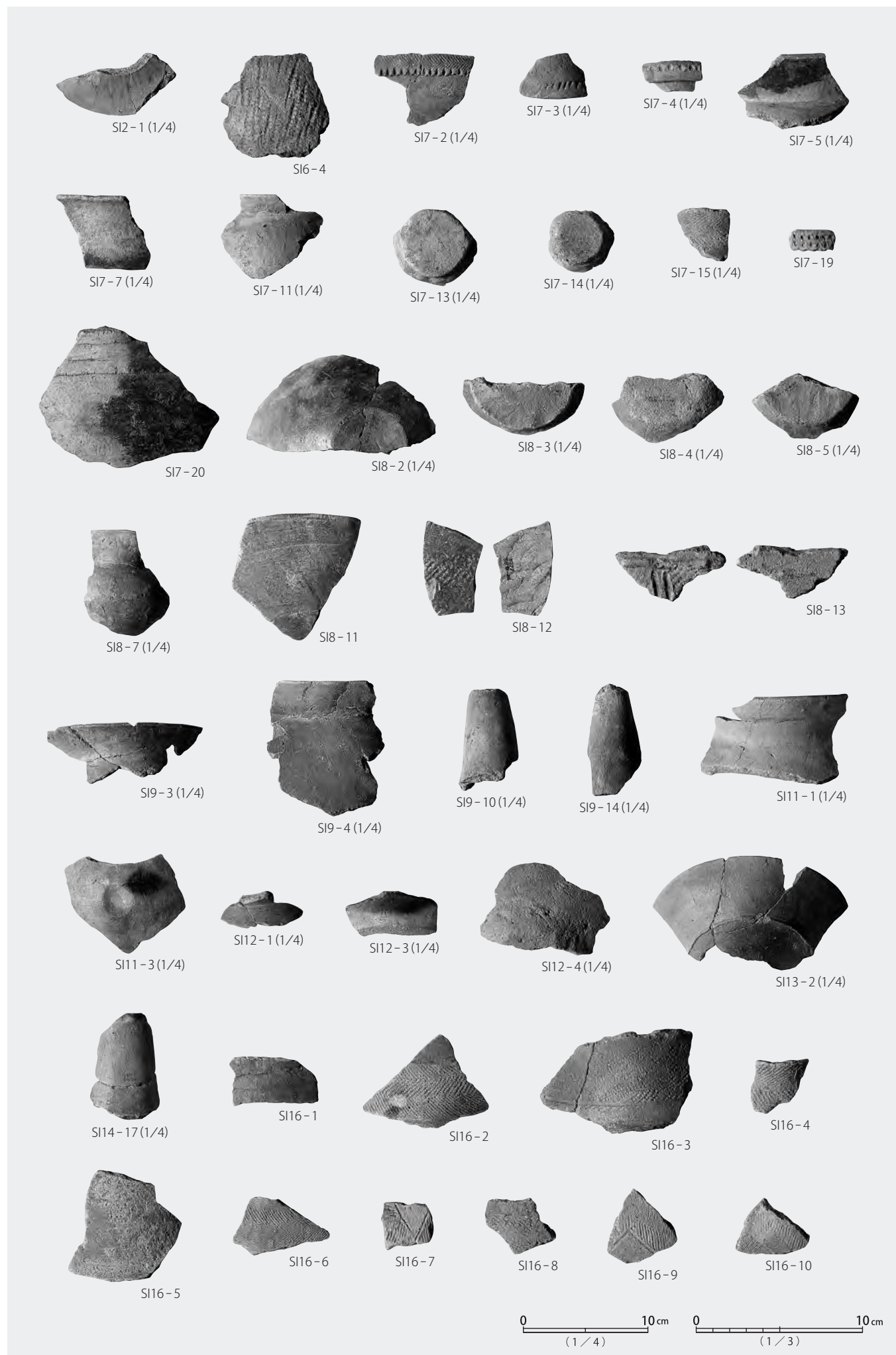
遺構外-10



遺構外-14

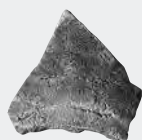


遺構外-38





SI17-1 (1/4)



SI17-2 (1/4)



SI17-3 (1/4)



SI17-5 (1/4)



SI18-1 (1/4)



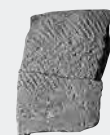
SI18-2 (1/4)



SI18-3



SI18-4



SI18-5



SI20-1 (1/4)



SI20-2 (1/4)



SI20-3



SI21-2 (1/4)



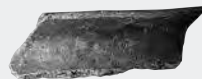
SI21-3 (1/4)



SI23-3 (1/4)



SI23-11 (1/4)



SI23-12 (1/4)



SI23-13 (1/4)



SI23-15 (1/4)



SI23-16 (1/4)



SI23-30 (1/4)



SI23-34 (1/4)



SI23-35 (1/4)



SI23-65 (1/4)



SI23-66 (1/4)



SI23-67 (1/4)



SI23-68



SI23-69



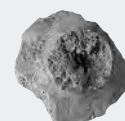
SI24-7 (1/4)



SI25-5 (1/4)



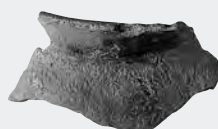
SI25-10 (1/4)



SI25-13 (1/4)



SI26-1 (1/4)



SI26-3 (1/4)



SI27-1 (1/4)



SI27-2 (1/4)



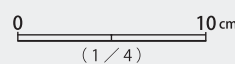
SI27-3 (1/4)



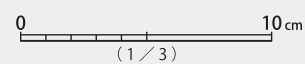
SI27-6 (1/4)



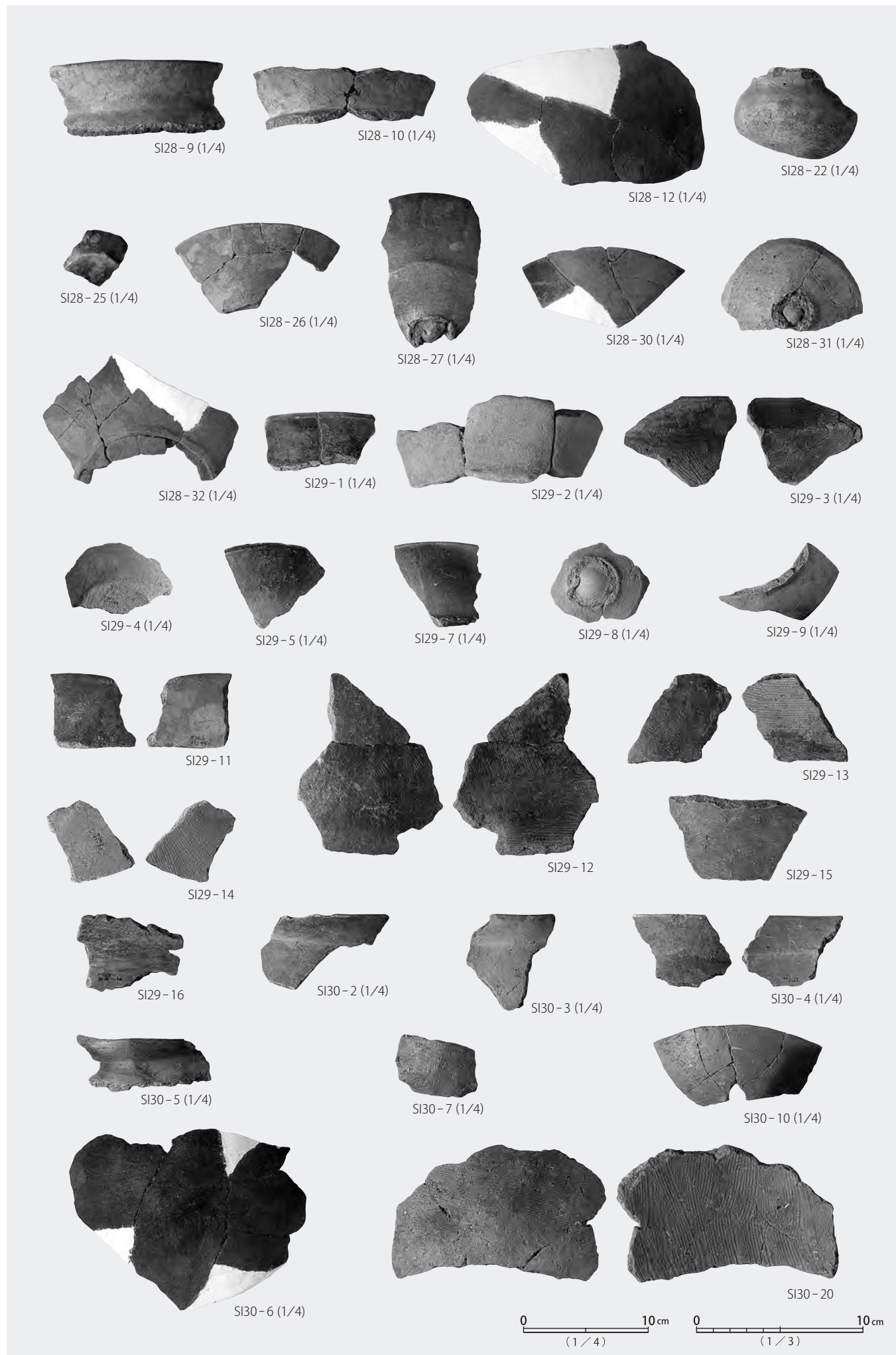
SI27-8 (1/4)

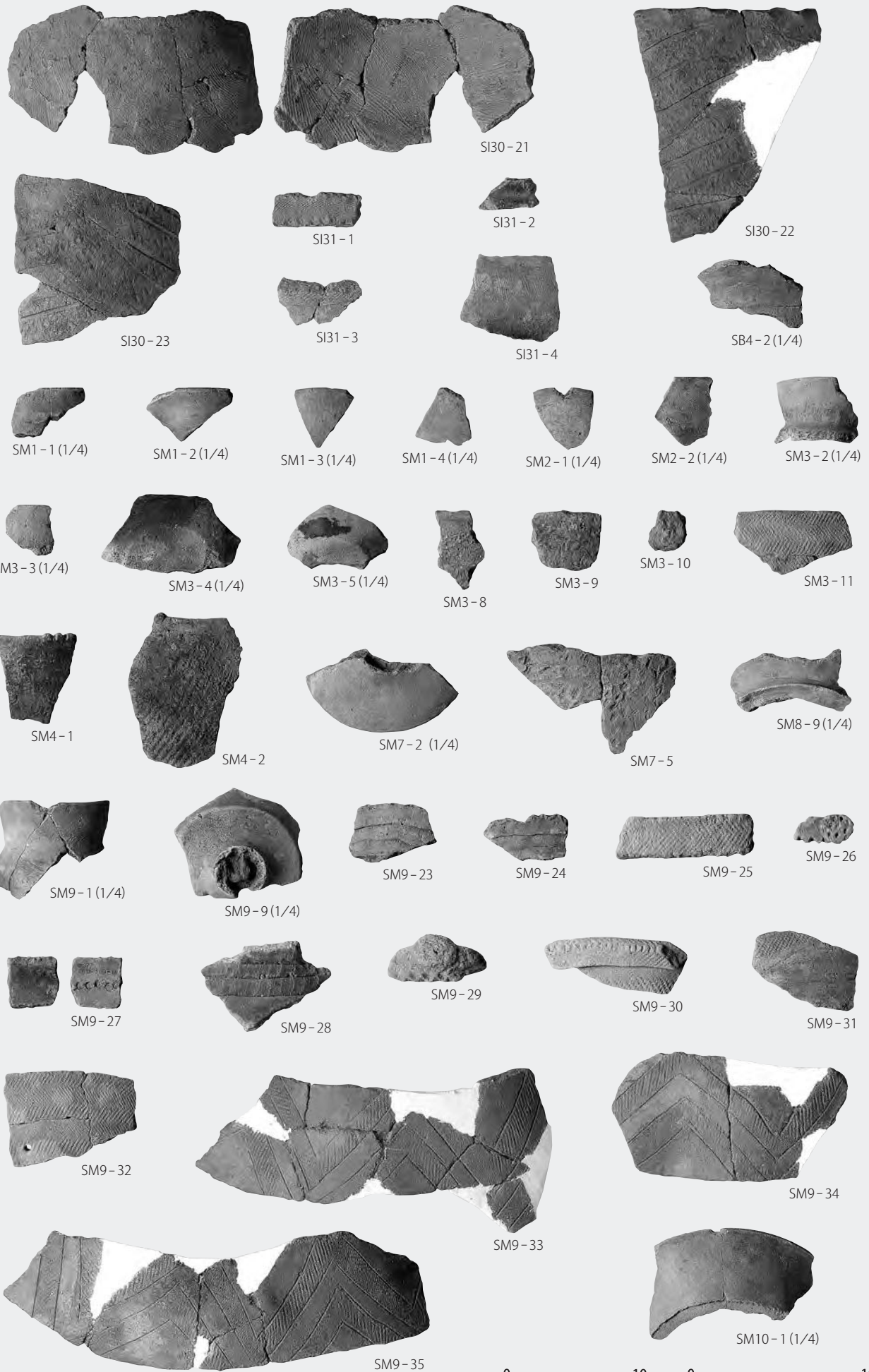


(1/4)



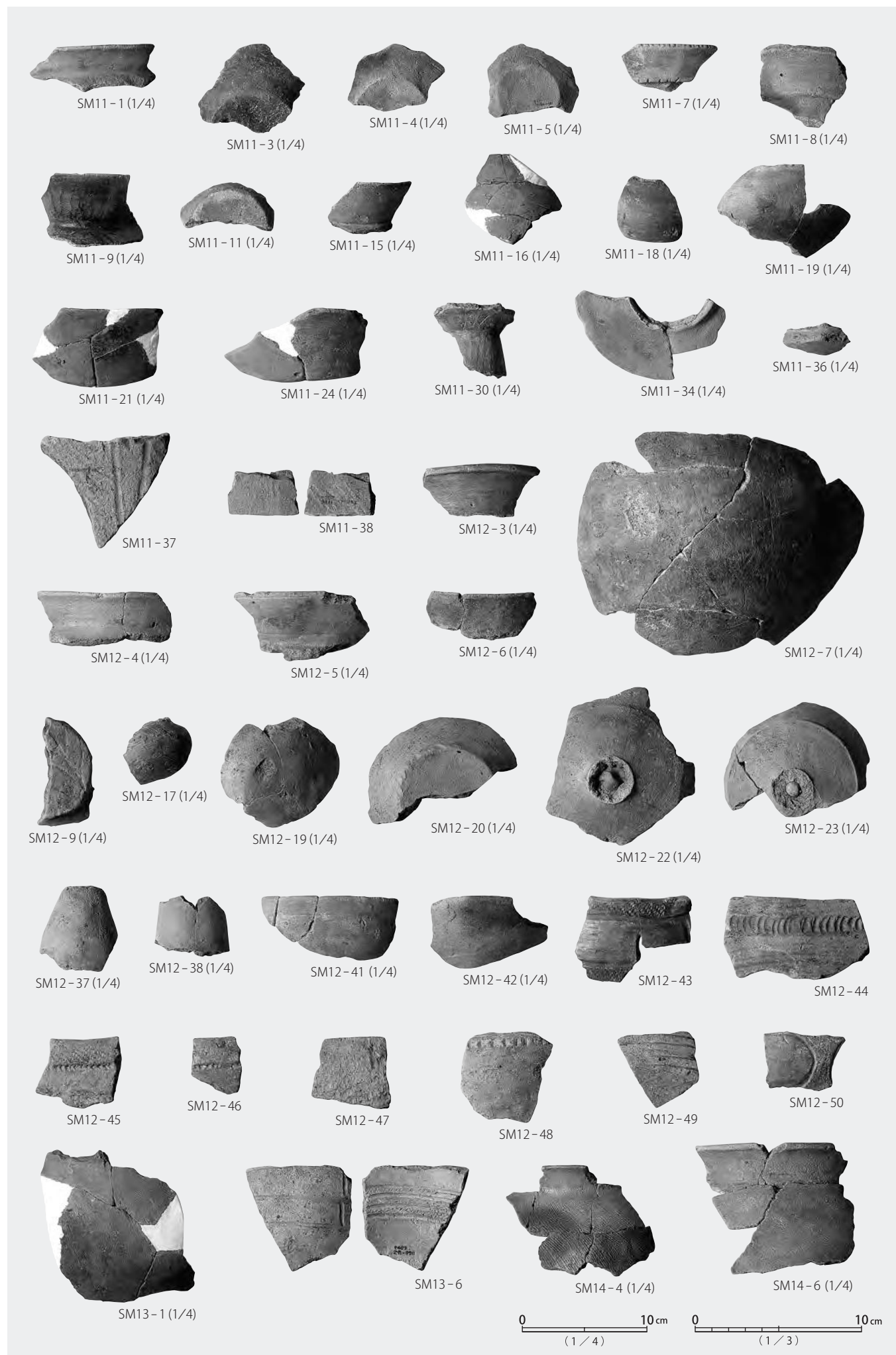
(1/3)

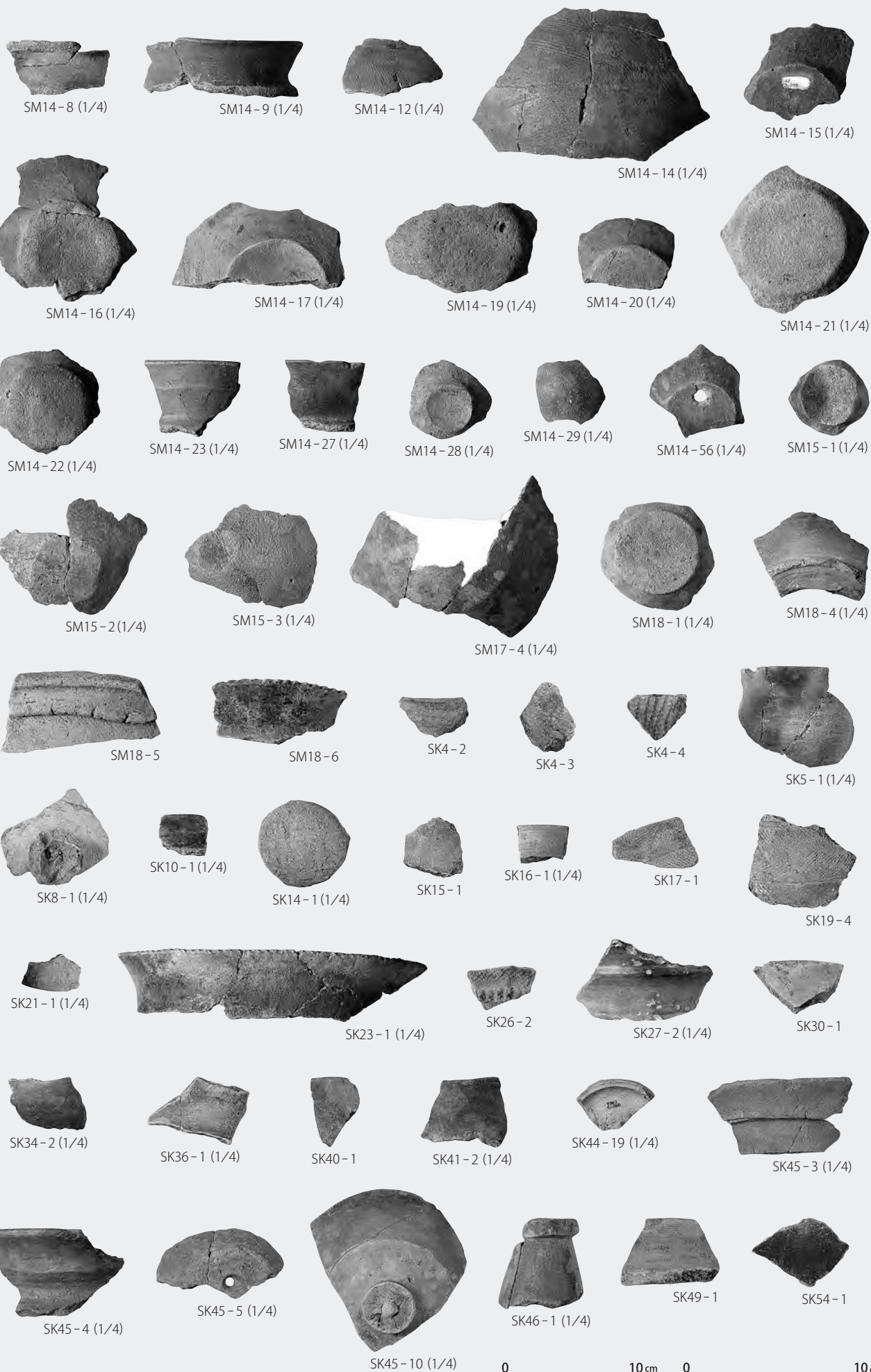


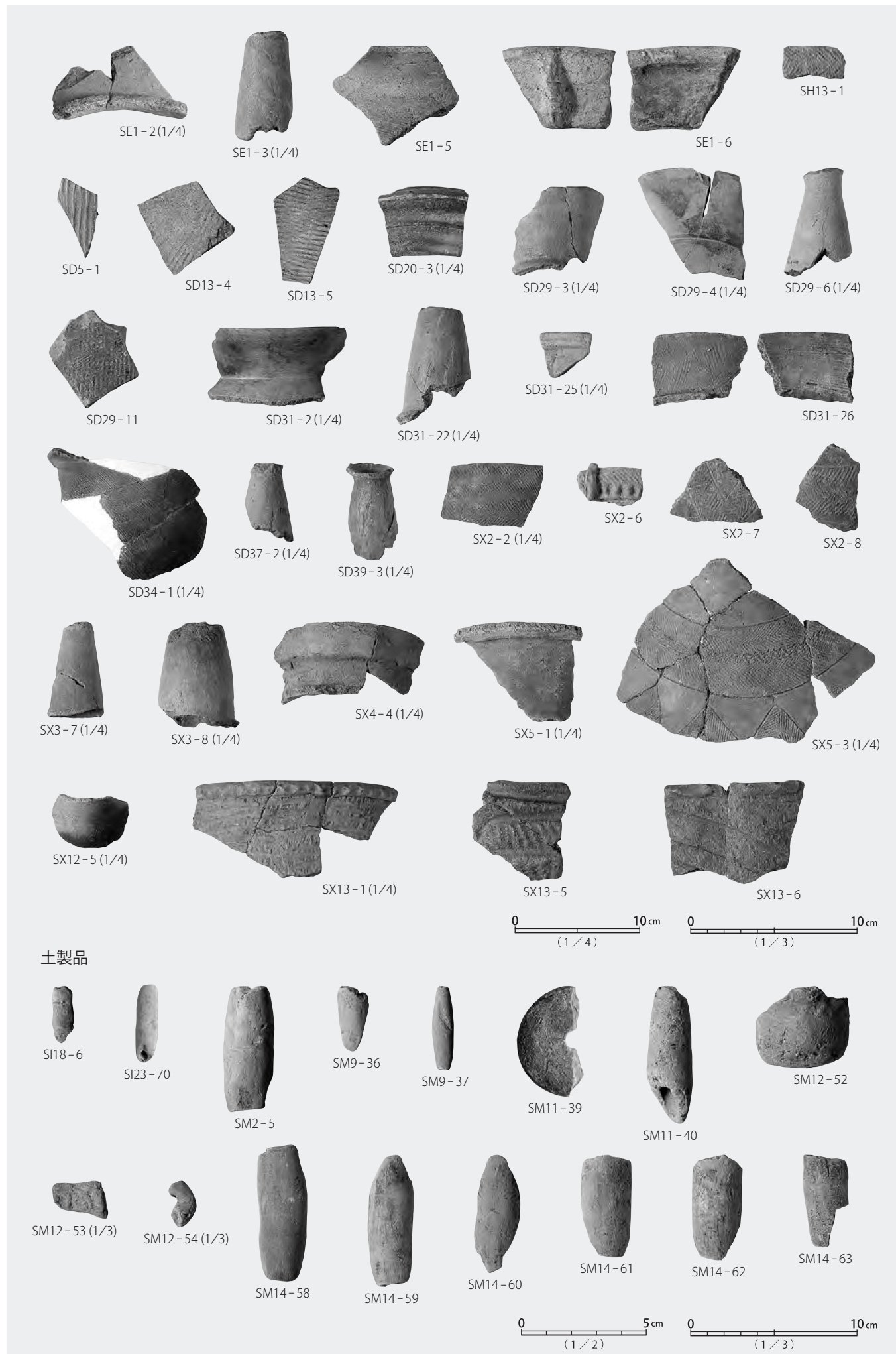


0 10 cm
(1/4)

0 10 cm
(1/3)

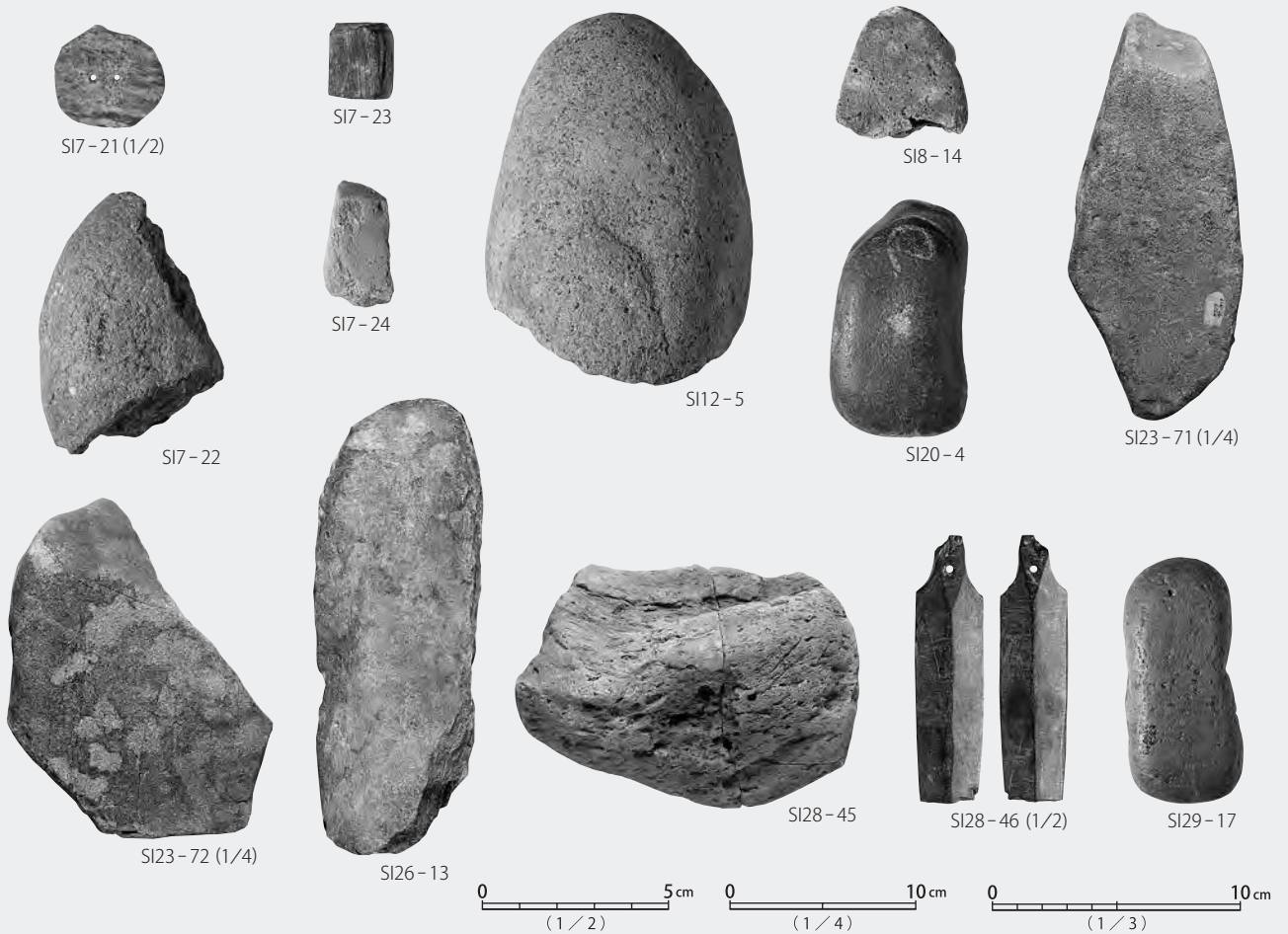


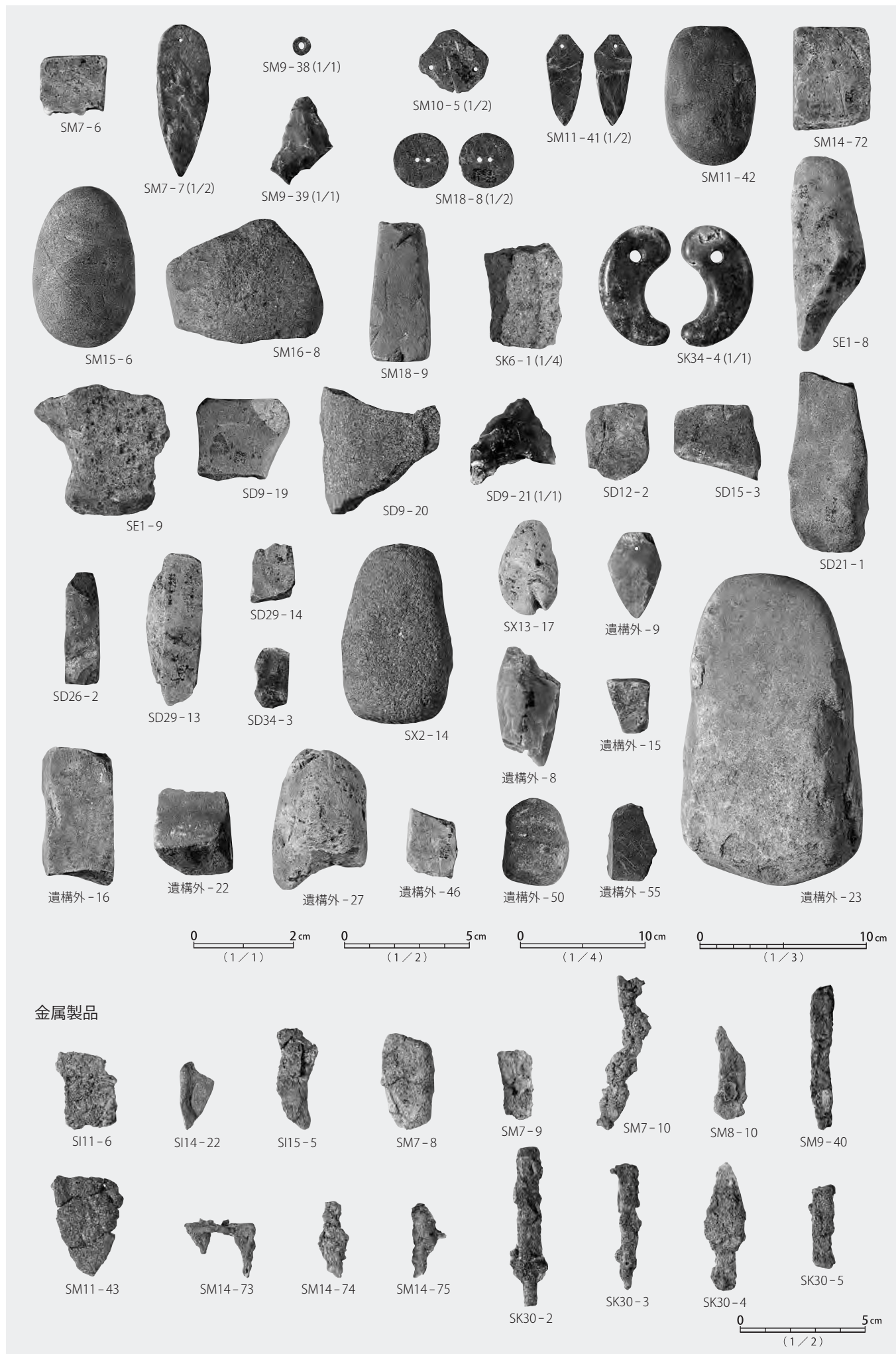


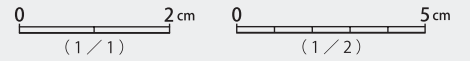
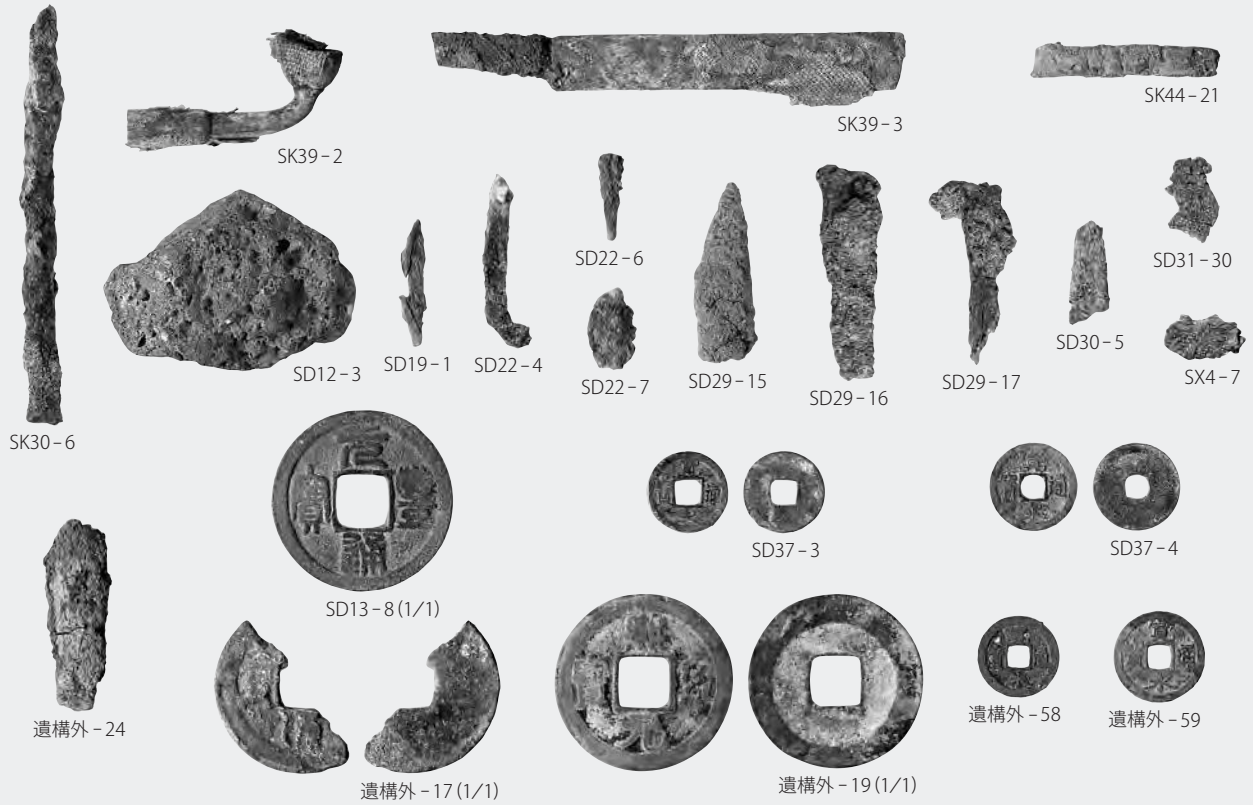




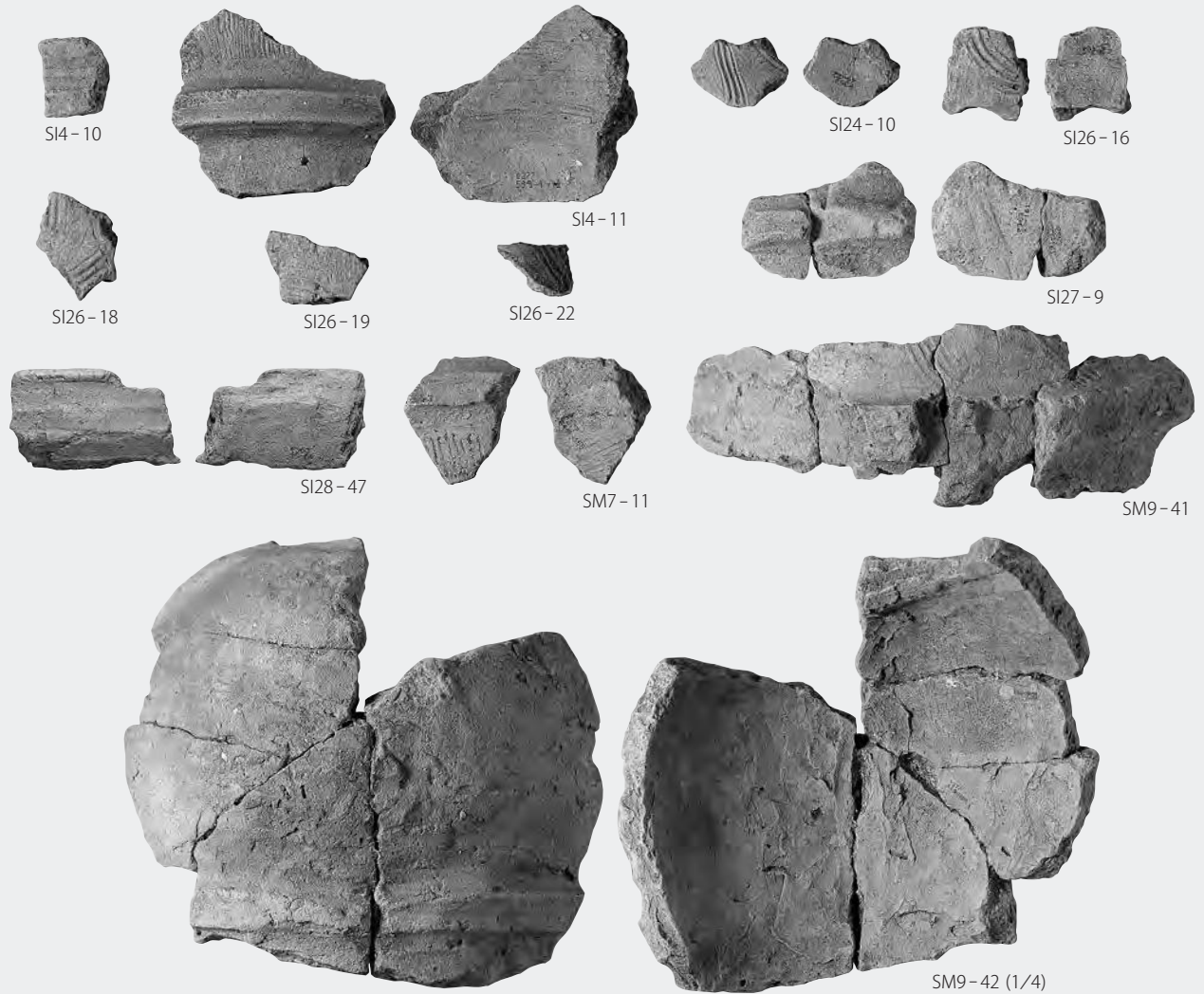
石製品

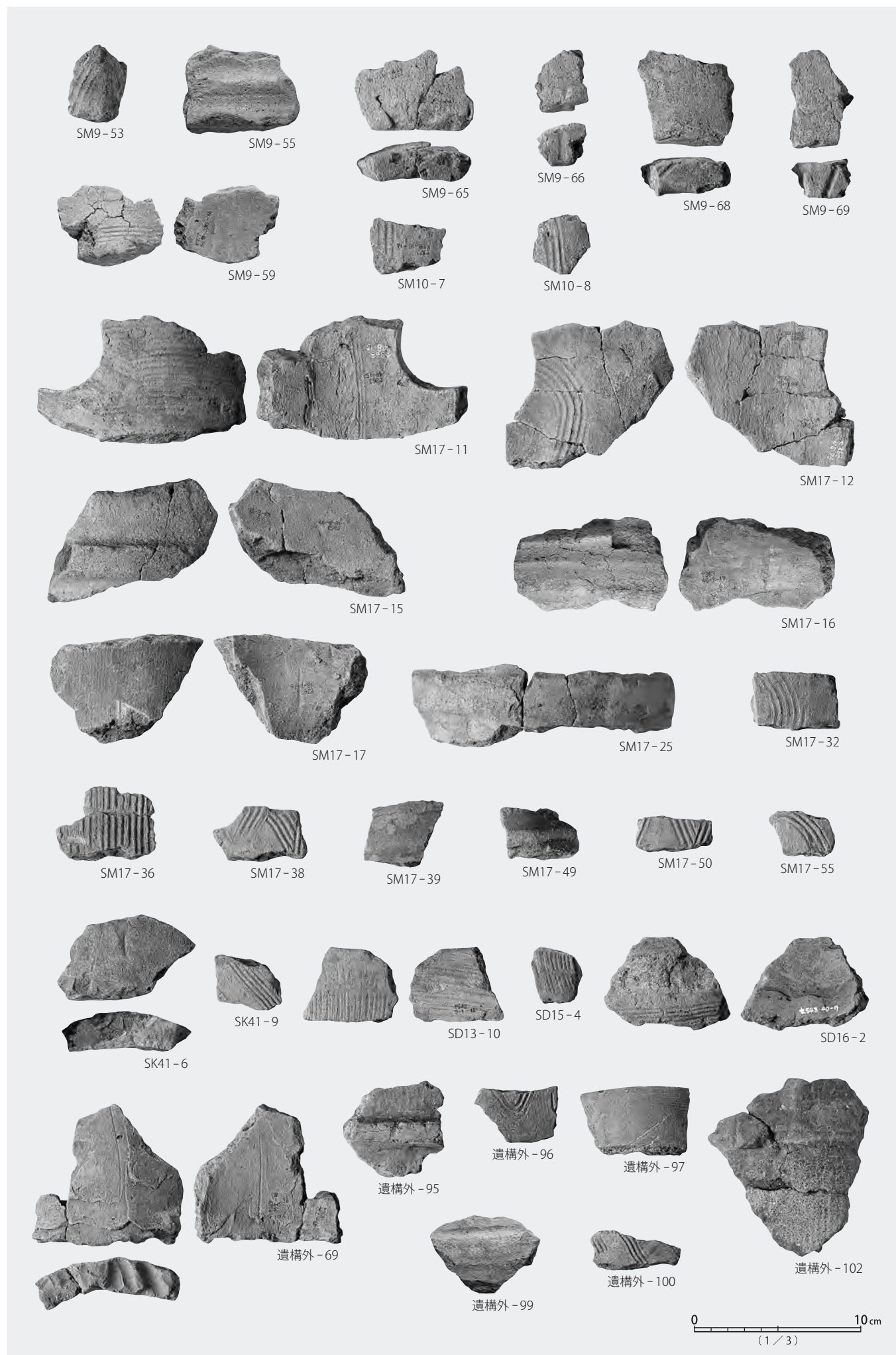






埴輪





自然遺物



SI23-73



SK23-24



遺構外-56



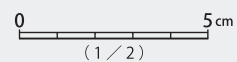
遺構外-57



遺構外-120



遺構外-121



中世



SI4-12 (1/4)



SI7-25 (1/4)



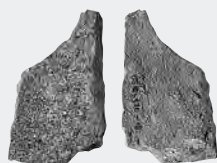
SI28-48 (1/4)



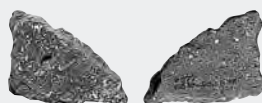
SM9-70 (1/4)



SM9-71 (1/4)



SM9-72



SM9-74



SM10-9 (1/4)



SM12-55 (1/4)



SM14-76 (1/4)



SM17-95 (1/4)



SK66-1 (1/4)



SE1-10



SD8-1



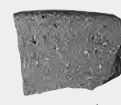
SD13-9



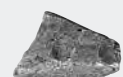
SD16-1



SD17-1



SD22-8 (1/4)



SD22-9 (1/4)



SD22-10 (1/4)



SD25-5



SD25-6



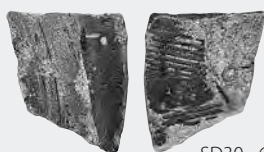
SD25-7



SD29-20 (1/4)



SD29-21



SD30-6



SD31-32 (1/4)



SD40-1



遺構外-104 (1/4)



遺構外-105 (1/4)



遺構外-106 (1/4)



遺構外-110 (1/4)



遺構外-111 (1/4)



遺構外-112 (1/4)



遺構外-113 (1/4)



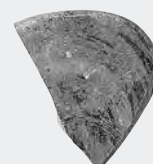
遺構外-115 (1/4)



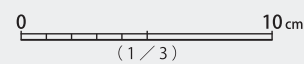
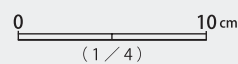
遺構外-117



遺構外-118 (1/4)



遺構外-119





0 2 cm
(1/1)



神明塚採集神獸鏡拡大



神明塚（棗塚）2017年撮影

報告書抄録

ふりがな	いちはらしさんしんいせき・しらつかでといせき							
書名	市原市山新遺跡・白塚出途遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	北見一弘・坂元秀平							
編集機関	市原市教育委員会(市原市埋蔵文化財調査センター)							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489 TEL0436(41)9000							
発行年月日	2018年(平成30年) 3月16日							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
いちはらしさんしんいせき・しらつかでといせき 市原市山新遺跡・白塚出途遺跡	千葉県市原市姉崎 1451番地5地先ほか	12219	349	35° 28′ 49″	140° 03′ 11″	19981109 ～19981120 20020115 ～20020318 20020411 ～20020821 20030707 ～20040130 20080616 ～20080711 20110926 ～20111209 20120910 ～20121130 20140715 ～20140808 20160905 ～20170120	11,407	都市計画道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
市原市山新遺跡 ・白塚出途遺跡	古墳群・集落跡	縄文時代	包含層1地点		縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製品(古相を示す剣形や、有孔円盤、白玉などの石製模造品)、埴輪(櫛描文施文の有黒斑円筒埴輪を含む普通円筒埴輪、有黒斑朝顔形埴輪)		姉崎二子塚古墳と同じ砂堆上に位置する古墳時代前期末から古墳時代中期前半を中心とした集落跡と古墳群。古墳群は中小規模の古墳で構成され、方墳から円墳への転換期に築造された可能性がある。発見された古墳群は、姉崎古墳群中での位置付けを意図して姉崎古墳群山新支群とした。	
		弥生時代	後期堅穴住居跡5軒 土坑6基					
		古墳時代	前期末から中期前半堅穴住居跡28軒 前期末から後期古墳18基 土坑・土壇21基					
		奈良・平安時代	溝状遺構2条					
		中世以降	井戸状遺構1基 土坑43基 溝状遺構42条					
要約	遺跡は、縄文時代後期の遺物包含層、弥生時代後期の集落が認められるが、中心は古墳時代前期末から古墳時代中期前半の集落跡と古墳群である。その後は奈良平安時代、中世に溝状以降や土坑が認められるが、活動の中心は棗塚遺跡にあるとみられる。出土品のうち、有黒斑の櫛描文施文の円筒埴輪は、外廓古墳、御霊台遺跡で類例があり、姉崎二子塚古墳出土の櫛描文埴輪との変遷を追える可能性があり注目される。 総括で既存土器編年から遺構の変遷を検討しているが、本遺跡は、今後姉崎地区における古墳時代前期末から中期の集落や古墳の動態を考える上で良好な資料である。 本書は都市計画道路八幡椎津線(姉崎工区)の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書3冊のうちの第1冊である。第2冊は中世の鍛冶関連遺物を含む貝層と、人骨22体を含む土壇群等を「棗塚遺跡」として2019年3月に、第3冊は縄文時代晩期の小谷地形に形成された土器集積遺構と、有孔磨製石鏃を伴う弥生時代中期後半の堅穴住居跡などを「山新遺跡Ⅱ」として2020年3月にそれぞれ刊行する予定である。							

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第42集

市原市山新遺跡・白塚出途遺跡

平成30年3月16日 発行

編集発行 市原市教育委員会
埋蔵文化財調査センター
〒290-0011
千葉県市原市能満1489番地
TEL 0436(41)9000

印刷 株式会社 正文社
〒260-0001
千葉県千葉市中央区都町1-10-6
TEL 043(233)2235

